偉人金日成主席

目　次

１．偉大な人間

１）人類知性の最高の境地に立って

探求の一生

偉大な金日成主席は非凡な思索と探求によって、豊富かつ多方面的な知性の塔を築き、それにもとづいて数十星霜にわたる困難で複雑な中でも人民大衆の自主偉業を勝利へと導いた。

主席が天下の真理を会得してただ一度の錯誤や誤りもなく革命と建設を百戦百勝へと導いた人類知性の代表者になりえたのは、まさに革命という壮大な実践の中で、並外れた思索と探求によって、一生を輝かせてきたことと主に関連している。

金正日総書記は次のように述べている。

「金日成同志はまた傑出した探求力を身につけています。金日成同志は瞬時も思索と探求を中断したことはありません」

主席は誰よりも博学多才ですべての道理に精通し、革命と建設の複雑多端な問題を常に天才的な英知で解決してきた非凡な知性人であった。

主席をしていかなる人物にも比肩できない知性の最高の境地に到達させた土台は、革命実践であった。

主席は幼年の時代から探究心が抜群であった。一つの事象も深く考察し、その本質を把握する時まで思索と探求を止めなかった。

手に取ってみようとした虹の秘密を知ろうと最後まで掘り下げてその道理を把握した話、蓄音機の原理を把握しようと部品を全部分解して見た話などは、主席が幼年の時代から並外れた探求心を持っていたことをよく物語っている。

主席は小学校の時も質問を多くする学生として知られ、時には教員もその返答に窮するほどであった。

主席は早くから神秘主義を一つの病気に考え、人間が神秘主義の病気にかかれば自分の役目を果たせない愚か者になると見た。何事でも最後まで掘り下げ、思索と探求を続けるならばこの世に神秘なことなど一つもないというのが、主席の独特な思考観点であり、疲れを知らぬ探求の姿勢であった。

現実の中での真理の習得は、早くから主席が体質化した主な探求方法であった。

11 歳の若年に「学びの千里の道」を歩んで祖国へ帰った主席は、朝鮮の山野、川と海、名勝古跡と学校、工場と農村、町と村をはじめ、多くのところを見て回りながら、祖国の山河の美しさと朝鮮人民の英知と才能について、民族の悠久さについて深く体験した。主席にとって朝鮮人民の血の涙が滲んでいる山野、町と村はそのまま祖国の現実を肌で感じる、一つの大きな学校であった。

この現実という学校で主席は早くから蔑まれ抑圧される惨めな人民の境遇とあくどい抑圧者、略奪者の本性を悟り、正義と真理への強い志向を培い、革命的で科学的な世界観の土台を着実に築き始めた。

早くから現実を目撃して体験し、思索と探求を重ねる過程で自然と社会の真理を会得し、数多の事象の道理を把握するのは、主席の一つの習慣となった。現実をまたとない立派な学校と見なす主席の並外れた習慣は、革命闘争に身を投じた後にも変わりなく、実践の中で絶え間ない探求の道を歩み続けるようにした貴重な元手となった。

1929 年の秋から 1930 年 5 月の初旬まで吉林監獄で獄中生活をした主席が初歩を切った行路は、搾取と抑圧に苛まれる人民の中に入る道、職業的な革命活動の現実に入る道であった。

職業的な革命家として現実の中に入ること、それは主席が獄中で温めた構想を実現するために高く掲げたスローガンであっただけでなく、すべての道理に精通し真理を追究する、思索と探究のより高い目標の達成をめざす金日成主席特有の新たな道程であった。

主席にとって探求の目的が、革命実践上の切実な問題を正しく解決する

ところにあったなら、人民の志向と念願、人民の才能と経験は、朝鮮革命を前進させ、世紀的な創造と変革を遂げるための尽きない探求の源泉であった。

革命実践が主席にとって知識と真理を探求する広い活動舞台であったなら、主席がこの上なく立派な師としておし立てたのはほかならぬ人民であった。

実に主席は、人民を自分のまたとない教師と見なし、一生涯人民を天のごとく崇拝した。主席が座右の銘としていた「以民為天」の理念には、人民大衆はいかなる個別の人物にも比べられない偉大な存在だという特異な見解と観点が置かれてあった。

主席は幹部たちに会っても常に人民大衆を教師と見なし、彼らから謙虚に学び、すべての活動を人民大衆に依拠しておこなわなければならないと助言し、党大会の高い演壇でも、われわれのもっともすぐれた教師は人民大衆であり現実である、と宣言した。外国の友人に会っても教師は人民大衆である、われわれは常に人民から学んでいる、と述べている。

誕生70周年を迎える意義深い場でも、自分の聖なる一生を感慨深く顧みながら、人民は、つねにわたしの手厚い保護者であり、ありがたい恩人であり、すぐれた教師でした、と真情を打ち明けた主席は、偉大な生の最後の年の4月、朝鮮を訪問したアメリカのCNNテレビ放送会社記者団の質問にたいする回答でもわたしのもっとも知恵深い博識な教師は人民です、と述べている。

主席は何を一つ思索し探求するにしても人民の自由と幸福、革命と建設の勝利のためにおこない、常に人民の素朴で飾り気のない言葉から探求の種子と糸口を求めていた。

人民を教師と見なした主席は、幹部と労働者、農民、インテリはいうまでもなく、老人と子供に至るまで各階層の人民から実に多くのことを学び取り、体験した。

チュチェ思想国際研究所の初代理事長であった安井郁は、人民を教師と見なし、一生を人民から学んだため、金日成主席はチュチェ思想のような

人間中心の偉大な思想を創始し、百科全書的な思想と理論を打ち出すことができた、このことが分かるようになった私の気持ちは今、他に言いようがない、人民を教師とおし立てた主席こそは偉人の中の偉人である、と感極まって言った。

主席は人民のなかで革命実践が提起する複雑多端な諸問題を一つも漏らさずに解決しながら、革命の各時期、各段階で遂行すべき戦略と戦術、原則と方途を明示する思想と理論も打ち出し、政治と軍事、経済と文化をはじめとした各分野の科学技術知識も専門家以上に深く心得ていた。

主席が打ち出したすべての思想と理論は、人民大衆の志向と新たな現実の要求を十分に反映して独創的に提示されたことにより、いかなる学術論文にも比べられない理論的深度と大きな実践的意義を有していた。主席が示した反帝反封建民主主義革命に関する思想と理論、社会主義革命と建設に関する理論、全社会の革命化、労働者階級化、インテリ化に関する理論など、民族解放、階級解放、人間解放に関する理論や党、国家、武力、経済、文化など各分野に関する理論は、すべてが時代性と独創性、百科全書的な完璧さによって、人類とともに永遠な生命力をもつ革命的な思想・理論である。

朝鮮で社会主義農村問題に関するテーゼも主席が国の農業部門を陣頭に立って指導していた日々に、全国各所の荒い畦道で朝露に濡れ、雪や雨にうたれながら直接創造した、朝鮮の農業問題解決の不滅の大綱である。

実際、大小の国事を指導すべき国家元首が、現実で提起される具体的な問題まで一々関心を寄せて指導するということは、口で言うほどなまやさしいことではない。しかし、主席は会議や報告資料を通してではなく、全国各地を絶えず指導しながら現実を調べ、実践で提起されるすべての問題を解決するために、思索と探求を瞬時も中断しなかった。

久しい前から人々は書物を手段にして自らの見解と経験を交換し、知識を習得しながら探求と文明の歴史を開拓してきた。読書は該博な人間をつくり、筆記は正確な人間をつくるといった名人たちの言葉も、人間の文明と知的能力の形成において読書がもつ意義を強調した価値ある見解だと思う。

主席は人間の生活と闘争で革命的で進歩的な書物の意義と価値を誰よりも深く洞察し、情熱的な読書で知性の塔を絶え間なく築いた、すぐれた篤学の士であった。

1987 年 2 月のある日、ソ連児童文学雑誌社の主筆は、主席が誕生して幼年の時代を送った万景台の生家と周辺の事績物を見て回った後、主席にどんな書物が影響を与え、それらの書物が困難な時期に何を教えたのか、と質問をしたことがあった。

主席は主筆が提起した質問に答えながら、自分の思想と信念と意志は、決して一朝一夕にして生まれたものではなく、長期にわたるたたかいと生活の過程で生まれたものであり、その最初の出発点はほかならぬ読書を好んだ幼いころであった、と述べている。そして自分が幼いころに読んだ書物は、まことにたたかいと生活の真理をはじめて教えてくれた教師であり、真の人生行路の初の出発を助けてくれた道づれであった、と感慨深く述べている。主席は幼年の時代から生涯の最後の時期まで常に手から本を離さず、一生、読書の日課を違うことなく守ってきた地道な愛読者であった。

主席には読書の時間と場所が別に決められていなかった。

主席は革命と建設を指導しながらすべての合間を読書に利用した。

主席は早暁に起きては新聞と新しい通信資料を読み、仕事の合間には各種の図書と雑誌に目を通し、夜の時間には小説をはじめとした各分野の書物を読んだ。ある時は食事をしながらも読書をし、自動車に乗って現地指導の道を行き来しながらも読書をした。このように体質化された読書なので、主席を随行する幹部らも主席が休むべき時間を切り出して読書をし、食事の時間と車内で読書するのを引き止めることができなかった。

主席の読書分野には限界が別になかった。主席は新聞と雑誌から始まって、政治、経済、軍事、文化など各分野の書物をみな耽読し、分厚い小説も欠かさずに読んだ。

主席が党と国家、人民を賢明に導く中でも戦略的問題から些細な問題にいたるまで、すべてを立派に解決していく最高の知性を所有するようになっ

た秘訣の一つは、ほかならぬ書物を無言の教師と見なし、書物とともに一生を生きてきたところにある。

それゆえある文筆家は主席が書物とともに行ってきた弛まない探求とそれによって達した知性の高さを正確に測るためには、人類の背丈が今よりもはるかに高くなければならないだろうと激情に満ちて言ったのである。

世界を見極める非凡な眼識

金日成主席は世界をもっとも幅広く、明哲に見極める非凡な眼識をもって、万事を誰よりもはっきりと見通す方であった。

主席は人間とその生活にたいする深い理解と政治と経済、軍事と文化、外交など、社会生活のすべての分野にたいする深い造詣をもっていた。主席は世界の主人、自己の運命の主人である人間の本性と生活について誰よりもはっきりと把握しており、自然と社会の各分野にたいして出色の眼識を持っていた。革命実践にたいする探求と読書を通して主席が体得した多方面的かつ、深みのある知識によって、主席はどの分野にたいしても並外れた識見をもつ博識家として名声を博していた。

主席が千万人の心を正しく察する博士、周囲世界にたいする百科全書的な科学的識見を持つ博識家であったため、朝鮮人民ばかりでなく世界の多くの人も、世界を見極める広い識見を持した主席を天才の中の天才と高くほめたたえたのである。

世界を知るには何よりも人間を知るべきである。

それは人間が世界の主人であるため、世界を把握し正しく変革していくためには人間について第一の注目を払い、人間をよく知らなければならない。

人間をもっとも尊び、一生涯人民の中にいながら数えられないほど多くの各階層の人に接した主席は、人間の心中を最も正確に察する人間心理の博士であった。

いつか、金正日総書記は幹部らに、多感で思いやりのある母親のように、

人の身の上と心の奥底まで知り、一言をいっても胸がすくように話してくれる主席をだれもが心から信頼し、敬慕したのはあまりにも当然なことである、主席があまりにも気さくで博識であったので、村の老人たちまでが 10 代のうら若い主席を金成柱先生と呼んで尊敬し慕ったものだ、人民大衆が全知全能の存在であるなら、主席は人民大衆の心を一身に体現した人民の太陽である、と熱く述べている。一生、いかなる指示や命令によってではなく、いつも人の心から察し、その心を動かす方法で大衆を指導することを違えることのできない鉄則にして活動した主席の偉大性にたいする意味深い話であった。

主席は人の心を正しく見抜いてそれを動かす、出色の能力を身につけていた。

具体的な事象にたいする人々の態度は喜びと悲しみ、満足と不満足、愛と憎悪といった、感情的・情緒的な心理状態で表現される。

主席は人々の感情・情緒を一時も無視していなかった。主席は人の心を奥底まで見抜き、些細な心理変化も正確に捉えた上で、それに合わせてすべての活動を能動的に展開した。

主席が重視し気を配った人々の感情・情緒には、物心のついていない子供たちの童心からはじまって、青春男女の愛情と、人々の職業的特性による感情的・情緒的趣味、年長者の感情細部など、人間が体験できるすべての心理的現象が含まれていた。

人々の心を実によく理解してくれる主席であったため、幼い小学校の子供が誰にも言わなかった秘密を主席にひそひそと耳打ちし、高齢の老人たちは膝を打ちながら言いたいことを全部言っていた。子供と話すときには、子供の気持ちを理解し、老人と話すときには老人の気持ちを理解した方が、ほかならぬ偉大な主席であった。

総書記はいつか、幹部らに主席が抗日武装闘争を開始した時期、主席より 10－15 歳も年上の多くの革命家が主席を朝鮮革命の最高指導者として従い慕った、それは主席が人々の心をよく知り動かす特出した能力をもってい

たからだと述べた。

主席は感情・情緒の把握を人々の心を把握する上での第一の工程とし、彼らの志向と要求の把握を人々の心の奥底に入るための重要な一課題と見なした。

主席は一生涯、数え切れないほど多くの人に会っている。国籍と経歴、年齢と職業、出身と社会的地位など、多くの差をもっている人々であっただけに、彼らの志向と生活上の要求もやはり千差万別であった。

しかし、主席は人々が今何を考えて何を願っているのか、生活上の要求は何であり、彼らの理想は何であるかをはじめ、人々の志向と要求の具体的な細部まで関心を払い、具体的に調べた。

革命は人民大衆の自主性を実現するための組織的な闘争である。そのため革命をおこなうためには大衆を動員しなければならず、大衆を動かすためには彼らの心から動かさなければならない。人の心を動かすためには、金や鞭を振りかざしてはならず、人々の思想・感情との活動をおこなわなければならない。

主席は人の心を知ること、彼らの具体的な心理状態を正しく把握することを革命家が備えるべき第一の実力とみなし、機会があるたびに幹部らに子供たちの心理を奥底まで見抜いている小学校教員のように、人々の心理をよく把握しそれにあわせて働くべきである、と常に教えていたのである。

主席自身も言っているように、主席は小学校と中学校を経ているので青少年学生の心理をよく知り、長い間、軍隊生活をしてきたので軍人たちの気持ちを誰よりもよく知っていた。それで抗日武装闘争の時期、隊伍を率いてまくわうり畑の傍を通り過ぎながらまくわうりを食べたがっている隊員たちの気持ちを叶えてやったその思いやりで、人民軍軍人たちが家にいる時のように餅やそば、初とうもろこしやまくわうりなどを食べたがるだろうから、切らさずに保障するよう懇ろに教えたのである。

主席は工場と農場に出かければ労働者たちの油のにじんだ手もはばかりなく取ってくれ、農場員の土で汚れた手も宝の手だと言いながら、彼らの心

の奥底まで詳しくはからった。

ゆえに主席は人間、人民大衆の志向と要求をもっとも正確に反映した人間中心のチュチェ思想を創始し、困難で試練に満ちた朝鮮革命を輝かしい勝利へと導きながら偉大な転換と変革へと千万の大衆を呼び起こす天才的な組織動員力を発揮することができたのである。

人間の心を推し測る博士、実にこれは人間の心をもっとも尊び、民心を天心に推し立て、日頃人間の心を先に考慮し、彼らの思想・感情との活動から始めて数多の国事をおこなってきた主席に、数千万の人民が謹んでさし上げた全人民的な呼称であった。

1992 年 2 月、インドではチュチェ思想国際研究所の理事をはじめ、世界各国の著名な学者たちの積極的な努力による図書が発行され、誕生 80 周年を迎える主席に贈呈された。　これは、時代と歴史、人類の前に不滅の業績を積み上げた主席の百科全書的な思想と理論、多方面的で豊富な識見にたいする外国の友人たちの称揚の賜物であった。

それで総書記も世界の多くの国で主席の著作と思想・理論を解説する書籍を出版しながら、主席の百科全書的なすぐれた思想・理論を高く称揚していると熱く述べていた。

主席が所有した革命と建設、 人間生活と社会生活の多方面的な分野にたいする識見は、その幅と深度を予想できないほど膨大なものであり、科学性と論理性、現実的意義において普通の常識を外れた超人的なものであった。

主席は革命と建設で提起されるいかなる問題についても明哲な思想的・理論的英知の込められた回答を与えている。それで朝鮮人民はもとより、世界の多くの政治家と学者、個別的人士まで主席の非凡な洞察力と広い識見、深奥で該博な知識に感嘆を禁じえなかったのである。

主席が体得して自らの有力な武器にした知識は、自然と社会の一分野に限られたものでは決してない。主席は朝鮮革命と人類の自主化偉業の複雑多難な問題を科学的に、完全無欠に解決できる膨大な知識を体得するために、常に探求の幅を広め最後まで掘り下げて、人々の想像を絶する知識の塔を築

いた。

主席は革命と建設のすべての原理的な問題はもとより、国際政治の複雑を極める実態をも常に明るく見極め、社会科学と自然科学の膨大な領域を包括する該博な知識を深く身につけていた。

ばかりでなく、主席は家庭と生活倫理、風俗と世態など、人間生活の具体的な細部にいたるまですべてに精通し、古代から現代にいたる長期間の常識的な問題も誰より多く知っていた博識家であった。

主席は外国の音楽と芸術、伝統と歴史についても非常に詳しかった。さらに主席は各宗教についてもかなり造詣を持っていた。

1980 年、主席がヨーロッパのある国を訪問する時，その国の大統領は、自国の訪問を熱烈に歓迎し、自宅に招請した。それで主席は彼の家で大統領とともに食事をするようになったが、食卓には各種の特色ある料理とともににんにくが置かれてあった。当時までその大統領は以前にはにんにくについて知らなかったが、その時分になって始めてその薬効成分を知るようになり、それに魅力を感じていた。彼は主席ににんにくの長点について話し始めた。

主席がにんにくの長点についてまだよく知っていないとばかり考えた彼は、隣で口でも挟んだら、と思ったばかりに情熱的に話した。自分はにんにくを初めて食べているが、これを食べると口腔の病気もなくなり、健康にもよかったと言うのであった。

余裕をもって彼の言葉を聞いてくれた主席は彼の話が終わると、にんにくの原産地は朝鮮である、朝鮮人は昔からにんにくを栽培して食べた、朝鮮のにんにくがフランスを通じてヨーロッパに広まった、私は幼い時からにんにくを食べながら育った人である、だから私ににんにくの自慢はいい加減にしなさい、と言って豪快に笑った。

傍にいた朝鮮の幹部らも大きな声で笑い、大統領をはじめとしたその国の幹部らももらい笑いをした。ややもすれば他国の自慢になるところだった朝鮮民族の誇りであるにんにくが、主席によって本態を取り戻したのである。

歴史上優れた知恵で名を馳せた人物を見れば、大体一定の分野における

特異な英知によってであった。外交的手腕の高い外交家や軍事的知略にたけていた戦略家、文学的才能が抜きん出ていた有能な文筆家など、個別の分野ですぐれた知恵を所有した偉人はどの時代にもいた。

しかし、主席は非凡な政治的手腕と洗練された指導芸術、すぐれた軍事的知略と科学的計算による経済管理運営方法などにもとづいて、革命闘争と建設事業で提起されるすべての問題を遜色なく解決してきた出色の知恵の持主、知略家であった。

ぬきんでた記憶力

一生の美しい追憶となる体験や忘れえぬ事柄を記憶しておき、顧みるのは、誰にもある普通の意識現象である。しかし、個別的人間の記憶量には限界があり、一定の事実や事件、資料を記憶する期間も制限されている。

しかし、主席は人々の中で普通見られる記憶の限界や時間の流れに伴う資料の退色をまったく知らない、特出した記憶力を所有していた。

主席は、朝鮮民族の悠久な歴史と諸国の歴史、そして各年代にあった多くの事実と事件について誰よりも詳細に記憶し、長い後日まで忘れないぬきんでた記憶力の持主であった。

主席が記憶していた事実と事件には、朝鮮民族の栄えある抗日革命闘争の時期から社会主義建設闘争の時期までの数々の大小事はもとより、誰も特別と思わない些細なことにいたるまで、実に膨大な内容のものが含まれていた。

主席は自分が結論して指導した問題はもとより、資料や現実にたいする調査を通じて知るようになった各部門や単位のそれぞれの時期にあったさまざまなことやそれに関した問題を一つも漏らさずに記憶していた。

数十余星霜の長きにわたる革命生涯で誰よりも多くの人と厚い人間的なきずなを結んでいた主席は、一度会った人であればそれが誰であれみんな記憶し、一生追憶していた。

主席は生涯の終わりの時期にも、数千の幹部らをはじめ、数々の平凡な勤労者と軍人、外国人だけでなく、ひいては幼年の時代に聞いていた村の巡査や地主の名前まで正確に暗記し、多くの人を生々しく記憶していた。

実際、歴史学を専攻した学者でもなく、国の政事を見なければならない一国の元首が、大小の事実と事件、それに関わった多くの人をみな詳細に記憶するのはなかなか信じがたいことである。しかし主席は自分の一生で見て聞いたこと、感じて体験したことのほとんどすべてを覚えていた。

主席は普通の人間の知的能力では到底想像できない、ぬきんでた記憶能力をもって活用してきた方であった。

主席の記憶力は、記憶の時間とその正確さの不可避な連関にたいする人々の固まった認識を完全にやぶる特異なものであった。主席はすべてのことをもっとも早く、もっとも正確に記憶する、特異な記憶力をもっていた。

1984 年、ユーゴスラビアを訪問したとき、主席はチトー記念センターで、陳列された大きな熊の皮について聞いていたチトー大統領の話と狩猟の点数についても正確に記憶していて、随行員とセンターの管理員をびっくりさせたことがある。

ずいぶん前に一度聞いていた数字まで正確に記銘し再生する主席の記憶力は、文字通り反復や過ちを知らないもっとも早くて正確な記憶力であった。

主席の記憶の世界は時間的限界のない無限大の世界であった。

人間が頭脳の中に記銘して再生する資料の量は限られている。ゆえに、人々は誰もが記憶の対象を選択的に決めるのである。

主席は人々の間で記憶の量と関連して現れる一般的な傾向とは完全に無関係な、出色の記憶力の持主であった。

主席はこの世でもっとも複雑で膨大な現実の中でもっとも多くの人を対象にして活動し生活してきた方であった。主席は自分の全生涯で直面した複雑多難な現実的諸問題や出会った無数の人々をみな生々しく記憶し保持していた。

主席の記憶力は、強固さと持続性の面でも特出したものであった。

歳月の流れは誰であっても、一時頭の中に覚えていた過去のことを次第に退色させてしまう。特に、業務量が多様で複雑であり、間断なく新たな資料を頭脳の中に構築すべき創造型の人間である場合には、記憶していた古い資料が新しい資料に席を譲る交替速度が速い。

主席の回顧録には、半世紀も越した久しい前に会っている、実に数え切れない人々が登場し、彼らの生活の細部、複雑な歴史的事実と事件、多くの人にたいする詳細な資料が収録されているが、そのすべてが主席の記憶にもとづいたものであった。

回顧録の一句一句に髣髴として生きている事実と事件、計り知れない人物は、時代と歴史、複雑多様な人間世界を総括する、主席のぬきんでた記憶力が記した歴史の目撃資料である。

千里眼の英知

科学的な英知は偉人の灯火である。真の偉人は金権や鞭ではなく卓越した英知を、千万の人を目覚めさせ、社会の発展を先導していくもっとも威力ある武器の一つにみなす。

主席は一生涯、天才的な先見の明で革命と建設を指導してきた。主席は朝鮮革命を指導する全過程で常に天才的な英知で未来への希望と信念を与える科学的な設計を示し、数多のことを計画的に、勝ち目があるように解決してきた。ゆえに主席は革命指導の全期間、ただ一度の失敗や錯誤もなかった。

主席は生涯の全過程に対内外的に提起される数々の問題を直接処理してきたが、すべてを科学的な予見と明確な計画にもとづいて行った。

朝鮮労働党と国家のすべての路線と政策は、主席の先見の明によって科学的に示された。

主席は革命実践上の複雑な問題を解決するうえで常に将来を見通して遠

大な構想と科学的な計画にもとづいてすべてのことをおこなってきた。主席はいかに複雑に提起される現行の問題であってもみな、将来の構想を実現するうえで有利な前提になるよう、先を見通して解決した。

主席が革命の進路を開いていた時期、朝鮮には受け入れるだけの革命遂行の教範もなく、指導を求めるだけの先覚者もいなかった。だからといって、外部勢力に依存して国と民族の運命問題を解決することはできなかった。すべての問題を自力で、独自に解決しないと、一歩も前進できないのが、当時の朝鮮革命であった。

こうした主客観的要求から主席は最初から主体的な路線と政策にもとづいて革命を遂行する独自の道を選択すべきだという確固たる決心をもつようになった。

主席は革命の前途を正しく見通し、今後かもし出される主客観的条件と変化される情勢を科学的に判断した上ですべての路線と政策、戦略と戦術を作成することを違うことのできない鉄則としてきた。

解放後、おこなわれた土地改革がその代表的な実例である。立ち遅れた農業国家であった当時の朝鮮の人口において 80 パーセントを占めていた農民たちのもっとも切実な願いは、自分の土地をもって農業を営むことであった。解放前、農民たちは自分の土地がなくて地主の土地を借りて働きながら背骨が曲がり、血と汗を流さなければならなかった。

主席はこうした現実の要請を正しく反映して、4 万 4 千戸の地主の土地を没収し、72 万余戸に達する広範な農民大衆の長年の願いをかなえてやる土地改革の偉大な変革を実現した。

そして土地改革が将来、社会主義革命への移行と国の社会主義的発展の有利な条件をつくる契機になるよう賢明な措置を講じた。

朝鮮における土地改革の成果的遂行は、いまだ古典やどの国の革命経験にもなかったものとして、複雑多難な当時の革命課題を遂行しながらも、到来する次の段階の革命課題を見通してすべてのことをおこなった主席の非凡な先見の明がもたらした輝かしい勝利であった。

革命と建設を指導する主席の先見の明は、近い将来だけでなく、遠い将来のことまでも手に取るように知り尽くし、すべてのことの経緯はもとより、弊害と意義についてまでも正確に予測する、文字通り神秘な予見性であり、判断力であった。

いつか、総書記はわが国がワルシャワ条約機構とコメコンに加盟しなかったのはまったく正しいことであった、じつに、主席は先見の明のある、革命と建設の卓越した指導者であった、と熱く述べた。

一時、修正主義者らが朝鮮に自分らの経済連合体であるコメコンに加入するよう圧力をかけてきたが、主席は個別的国の自立的民族経済の発展を抑制するコメコンの運命を正しく見込み、自立的民族経済建設路線をあくまで固守した。

主席が早くから見込んでいたように、コメコンはヨーロッパにおける社会主義体制の崩壊とともに終焉を告げたが、朝鮮の自立的経済は人間の想像を絶する厳しい試練の中でもチュチェの赤旗をしっかりと守る威力あるものとして発展するようになった。

主席の指導の賢明さと科学性はこのように遠い将来を見通す非凡な英知を抜きにしては考えられないことである。朝鮮革命の全過程に渡って徹底的に貫かれた革命的原則性と巧みさ、創造性と科学性は、一つの事を行うにしても遠い将来を見通し、ありうるすべてのことを予見した主席の科学的な先見の明による貴い結実であった。

2） 人間愛の最高の化身

熱烈な人間愛

金日成主席と会見している人はそれが誰であれ、主席に惹かれるようになった理由がその高潔な人間愛と徳望にあると異口同音に言っている。これは主席が身につけている崇高な人間愛と徳望にたいする当然の称揚である。

早くも革命の草創期に主席が創始した不滅のチュチェ思想は、人間をこの世で最高の尊厳と価値をもつ貴い存在におし立て、人民大衆がもっとも知恵あり強力な歴史の主体であることを力強く宣言した人間尊重、人間愛の思想である。

人間を尊び、人民を重視する主席の崇高な観点と透徹した立場の精華は人民崇拝である。

1936 年の初冬、主席の接見を受けた朴寅鎮道正は主席に、崇めるものは何かと心中の事を聞いた。

金日成主席は彼の質問に次のように述べている。

「･･･もちろん、わたしにも神のように崇めるものがある。それはほかならぬ人民である。わたしは人民を天のごとくみなし、神のごとく人民に仕えてきた。わたしの神はほかならぬ人民である。この世に人民大衆のように全知全能で威力ある存在はない。それでわたしは『以民為天』を生涯の座右の銘としている」

天のごとくみなし、神のごとく仕える人民、これには主席の人民重視の観点が総体的に集約されている。

人民は天である、誰も考えられなかったこの独特な観点は、人民という巨大な実体の威力と価値を最上の境地に引き上げた主席の崇高な人民観の結晶体である。

人民を天のごとくみなし、神のごとく仕えるべきだというのは、主席が生涯、主張してきた座右の銘である。いまだ歴史のどのページにも記されていない主席のこうした崇高な座右の銘が「以民為天」という 4 文字で集大成されている。

主席のすべての思索と実践活動の始めも終わりも人民にたいする愛にあった。人民にたいする愛から出発し、人民にたいする限りない愛によって一貫して展開されたのが、すなわち主席の偉大な思索であり、偉大な活動であった。

主席は生涯の全過程で超人的な精力をもって、多くのことを構想して設

計し、実践した。その中心には終始一貫人民にたいする愛が置かれてあった。主席には人民にたいする愛を抜きにした一瞬間の思索や一つの実践活動もありえなかった。

人民への太陽のように明るく暖かい微笑は、主席の独特な人情味の集中的表現であった。

万人の心をとらえる明るい笑みを浮かべた主席の姿は、80 の全生涯を一貫した太陽の姿であった。

主席の尊顔にはいつも明るい笑みがあふれていた。労働者、農民に会う時も子供たちに会う時も、太陽のように明るい微笑をたたえていた。幹部らに会っても、現地指導の道で軍人たちと革新者に会っても満面に明るい笑みをたたえて話を交わし、さらには過ちを犯して心配をかけた恥ずかしい思いで恐縮しきっている幹部と人にたいしても優しく微笑んで一つ一つ過ちを諭してくれた。主席は公式的な会議や談話、党と国家行事の幹部壇でも常に満面に明るい笑みをたたえていた。

主席は、一時的に朝鮮労働党と人民に反対して反逆の道を歩んだ人であっても、自分の過ちを悔い改める人々は笑顔で対応し、外国の賓客に会っても常に笑みをたたえて談話をした。

常に満面に明るい笑みをたたえる主席は、人民にたいする愛情、革命同志にたいする友情のため、一生涯涙も多く流した方である。

主席がもっとも悲しみ、胸を痛めて涙を流した時は、愛する革命同志を失った時であった。同志たちが犠牲になったという悲報に接するたび、こぼれる涙とともにできた心中の傷は、永遠に癒せなかった。

主席は抗日戦の日々、祖国の解放を見ずに同志たちが先に逝くたび、心を痛めて寝食も忘れ、苦痛と悲哀の痛みを胸に、涙の中で追悼の言葉を書き、自ら遺体の安置もした。

主席は、誰もが一瞬間に心を惹かれ感動する、並外れの人情味を身につけていたため、常に万人の支持を得、彼らの厚い信頼を受けていた。

主席は一生を限りなく謙虚に生きた方である。自分を人民の息子、人民

のために働く奉仕者とみなした主席は､いかなる人民の称揚についてもいっさい受け入れず､自身をおし立てようとするいかなる試みや行為も許したことがなかった。

しかし、主席が偉大な生涯にわたって人民からの一つの呼び名だけはたいそう満足して心安く受け入れている。

それはほかならぬ人民の「慈父」という呼び名であった。

一国の主席、政権党の総書記と慈父という言葉には、大きな意味上の差がある｡主席や総書記という言葉が一国のもっとも包括的な政治組織と最高の政治組織における公式的な最高職務を指す概念であるなら､慈父という言葉は、生み育てる一家庭の父母を指す概念である。これまでの人類史を振り返ってみても、名望ある政治家や軍司令官、偉人の中には自分を人民の慈父と名乗った人はいない。なお、人民大衆がある偉人や政治家について一様に慈父と心から呼んだことがなかったことは言うまでもない。

主席は朝鮮人民にとって党と国家の最高指導者である前に、限りなく慈愛深くて強い心の柱となってきた父であり、思いやりの深い、細心な母であった。

主席は人民にたいする暖かい愛をもって、冷たい露にぬられ、歳月の雪と雨に降られながら工場や農場、軍部隊を訪ね、人民と兵士たちの生活を肉親の心情で気遣った。人民の食・衣・住の問題を解決しようと、一生をささげた方が主席である。

主席は人民の幸福、全国の家庭の幸福のために真心を尽くし、自分のすべてをささげながらも１年に 1 回しかない誕生日や祝日の日も人民とともにおられながら、素朴で質素に過ごすことを一番嬉しく思った。

慈父という呼び名には、主席の手元であらゆる愛と配慮を受けながら成長した朝鮮人民の心からの感謝の気持ちがこめられている。

無限大の度量と包容力

金日成主席は生涯、海のように広い度量と包容力をもって万民を育み見守った真の人間愛の体現者であった。

主席は朝鮮人民の幸福のために労苦を重ねる多忙な中でも南と海外の同胞を一時も忘れず、全同胞を愛の懐に抱いて暖かく見守り、導いた。

主席は良いこと、嬉しいことがあっても分かれて離散した同胞たちを思い、彼らに悲しいこと、困難なことがあれば誰よりも心を砕いた。党と国家の大慶事を迎える時刻にも南朝鮮と海外の同胞たちを思い、元旦の朝、新年の辞でも欠かさず彼らに暖かい挨拶を送る主席は、実に全民族を抱いて気遣う全同胞の慈父である。

主席は大雨が降り、日照りが続いても南朝鮮の農民たちの営農のことを心配し、冬にはまた南の空を眺めながら寒さに震える南朝鮮の同胞たちを気遣った。

1984年8月末—9月の初旬、南朝鮮で水害を被った。当局の公式の発表によっても300余名が死亡し、20万7000余名が罹災民となって路頭に迷い、3万6700余棟の住宅が破壊し、6万7000余ヘクタールの耕地が流失、埋没された大災害であった。

主席は、自然災害を被った南朝鮮の同胞たちのために心を痛め、即時赤十字中央委員会をはじめ、当該部門を総発動して救護物資を送ることを決定し、その強烈な意向を世界に公布するようにした。

南朝鮮の傀儡当局者が世界の面前で仕方なく救護物資を受け入れることを約束してからもあれこれとその実行を邪魔したが、偉大な慈父の同胞愛によって非常に短期間に米5万石（10回精米した米）、生地50万m、セメント10万t、各種の多量の医薬品が用意されて境界線を渡った。総量を額数で計算すると、1800万US$に値するものであったが、「友邦」を自称していた国々が当時、名目上送ったという「救護金」もそれぞれ2万、10万US$であっただけである。当時まで120余年の赤十字救済歴史上もっとも多かった記録も1983年にインドが水害を被ったとき、スウェーデンからもらった75万US$であった。

救護物資を載せた1400余台の貨物自動車と14隻の船舶が、板門店の境界線を越えて海の波をかき分ける光景を目撃しながら、全朝鮮民族ばかりでなく、世界の人々が偉大な慈父の同胞愛に胸を打たれ激情につつまれた。

このように熱い同胞愛をもっている方なので、主席は訪北する南の同胞らを一人も差別せずに、肉親の情で暖かく包容した。

国が解放された後、呂運亨、洪命熹、金奎植などの政治家と金九のようなかつて反共思想に根深く染まっていた頑固な民族主義者、キム・ソクヒョン、パク・シヒョン、ド・サンロクのような学者をはじめ、多くの南朝鮮の同胞たちが偉大な慈父をお目にかかっては主席の明るい微笑と同胞愛に惹かれて人生の方向転換をしたのである。

世界120余の国には多くの朝鮮同胞が住んでいる。

主席にとって海外同胞一人一人はみんな自分の血肉であった。たとえ、居住地と国籍は異なるとしても、彼らはみんな自分が必ず包容して見守りいたわるべき実の息子、娘であり、肉親であった。

主席は終始一貫、在日同胞たちの運命問題で心を砕き、彼らの尊厳と利益を守るためにすべてを尽くした。

主席は在日同胞たちの民主主義的民族権利を擁護し、彼らが祖国と民族のための真の人生を生きるように、1955年5月には共和国の尊厳高い海外公民団体であり、強力な統一戦線体である総聯（在日本朝鮮人総連合会）を結成し、それを通して同胞たちに肉親の情を超越する熱烈な愛と恩情を注いだ。

1957年に主席の指導の下に国家予算の草案が審議される時であった。

戦争の傷がまだ癒されなかった状況なので、復旧と建設の課題が数多く提起されていたので、国の財政実態は非常に困難であった。

主席はわれわれが工場を一つ、二つ建設できないことがあるとしても、異国で苦労する同胞たちに子供を勉強させる金を送らなければならない、これは一度や二度で終わるのではなく、恒常的に捉えていくべき活動であり、単なる教育事業ではなく、重要な民族的愛国事業である、と強調した。

こうしてどの国にもない在日同胞の子弟のための教育援助費と奨学金」という新たな財政予算項目が設定され、現在まで莫大な教育援助費と奨学金、多くの教科書と民族楽器が在日同胞の子弟に渡されるようになった。

主席の慈愛深い愛は、世界の各地に住んでいる多くの海外同胞にも行き届いた。

偉大な慈父の真心のこもった同胞愛に惹かれ、アメリカにいる祖国統一促進会の会長であり、南朝鮮の人々の教会連合会の顧問であった金聖洛牧師、国際テコンドー連盟（ITF）の総裁崔泓熙、世界平和連合の総裁ムン・ソンミョン、ドイツの名望高い同胞音楽家ユン・イサン、在米同胞の女流記者ムン・ミョンザなど、それぞれの職業と政見、国籍をもった多くの海外同胞が人生の新しい出発をし、同胞の統一と繁栄のための道で人生の真の意味を新たに感じ取った。

主席の愛の世界は国境を知らない、広大な人情の世界であった。

主席は限りなく広い度量と包容力によって、一生多くの外国の人士と親交を深め、暖かい恩情と配慮を施した。

主席は解放後から生涯の終わりの時期まで、各国の党と国家の元首級の人物だけでなく、それぞれ異なる国籍と政見、職務と年齢をもった各階層の136カ国の7万余名に達する外国人を接見し活動した。解放後から偉大な生涯の最後の時期まではほとんど50年である。結局、平均的に見れば、1年間に1400余名、毎日4名程度の外国人を接見し活動したことになる。

主席は対面するほとんどの外国人を単なる実務的な活動対象としてではなく、親しい友人としてたいし、友情を交わし、暖かい人間的絆を結んだりした。

主席の暖かい人情味、外国の友人たちと非常によく解け合い、親しく対応する限りなく広い度量と人間愛に、朝鮮民主主義人民共和国と敵対関係にあったり、好ましくない感情をもっていたりした外国人までも、一度対面しては瞬間に魅了されて主席の支持者、信頼者、宣伝者になったのである。

主席を2回も会見する栄光に浴した外国のある人士は自分の文に、主席

はどういう方なのかと聞く人々に、一度会えば別れたくない、いつも慕いたい、偉大な人間であると言ってあげたい、と書いている。

イタリアには太陽はすべての人のために光を放つという格言がある。大洋と大陸を越える暖かい愛によって、人類に光明を与え、愛を与える主席こそは偉大な人間、人類の永遠な太陽である。

1992 年のある日、総書記はシリーズ劇映画『民族と運命』の創造活動を関連して幹部らと談話をおこなった。

総書記は談話で、南朝鮮と海外から主席の懐を訪ねてくる人々の中にはかつて祖国と民族にたいして罪を犯した人もいる、しかし主席は過去を問わず、統一という聖なる事業に余生を捧げるという彼らの決意を信じ、慈愛深い懐に抱いている、と熱く述べた。

1986 年 9 月、共和国北半部の永住を宣言する海外同胞崔徳新の記者会見があった。

永住を宣言する記者会見で彼はこういった。

「金日成主席は民衆を愛し、民衆に真の福音をくださる民衆中心、民衆本位の哲理に根を下ろした偉大な政治経綸とすぐれた品格、非凡な先見の明と該博な知性、広い度量と慈しみ深い徳望を備えた偉人の中の偉人であり、聖人の中の聖人です。一度会えば、遠い過去に抱いていた願いと今日と明日の念願まで察し、一瞬にして胸がすき、目の前が明るくなる前途を指し示し、愛と恩情を施す金日成主席は、実に私のように反共をしていた人までも民族の一構成員に包容する慈愛深い方です」

主席は民族にたいして大罪を犯した過去と決別して新しい出発を始めた彼が人生の終わりをきれいにしめくくるよう格別な関心を払った。

主席は永住を宣言した彼に祖国平和統一委員会の副委員長、統一新報社の名誉社長、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議代議員として活動するよう大きな信頼を与えた。それだけでなく、1989 年 3 月から朝鮮天道教会中央指導委員会の委員長として働くように恩情をほどこし、金日成勲章と祖国統一賞も授賞した。彼が死亡した時には愛国烈士陵に安置するように暖か

い配慮をめぐらし、彼の未亡人にも限りない信頼と配慮をほどこした。

一時の誤りも大らかに白紙化する主席の懐に抱かれて人生の新しい門出をして、共和国英雄や祖国統一賞の受賞者、教授、博士、人民俳優になり、党と革命、祖国と人民に忠実な活動家として生の終わりを立派に締めくくった人は数え切れないほど多い。

大きな雅量をもって人にたいし、人間的な情を注ぐ主席の人間愛の幅がかくも限りなく広かったので、かつて封建時代の王族の後裔も主席の前で深く頭を下げたのである。

主席が高麗太祖王建王陵を見て回ったという消息に接した王建王の後裔たちが600余年間も隠匿していた王建の玉璽と系譜を出し、家門の運命と将来を主席に全的に託した歴史的事実は、封建時代の王と歴史的人物の功績までも歴史主義的原則で客観的に評価しおし立ててくれる主席の度量と包容力がいかに深くて熱いものであるかを物語っている。

偉大な太陽の大きな度量と包容力に惹かれて、再生の道を歩み、人生を立派に総括した人々と彼らの子孫は今日も、主席の暖かい愛の懐を忘れず、主席が永生の姿でおられる太陽の聖地を訪ねてまた訪ねている。

崇高な同志愛でつづられた革命的生涯

主席の人間愛は革命同志にたいする熱い愛情でその絶頂をなした。主席は偉大な生涯をいかなる人物も比肩できない、労働者階級の革命闘争史にいまだかつてなかった、真の同志愛でつづってきた。

主席が抗日大戦を宣布した時から全生涯にわたって情を注ぎ、真心を交わした革命同志は数千数万に達する。その一人一人に注いだ主席の同志愛は、枯れていく人生にも再生の春をもたらす暖かい生命素であり、終生一度も冷めたことのない情熱的な愛であった。

主席の一生は同志の獲得にささげられた崇高な一生であった。

早くから父母の革命的影響を受けながら並外れた革命的同志観を確立し

た主席は、特有の同志観を確固たる信条とし、石の上にも花を咲かせるような熱烈な愛で同志を得るための一生を生きてきた。

主席は崇高な革命的同志愛で革命隊伍の一心団結を成し遂げ、その威力で祖国解放の歴史的偉業を実現し、新しい祖国建設と祖国解放戦争、戦後の復興建設と社会主義建設をはじめ、複雑で困難な朝鮮革命の全歴史的段階で常に勝利と成功のみをもたらした。

主席を革命の陣頭に最初に戴いた朝鮮革命の初世代の革命家らは、主席の同志愛を石の上にも花を咲かせる愛であると心から歌い、主席の懐で革命を学び成長したすべての人は、主席を、一生をかけて慕うべき偉大な同志として高く奉じた。

主席は歴史上、どの偉人よりも同志が多かった。

生死を分かつ厳しい決戦場や平和的建設の日々にも、主席を限りなく清らかな同志的信義と忠誠で高く奉じた人々はみんな、主席が探し出し、手塩にかけて育て、手取り足取り導いた、主席の革命同志たちであった。

朝鮮労働党の胎児であり種子である初の党組織「建設同志社」の名称に込められた意味は実に深奥である。「建設同志社」という名称には、同志の獲得から革命の第一歩を踏み出し、生死をともにする同志をたえず探し求めて結束し、革命を発展させて、最後の勝利を達成しょうという主席の雄大な抱負と確固たる意志がそのまま込められていた。

同志を獲得するための遠くて険しい道を踏み分ける日々に、主席は人民大衆の解放闘争史に類を見ない崇高な同志観を確立した。

主席の同志にたいする信条は、真の同志は第2のわたしだということである。

主席にとって同志は単なる友情を分かち合う友人や仲間を意味するのではない。思想と志向が一致し、そのために自分の生命をも惜しみなくなげうつことのできる、もう一人の自分だというのが主席の革命の同志であった。

同志を得れば天下が得られ、同志を失えば天下を失うということが、抗日のその日々から主席が掲げてきた大命題であった。

思想と志をともにし、生死をともにする同志たちの力はこの世でもっとも威力あり強固なものであり、その力に依拠すれば不可能なことも恐れるものもないというのが、ほかならぬ同志の貴重さと役割に関する主席の一貫した見解であった。

同志を獲得することから革命の第一歩を踏み出し、同志を集めた後に武器を得、党と国家も建設した主席にとって同志を得ることは一生のまたとない楽しみであった。

主席がこの世でもっとも貴重な財宝と見なしたのは、黄金や千万の財ではなく、生死をともにできる革命の同志であった。

主席は、同志を千金をもってしても買いがたく何物にも代えがたい、もっとも貴い財宝と見なした。まさにそれで主席は同志の獲得をまたとない楽しみにしたのである。

主席は同志を一人一人得るたびに喜びを感じていた。それは何物にも比べられない厳かで壮快なものであった。

主席は一生、限りなく崇高な同志的信義心をもって革命の同志を限りなく愛しいたわり、同志のために自分のすべてを尽くした崇高な信義の最高の体現者であった。

主席は抗日革命闘争の勝利の神話的な秘訣を知りたがる人々から朝鮮人民革命軍がいかにして新興軍事強国である日本の軍事力を打ち破るほど強くなれたかという質問を多く受けた。

主席は自分の一生を総括した回顧録の中で、朝鮮人民革命軍が強かったのはなぜかと問われるたびに、わたしは、信義によって結束した集団だったからだと答えてきた、われわれの団結が道徳と信義にもとづかず、ただ思想・意志の共通性によるものだけであったなら、われわれはこれほど強くはなかったであろう、と書いている。

主席は、強盗日本帝国主義が現代軍事科学のすべての最新成果と数十年にわたる暴圧政治と領土膨張を通じて練磨したファシスト的な抑圧手段を総動員して朝鮮革命を絞殺し、朝鮮民族を抹殺しようと狂奔するとき、革命

的信義と団結の戦略で抗日革命戦争を導き、国の独立と人民の解放をもたらすことができたのである。

主席は各段階の革命課題を遂行していく全工程で、常に隊伍の思想・意志の団結を強固にし、革命と建設を力強く推進する上で道徳・信義を威力ある武器としてきた。

愛と信義で大衆にたいし、彼らを呼び起こす主席の限りない崇高な同志愛と道徳・信義に惹かれて、数千数万の人々が主席のもっとも忠実な同志となり、領袖のために自分をささげることのできる革命家として成長した。

世界には指導者も多く、人民大衆の革命闘争を指導した傑出した偉人も少なくない。しかし、主席のように人民大衆の一人一人を自分の貴重な革命同志と見なし、愛情を注ぎ、限りない信義心で導き見守った指導者や偉人はなかった。

革命の同志たちにたいする主席の同志的信義は、時間の限界を知らない永遠な道徳・信義であった。主席は革命戦士と同志たちの生存時だけでなく、犠牲になった後も厚い信義心をもって生きているときと少しも変わらない温かい愛と配慮をめぐらした。

写真も退色してしまう長い歳月の中で先に逝った革命同志を忘れず、彼らと限りない情を分かち合った主席の信義心によって、平壌の大城山の朱雀峰の丘には抗日の革命先達の半身像を厳かに安置した革命烈士陵がつくられるようになった。

その後、主席は犠牲になった昔の戦友たちが懐かしくなる度には、事務を執っていた錦繍山議事堂の窓を開けて、抗日戦争の昔の同志たちが永生の姿で安置された陵を眺めたりした。

主席と抗日戦場の姿そのままで永生する先達の間では、崇高な信義にもとづいた懐かしさと真心のこもった対話が間断なく続いた。

国が解放されるやいなや、革命家遺児たちの学院を建設し、多くの人を各地に派遣して国の津々浦々と異国に離散している同志の子女を一人も漏らさず探し出し、先代の後を継ぐべく革命家に育てた方も、革命の同志にた

いする永遠に退色を知らない崇高な信義の持ち主である偉大な主席であった。

主席が生涯の最後の瞬間まで、金策同志とともに撮った写真を金庫の中に大事に保管していた話、全国各地に闘士たちの銅像を建てて都市と機関、単位の名称に革命先達の名をつけるようにした話、多くの革命同志の子女を育てて堂々たる活動家におし立てた話など、主席の崇高な信義の世界にまつわる話には限がなかった。

主席の崇高な信義の世界は、その幅において限界を知らぬ崇高な人間愛の世界であった。

主席が限りなく崇高な信義をもって暖かい愛と配慮をめぐらし、情を分かち合った人々の中には、身近で働く活動家から始まって平凡な労働者、農民や物心のついていない子供、海外同胞、外国人にいたるまで様々な人がいた。

主席は一生涯、人民との約束を一度も守らなかったことがなかった。人民との関係で官職ではなく、愛と信義を第一位に置く主席は、誰よりも信義を重んじ、それを守るためであれば、いかなる苦労もいとわず、いかなることでもためらいを知らなかった。

主席は革命活動を行いながら知るようになり、少しでも援助を受けたことのある人であるなら、彼がどの国の人であれ自分の恩人として見なし、彼らに人間的信義を守るために努力した。彼らの中には中国人の抗日革命縁故者もおり、アパナセンコ、ノビチェンコなど、旧ソ連の軍人もおり、さらにはモンゴルの平凡な女性もいた。主席は機会あるたびに彼らをお招きし、厚い恩情をほどこし、可能なすべてのことを配慮した。

実に、主席は一生を同志と人民のために捧げた崇高な革命的信義の鑑であった。

3）不屈の精神力の第一の強者

不変の信念と意志

金日成主席が身につけた革命的信念は、人民大衆の革命思想と正義の革命偉業にたいする確信で一貫されている出色の精神力であった。

金正日総書記は次のように述べている。

「革命的信念は革命偉業の正当性と勝利の確信であり、革命偉業のために献身しようというかたい覚悟と意志です」

主席はチュチェ思想の創始を宣言し、それを具現して各段階の複雑多難な革命課題を成果的に遂行する過程で、チュチェ思想の科学性と真理性、正当性と生命力にたいする並外れた誇りと確信を固くもつようになった。

朝鮮革命の誇るべき発展の歴史はすなわち、チュチェ思想を具現して祖国と人民の運命を救い、その尊厳と栄誉を全世界に轟かすための主席の栄えある革命活動史であり、朝鮮革命の実践闘争の中でチュチェ思想の正当性と真理性が遺憾なく確証された過程であった。

解放直後、国家を管理し経済を運営した経験もなく、国が非常に立ち遅れていた上に、南北に分裂された困難な状況にあったが、主席は土地改革を実現するために各地の農村に出かけて数日間も農民たちと生活をともにしながら、どういう方法で土地改革をおこなうことが朝鮮の農村の実情に合うかを具体的に研究した。その過程で主席は他国のことをそのまま真似るのではなく、チュチェ思想の要求通りに自国の実情に即して自力ですべての問題を解決するために努力するのがより必要であることを確信した。

主席はこのような過程を通じて、革命の主人としての自覚をもって自分の力に依拠し、すべての問題を自国人民の利益と自国の実情に即して自主的に、創造的に解決していく主体的観点と立場こそは、革命と建設で堅持すべきもっとも正しい観点と立場であるという信念をさらに固くした。

人民大衆の革命偉業の正当性にたいするゆるぎない信念を持って一生を戦ってきた主席の高潔な精神力がそのまま思想的・精神的源泉となっていたため、朝鮮革命は第一歩を踏み出した初期から、革命の各段階を経ながらも一貫して人民大衆の正義の革命偉業として前進してくることができたので

ある。

社会主義が人民大衆の理想であるということを確信し、その偉業をあくまで完成しようという主席の信念は、革命闘争の全過程で一時たりとも動揺したり、変わったりしなかった。

主席は社会主義偉業の正当性にたいするこうした並外れた確信をもっていたため、その勝利を絶対的に信じ、あらゆる事大主義と教条主義、修正主義との熾烈な闘争を展開しながら幾多の試練と難関を乗りこえ、人民大衆中心の社会主義を建設したのである。それだけでなく、ヨーロッパの多くの社会主義国が正義の道で脱線して資本主義を復帰させていたその厳しい時期にも揺ぎ無くチュチェの社会主義の旗を高く掲げて朝鮮労働党と人民を力強く導いたのである。

社会主義偉業にたいする確固たる信念を持っていたがゆえに、主席は 1992 年 4 月 12 日、アメリカ「ワシントン・タイムズ」記者団を接見し、彼らがソ連と東欧社会主義の崩壊にたいする見解を質問したときにも、社会主義の発展過程には一時的に紆余曲折がありえるが、人間の社会的本性を具現した社会主義の理念は変わるものではない、社会が発展するにつれ、社会主義を求める人間の社会的本性はさらに発展するものであり、したがって人々が社会主義へ進むのは動かしがたい法則であるとしながら、社会主義の道を最後まで進もうとする自らの信念と意志を確固と表明したのである。

主席は一生涯、朝鮮人民の正義の祖国統一偉業の勝利についても並はずれた確信を持ち、その実現のために力強く戦ってきた。

主席は、わが人民へのもっとも立派な贈り物は祖国の統一であるとし、祖国統一を自分に負かされた最上の民族史的課題として受け止めていた。

主席は朝鮮が分裂の苦痛をなめた初日から、朝鮮民族の祖国統一偉業は正当であり、必ず勝利するという固い信念をもってその実現のために労苦を重ねた。

祖国統一にたいする透徹した信念の持ち主であった主席は、数十年の長きにわたり、国の統一のために労苦と心血をつくし、祖国統一 3 大憲章のよ

うな祖国統一の里程標をもたらし、偉大な生の最後の時刻にも祖国統一の問題に深い関心を払った。

主席は一生涯、朝鮮人民の正義の偉業にたいする確信とともに人類の解放偉業、全世界の自主化偉業も必ず実現されるという鉄の信念を持していた。

主席は、自主性は人類共同の念願であり、自主性を志向することは、現代の基本潮流として、世界のすべての国、すべての民族が自主的な新しい世界を建設するために一致して闘争に奮い立つならば、人民大衆の自主偉業、世界の自主化偉業は立派に成就されるという確信をもって一生、それを実現するために力強く戦ってきた。

主席が持した革命的意志は、自主的な思想・意識と鉄の信念で固められた不屈の革命的節操であり、強い闘志であった。

主席は革命の道に立った初期から人民大衆の限りない力を絶対的に信じ、人民大衆の力に依拠して、革命の草分けの道を屈することなく乗り越えてきた。

主席が守ってきた革命的節操は、崇高な革命的信義に源泉を置く強靭な意志であった。

主席は早くから革命の道に立ち、同志と人民の中で苦楽をともにしながら、同志的信義を何よりも重んじた。

主席は必ず祖国を独立し、朝鮮人民に自由と幸福をもたらすことこそは人民と同志にたいして担った自分の本分であり、信義であると見なした方である。

主席は革命同志と人民にたいする革命的信義を果たすために、革命的節操と不屈の意志で敵の陰険かつ狡猾な策動をことごとく粉砕し、革命闘争の道でただ一度もためらったり、原則を譲歩したりしたことがなかった。

たぐいなき胆力と度胸

金日成主席がもっている胆力は、いかなる雷鳴にも微動だにしない強大

無比さと死をも恐れずに立ち向かい、何事もスケールが大きく設計し、最後までおし進めた頑強な実践力であった。

いかなる難関と試練に直面しても泰然自若で余裕綽々に万事を処理し、大胆かつスケールの大きい作戦を練り、一度決心したことはけりをつけるまでゆるぎなく実践していく頑強な気概に、天下第一の胆力家としての主席の崇高な偉人像がある。

主席の胆力はいかなる強敵の侵略と挑戦、いかなる試練と逆境にあっても微動だにせず、立ち向かう強大無比の精神力であった。

主席は２度の革命戦争を指導した総帥である。主席が指導した苛烈な 2 度の革命戦争は、逆境に立ち向かっていく人間の胆力がどういう高さにいたるべきかを実践的模範で見せる生きた教材である。

抗日革命戦争はそれ自体が無比の胆力で開始され組織展開された革命戦争であった。実際、飛行機と戦車、軍艦をもった帝国主義強敵とごく少ない武装でもって全面対決戦を決心するということは、普通の常識では想像できないことであった。

しかし、主席は誰もすぐには決心できないこの道を断然選択し、抗日大戦を宣布した。

いつか、総書記は強靭な胆力で強盗日本帝国主義との革命戦争を組織指導した主席の偉大性について話しながら、普天堡戦闘を例に挙げたことがある。総書記は主席が普天堡戦闘を指揮した佳林川のほとりの司令部指揮所は日本帝国主義の警察官駐在所から 100m余り離れたところであったとし、これについて外国の人士たちも、司令官が戦場からあれほど近いところで戦闘を指揮した例は世界戦争史上なかったといっていたと述べた。

たぐいなき胆力で一生涯、祖国と革命を守護した主席の強靭な精神力は、生涯の晩年まで変わりなく高く発揮された。

主席は東欧社会主義諸国の連鎖的崩壊という歴史の渦中でも、多くの古典的著作を発表して、あらゆる帝国主義反動と立ち向かってあくまで正義の革命的立場を固守する鉄の意志を明白に披瀝した。

主席は仕事を一つ設計し作戦しても人々の想像を絶する高い目標を提起し、仕事をスケール大きくくり広げ、一度設定された目標は最後まで貫徹することを鉄則にした。

西海閘門は主席の革命的展開力と頑強な実践力を示す労働党時代の数多い立証者の中の一つである。

1981 年 10 月、党中央委員会第 6 期第 4 回総会で自然改造事業の 4 大課題を提起した主席は、西海閘門建設のための雄大な設計図を示した。

当時、一部の幹部と専門家は大同江下流の臥牛島の前をせき止める案を出し、それも旧ソ連でのヴォルガ・ドン運河とルーマニアのドナウ川の下流運河の建設と比べながら数十年がかかってこそ完成されると予想した。

主席はそのようにしては干拓地の用水問題を完全に解決できないとし、実務幹部らが予定した位置より海の方へもっと出てその位置を定め、それも数十年ではなく、数年内に終える大胆な目標を示した。

当時、ある国の人々は水深が深い上に、干潮と満潮との差が著しい条件で、8ｋｍの外海をせき止めることは全く不可能なことだとし、朝鮮で西海閘門を建設すれば、自分らはベーリング海峡をせき止めるとまで、横柄な話し方もした。しかし、彼らはたぐいなき胆力と闘争力をもった主席の不屈の精神力の前で、自分らの考えが全く誤りであったことを認めざるを得なかった。

主席の大胆かつスケールの大きい作戦と頑強な実践力によって、朝鮮の軍人建設者と人民は自らの設備と資材、技術でただ 5 年の間に労働党時代の記念碑的建造物である西海閘門を立派に建設する歴史の奇跡を創造した。

主席は天をもつく、無比の胆力を備えた偉人の中の偉人、剛毅な精神力の最高体現者であった。

敢然として立ち向かう攻撃精神は主席特有の精神力であった。

主席は生涯の末期に栄光に満ちた一生を総括しながら回顧録の中で、わたしの生涯を通じての志向は、防御ではなく攻撃だったといえる、わたしは革命に身を投じたその日から今日にいたるまで、敢然として立ち向かう攻撃戦術をもって人生を生きぬいてきた、前進途上に難関が立ちはだかるたびに、

わたしはその前でためらったり動揺したりしなかったし、迂回したり避けたりすることもなかったと書いている。そして革命発展の各段階において、われわれが主に敢然として立ち向かう攻撃戦術を用いたのは、複雑で試練にみちた朝鮮革命の要請であった、20 世紀、世界をゆさぶる複雑な政局の渦中にあって、われわれがもし防御や後退、迂回の方法にのみすがっていたならば、われわれの前に立ちはだかる難局を打開することはできなかったであろう、だから、わたしはいまも、あのときわれわれが逆境に立ち向かい、それを順境にかえた革命的戦略が至極正しいものであったと考えている、と感極まって書いている。

革命活動の初期からあらゆる辛酸をなめながら、敢然として立ち向かう攻撃精神で万難を排してきた主席は、困難を極めるたびに、恐れを知らぬ胆力をもって死にも敢然として立ち向かいながら逆境を順境に、禍を福に変えてきた。

実際、抗日の戦場は毎瞬間が数多の死線を乗り越えなければならない決戦場であった。解放後、革命詩人の李燦が「金日成将軍の歌」を創作しながら不滅の頌歌に「長白の山なみ　血に染めて　鴨緑の流れを　血に染めて」と書いたのは余りにも当然なことであった。しかし、主席はこの無数の死線、血のにじむ決戦場で常に敢然として立ち向かう攻撃戦術を一時も緩めたり、変えたりしなかった。

朝鮮人民革命軍の主力部隊が 1937 年の春、小湯河で数千に達する兵力が幾重にも取り囲んだとき、主席は敵が森林地帯にだけ神経をとがらせている点を正しく見抜き、包囲が比較的手薄な大道路に沿って大胆に住民地区へ行軍するようにして危機を逃れて部隊を救い出した。

頑強な攻撃精神をもった主席は1939年の春、茂山地区へ進出する時も、日本帝国主義が遊撃隊「討伐」のために建設し竣工検査を待っていた甲茂警備道路を白昼に行軍をすることにより、敵をびっくり仰天させた。

革命のために、愛する祖国と人民のためなら、いかなる危険もかえりみず、胆力を持って攻撃戦で立ち向かった主席は、革命生涯の全期間、常に銃弾がふりそそぐ最前線にて朝鮮人民を勝利へと導いた。

抗日の日々、主席のいる司令部は常に戦場のもっとも熾烈なところにあったし、そこで主席はモーゼル拳銃で敵兵を撃ち倒しながら戦闘を指揮した。大沙河戦闘時のように司令部を狙う敵の銃口が集中される中でも、主席は一度も一身の危険もかえりみず、最決戦場に出ていた。時には機関銃を手にして突撃戦に臨み、時にはしんがりをつとめて追ってくる敵を撃滅したことも一度や二度ではなかった。

主席は一生涯、決心して取り組めば不可能なことはないという胆力をもって革命と建設のすべての問題を剛毅な精神力で解決した剛腹な方であった。何事も決心さえすれば不可能なことがないというのは主席の一生を貫いた根本的精神であったし、こうした不可能を知らぬ胆力があったがため、朝鮮革命は常に勝利の一途を歩むことができた。

抗日武装闘争の時期、遊撃区で火薬を自力でつくり出したのも、主席が身につけた不屈の革命精神、決心さえすれば不可能なことがないという鉄の信念と胆力がもたらした貴い結実であった。

主席が戦後、とうもろこしの栽培を大々的に行うようにしたとき、一部の保守主義者はそれに半信半疑しながら反対した。

しかし、主席は人民大衆の積極的な支持、声援の中で保守主義、消極性を粉砕し、とうもろこしの栽培を全国的に行うよう断固と導くことにより、戦後の困難な食糧問題を解決した。

主席は対外関係においても、たとえ誰から認められず、妨げがあるとしても革命に有利で人民に有益であればそれでよしという胆力をもって、いかに緊迫で厳しい状況の中でも余裕綽々と朝鮮革命を勝利へと導いた。

革命的情熱と楽観

主席の一生はそれこそ、超人的な情熱で生きた一生であった。

偉大な革命的生涯の全期間に渡り、主席はしばしの休息もとらず、人民大衆の自主偉業のために、祖国と民族のために昼夜を分かたず、献身の道を歩み、先頭に立って万難を排しながら祖国繁栄の地ならしをした。

主席の一生には休息という言葉すらなかった。

主席は人間の意志力の発現と見るには全く信じられない超人的精力で活動した。

いつか、幹部らが主席に夜更けまで仕事をし、また早暁には誰よりも早く起きて仕事を始めることを少し控えてほしいと懇願すると、主席は大らかに笑いながら身についた習慣はなかなかなくしがたいと述べた。

抗日武装闘争の時期、敵らは必ず早暁に襲撃してきたので主席は部隊の運命が心配になって安心して休まれず、それ以来、朝早く起きるのが主席の固まった習慣となった。

主席は祖国が解放されたらゆっくり休もうと約束したが、解放されるとまた胸がいっぱいになるほど仕事が待っていたので、山にいるときと同じく

早暁には眠れなくなるとし、それでまた心配する同志たちに建党、建国、建軍の事業が一段落つくと、のんびり休もうと言っていた、と話した。

そして、ところが次には戦争が起こり、戦争が終わると、復興建設が始まり、続いてチョンリマ大進軍が始まった、しかし、他国より立ち遅れているのに十分に寝て休めばどのように彼らに追いつき、追い越せるかとし、結局、生活は自分に朝ゆっくり休むことを許さなかった、それで固まった習慣であるとし、朝早く起きる習慣だけは一生変えることができないだろう、健康は革命のために必要であり、革命家は革命活動を瞬時も中断してはならないと、平然と話すのであった。

主席にはただ一度の休暇も、数時間の短い休息もなかった。むしろ、主席は情熱的に活動することを自分の休息として思っていた。

主席のエネルギッシュな活動は、単に時間の延長線上でのみ行われたのではない。

主席は一生、天気が悪い日にも関わりなく活動し、険しい道もかまわずに現地指導の道を歩み続けた。

朝鮮革命博物館には今も主席が現地指導の際着ていた質素な軍用外套が大事に保管されている。襟がすり切れて毛羽立った軍用外套、その外套には危機に瀕した革命の運命、祖国と民族を救い、人民に豊かで文化的な生活をもたらすためにしばしの休息もとらず、人民を訪ねて数億万里の道を歩み続けた主席の大きな労苦と人民への愛が秘められている。

それゆえ総書記は、誰も知らない道、類を見ない困難な道を一生涯歩んだ方は主席である、主席は革命の道に身を投じた当初から生涯の最後の瞬間まで常に人民行きの列車に乗って祖国と人民のための現地指導の道におられた、実に人民のためにささげた主席の一生を思うと、目頭が熱くなる、と熱く述べている。

世界の政治界を見れば普通、国家元首や政治指導者たちの晩年は、政治と離れた静かな環境で流れていたのが一般的である。

しかし、主席は高齢の身でありながらも信じがたいほど燃えるような精力で国事を指導し、各階層の人々も接見しながら生の終わりを立派に締めくくった。

実際、生の晩年に主席は心臓病を患っていた。

逝去した年には眼病まで患い、1994 年の最後の新年の辞を行うときには、よく見えなくて原稿を手にし、苦労して読まざるを得なかった。それで主席はと

うとう目の手術を受けるようになった。

若い人々もそういう手術を受ければ、一ヶ月余り休みながら治療を受けなければならない。

しかし、主席は目の手術を受けて何日も経っていないときに海外同胞の孫元泰先生を接見し、続けて朝鮮少年団第 5 回大会に参加した学生少年たちと会って記念写真を撮った。

主席は逝去する数ヶ月前にも全国農業大会や全国石炭工業部門従事者大会の参加者をはじめ、多くの勤労者と会って綱領的な助言をおこない、彼らと記念写真を撮った。

それだけでなく、数回にわたって農業部門の幹部協議会を指導し、温泉郡と平壌市周辺の農場を現地指導しながら農業問題を話し合った。生涯の最後の日であった 7 月 5 日と 6 日には経済部門の責任幹部協議会を招集し、社会主義経済建設で堅持すべき綱領的な指針を示した。

主席は生前に 54 回にわたって 87 余の国を訪問した。その道のりは 52 万 2460 余ｋｍに達する。それだけ、主席の対外活動は人々の想像を絶するものであり、主席が接見した外国の元首と政治人、各階層の人士の数は数え切れない。

主席は一生、誰より苦労も多くし、胸の痛む喪失の苦痛も数多くなめた。

しかし、主席は一度たりとも悲観や動揺を知らなかった。特に革命の前に試練と難関が直面するたび、将来の勝利にたいする楽観をもって主動的に立ち向かい、常に楽天的に生活した。

主席の革命的楽観主義に見習って、抗日闘士たちは千古の密林の中で、素手で延吉爆弾をつくり出し、敵に両眼をえぐり取られ、断頭台の露と消えながらも革命の勝利が見えると声高に叫ぶことができた。未来にたいする楽観、解放された祖国で幸福に暮らす日は必ず来るという楽観が不屈の闘争精神を生み、祖国解放の歴史的偉業を成し遂げることができたのである。

祖国解放戦争で朝鮮人民が発揮した大衆的英雄主義と楽観主義も主席が身につけた楽観主義精神に基づいて形成され、高く発揮されたことである。

主席の一生は楽天家の一生であった。

主席はわれわれの人生の経験によれば、歌は革命的楽観主義の象徴であり、革命勝利の象徴であるとしながら、よく人間の生活には詩もあり踊りもあり、歌もあるものである、そうでなければ生きる楽しみが無いのではないかと述べている。

歌声が高いと、国が栄え、党が強くなり、歌声の高いところに革命の勝利があるというのは、主席が革命的生涯の全期間にわたって堅持していた観点であった。

いつか、主席はかつて白頭山で日本帝国主義と戦うとき、われわれは歌を歌いながら戦った、歌は敵撃滅の力であり、必勝の武器であった、われわれは祖国解放戦争の時期にも、戦後の復興建設時期にも革命の歌を高く歌いながらあらゆる試練に打ち勝ち、この地上に人民の楽園を建設した、と回顧した。

文学と芸術を非常に愛した主席は機会があるたびに、直接不朽の古典的名作「血の海」「花を売る乙女」「血噴万国会議」「ある自衛団員の運命」「城隍堂」などの革命歌劇、革命演劇、革命歌謡「思郷歌」「反日戦歌」などをはじめ、革命的な文学・芸術作品を創作した。

主席は小説や映画のような文学･芸術作品の鑑賞を好み、歌もよく歌い、楽器もひきながら楽天的に生活した。

主席はもともと運動が大好きであった。水泳も好み、し、テニスと卓球も上手であった。

実に主席は一国の革命の成敗や生命力、人間の生活水準も革命的楽観主義によって左右されるという信念にもとづいて革命闘争と生活を楽天的におこなってきた剛毅な精神力の最高の体現者であり、それによって朝鮮革命は歴史のあらゆる風波のなかでも常に青春の活力に満ちて力強く前進してくることができたのである。

4）高潔な風格を備えた偉大な平民

限りなく謙虚に生きた一生

朝鮮の諺に、実る稲穂は頭垂れるという言葉がある。自分をへりくだって相手を尊重する謙遜な態度をもってこそ､人々の間に率直な話が交わされ、真実な交際がなされるのである。

金日成主席は限りなく謙遜な品格を身につけて､一生を生きてきた偉人の中の偉人である。

金正日総書記は次のように述べている。

「金日成同志は限りなく慈愛深く謙虚な人でした」

主席は積み上げた大きな業績も、人民の称揚と世界的な公認も拒みながら一生、自分をへりくだった。

主席はしばしば自分も人民の息子であると述べている。

人民の息子、たとえ短い言葉ではあるが、その中には自分を人民の隊伍の中に人民の一構成員として平凡に立たせて生きようとする主席の真心と人民の一構成員として生きるうえで生き甲斐と価値を求める主席の確固たる人生観がそのまま反映されていた。

主席は自分を人民の息子、人民の忠僕、平凡な人民の一構成員と見なして生きることをこの上なく重んじた。

主席は一生、誰の前でも自分の功績や称号について自ずと自負したり、自称したりしたことがなかった。主席の謙虚な姿勢と立場は、司令官も人民の息子であるといっていたパルチザン時代にも、振り返れば自分の 80 歳は一言で言って人民の息子として人民のためにささげた闘争の一生であるといえるとした 80 の高齢にいたるまで一度たりとも変わったことがない。

インドネシアのボゴール植物園は、世界草花博覧会場を髣髴とさせるほ

ど花が多く、歴史が長いことからして世界的にも有名な植物園である。

主席がこの植物園を訪ねた時、インドネシアのスカルノ大統領と植物園の園長は、ある有名な植物学者が長年の努力の結果、新しく育種した美しい花に主席の尊名を冠したいと請願した。

その時、主席は、私は別にやったことがないから、花にまで名をつける必要はないとして、謙遜に辞退した。

すると、スカルノ大統領は、そうではなく閣下は人類のために多くのことをなさったので、高い光栄に浴して当然ですと言い、自己の意思を変えようとしなかった。植物園にたいする参観が終わり、首都に帰っても大統領は自己の提案を重ねて提起した。

この報告を聞いた主席は大統領とインドネシア人民の願いがそうであるなら、朝鮮人民にたいする称揚の表しとして受け入れることができる、と熱く述べた。このようになって数千年の人類歴史上初めて、花に偉人の尊名がつけられるようになった。

一生涯、活動と生活を常に虚心にしてきた方であるというところに、主席の謙虚な人間的風格の今一つの魅力がある。

主席は自分を平凡な党員の一人と見なし、党の前に限りなく虚心に生きてきた。

いつか、金正日同志は、主席は全国の党員が党組織観念を高めているのに、総書記であり国家主席である自分がその模範を示すべきである、党中央委員会の組織書記が党活動を受け持っているから、組織書記から任務の分担を受けてその執行状況を報告することは党員の義務ではないかと話しているとし、すべての幹部らが主席の崇高な党組織観念を見習うべきであると強調したことがあった。

世には多くの政党や団体、国家の指導者がいるが、主席のように自分が直接創建し導く党にたいしてこのように虚心な偉人はどこにもいなかった。

主席は国家の法と秩序を自発的に遵守することを公民の神聖な義務として見なし、いつどの単位にいっても、直接樹立された制度と秩序を守ること

を違えることのできない準則にした。

主席は農場に行った時は見張り番の農場員に自分の身分証も出し、軍部隊を訪ねた時、歩哨勤務中の幼い兵士に自らの身分を明かしたりした。

主席は一生、学ぶために努力した。主席が一生、限りなく虚心な姿勢と立場をもって学んだ先生は人民大衆である。

主席にとって書籍が無言の先生であったなら、人民は知恵あり博識な先生であった。それで主席は人々に会えば誰の言葉であってもみな聞いてくれた。

その個々人の様々な要求と志向が主席によって党と国家の路線と政策として集大成され、革命と建設の指導指針と転換されたりした。主席によって科学的に集大成され、全面的に体系化された路線と政策は、いずれも誰も打ち出せない真理の中の真理であった。

限りなく謙遜に、一生を人民の息子として生きてきた、人類史上になかった偉大な平民を高く戴いたことにより、朝鮮人民は世界のどの人民も呼ばれたことのない「指導者の師」という身に余る称号を持つことができたのである。

限りなく素朴な生活

金日成主席は革命的生涯の全期間、余りにも素朴で質素に暮らした。

主席は抗日革命の全期間、弾雨をついて血戦の先頭に立っていた旗手であった。主席は一度も司令官の襟章をつけたことがなく、専用寝食条件や特別な待遇などを許したことがなかった。困難で試練に満ちた日々に主席は隊員たちと少しも区別のない素朴な生活をした。

主席は万民を魅了させる気さくな品性を備えていた人民の慈父であった。

人を引き付ける魅力を備えた方、懐に抱いた労働者と農民、インテリと兵士はいうまでもなく、海外同胞や外国の友人まで会見するや瞬間に心を引かれ、心の内を打ち明け、別れてはまた会いたがる方がほかならぬ主席であ

った。

たしかに主席には磁石のように人の心を引き付け、我知らずに熱烈な魅惑と信頼心をもたせる特異な引力があった。

主席は人々といささかの間隔も置かず、ざっくばらんに付き合った気さくな方であった。

今日、朝鮮のどの幼稚園、託児所に行って見ても一目に胸がいっぱいになる一点の油絵がある。祖国の未来、朝鮮の子供たちの中におられる主席の慈愛深い姿を形象化した美術作品である。

公園の素朴なベンチに座って太陽のような明るい笑みをたたえている主席、その周りに子供たちが多く集まって、ある子供は主席の中折帽子を斜めに被って笑っているかと思えば、またある子供は主席の首を両手で抱きしめて耳打ちをしている。みんなが自分の実のお祖父さんと一緒にいる幸福感に満ち溢れている姿である。

一国の指導者と幼い子供たちの間の飾り気がなく素朴で熱い、血肉の情あふれる場面を描いた美術作品は、そのまま領袖と人民、子供たちの間の血縁の関係をみせる歴史的な一画幅である。それは人類史にいまだかつてなかった人倫道徳と政治倫理、人間的風格の新しい境地を示した、もっともすぐれた偉人を形象化した、もっとも美しい画幅となっている。

主席は一生、いささかの間隔や気取りもなく、人々とよく交わって活動し生活してきた。

主席は自分の活動と生活の基盤を常に人民が生活するところに置き、行く先々で人民と交わっていた。

天のごとく信じている人民の中に入ってとけこんでこそ、彼らの尽きない力を最大限に発揮させることもでき、党と国家も動かせ、革命も完遂できるという確固たる観点は、主席をして終生、人民と隔たりなく交わることを活動と生活の鉄則とするようにしたのだ。

国籍と皮膚色、言語の相異なる外国の人々も主席は儀礼上の格式にこだわらず、親しく気さくに対したりした。

主席を思いがけなく失い、全国の人民が血の涙を流していた 1994 年 12 月のある日、朝鮮人民は主席が数十年前のテレビをそのまま利用し、普通の地味なビニール･スリッパを使っていたという信じがたい事実の前で驚きを禁じえなかった。

自分の一生をことごとくささげて人民にできることすべてを解決してくれた方、半世紀余りにわたって党と国家の最高職責におられながら革命を指導してきた方が人民と変わらぬ平凡な生活をした、それ自体が歴史に類を見ないことであった。

いつか、ある幹部が活動の費用まで自分の生活費で負担する主席に活動費が添付された生活費を上げたことがあった。その時、主席は国家の財政規律を違えてはならないとし、自分の生活費を除いた金額の全部を返すようにし、またある内閣会議で総合大学総長の生活費が首相の生活費より高い問題が提起されたときには、そのことに職務が何の関係があるか、総合大学の総長は科学者であるので当然、生活費を多くもらうべきだと、念を押して強調した方が偉大な主席であった。

1993 年 11 月のある日、平安南道平原郡元和協同農場で盛大におこなわれた決算分配会では戦後、社会主義農業協同化の時期から名誉農場員として登録されている主席に、その間貯金して置いた 10 万 2485 ウォンの分け前を丁重に差し上げる決定が採択された。抗米の戦火の日々、農民たちとともに春の種蒔きをした時から農場が進むべき道を示しながら、農場の経済管理を細かく指導した主席の心血と労苦にたいする切々たる感謝の表しであった。

分配会にたいする報告を注意深く聞いた主席は、その金で農場にトラクターと自動車、農機具を買ってあげようと言った。

それで総 22 台のトラクターとトレーラー、自動車が 4km まで出迎えた農場員たちの歌と踊りの中、元和協同農場に入るようになった。

感激的なこの話を伝えられたヨーロッパのある政治活動家は、世界的に一国の領袖が名誉農場員となって分け前をもらったという話も初めてであり、その分け前で農民たちにトラクターや自動車を買って送ったという話も

初めて聞いた、農業が始まって数万年が流れているが、これは実に伝説のような話であるといった。

天下の景勝である妙香山に位置している国際親善展覧館は主席にたいする敬慕の念が集大成された偉人称揚の大殿堂である。

主席に世界各国と党の指導者と人士、団体と機関から送られてきた贈り物が展示されているここには忘れがたい話がある。

他国の政治家を見ると大体、他人からもらった贈り物を公開しない。それを単に自分の人格や尊厳にたいする表しとして思うことから、個人の財産として保管し利用したりする。他人に見せる場合にも個人の人格にたいする自慢の種にするのが常である。

しかし、主席は自分に送られた多くの贈り物をそのまま国の財宝と、人民の尊厳と威力の象徴としてくれた。自分への贈り物まで子々孫々譲り渡す国の財宝、人民の財宝にした方なので、3 大革命展示館や歴史博物館、さらには東明王陵をはじめ、全国の財宝と歴史遺物は一々指導しながらも、自分に送られた贈り物が展示されている展覧館は生涯の最後の時期まで全部見て回れなかった主席であった。

金や財産ではなく、崇高な思想と健全な精神を革命家の第一の財宝として見なしてきた主席ならではのことである。

２．チュチェの太陽

１）チュチェの陽光を照らした不世出の偉人

不滅のチュチェ思想の創始

金正日総書記は次のように述べている。

「金日成同志は、抑圧されさげすまれてきた人民大衆が自己の運命の主人として登場した新しい時代の要請を深く洞察して、偉大なチュチェ思想を創始することにより、自主性をめざす人民大衆の闘争を新たな高い段階に発展させ、人類史発展の新しい時代、チュチェ時代を開拓しました」

思想・理論における時代性の保障は、当該時代の本質にたいする科学的解明に基づいてなされる。

チュチェ思想が創始された20世紀20年代—30年代の初め、世界的範囲で見れば、時代の変化発展の中で抑圧され蔑まれてきた人民大衆が自己の運命の主人、時代と歴史の主人として登場していた。

当時、世界の多くの国の人民大衆は資本の抑圧と搾取、植民地支配をただ甘受したばかりでなく、それを終わらせるための闘争に奮い立った。

特に当時、これまで中世の暗黒の中で蒙昧になり、資本主義文明の元肥とばかりなってきた被抑圧民族の反帝反植民地主義闘争がさらに活発にくり広げられた。

金日成主席が革命活動の道に身を投じた1920年代の後半期から1930年代の初めにいたる間、朝鮮の各地では前例のない人民大衆の組織化された暴力的闘争が激しく起こっていた。

不滅のチュチェ思想は、主席が革命闘争の初期に自主が人民大衆の志向と要求であり、時代の要請であるという科学的洞察にもとづいて創始した独創的な思想である。

1989年6月、ユーゴスラビアの新聞「オスロボジェーニェ」責任主筆を接見した主席は、彼にチュチェ思想は朝鮮革命の実践的要求から、そして朝鮮人民の闘争経験にもとづいてわれわれが提示した思想であるが、それが今日、世界人民の間で広範な支持と共感を呼び起こしているのはあらゆる支配と従属に反対し、自主性を志向する現代の趨勢と自己の運命を自力で開拓しようとする現代の人民の念願に合致するからだと思う、と述べた。

このように主席は10代の幼年の時代に、現代がかつて抑圧され蔑まれてきた人民が世界の主人として登場して自己の運命を自主的に、創造的に開拓していく自主性の時代であるという結論を下したのである。

今日、世人がチュチェ思想について、人民を中心に据えて展開され体系化された人民大衆中心の思想、完成された自主の革命思想であると激賞する理由は、それがほかならぬ人民大衆が生き、彼らの志向が反映された時代の流れの中で創始された思想であるところにある。

思想と理論にはその起点が必ずあり、進歩的思想は科学的真理をその起点にしている。

主席は書斎でいかなる従来の学説を起点にしてではなく、祖国と人民を救い、新しい時代を開拓するための血のにじむ闘争の中で革命の新たな真理を発見し、それにもとづいて不滅のチュチェ思想を創始した。

主席は朝鮮の具体的現実から出発して、革命的実践闘争の経験と教訓にもとづいて新たな真理を探究し、思想と理論を打ち出した。

主席は自分が座右の銘にした「以民為天」の思想と父である金亨稷先生から譲り受けた「志遠」の思想と無産革命の理念を貴い思想的・精神的源泉にして独自の新たな真理を探究した。

主席は先進思想、新しい思潮にたいする研究も革命実践と結びつけて深化させた。

主席は朝鮮の現実とマルクス・レーニン主義にたいする研究を通じて従来の学説が朝鮮革命の具体的な実践的諸問題に正しい解答を与えられないことを切に感じた。

主席は朝鮮の民族解放運動の実践的経験と教訓にもとづいて重要な二つの真理を発見した。

主席が発見した貴い真理の一つは、革命の主人は人民大衆であり、人民大衆の中に入って彼らを教育し、組織動員してこそ革命が勝利することができるということである。

当時、朝鮮では民族解放運動の2大陣営をなしていた民族主義者と初期

共産主義者が人民大衆という大きな革命勢力から離脱して空理空論とヘゲモニー争いに明け暮れていた。彼らは人民大衆のなかに入ってかれらを教育し組織化し、革命闘争に立ち上がらせることは考えず、大衆から遊離してヘゲモニー争いと空理空論に明け暮れ、大衆を団結させるのではなく派閥争いによって分裂させていた。

主席は1926年10月、真の初の革命組織である打倒帝国主義同盟（略称「トゥ・ドゥ」）を結成し、朝鮮革命の新しい出発を断行し、英知に富み、勇敢な朝鮮人民が団結して戦うならば、強盗日本帝国主義を打ち破り、朝鮮の独立を成就できるということを宣言した。そして革命組織を拡大し、その周囲に広範な青少年と勤労大衆を結束させるための闘争を力強くくり広げた。

主席のエネルギッシュな指導の下に、1926年12月にはセナル少年同盟が結成され、1927年8月には「トゥ・ドゥ」を前身とする反帝青年同盟とともに朝鮮共産主義青年同盟が結成され、その翌年には農民同盟と反日労働組合まで組織された。1926年12月には反日婦女会も組織された。

主席は広範な人民大衆を革命の主人と見なし、彼らを教育し結束させる活動を組織指導した。

特に、自分が学生たちを組織動員して同盟休校を起こし、吉会線鉄道敷設反対闘争と日本商品排斥闘争を勝利へと導いた。

こうした実践闘争の過程を通じて主席は人民大衆こそは、革命闘争の直接の担当者であり、その人民を意識化、組織化して強力な革命勢力として結束するならば、必ずいかなる強大な帝国主義侵略者をも打ち破って、国の独立と繁栄を成し遂げることができるということを確証した。

主席が見出した今一つの貴い真理は、革命は他人の承認や指示によってではなく、自分の信念にもとづいておこない、自分が責任をもって進め、革命におけるすべての問題を自主的、創造的に解決していくべきだということであった。

革命は輸入することも、輸出することもできず、誰に代わっておこなう

こともできない。

しかし、当時の民族主義運動勢力の一部の上層部の者と独立運動家たちの間では、外部勢力による国の独立問題を解決しようとする事大主義的傾向が濃厚に表れていた。彼らは「教育と産業の振興による国力育成運動」を「独立の目的達成の早道」だとし、その「力の準備」を、アメリカやフランスなど資本主義列強の「援助」に依存して進めるべきだと力説していた。

初期共産主義運動でも事大主義、教条主義がより濃厚に表れた。共産主義運動を自称する人々は実際の独立対案はなく、ただ古典だけ脇に挟んで歩きながらソ連やコミンテルンを見上げるだけであった。ただ時期が熟してソ連やコミンテルンが前に出ると万事が解決されるだろうという、いわば漁夫の利を得ようというのが大方の初期共産主義者の立場であった。

主席は自国の革命を自分が責任をもって立派におこないさえすれば、おのずと他人が認めるようになり、無視できなくなるだろうと確信し、革命組織を結成して独自に日本帝国主義に反対する各種の闘争も組織指導し、最初の党組織も、最初の武装組織である朝鮮革命軍も結成したのである。

これらのすべての大業は、主席が独自の決心によって実践したことであった。

このように主席が見出したチュチェ思想の二つの起点は、名実ともに独創的な真理、自国人民、自国革命中心の主体的な真理である。

早くから朝鮮革命の新たな進路を模索しつづけてきた主席は、この時期に入りながら、新たな指導思想と指導理論なしには朝鮮革命を一歩も前進させることができないことをさらに肌で感じるようになった。

チュチェ思想は朝鮮革命と世界革命、人類の運命がその創始を切に求めていた歴史的時期に生まれた偉大な思想であった。

主席は 1930 年 6 月 30 日から 7 月 2 日の間に行われた卡倫会議で「朝鮮革命の進路」という歴史的な報告をおこなった。

主席は報告で、革命闘争の主人は人民大衆であり、人民大衆を組織動員してこそ、革命闘争で勝利することができると示した。

主席は報告でまた、朝鮮革命の主人は朝鮮人民であり、朝鮮革命はあくまで朝鮮人民自身の力で、自国の実情に即して遂行すべきであるという確固たる立場と態度をもつのがもっとも重要であると明らかにした。

「朝鮮革命の進路」は、革命運動史上初めて、チュチェの革命原理と原則にもとづいて科学的な革命戦略と戦術が集大成した、革命闘争の大綱であった。

主席は歴史的な報告において、朝鮮の現実を科学的に反映して朝鮮革命の性格と基本任務、革命の動力と対象を明示し、朝鮮革命を成果的に遂行するための独創的な武装闘争路線と反日民族統一戦線路線、党創立方針を提示した。これらの路線はいずれも主席が見出したチュチェ思想の革命原理と原則から出発し、それで一貫されたチュチェの路線と戦略戦術であった。

主席は朝鮮革命の性格を、朝鮮革命の主人は朝鮮人民であるという立場にもとづき、当時の朝鮮の階級関係と朝鮮革命の課題を反映して、いかなる古典にもなくどの国でも提示したことがない、反帝反封建民主主義革命と規定した。

歴史的著作「朝鮮革命の進路」の発表がチュチェ思想創始の宣布となるのは、この著作がチュチェの革命原理と革命闘争で堅持すべき根本原則を込めており、朝鮮革命の性格に関する問題からはじまって革命の基本任務とそれに伴う戦略戦術的諸問題を全面的に解明しているチュチェの思想と路線の不滅の大綱だからである。

偉大なチュチェ思想は、当時まで革命理論と闘争方法の百科全書として公認されていたマルクス・レーニン主義の学説も解明できなかった朝鮮革命の進路を誕生させたことにより、名実ともに時代の暗闇を追い払った光であった。

不滅のチュチェ思想が創始されたことにより、人類とともに永遠であろうチュチェ時代が開かれ、その激しい流れが始まるようになった。

チュチェ思想によって解明した運命開拓の道

金日成主席がチュチェ思想を創始することによって運命開拓をめざす人民大衆の闘争史に積み上げげた特出した功績は、人間の本性と世界における人間の地位と役割を解明して、人間自身が自己の運命を自分の手に掌握していく新しい歴史を開いたことにある。

主席は人類の哲学史上初めて、世界における人間の地位と役割の問題を哲学の根本問題として提起し、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理を明らかにすることにより、人間の運命の主人はほかならぬ人間自身であるという歴史的な真理を示した。

人間があらゆるものの主人であるというのは、人間が世界と自己の運命の主人であることを意味し、人間がすべてを決定するというのは、人間が世界を改造し自己の運命を開く上で決定的な役割を果たすという意味である。チュチェ思想によって世界の支配者、改造者としての人間の地位と役割が新たに解明されて、人間は自己の運命を自分自身が掌握した、運命の主人、運命の開拓者となった。

主席は世界における人間の地位と役割を示しながら、その根本的秘訣を人間の本性と結びつけて解明した。

すなわち、人間が世界と自己の運命の主人となり、主人としての役割を果たせるのは、ほかでもなく人間が自主性と創造性、意識性をもつ社会的存在であるからだということである。

主席は、人民と苦楽をともにする課程で早くから人間にたいする並外れた見解と観点をもつようになった。

主席が人間にたいする見解を打ち立てていたとき、もっとも強烈に感じたのが、人間の自由と権利に関する問題であった。不遇な植民地朝鮮の息子として誕生した主席は、国なき民は喪家の犬にも劣るという真理を確認し、人間にとって死すとも失ってはならないのがまさに自由であり、自主的権利であるという哲理を骨身に染みて感じた。

主席は日本帝国主義の植民地統治に抗して全国各地で立ち上がる労働者

階級と農民たちの決死の闘争ぶりからも人間の自由、国と民族の自由を求める人民の共通した志向を感じ取った。さらに抗日の日々、「自由歌」を歌いながら命を懸けて国の自由と独立のために戦う革命家たちの闘争意志からも自由に生きようとするのは人間がおし立てるもっとも初歩的な、かつ死活の要求であり、それを実現する上で人間の最大の精神力と意志が噴出されるということをより切に感じた。

主席は真の人間的自由にたいする要求と志向で表現される自主性は何ものにも縛られずに世界の主人、自己の運命の主人として生き発展しようとする人間の根本属性であると見なした。この自主性によって人間は自分の外の世界を運命開拓の要求に即して能動的に改造し変革しながら、世界で唯一の自主的存在としての尊厳と価値を輝かせるのである。

主席は自主性とともに創造性と意識性も人間の根本てき属性であると新たに解明した。

主席は、人間は創造性をもつ社会的存在だということについて明哲に示した

主席は早くから初歩的な生存の権利まで奪われた植民地民族として、想像を絶する劣悪な生存条件の中でも創造と労働を中断することなく、生活をし続ける剛毅な人々の姿から、人間本来の無限の創造的能力を見た。主席は徒手空拳で強大な日本帝国主義と戦った抗日武装闘争期から試練と難関が折り重なる朝鮮革命の全期間、人民大衆とともに奇跡的な勝利を成し遂げる過程に、人間こそはこの世で不可能なことのない、世界で唯一無二の威力ある創造的存在であるという確固たる観点を持つようになった。

主席は、人間は意識性をもつ存在、意識的な社会的存在であることについても明哲に示した。

革命活動の初期から思想・意識を基本とする人間の精神力に絶対的な意義を付与し、それに依拠して百戦百勝の歴史を創造してきた主席は、意識性こそは、人間のすべての認識と実践活動の根底に置かれる根本的属性であり、まさにそれが人間の限りない威力の源泉であることを確信していた。抗日武

装闘争の時期に革命の司令部を守り、祖国解放の聖戦に身命を賭して戦った人民革命軍隊員の無比の犠牲性もほかならぬ革命家としての高い意識性にもとづいている。

主席は意識性を世界と自分自身を把握し改造するための人間のすべての認識活動と実践活動を規制する属性と見なし、それを自主性、創造性とともに人間の根本的属性であると明示した。

主席は人間の本性は決していかなる先天的で生物学的な属性であるのではなく、不断な社会的教育と社会的実践活動の過程を通じて、社会的、歴史的に形成され強化される社会的な本性であり、これによって人間は世界で唯一に社会的存在となることを明示した。

人間とは何か、この論議は決して昨日や今日に始まったのではなく、人類の発生とともに絶えず行われてきた人類史的課題であった。

人間の社会的本性が解明されたことにより、人間が世界と自己の運命の主人となる科学的根拠が完全に解明されるようになった。長い間、神や支配階級の意志によって左右されていた人間の運命はとうとう人間自身に戻るようになった。

まさに人間が世界と自己の運命の主人であるという鉄の真理を真髄にし、主席はチュチェの哲学的世界観を確立し、チュチェ思想の全般内容に貫かせた。

主席が歴史上初めて人間の本質と地位を完璧に解明したことにより、人間の尊厳と価値は最上の境地に至り、人間はこの世でもっとも貴い存在となった。

主席は人間中心の哲学的原理にもとづいて人間中心の新たな世界観を確立することにより、運命開拓のための人間の認識と改造活動の有力な方法論をもたらした。

人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理にもとづいているチュチェの世界観は、自主時代のもっとも正しい世界観である。

自主時代に入って人民大衆は世界の真の主人として登場し、彼らの闘争によって世界はより人民大衆に奉仕する世界に変わっている。世界の主人としての人民大衆の地位と役割が非常に強化された今日の現実は、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するというチュチェの哲学的世界観の正当性と生命力をさらに実証している。

主席は人類思想史において初めてチュチェの社会・歴史観を定立した希世の偉人である。

主席は歴史の主体は人民大衆であることを明白に示した。主席は人民大衆を抜きにしてはいかなる社会的運動もあり得ず、社会的運動はただ人民大衆の能動的な作用と役割によってのみ発生、発展すると闡明した。

歴史の主体である人民大衆は勤労する人々を基本にして自主的要求と創造的活動の共通性によって結合された社会的集団である。言い換えれば、人間の真の社会的本性を体現した人々の集団が人民大衆である。人間はその社会的本性によって自己の運命の主人となり、こうした本性からして人民大衆は社会・歴史を開拓し主導していく歴史の主体となるのである。

人民大衆が歴史の主体であるというのは、歴史の主人が人民大衆であることを意味するが、それは決して自ずと人民大衆が主人の地位を占め、主人としての役割を果たしたという意味ではない。

歴史と現実は、思想的に目覚めず、正しい指導の下に結束しなかった人民は、いくら膨大な人口数と英知に富んだ民族であるとしても、決して人類社会を主導する歴史の自主的な主体となりえないということをはっきりと見せている。

人類史に存在した大小のすべての国と民族の盛衰、すべての歴史的運動の成敗は、人民大衆の運命を開拓するための闘争で決定的なのは何よりも領袖と党の正しい指導であることを血の教訓として刻み付けた。

主席は特に10代の革命活動の時期から人民を指導して勝利の歴史を創造してくる過程に、人民大衆が歴史の主体としての地位を占め、役割を果たすためには必ず指導と大衆が結合されなければならないという、歴史的結論

に到達した。

主席は歴史の主体が人民大衆であるという社会・歴史原理から社会的・歴史的運動の本質は人民大衆の自主性をめざす闘争だということであり、その性格は人民大衆の創造的活動だということを科学的に解明した。これとともに、社会的・歴史的運動で決定的な役割を果たすのは人民大衆の自主的な思想・意識であり、人類歴史の発展方向は人民大衆の地位が高まり、役割がさらに増大していくところにあることを明示した。

主席が人民大衆を中心にして歴史発展の基本方向、人民大衆の運命開拓の正しい道を明示することにより、人類はいかに複雑な情勢の中でも歴史の進軍路に沿って力強く前進していくようになった。

人民大衆の自主的志向と念願を反映して不滅のチュチェ思想を創始した主席は、革命と建設で主体性を確立することを人民大衆が運命開拓のための闘争で堅持すべき闘争原則としておし立てた。

主体性の確立に関する思想は人民大衆が自己の運命開拓で主人たる態度をもつべきだという思想として、革命と建設で堅持すべき根本的立場、基本的方法を示した。

主体性確立の本質的内容の一つは、自国の革命は自分が責任をもち、自力であくまでおこなっていく自主的立場を堅持することである。

自主的立場は人民大衆が革命と建設において主人としての権利を擁護し、主人としての責任を全うするために堅持すべき立場である。自主的立場の具体的内容は、一つは常に自国人民の利益、自国革命の利益から出発して、すべての路線と政策を自分が決定する完全な独自性であり、もう一つは革命と建設のすべての問題を自分が責任をもって自力で解決していく徹底した自力更生である。

これは、自分の信念と定見を持たずに他人の指図によって行動し、自分の力を信じずに他人の力に依存して革命をおこなおうとする、外部勢力にたいする依存思想、事大主義と根本的に対峙する。

主体性確立の本質的内容の今一つは、人民大衆の力を信じ、彼らを動員

させて革命と建設で提起されるすべての問題を自国人民の利益と自国の実情に即して解決していく創造的立場を堅持することである。

創造的立場は自然と社会の改造者、自己の運命の開拓者として人民大衆が当然堅持すべき立場です。創造的立場の内容の一つは、常に人民大衆の力を信じ、すべての問題を人民大衆の力と知恵を引き出して解決していく原則であり、もう一つはすべての問題を自国の実情に即して解決していく原則、言い換えれば、すべての問題を絶えず変化発展する時代的条件と各国の具体的条件に即して解決していくことである。

創造的立場は自国人民の力と知恵を信じることなく、自分の信念を持たずに既成理論と経験を機械的に模倣しようとする教条主義、マンネリズムと根本的に対峙する。

主席が示した自主的立場と創造的立場の堅持にかんする思想は、実践的には自国人民の力を信じ、自己の方式で革命をおこなうことに帰着する。自己の力を信じ、自己の方式で革命をおこなう立場、これがほかならぬ運命開拓の武器としての自主であり、創造である。

主席は機会があるたびに、人民大衆は革命と建設で提起されるすべての問題を自己の要求と利益に即して処理する堂々たる権利をもっており、革命と建設を自分が責任をもっておし進めるべき神聖な義務をもっていると強調していた。一生、朝鮮革命の現実に立脚し、人民大衆に依拠して革命をおこなってきた主席のこの揺るぎない革命信条が、自主的立場と創造的立場の堅持に関する思想にそのまま脈打っている。

主席はチュチェ思想の旗の下に、人民大衆が自己の運命を自主的に、創造的に開拓していく上で堅持すべき原則的問題についても明白な解明を与えた。

主席は思想における主体、政治における自主、経済における自立、国防における自衛の原則を自主的立場と創造的立場を具現するための根本的原則として示した。まさにこの根本的原則によって自主的立場と創造的立場は、実際に人民大衆の運命を開拓するための闘争の武器として確固と転換され

るようになった。

自主的立場と創造的立場に関する主席の思想は一国、一民族の範囲や歴史のある期間にのみ価値をもつ思想ではない。自主と創造の理念こそは、人民大衆の運命開拓においていかなる制約も受けない偉大な思想である。

自主的立場と創造的立場の徹底した堅持にたいするチュチェ思想の要求は、単に朝鮮革命の政治的及び歴史的環境と条件の特殊性によって提起されることではない。この要求は社会的人間の本性から提起される必然的なものである。

人民大衆の運命開拓のための闘争は国と民族を単位にしておこなわれる。歴史的に見ても国と民族を離れた全人類的な革命など実際にあったことがない。国と民族が処している具体的環境と条件、達成すべき闘争の目標もそれぞれ異なり、大衆の準備程度と具体的な思想・感情も異なっているため、運命を開拓するための人民大衆の闘争はあくまで独自性を帯びておこなわれざるをえない。

実践の中で検証された思想は真理である。

主席が回顧録で感慨深く書いているように、朝鮮人民が今日まで困難で複雑な革命の道を踏み分けながらまっすぐに勝利の道を歩んできたのは、ほかならぬ自主的立場と創造的立場を堅持したことに根本的な秘訣があった。

総書記は朝鮮民主主義人民共和国創建 60 周年を迎える 2008 年の正月の初旬、革命と建設で主体的立場を確固と堅持して自主で尊厳高く、自立かつ強固であり、自衛で富強な祖国を建設した主席の輝かしい一生を感慨深く回顧した。

主席は早くから革命闘争の初期から自分の力を信じ、自分の方式で革命を行うべきとの自主と創造の原則を示し、それを鉄則として朝鮮人民を導くことにより、今日の勝利と栄光をもたらした。

２） 自主の新しい歴史を開いた偉大な領袖

現代政治の生命線―自主政治の起源を開く

金日成主席の自主的革命指導史は、現代政治の生命線となる自主政治の真の起源を開き、20 世紀を自主政治の時代に転換させた聖なる道程として輝いている。

朝鮮人民の要求と意思を集大成し体系化すれば、朝鮮労働党の思想となり、路線や政策になるということ、これは主席が一生涯守ってきた政治信条であった。

解放された朝鮮がどの道を進むかを正しく規定することは、新しい社会建設に入った初期、朝鮮人民の前に提起された焦眉の歴史的課題であった。

当時、新しい社会建設の経験は、先に革命が勝利したソ連のものしかなかったし、他の多くの国が実際的にそれに従っていた。

しかし、主席は新しい朝鮮を建設する出発線で、他国のものを鵜呑みにしたのではなく、朝鮮人民の根本利益、国と民族の自主権を擁護し実現するための独自の路線を選択した。

金日成主席は国が解放された直後である 1945 年 8 月 20 日、軍事・政治幹部の前で「解放された祖国での党、国家および武力建設について」という歴史的な演説をおこなった。

主席はこの演説で、自主独立国家の現実的保証である建党、建国、建軍の偉業を朝鮮人民の要求に即して、朝鮮人民自身の力で遅滞なく実現すべきだという当面の課題を明白に示した。

主席が朝鮮人民の根本的利益を擁護して新しい祖国建設路線を提示したことがいかに正当であったかは、その後の歴史によって検証された。もしその時期、朝鮮人民が他国の歩んだ社会建設の道を選んだならば、今日のように人民大衆中心の社会主義を打ち立てることができなかったであろう。

現実的に自国人民の自主的志向と要求に即した独自の路線をもたず、ソ連式民主主義をそのまま移植していた東欧諸国は、新しい社会建設の初めから紆余曲折を経なければならなかった。1945 年 6 月、政府を樹立したポー

ランドは2年近く混乱を経てかろうじて政局を収拾し、1945年5月、政府を樹立したチェコスロヴァキアは3年間も曲折を経なければならなかった。事情は東ドイツとルーマニア、ブルガリア、アルバニアでも同様であった。

重工業を優先的に発展させながら軽工業と農業を同時に発展させるという社会主義経済建設の基本路線も、戦後の廃墟の上で主席によって生まれた独創的な路線であった。

事実、重工業といえば、すべての面で膨大な投資を要する部門として、ある程度工業の土台がある国でも、その優先をたやすく決心できない、工業経済分野のもっとも大きな部門である。そのため当時までは軽工業のように投資が少ない上に、資金の回転が速い部門を先に発展させて蓄積を強化した上で重工業を発展させたり、他のすべての部門を犠牲にして重工業を建設したりするのが慣例となっていた。事実、戦後の廃墟の灰燼に帰した朝鮮において重工業を優先的に発展させながら、軽工業と農業を同時に発展させるということは、普通の常識ではとうてい不可能なことであった。

しかし、主席はすべてがゼロ状態に置かれている戦後の状況でも、朝鮮人民の根本的利益、国と民族の自主的利益を何よりも重視した。主席はいくら困難な条件であっても、困苦欠乏に耐えて重工業を優先的に発展させないと、自らの強固な自立経済と自衛的な国防力の土台を築くことができず、そうなれば、歴史的に大国の利害関係の焦点となってきた朝鮮がいつかは、必ずその犠牲物になるということを見通していた。

それで主席は歴史上いまだかつてなかった重工業の優先的発展と軽工業と農業の同時的発展であるという独創的な経済建設路線を示した。

主席が示した進歩的民主主義路線は解放後、反帝反封建民主主義革命を遂行すべき朝鮮の現実的条件で自主独立国家の建設とその活動の基本的方向と方式を規定した独創的な路線であった。

近代以後、世界政治史を振り返って見ると、国家の建設と活動の一般的な方式としては、資本主義制度の発生とともにブルジョア民主主義が公認されていた。ロシアで社会主義１０月革命が勝利してソビエト政権が樹立した

後、特に第２次世界大戦以降、民主主義はアメリカ式「自由民主主義」によって代表される欧米資本主義国家の「自由民主主義」とソ連式の社会主義的民主主義に分かれるようになった。世界的に見ると、第２次世界大戦後、実際に資本主義諸国では例外なくアメリカ式「自由民主主義」の道へと進み、民主主義発展の道に入った東欧諸国ではソ連式の社会主義的民主主義の道を選んだ。

主席は他人方式の民主主義が祖国と革命の発展に及ぼす重大な害毒を察し、祖国に凱旋した数日後である 1945 年 10 月の初旬、朝鮮式民主主義、進歩的民主主義について明らかにした。自主、連合、自由、富強、革命、平和で特徴付けられる進歩的民主主義は、人民民主主義革命を遂行すべき解放後の朝鮮人民の志向にはもちろん、朝鮮の具体的実情に全的に合致する、実に独創的な朝鮮式の政治路線であった。

朝鮮における農業協同化の政策を見てもそれは従来の理論と経験にこだわらず、創造的に作成され提示された独特な自己方式の政策であった。

当時までは、農業協同化のような大きな社会的変革が、社会主義的工業化を実現せず、現代的農機具のない条件では実現できないものとされていた。これをそのまま受け入れた教条主義者は、農業協同化の「時期尚早」論を持ち出してきた。

しかし主席は、技術的条件が協同経理の優越性を発揮させる上で重要な条件であることは確かであるが、それが協同化を実現する上で必ず先行させるべき必須の条件となるのではないし、朝鮮の現実が協同化を要求し、革命力量が準備されていれば進めるべきであって、それを他国の経験に照らして停止させたり、後退させたりする必要はないと見た。

主席は農業生産の集団的経営を保障する現代的農機具がない条件でも、農民たちの生活が古い生産関係の改造を切に要求し、またそれを担当すべき革命力量が準備され手いる場合には、農業協同化をゆうに実現できるという確信の下に、遅滞なく独創的な農業協同化政策を示した。

自力更生は主席が創造し、一貫して具現してきた貴い伝統であり、自己

方式の革命方式である。

主席は生前、総書記に朝鮮革命が勝利する時まで絶対に「延吉爆弾」を忘れてはならないという、懇ろな頼みを残した。

一時、間島の人たちは、当てもないままソ連の援助で遊撃根拠地に手榴弾工場を建てようとした。ところが、ソ連側からはこの要請になんの回答もよこさなかった。ソ連の冷淡な沈黙は、革命勝利の先頭を切ったソ連が、まだ政権を握れなかった革命家を助けることを当然の国際主義的義務であると考えていたすべての人に精神的混乱を与えた。

主席は愚かにも他国の援助を要請した間島の人たちの事件を革命隊伍に自力更生の革命精神を確立する決定的な契機にした。主席はすべての遊撃隊員と革命大衆に自力更生のみが生きる道である、革命をおし進めるうえで決定的なのは自らの力を最大限に発揮することであり、他国の援助は付随的なものであるという確固とした立場に立たせるように教育し、敵の手から武器を奪い取る一方、自体で兵器廠をつくって武装を解決するようにした。主席は直接遊撃根拠地の実情に即した火薬製造方法で爆弾を造れる方途を探し出し、兵器廠の関係者の革命的積極性と堅忍不抜性、創意工夫を呼び起こした。

「延吉爆弾」という爆弾のその名は、延吉一帯で抗日遊撃隊員の爆弾の攻撃に肝を抜かれた日本帝国主義が恐怖の対象としてつけた呼び名である。

「延吉爆弾」はいうまでもなく、ハンマーとやすり、ふいごなどの道具しかなかった白頭の原始林の中で最初に造られたという意味で意義が大きかった。しかし、それに比べられない大きな意義は、遊撃隊員と人民が自分の大きな力と英知を実際に悟り、自己の運命を自力で開拓できるという信念を実践の中で切に感じさせた精神的領域での一大転換の契機であったところにある。「延吉爆弾」が朝鮮革命の歴史に自力更生の輝かしい象徴として記録された理由がここにある。

抗日武装闘争の時期、主席がソ連の有名な党及び国家活動家であったジダーノフに会って談話したことがあった。

その時、ジダーノフは主席に解放後、ソ連が朝鮮にどういう支援を与えられるかと質問した。この質問に主席は、われわれはできるだけ自力で国を建設しようとする、困難はあってもそうするのが将来のためにいいと思う、わが国には歴代的に事大主義が亡国の根源として存在してきた、新しい祖国を建設する時には、事大主義による疲弊が絶対にないようしようというのがわれわれの決心である、と確固たる語調で述べた。ソ連の人たちはその時、すでに主席の確固たる信念と意志に驚きと賛嘆を禁じえなかった。

朝鮮人民は今日も主席の 1956 年 12 月の歴史的な降仙への道を熱く追憶している。

朝鮮革命の一歩一歩が試練と苦難に満ちた厳しい行路であったが、この時のように厳しい難局に直面した時はかつてなかった。

修正主義、支配主義者の圧力は極に達し、彼らの後援を受けていた反党反革命分派分子らは意気軒昂として露骨に党に挑戦して来た。

それに膨大な 5 ヵ年計画を遂行するための資材と資金は不足し、人民生活も困難であった。朝鮮労働党と朝鮮革命はこの厳しい試練を乗り越えて党第 3 回大会が打ち出した第 1 回 5 ヵ年計画の膨大な課題を遂行するか、それとも永遠に放棄するかという分かれ道に立たされるようになった。

このような時、主席は降仙の労働者たちを訪ね、国の困難な状況を話しながら、自力を信じて内部の余力を最大限に動員し利用して厳しい難局を打開することを呼びかけた。

主席の自力更生の意志と信念を心で受け止めた降仙の労働者階級はチョンリマ運動の先駆者となり、6 万トン能力の分塊圧延機で 12 万トンの鋼材を生産した。朝鮮人民は前年に比べて工業生産の 22%成長を予見した 1957 年の膨大な人民経済計画を 2 倍に超過遂行し、5 ヵ年計画が「幻想」だの、「空想」だの、という詭弁を粉砕し、それを工業総生産額的に 2 年半もくり上げて遂行し、14 年という短期間で社会主義工業化を完成する歴史の奇跡を創造した。

フランスの著名な記者は、朝鮮人民の自力精神と不屈の闘争に感動し、

この世に奇跡という現象があるとすれば、それは不死鳥のように廃墟の上で立ち上がった朝鮮民主主義人民共和国、社会主義朝鮮の復興と建設だろうとし、驚嘆を禁じえなかった。

去る 20 世紀、自主の旗を高く掲げて革命と建設を前進させてきた朝鮮労働党と朝鮮人民の革命闘争は修正主義者、支配主義者の執拗な内政干渉を粉砕する深刻な政治闘争を伴った。

1955 年、主席の社会主義革命に関するテーゼの発表は、修正主義者の支配と干渉を粉砕する深刻な闘争の中で行われた。

主席は戦後、農村部門の活動を現地で指導しながら、農民たちとの談話を通じてこの時期、社会主義革命のスローガンを掲げられる主客観的条件が成熟していることを確かめ、社会主義建設の綱領を完成した。

ところが、1955 年の初旬、ソ連党の高位級人物は、テーゼを見ると、朝鮮の党が都市の手工業者を社会主義的に改造して利用するというが、これは資本主義を扶植させることではないかと荒唐無稽なことをいった。

修正主義者らはテーゼで言及された農業協同化を実現するとの朝鮮労働党の政策も反対した。彼らは社会主義工業化を完成した後、農業協同化の実現が可能だという既成理論を持ち出し、工業化された東欧諸国もまだ協同化をしていないのに、これだけを見ても朝鮮の党の政策が主観主義的なものではないかと、文句をつけた。そして彼らはヨーロッパの社会主義諸国ではテーゼがなくても社会主義革命をおこなっているのに、朝鮮でテーゼがなぜ必要なのかと言い出した。

当時、主席はわれわれがテーゼを発表したことがなぜ悪いのか、他国で発表しなかったとしても、われわれは絶対に退かずわれわれの方式でおこなうと、厳かに宣言した。

社会主義建設の綱領をおいて修正主義者と一大論争を行った主席は、１週間の後である 1955 年 4 月に、朝鮮革命の性格と課題に関する歴史的な「4 月テーゼ」で呼ばれる不滅の著作「すべての力を祖国の統一独立と共和国北半部における社会主義建設のために」を発表した。この著作で主席は全国的範囲で朝鮮革命の基

本任務を示し、北半部で社会主義革命を本格的に進めるための課題を明白に闡明した。

歴史的な社会主義建設の綱領を発表した主席は、すぐ農村経理の社会主義的改造、都市の手工業と資本主義的商工業の社会主義的改造のための闘争を賢明に組織指導して、他国で 10 余年かかっても実現しなかった歴史的偉業をただ 4－5 年間で完遂する輝かしい現実を創造した。

もし、その時、朝鮮が修正主義者の圧力に屈して自己方式の社会主義建設の綱領をかかげなかったり、その実現のための闘争を少しでも緩めたりしたならば、今日のように朝鮮にチュチェの社会主義を建設することができなかったことはもちろん、現世紀の大政治風波の中で存在することもできなかったであろう。これは歴史が見せた明白な現実である。

主席は革命指導の全期間、対外関係で徹底した自主的立場に立って独自性を堅持することにより、朝鮮労働党と朝鮮革命の国際的地位と尊厳を最上の境地で轟かせた自主の政治家であった。

主席はすべての党、すべての国と民族は平等かつ自主的であり、大国の党、小国の党はあっても「兄党」「弟党」なるものはあり得ないという原則的立場を確固と堅持し、いかなる国の特権的行為にたいしても断固反対した。

主席の献身的な労苦と不眠不休の闘争により、朝鮮労働党は「完全な自主権を行使する偉大な党」「人類の自主偉業の運命を堂々と担っている党」として、朝鮮民主主義人民共和国はその名も輝く自主の強国として、尊厳と威力を世界に誇るようになった。

自主的な国家建設の新しい歴史の開拓

金日成主席はチュチェ思想を朝鮮革命の実践に立派に具現して、自主的な新しい社会建設の道を開拓し、この地に威力ある社会主義強国を建設した創造と建設の英才である。

数百年間の長い歳月に渡り、事大主義と外部勢力依存思想が深く根を下

ろしていた朝鮮で、民族の自主精神を確立する問題は、どの国にも比べられないほど困難で鋭い政治闘争であった。歴史的に朝鮮革命の自主的発展を重大に犯してきた事大主義と教条主義は、戦後の時期に入って革命隊伍にまぎれ込んだ反党反革命分派分子らによってそれ以上我慢のならないものとなった。

金日成主席は 1955 年 12 月、「思想活動において教条主義と形式主義を一掃し、主体性を確立するために」という歴史的な演説をおこなった。

主席はこの歴史的な 12 月の演説で、われわれはいかなる他国の革命でもない朝鮮革命をおこなっている、この朝鮮革命こそはわが党の思想活動の主体である、それゆえすべての思想活動を必ず朝鮮革命の利益に服従させるべきである、と述べている。

主席は民族自主精神を確立するための一大思想戦を展開しながら、朝鮮人民に自国のものをよく知らせるための思想教育活動に火の手をあげた。

主席は 1955 年 12 月の演説をはじめとした幾多の古典的著作でチュチェ思想が朝鮮人民の民族自主精神を確立する上でもつ意義とその実現方途を教え、すべての思想教育をチュチェ思想教育で一貫させることについて述べた。特に、主席は 1956 年 2 月、党中央委員会常務委員会で党思想活動の形式と内容を全面的に改善して、党員と勤労者を朝鮮労働党のチュチェ思想でしっかり武装させるための対策を講じた。

主席はチュチェ思想教育とともに朝鮮人民の闘争の歴史、創造の歴史にたいする教育を強化することにも深い注意を払った。

主席は民族自主精神を確立するための一大思想戦を展開しながら、社会主義革命を遂行するための巨大な実践闘争を民族自主精神の確立のための一つの威力ある思想戦に転換させた。

チョンリマ運動は他人が何と言おうが、他人がどの道を歩んだかにこだわらず、ひたすら自分の力でより速く前進して富強な祖国を立ち上げようという、朝鮮人民の透徹した自主精神の発現であった。

主席はチョンリマ運動を強力な方途にして革命と建設を導いていく意志

をもち、朝鮮労働党第 4 回大会の演壇で、この運動を社会主義建設におけるわが党の総路線と規定した。これは革命と建設のすべての部門、すべての単位がチョンリマを駆けらせることにより、民族自主精神で武装した大部隊を育成するための歴史的運動であった。

戦後、ある人たちは朝鮮の労働者階級がレーニングラードのキーロフ工場の労働者たちのような人間になるためには少なくとも 1 世紀、100 年はかかるだろうと力説した。しかし、チョンリマ運動の炎の中で大衆の先頭に立たせることができないほど複雑な生活経歴をもった降仙製鋼所の陳応源作業班長が、数年の間に最初のチョンリマ旗手、国の英雄になった。ただ 14 年間で完成された社会主義工業化と継続革命の炎の中に全国各地でチョンリマ旗手、英雄たちが生まれた。

民族自主精神が発揮される社会的実践運動、これは人民大衆の自主意識を革命闘争の精神的推進力と見なした主席であってこそ発見し実践できる民族自主精神確立の威力ある方途であった。

20 世紀は各国と各民族の運命開拓において自衛の銃剣がもつ意義と役割が明白に実証された歴史的道のりであった。

金日成主席は解放後、1945 年 8 月 20 日、軍事政治幹部らの前でおこなった演説「解放された祖国での党、国家および武力建設について」で革命的武力建設の道を明示し、その事業を優先的に推進した。

主席が解放後、労働者階級を訪ねて歩んだ現地指導の足跡は、軍需工業を創設するための「平川への道」にも深く刻されている。主席が新しい祖国建設の初期に自衛的防衛力を築き上げる活動にどれほど大きな心血と労苦を注いだかは、朝鮮の労働者階級が初めて造った武器を見れば疲れがとれるだろうとして 1948 年 12 月の日曜日の休息も引き伸ばし、機関短銃の試射をおこなった歴史的事実がよく物語っている。

朝鮮の経済建設史には第 1 回 7 ヵ年計画が 3 年間も延期されたと記録されている。

1960 年代、「カリブ海危機」を契機に醸し出された世界政治情勢を洞察

した主席は、祖国と人民の前に迫ってくる危険に対処するための重大な決断を下した。1962 年 12 月に開かれた朝鮮労働党中央委員会第 4 期第 5 回総会で主席は、経済建設と国防建設を並進させるという朝鮮労働党の戦略的方針を示し、1966 年 10 月、党代表者会でこの方針を正式に闡明したうえで国防建設に総力を集中するようにした。

主席は自らの武装隊伍を立ち上げ、しっかり固める活動を自衛的な国防力を築き上げるための中心として捉え、まず革命的武力の中核である軍事幹部を自力で育成する活動から進めた。主席が示した全軍幹部化は将校から兵士にいたるまですべての軍人が一等級以上の高い職務を担当し遂行できるように彼らの水準を高め、自力で軍事幹部問題を解決するための独創的な軍強化の戦略であった。

大徳山の天然岩には代を継いで永遠に保存すべき「一当百」という三つの文字が深く刻まれている。その「一当百」は、主席が 1960 年代の初め、ここを訪れて人民軍の戦闘力を強化するために提示した戦闘的スローガンである。

いつか総書記は、自分は先軍政治をしながら多くの部隊を視察し、部隊の沿革と配置状態を見ているが、どこにも主席の足跡が秘められていないところがなかった、と熱く述べた。実際、主席の革命的生涯は人民軍を「一当百」の革命的軍隊に強化発展にささげた、軍強化の日々であった。

主席は自衛的国防工業を建設するために大きな労苦と心血を注いだ。主席の先見の明によって、朝鮮の国防工業はすでに 1970 年代に現代的な国防科学技術にもとづいてその土台を打ち固めるようになった。

主席は自衛的国防力を築き上げる上で全人民的、全国家的防衛体系の確立に格別の力を入れ、朝鮮を難攻不落の要塞に変えた。

主席の自衛の思想と構想によって、1959 年に労農赤衛軍が、1970 年には赤の青年近衛隊が組織され、民間武力の合理的な組織構成と指揮体系が確立し、訓練の内容と方法が示された。このように全民武装化の実現によって、人類最初の全人民的自衛の歴史が始まるようになった。

主席は全国を要塞化する活動も強力におし進めた。主席は全国のすべての要塞を敵のいかなる打撃にも耐えるよう強固に、利用的価値が高く、最大の実効性をもつように作る原則を堅持するようにした。

2008 年、破局的な金融危機が世界を席巻した。数百年の発展歴史を誇っていた巨大銀行と独占体が次第に倒産し、そのしわ寄せで絶対多数の国と企業体が騒ぎ立てている時、ある国の通信はこの恐ろしい動乱の中でも泰然としている国は北朝鮮だけであろうという記事を伝えたことがある。

これには朝鮮の自立的民族経済にたいする無視できない世界の評価と認定がある。

主席が構想し建設した自立的民族経済は一言で言って、自分の足で歩んでいく自立経済、自国人民のために奉仕する民族経済であった。

ソ連の影響下にあった当時の東欧社会主義諸国は、支配主義者の「コメコン」政策を受け入れた結果、不可避に彼らの経済部門構造に縛られた奇形的な経済構造をもつようになった。これらの国の産業は「コメコン」の分業体系に従って建設されたことにより、自国で再生産しうる物質的、技術的土台のない、構造上の深刻な弱点をもっていた。結局、これらの国は経済発展と人民の生活に必要な経済部門構造を十分に揃えなかったばかりか、生産循環体系が国内の範囲で実現できるように確立されなかった。そういうことにより、経済構造上一面性と奇形性を免れることができなかったのである。

いつか、黄海製鉄所（当時）を訪れた主席はそこの労働者階級が朝鮮の燃料に依拠した鉄の生産で収めた革新的成果を高く評価しながら、鋼鉄工業の主体化に寄与した研究士たちに英雄称号を授与するよう最上の栄誉を担わせた。主席は生前にチュチェ思想を信奉する人たちはチュチェ鉄を生産しなければならないとし、自らの原料、燃料による鉄の生産システムの完成のために、実に大きな心血を注いだ。

それゆえ、2009 年 12 月、降仙の労働者階級が生産したチュチェ鋼鉄を見てくださった総書記は、チュチェ鉄の生産のためにあらゆる労苦と心血を注いだ主席がこの誇らしい創造物を見たらどんなに喜ぶだろうか、と熱く述

べながら、チュチェ鉄による製鋼法を完成したのは3回核実験の成功よりもっと偉大な勝利であると激情を禁じえなかった。

今までの経済建設の実践は、強力な重工業にもとづいた朝鮮式の経済構造こそは、国の経済的自立性を完璧に実現し、国の物質的土台を全面的に強化する、もっとも理想的な経済構造であることを示した。

1965年4月、インドネシア大統領は主席の参加の下に行われたインドネシア臨時人民協商会議第3回会議で演説しながら、アメリカの経済もだめだ、社会主義国家の場合も、一部は経済発展で農業問題を未解決でいるか、あるいは工業問題を未解決でいる、ただ気に入るように経済を発展させた国は朝鮮である、朝鮮は工業と農業がともに発展しており、完全な自立的民族経済を建設して誰にも従属されていない、と激賞し、自国も自力更生して自立的民族経済を建設する方向へと政策転換をする意志を確固と表明した。アメリカの特使とフランス、イギリス、西ドイツの代表が傍聴席に座っている会議で彼が朝鮮の経済建設に見習うべきだと発言したのは決して簡単な政治的問題ではなかったし、それ自体が強力な重工業にもとづいて国のすべての経済部門構造を総合的に完備した朝鮮式の経済構造と自立的民族経済建設にたいする認定であり、公認であった。

生の最後の時期に元アメリカ大統領であったカーターを接見した主席は、彼にアメリカはわが国の「核問題」を国連に持ち込んでわが国に制裁を加えるといっているが、われわれは制裁を恐れはしない、われわれはこれまで制裁を受けつづけてきたのであって、制裁を受けなかったことは一度もない、アメリカの制裁も受け日本の制裁も受け、他の国の制裁も受けた、いままで制裁を加えられながら無事だったのに、いまさらまた制裁を受けるからといって生きていけないはずはない、と話した。一生をささげて強力な自立経済を建設した主席であるからこそ言える度胸の居座った話であった。

自主の旗の下に新しい社会建設の輝かしい歴史を開拓してきた主席の革命指導で重要な地位を占めるのは、歴史上はじめて民族人材育成事業を中核にして、革命と建設を成功裏に指導してきたことである。

主席が独創的に実施した全民教育制は新しい世代はもちろん、社会のすべての構成員を教育対象にし、教育を中断することなく持続的に与え、社会全構成員の文化知識水準を大学卒業程度に到達させることをその主な内容としている。

育ち行くすべての新しい世代を対象にする国家的児童保育教育制度と全般的12年制義務教育制度、働きながら学ぶ教育制度、これは文字通り、社会の全構成員を網羅する一つの巨大な全民学習制度を成している。実に徹底した無料で保障している全民教育制度こそは、朝鮮が世界的な人材の国として浮上させた巨大な土台である。

新世紀の初期、ある国では情報産業時代、知識経済時代に対処して人的資源を開発するためには何をすべきであるかという問題を提起し、次のような結論を下した。学習型社会の全面的な建設、人民への学習機会の全面的拡大、人民の学習能力の全面的向上…

このように、21 世紀に入った今日になって世界が理想としておし立て、それも現代的な文明を志向する国々でもいまだ実現できなかった全民教育、全民学習の理想が朝鮮では去る20世紀、主席の代にすでに完全に現実化されていた。全民が学習する学びの国、教育の国の建設、これこそ人材養成の土壌、基盤の問題をもっとも成功裏に解決した主席の大きな功績である。

主席は人材育成の基盤を築く上で全民教育制とともに整然とした高等教育体系、すぐれた人材育成体系を有機的に結びつける方式で人々を革命と建設で自分の役割を全うする立派な人材に育成するようにした。

1985年2月26日、平壌の普通江のほとりに現代的に建設された秀才養成基地である平壌第1高等中学校（当時）を訪れた主席は、この立派な学校が建設されたことについて始終大きな満足を表し、こういう学校を地方にも建設して国の立派な人材をより多く質的に養成すべきだとねんごろに述べた。

その後も主席が国の科学文化の発展に大きく寄与するすぐれた人材をよく育てることについて強調したことは数え切れないほど多い。

主席は民族人材養成基地を作ることも独特に推進したが、総合大学を先に創設し、それを母体にして民族幹部養成基地を拡大していくようにしたのは、その代表的な実例となる。

国の具体的な民族幹部の実態と将来の科学発展の要求をぬきんでた英知で察し、総合的な民族幹部養成基地としての使命を遂行する金日成総合大学を建ててくれた主席は、国の母体大学、総合的な民族幹部養成基地としての使命と任務にふさわしく総合大学に今後、いくつかの短大に分離できるよう技術関係の学部を総合的に、将来を見通して設けるようにした。そして短大が設けられる基礎が十分に築かれた時は工学部、農学部、医学部を短大に分離させるようにし、これらの大学に教員と学者、大学の関係者と社会科目の教員も送って短大を助けるようにした。それで解放後 3 年目である 1948 年にすでに 11 の大学、1949 年には 15 の大学と 55 の技術専門学校で数万名の学生が各部門の有能な民族幹部として育成されるようになった。

主席は養成基地の創設だけでなく、教育活動も徹底的に朝鮮式でおこなうようにした。ここで特徴的なのは、主体性が確立した人材、革命化、労働者階級化された人材の育成であった。

いかなる抽象的な「全人類のための知識」ではなく、わが国、わが民族、わが人民のために必要な革命的世界観と科学知識を所有した人材を育成しなければならないというのは主席が人材育成活動で堅持した根本的原則であった。まさにこの思想が民族人材育成活動の主体化という定義づけに集大成されている。

実に、歴史上はじめて朝鮮で民族人材の問題を完璧に解決したことこそは、祖国と民族の万年の未来のために主席が積み上げた貴い業績の中の業績である。

3） 人民的指導の巨匠

一生の座右の銘―「以民為天」

偉人を知るには彼の座右の銘を知るべきだという言葉がある。偉人の座右の銘は彼のすべての闘争と生活に貫かれている信条と人格を物語っている。

主席の座右の銘は「以民為天」である。

主席の「以民為天」の座右の銘には二言三言の言葉や文章では言い尽くせない、深奥な哲学があり、長い歴史が集大成されている。

金日成主席は次のように述べている。

「『以民為天』―人民を天のごとくみなす、というのがわたしの持論であり、座右の銘でもあった。人民大衆を革命と建設の主人として信頼し、その力に依拠するというチュチェの原理こそ、わたしがもっとも崇敬する政治的信仰であり、まさにそれがわたしをして、一生を人民のためにつくさせた生活の本質であった」

この世のすべての名人たちは、おし立てた座右の銘から非凡であった。彼らの中にはたゆまない闘争を座右の銘として労働者階級と人類の解放偉業に貢献した偉人もおり、愛国を座右の銘として自分の祖国のために献身した愛国名人もいた。しかし、人類が記録した偉人史には、人民を天のごとくみなした偉人、名士はいない。

「以民為天」の座右の銘は、古今東西のどの偉人も打ち出せなかった最高、最上の座右の銘であり、主席がかくも人民のために、人民に依拠して一生を立派に輝かせるようにした根源であった。

人民は天である、主席の座右の銘はここから出発している。

主席の座右の銘の中にある人民は、長期にわたる歳月、百姓と呼ばれながら政治の領域外で頭をもたげずに生きてきた平凡で素朴な人々であった。貧困を強要される万景台の人たちと町に出て血まみれになりながらも独立万歳を叫んでいた 3.1 人民蜂起の参加者、忘れえぬ恩人であった蛟河の主婦と天橋嶺で会った老人、解放後の日々から一生、畑の端と機械設備の前で会った多くの人、どこでも見られる人たちであった。まさに彼らが世界でもっ

とも偉大な主席の人民であり、天であった。

主席の座右の銘である「以民為天」には、この世でもっとも貴重な存在である人民にたいする崇高な愛と献身の精神が集大成されていた。

いつか、主席が外国のある文筆家のために午餐会を催したことがあった。

その時、文筆家は主席に英知に富んだ朝鮮人民の繁栄のために主席のご健勝を祈願すると丁重に申し上げた。

すると、主席は人民のために長寿を願うのは実にありがたいことだと熱く述べた。

後日、彼はこの事実について感動的に伝えながら、人民という二文字さえ話題にのぼれば、今にでも活気付く金日成主席にたいする記事は当然人民的な頌歌になるべきであると、自分の気持ちを切に吐露した。

自分の一生を人民のためのものと思い、人民を天のごとく奉じた主席であったがゆえに、事業を一つ構想し実行するにしてもすべてが人民のためのもので一貫していた。主席が困難な闘争によってうち建てた国家も人民のための「人民共和国」であり、政権も人民が主人となった「人民政権」であり、軍隊も人民を守るための「人民軍隊」であった。人民のために特別に多くの仕事をし、立派な功労を立てたインテリやスポーツ選手、芸術人の生もすべて「人民」という言葉とともに輝くようにした。

人民が創造したもっとも立派な創造物も名実ともに人民とその国を象徴して命名された。朝鮮の労働者階級が自力で加工した国の初の迫撃砲には、朝鮮民主主義人民共和国の国章の標識が刻まれ、解放後の困難な環境の中で生まれた最初の軍艦も「労働者」号に命名された。朝鮮で一番大きい宮殿が「人民文化宮殿」であり、一番大きな図書館も「人民大学習堂」である。

人民は天であるという主席の座右の銘は、主席をして党と革命のために祖国と人民があるのではなく、祖国と人民のために党もあり、革命もあるという哲学を一生の政治信条にさせた思想的源泉であった。まさにこういうことにより、革命はそれ自体が人民にたいする愛を花と咲かせる闘争であるという新たな革命観が定立し、朝鮮労働党と共和国政府は生まれる時から人民

にたいする奉仕を自己の活動の最高原則にするもっとも人民的な党と国家となることができた。

主席の回顧録「世紀とともに」が出版された時からもはや20余年の歳月が流れた。しかし、今日も朝鮮人民と進歩的人類が主席の回顧録を熱心に愛読しているのは、主席が自分たち、人民を、一生をささげて天のごとく奉じ、80 余星霜の偉大な生涯を総括する回顧録も人民にたいする絶対的な崇拝と信頼の聖典として書いたからである。

「人民の中に入ろう!」、これは「以民為天」の座右の銘を実践に具現するための主席の一生涯の革命方式を通称している不滅の格言であり、主席の全生涯を貫く今一つの貴い政治的信条である。

図書「人民とともに」は、一生を人民の中におられながら人民と意志と情を分かち合い、人民に依拠して革命を導いてきた主席の崇高な愛民の思想と人民的指導風格について朝鮮人民が書いた回想実記である。

一生涯、人民を訪れた主席の不滅の足跡が記されたこの人民指導の叢書は、今日も万人を感動させている。図書「人民とともに」は1962年に初の巻が出版されてから今日まで数千万部余りも発行され、朝鮮人民ばかりでなく、世界の広範な人民の間で広く愛読されている。主席と朝鮮人民が一家族として生きてきた栄光に輝き、幸福な日々にたいする追憶が収められた回想実記は、中国、日本、アメリカ、イギリス、ドイツなど、各国にほぼ数十万部も普及された。世界の有名な新聞と雑誌もその書籍の回想実記を多く連載した。

「人民の中に入ろう!」、主席のこの座右の銘には、一生涯、人民を師として革命をおこなうべきであるという主席の闘争と生活のゆるぎない信条が反映されている。

1994年4月、アメリカのCNNテレビ放送会社記者団を接見した主席は、自分の一生を顧みながら、人民のなかには哲学もあれば経済学もあり、文学もある、それで私はいつも人民のなかに入り、人民から学んでいると述べた。

人民の中に哲学もあり、経済学もあり、文学もあるという主席の話しは、

人民大衆が体現している限りない知性の世界を明白に集約化した意義深い名言である。

主席の革命活動は人民の中に入り、彼らから学ぶことで始まった。人民の中にいながら人民から学んだがゆえに、主席はチュチェ思想のような不滅の思想を創始することができ、哲学と経済学、文学と心理学の大家にもなれたのである。

今も万景台の分かれ道に立つと、解放とともに夢にも忘れられなかった故郷を間近にして、鋼鉄の労働者たちを訪ねた主席の姿が思い浮かび、製鋼所に行けば、倒壊した壁の上に座り、廃墟を一日も早く復旧しようと切に呼びかけていた主席の声が聞こえてくる。農村に行けば、主席が農民たちと農業の問題を議論し、こだわりなく座っていた質素なむしろが、漁村に行けば、漁夫たちとともに触ってみた網が、炭鉱に行けば、坑内の切羽まで入って炭鉱労働者たちを石炭の増産へと呼び起こした足跡が目に浮かんでくる。

主席はこのように一生、人民を呼び起こし、人民の巨大な力に頼って試練と難関が折り重なった朝鮮革命の前途を切り開き、百戦百勝の歴史を創造したのである。

革命の主体—新しい人民の誕生

金日成主席の一生の革命活動史、それは革命の主体を強化する活動をすべての活動に確固と優先させてきた独特で崇高な闘争の歴史であった。

主席は誕生 60 周年を慶祝する朝鮮民主主義人民共和国政府の宴会に参加し、過ぎ去った 60 の生涯を感慨深く振り返りながら、事大主義と派閥争いによる朝鮮の亡国史を総括し、全人民を思想的、意志的に、組織的に固く結束させて、革命闘争の困難で複雑な道を勝利的に切り開いたことについて誇り高く述べた。主席は誕生 70 周年と 80 周年を慶祝する意義深い席でも、帝国主義に反対する闘争や社会主義を建設する闘争でも終始一貫、主体を強化し、その役割を高めることに第一義的な力を入れてきたことについて感慨

深く回顧した。

抗日革命の全道程は、人民大衆を歴史の主体と見なし、彼らを意識化、組織化して抗日戦に立たせた主席の愛と信頼の日々であり、人民大衆自身が自分の闘争でもって歴史の堂々たる主体であることを誇示してきた日々であった。

主席は解放直後、二ヶ月足らずの間に党を創建し、5ヶ月余りの間には北朝鮮労働組合総連盟と北朝鮮農民組合連盟などを結成して、整然とした組織体系を確立した大衆団体に各階層の民主勢力を固く結束させた。特に、主席が適時に党を大衆的党として発展させ、各民主主義団体と宗教団体まで網羅する統一戦線組織を設けたことは、全民族の団結を実現する上で画期的意義を有する出来事であった。

主席は祖国解放戦争の時期にも主体を強化する活動に最優先的な力を入れた。主席は戦争が起こって数日後である1950年12月、党中央委員会第3回総会で、北南朝鮮の職業同盟、農民同盟、青年同盟、女性同盟をそれぞれ統合して統一的中央指導機関を設けるべきという重要な措置を講じた。それで戦争が起こって、1年も経っていない1951年の初めまで、北南朝鮮の勤労者団体が統合されて一つの政治的勢力をなし、戦争の勝利のための闘争に力強く組織動員されるようになった。

主席は戦後の廃墟の中でも党と政権、人民の力の強化に朝鮮革命が進むべき唯一の道があると見なし、反党反革命分派分子に断固反対し、党の統一団結を強化する活動に第一義的な力を入れた。これとともに、戦争によって複雑になった住民たちの社会的・政治的構成にふさわしく各階層の大衆との活動を強化し、階級路線と大衆路線を正しく結びつけて、社会主義革命の主体を一段と強化するようにした。

主席は革命的大高揚を起こす上でも、人々をチュチェ思想、集団主義思想で武装させ、党と領袖の周りに一つに結束させることをキーポイントにしてこれに第一義的な力を入れ、社会主義建設の全期間、人民大衆の統一団結の問題を革命の最優先的な課題とし、強力におし進めた。この日々にチョン

リマ作業班運動の炎が全国に激しく燃え上がり、すべての人が集団主義思想と精神でその全容を一新し、全社会が固く団結し、党の唯一思想体系を確立する闘争で転換的局面が開かれ、全党と全社会の統一団結が新たな高い段階に入るようになった。

歴史はある時期に発揮された人民の力が決して革命と建設の全過程でそのまま持続的に発揮されるのではなく、人民大衆を革命の主体として育てる活動をいささかなりとも疎かにすれば、数十数百年をもってしても補えない破滅的な結果を招くということを見せている。

しかし、真の団結にたいする希望は、5 千年の朝鮮民族史を通じても、100 余年の国際革命運動史を通じても実現できなかった。

人民大衆の統一団結を成し遂げる歴史的偉業は、人民大衆を革命と建設の主体として確固と信じ、革命指導の全期間、革命の主体を強化する活動を最大の重大事として優先させてきた主席によって始めて実現した。

主席は歴史上初めて、革命運動の天下の大本は一心団結であり、一心団結の基礎は革命的同志愛であるという団結の原理を打ち出し、革命的同志愛によって渾然一体の歴史的偉業を実現した。

同志はすなわち第 2 の私であり、同志を獲得すれば天下を得られるというのが主席の同志観であった。早くから、父親の同志獲得に関する貴い思想を遺産として譲り受けた主席は、先に同志を獲得し、その後に武器を獲得し、同志を糾合して党組織を結成し、同志を発動させて革命闘争を展開した。朝鮮における最初の党組織であった「建設同志社」の名称には、生死運命をともにする同志を探し出し結束して朝鮮革命を前進させ完成しようとする主席の革命的同志観が反映されていた。

革命の同志への主席の愛は、主席を仰ぎ慕うすべての人を自身の運命と一つに結び付け、史上初めて革命隊伍を一心団結した運命共同体に作り上げた精神的源泉であった。

革命同志にたいする主席の偉大な愛と主席にたいする革命戦士の決死擁護の崇高な精神力、これは歴史がいまだかつて知らない同志愛と信義の絶頂

であり､いかなる試練と難関も切り抜けるようにした無比の原動力であった。

ゆえに、主席は抗日遊撃隊の不敗性の根源について感慨深く回顧しながら朝鮮人民革命軍が強かったのはなぜかと問われるたびに、わたしは、信義によって結束した集団だったからだと答えてきた､われわれの団結が道徳と信義にもとづかず、ただ思想・意志の共通性によるものだけであったなら、われわれはこれほど強くはなかったであろう、ひとえに、忠誠と信義によって結合した思想･意志の結束があったからこそ、われわれは強敵を打ち倒すことができたのである、と熱く述べた。革命的同志愛にもとづいて固く結束するとき、15 年ではなく、20 年、100 年も敵と戦えるし、いくら困難で複雑な条件の下でも勝利することができるというのが､主席の不変の信念であり、意志であった。

全人民を自分の同志として見なし、限りない愛を施す主席の限りない愛と信頼は､その幅において、自主性を志向する各階層のすべての人を包括する幅広いものであり､その熱度において名実ともに太陽にだけたとえられる熱烈なものであり､その持続性において代に継いで続けられる永遠な愛と信頼であった。

インテリを象徴する筆が朝鮮労働党のマークの中に堂々と描かれたとき、労働者階級の諸政党は驚きを禁じえなかった。インテリ、労働者、農民が一つに結束して労働者階級の党の一構成員になったということは驚異的な出来事であった。

1930 年代の初め、ある国の哲学者は、インテリはそれぞれの階級の代表者が彼らを派遣した階級の利益に沿ってすべての可能なグループを形成する思想的議会に似ているとし､全体としてのインテリの階級的特性を云々するなんらの根拠もないと主張した。こうした見解は社会の他の構成員とは異なり､自分の専門知識と技術をもってそれぞれの階級に服務する社会の中間層としてのインテリの社会的立場を重視したことであった。

社会の中間層、これは労働者階級の革命運動を開拓したマルクスとエンゲルスからはじめて､社会主義革命と社会主義建設を指導したレーニンとス

ターリンに至るまで、一様に規定したインテリの社会的地位であった。従来の革命の領袖たちが社会的変革のための闘争でインテリの問題解決の重要性を認識し、それに大きな意義を付与しながらも、単に彼らを闘争に引き入れたり、利用したりし、せいぜい「配慮する政策」の対象にしか見なさなかったのは、ほかならぬインテリにたいする固まった認識があったからであった。

主席は朝鮮のインテリの境遇と彼らの動向にたいする科学的な分析にもとづいて、彼らを党と革命、祖国と人民と運命をともにできる同志、革命の主体の一構成員と規定した。世界にはインテリがいない党はないが、その党のマークにインテリを象徴する筆を形象化した党は朝鮮労働党しかない。この事実一つだけでも、主席がそなえている出色の同志愛と信頼についてよく知ることができる。

主席のこのような熱い同志愛と信頼の世界には先に逝った革命同志たちの姿を一人一人探し出して永生の丘に立たせた高潔な革命的信義もあり、一生涯あれほど切に探していた遺児たちに会ったとき、彼らよりも先に熱い涙を流していた肉親のような愛も秘められている。その世界には病床に臥しているある戦友を思って子供たちの迎春公演に臨席して帰る道に家庭訪問をしてくれた偉大な同志愛の逸話もあり、長い間、犠牲になったある農場の管理委員長のことに胸を痛め、彼の故郷を通り過ぎるたびにはわざわざ遠回りをして現地指導の道を続けた涙ぐましい愛の道も刻されている。実に、どの革命よりも複雑多難な道を踏み分けながら千差万別の朝鮮人民を愛の懐に抱いた主席こそは、万物に生命を与えて大自然の調和をなす太陽にも比べられない偉大な愛の化身であった。

主席が全朝鮮人民を自分の同志にし、この地に崇高な同志愛の世界を建設していくその歴史的な日々は、朝鮮人民が領袖の周りに渾然一体として結束していく歴史的な日々であった。

主席が逝去して数日経ったある日、大雨が降り出す万寿台の丘で服を脱いで花輪に被せ、涙を流しながら立っている青年大学生たちを見ていた総書記は静

かに熱い涙を流した。

その後のある日、総書記は雨の日に万寿台の丘で見かけた大学生たちの姿を感慨深く追憶しながら、今回の哀悼期間にわれわれの領袖、党、軍隊と人民の一心団結の威力がどんなに強固なものであるかが力強く示威されたが、こういう強固な一心団結を成し遂げたのは主席の偉大な業績である、と熱く述べた。

主席は生前に世界各国の元首と各階層の指導者、著名な人士と平凡な人民から多くの贈り物を受けている。国際親善展覧観として呼ばれる妙香山の壮大な家には20世紀の最高の至誠品がみな展示されている。

そのように自分の財産の全部を人民に譲り渡した主席が、自分の手元に残したのは、ただ一枚の写真だけであった。

この世でもっとも崇高で美しい世界、この世でただ一つしかない不変の世界、革命同志の愛の世界を物語る一枚の写真は、植民地亡国の民の子として革命の道に身を投じ、あれほど大きな業績を積み上げた主席の唯一の元手がほかならぬ革命の同志であったことの涙ぐましい確証である。

革命的同志愛と渾然一体、それさえあればこの世のすべてがある、まさにこれが、主席が残した一枚の写真の歴史的意味である。これこそは主席が祖国と人民に残した遺産の中の最大の遺産であり、遺訓の中の最大の遺訓である。

人民の力を革命の強力な推進力に転換

金日成主席の卓越した大衆動員力で基本は、人民大衆の精神力の発揮である。

いつか、朝鮮を訪問した西欧のある記者は、人民を重んじ、人民が革命と建設で限りない力を発揮するように導く主席閣下の指導芸術は、人間の精神活動に根本を置いた新たな指導芸術であるといった。

主席の大衆動員力の本質的特徴にたいするこの評価はこれまで大衆を

奮起させる上で普遍的方法によって適用されてきた外部の作用による方法の制約とそれに比べた人間の内的力、精神力発揮の絶対的優越性にたいする正しい認識にもとづいている。

国際革命運動史を考察すれば、人民大衆の精神力を重視し、それを発揮させるための労働者階級の領袖たちと党の努力を見出すことができる。

社会主義 10 月革命を遂行していた時期に、ロシアの革命家と人民はレーニンが示した「すべての政権をソビエトへ！」という革命的スローガンで限りない精神的力と勇気を得て闘争に奮い立った。中国共産党は困難の中でおこなった 2 万 5 千里の大長征で「北上抗日」の旗の下に広範な中国人民の民族的義憤を爆発させ、紅軍の兵士を決死戦に呼び起こして勝利をもたらした。独ソ戦争の時期に、ヒトラーの最後の牙城であったベルリンの国会議事堂に赤旗を立てたソ連軍の師団長は回想録で、政治的方法で軍人の精神力を呼び起こしたのが最後の勝利をもたらす上で決定的意義を有したと書いた。

長期にわたる人類史が記録しているこうした精神的高揚の数多の逸話の中で特出なのは、人民大衆の自主的な思想の力、真の精神力を発揮させて消えゆく一国を建て起こして、一つの時代を震撼させた主席に対するものである。

朝鮮革命の歴史を振り返れば、一つの特異な現象を見出すことができる。それは革命と建設のもっとも困難な試練の時期には朝鮮人民の革命的熱意と創造的力が激しく噴出されたことである。

朝鮮革命で不屈の革命精神、白頭の革命精神が誕生したのも、日本帝国主義の前代未聞の暴圧が極に達していた抗日武装闘争の時期であり、祖国解放戦争勝利の転換的局面が開かれたのも、戦争の運命が旦夕に迫っていた時であった。革命と建設のすべての分野でチョンリマの精神が高く発揮されたのも朝鮮の革命でもっとも厳しかった 1950 年代であり、新たな革命的大高揚の熱意の下に、国防建設を並進させながら社会主義工業化のための闘争を力強く前進させたのも、敵の新しい戦争挑発策動によって一触即発の緊張状態が醸し出された 1960 年代であった。

主席の革命指導で特徴的なのは、もっとも積極的で進攻的な思想攻勢、政治思想攻勢であった。

主席は朝鮮革命を武装闘争の新たな高い段階へと導いていた時期、積極的な武装闘争路線にもとづいて革命的で戦闘的なスローガンを提示し、人民に抗日武装闘争の明白な目標と勝利への信念を与え、解放後は大衆的思想改造運動である建国思想総動員運動を展開するようにして建国の草分けの道を切り開いた。主席は厳しい戦争の時期と復旧建設の時期など、革命と建設の重要な時期ごとに、全党員と勤労者に現下の政治情勢と重要問題を熟知させ、連続的に戦闘的なスローガンを提示して全国が沸き立つようにし、全人民を思想的に覚醒させて奇跡の創造へと力強く奮い起こした。

朝鮮人民の精神力の根源は主席が創始した不滅のチュチェ思想である。朝鮮人民が身につけた精神力のすべての内容はチュチェ思想を起点、源泉にしている。

主席は早くから不滅のチュチェ思想を創始し、革命と建設の各時期、各段階にチュチェ思想の教育に決定的意義を付与し、それにもとづいて人民大衆の精神力を高く発揮させてきた。これは朝鮮人民が自己の限りない力を運命開拓のもっとも正しい行路で遺憾なく発揮できるようにした根本要因となった。

20 世紀の歴史の中で前進してきた朝鮮革命の特徴は経済と軍事、科学と文化など、すべての分野でその発展速度が非常に速いことであった。朝鮮革命の最終的勝利を早めるその奇跡的な速度は、主席が指導した大衆上げての運動、全人民的運動によるものであった。

抗日革命大戦は大衆上げての武器獲得闘争から始まり、新しい祖国建設は建国思想総動員運動で始まって増産競争運動と文盲退治運動、愛国米献納運動と軍器基金献納運動につながって激しく前進した。祖国解放戦争の時期に生まれた「私の高地」運動と報復記録運動、「民青号」武器獲得運動と前線援護米献納運動は多くの英雄を輩出し、勝利の日まで続いた。社会主義の基礎建設と全面的建設の時期にはチョンリマ運動とチョンリマ作業班運動、

工作機械の子生み運動と突撃隊運動が世人を驚嘆させる奇跡と革新を生んだ。社会主義建設のより高い目標を占領するための闘争の時期に入っては、3 大革命赤旗獲得運動の火の手が上がった。朝鮮革命の奇跡的な歴史は、このように全民上げての大衆運動によって前進し勝利してきた誇らしい道程であった。

大衆運動は広範な大衆の集団的力に依拠して、革命と建設を推進して行く、もっともすぐれて革命的な活動方法である。大衆の団結と協力を最大に図り、集団的革新の炎の中で大衆の限りない力と知恵を最大に発揮させる朝鮮の大衆運動は、チュチェ思想の旗の下に歴史を創造し発展させる人民大衆の威力ある社会主義運動である。

従来の労働者階級の革命運動史にも労働者階級の党が大衆運動で収めた成果が少なからず記録されている。

ソ連における大衆運動は主に社会主義競争運動であった。共産主義的土曜労働とスタハノフ運動がその実例である。1919 年モスクワーカザン鉄道機関区の 15 名の共産党員がレーニンのアピールに応えて、無報酬労働で展開した共産主義的土曜労働によって大衆的競争運動の起源が開かれた。スタハノフ運動は1935年ドネツ炭田のある労働者が従来の基準量を10倍以上も超過遂行したのを契機にしておこなわれた社会主義競争運動であった。

しかし、これらの運動の発端と拡大過程、結果を見ると、みな一時期の生産力発展や当時の危機を打開するための、一時的な性格を帯びるものであった。共産主義的土曜労働だけを見てもソ連ではそれが 1940 年代以降には重要な記念日や意義深い日を契機にしかおこなわれなかった。事実上、それらの大衆運動が志向する戦略的目標はなかった。

主席が解放後、初の大衆運動から始めて革命と建設の全期間、組織展開し指導してきたすべての大衆運動はあくまでも思想、技術、文化の 3 大革命の遂行を志向していたところにその重要な特徴がある。

解放直後組織展開された建国思想総動員運動、増産競争運動、文盲退治運動は本質上 3 大革命のスタートを宣言した大衆的運動であった。建国思想

総動員運動が人民大衆の中に新たな民主朝鮮の主人としての精神と風格、道徳と戦闘力を培養するための思想改造運動であったならば、増産競争運動は民族経済の富強発展を目指す技術的・経済的課題を提示し、その遂行へとすべての勤労者を呼び起こす運動であり、文盲退治運動は文化革命のスタートを告げる大衆運動であった。

チョンリマ運動は人々を教育改造して、継続的に前進し、革新を起こす、社会主義建設の積極分子に育成する大衆教育運動であり、大衆的英雄主義を発揮して経済、文化の建設で革新を起こす、技術改造、文化改造の運動であった。

主席は社会主義建設のより高い目標を達成するための闘争段階では大衆運動を 3 大革命赤旗獲得運動と命名し、この運動を 3 大革命の課題を完遂するための全社会的な革命的大衆運動に発展させた。

主席が人民の中におられ、その力を発揮させてきた現地指導は、主席が史上初めて開拓し実践してきたもっとも威力あり人民的な大衆指導方法である。

現地指導は主席の「以民為天」の思想が現実に具現された指導方法として、人民大衆の力を遺憾なく発揮させ、革命と建設で世紀的な勝利をもたらす根本要因の一つであった。

総書記が述べているように、主席の一生は、絶え間なく人民を訪ねて歩いた現地指導の一生であった。今日も朝鮮人民が熱く話している「人民行きの列車」、この言葉にはいつも人民を訪ねて歩み続けた主席の一生にたいする限りない称揚がそのまま込められている。現地指導は名実ともに主席が創造した主席の固有の大衆指導方法であり、チュチェの大衆指導方法のモデルである。

主席は現地指導を通じてもっとも科学的で現実的な路線と政策を構想して作成し、それを提示して人民大衆を革命闘争と建設事業へと力強く奮い立たせた。

今日も朝鮮人民の心の中には溶鉄が降りそそぐ溶解場と削岩機の音が

響く切羽、芽が生え、穀物が熟する野原と雨が降りしきる最前線で人民と膝を交えてざっくばらんに話し合う主席の尊顔が深く刻まれている。常に人民の中におり、人民の素朴な考えや耳打ちも党と国家の路線と政策に反映する方が主席であった。

解放後、主席を遂行して各農村と製鋼所、電気工場、穀物加工工場に出かけていた幹部らは主席がその時に聞いていた農民たちの願い、その時に調べた工場の実態が土地改革の法令や産業国有化の法令など、諸般の民主改革の法令にそのまま反映されたことについて感激して話していた。

今日、朝鮮の随所には主席の大いなる指導事跡を伝える現地指導事績碑が丁重に建立されている。それらの事績碑に主席が当該単位を訪ねて受け持った革命課題の重要性と遂行方途など、代を継いで肝に銘じ、堅持して行くべき諸問題を具体的に助言し指導したことが、深く刻されている。

現地指導を通した主席の政治活動は、いずれも具体的な革命課題の遂行と密着した現実的なものであった。

いつか、総書記は主席の偉人像について回顧し、主席は10代の幼年の時代にすでに人間を知り、人間の心を動かす上で博士になったと述べている。万人の心を一気に引き付ける強い親和力、万人の理性を一時に啓発させる強い説得力、千万人の心を一瞬に捉える強い扇動力、これは誰にも比肩できない主席の政治家的能力であり、魅力であった。この偉人的な能力が人民とともにいながら彼らの革命課題の遂行と一つに結合されて発揮されたため、革命と建設で人民大衆の力と熱意を遺憾なく発揮させる大きな推進力になれたのである。

主席は一生、人民が働くところなら、どこでも訪ね、彼らと生死をともにした。苛烈な祖国解放戦争の時期、わが兵士たちが戦っているところに私とてどうして行けないのかとし、最前線の塹壕にまで出て戦士たちを一人一人熱く抱いてくれた主席は戦争が終わって 3 ヶ月も経っていないある日には、険しい山奥に位置している一発電所を訪ねて、危ないから入ってはいけないと切願する幹部らを引きとめ、天井と壁に高圧線が複雑に伸ばされ、地下水まで流れ込んで感電する恐れのあるトンネルの中にためらわずに入っ

た。製鋼所に行っては 2000℃の高熱で熱い炉の前に立って火の手が燃えさかる中で労働者たちの労苦をねぎらい、鉱山と炭鉱を訪ねては数千尺の地下の切羽で働く労働者たちに会おうと鉱車と炭車に乗って深い地下の中にまで入った。

主席の現地指導は間違いなく歴史が知らない偉大な政治・芸術であった。しかし、主席の現地指導はまずは、もっとも偉大な人間、人民の慈父としての体質化された生活方式であった。

主席が祖国に凱旋した時から偉大な生涯の最後の時期まで 50 余年間、人民の中で過ごした時間は、その半分に及ぶ 24 余年間の長い歳月、8650 余日をなしている。この間、主席が歩んだ足跡を全部合わせれば、そのままこの国の地図になる。

振り返ってみると、今までの歴史には現地指導という言葉自体がなかった。一生を人民とともに生きた指導者はなおいなかった。

いつか、キューバ元首相のフィデル・カストロが前触れもなくハバナの朝鮮大使館を訪ねたことがあった。地方へ指導活動に出かける道で主席の現地指導のドキュメンタリーが見たくて立ち寄ったとのことであった。同日、カストロ首相は明け方 3 時が過ぎるまで数編のドキュメンタリーを見た後、感動を禁じえずに、金日成主席の指導方法はすべての社会主義国家指導者が見習うべき偉大な模範である、ブルジョア政客なるものは大衆の前で演説を一、二回やればそれで終わりだが、社会主義国家の指導者はそのようにいつも人民の中に入って政事を議論すべきである、それが骨を折ることであり、忙しいのは事実である、しかし、私は必ずそうすべきであると思う、といった。

主席は一生、人民とともにいながら、人民的な指導方法の手本を創造しただけでなく、それを社会管理全般に立派に具現して、社会主義社会の本性的要求に即したチュチェの社会管理体系と方法を創造した。

主席は歴史的な 1959 年 12 月の総会の後、大衆指導の新たな活動方法を創造する構想をもってほぼ 15 日間にわたってチョンサンリと江西郡党委員

会の活動を現地指導する過程でチョンサンリ精神、チョンサンリ方法を創造した。

チョンサンリ精神、チョンサンリ方法には党、国家、経済機関の指導における基本方向と原則が体系化されている。その内容は社会のすべての構成員を教育改造して党の周りに結束させ、国の経済管理と人民の生活について完全に責任をもち、すべての活動を人民大衆自身の活動に確固と転換させる原則で党的、国家的指導を実現することである。

主席はチョンサンリ精神、チョンサンリ方法を具現して独創的な経済管理体系、社会管理体系を確立することにも大きな心血を注いだ。

1961 年 11 月、党中央委員会第 4 期第 2 回総会の拡大会議で、新しい環境の要求に即して経済にたいする指導管理体系を根本的に改善するという綱領的課題を示した主席は、同年の 12 月、テアン（大安）電気工場を訪れ、その手本を創造した。

支配人がすべての権限を掌握し行使する支配人唯一管理制とは異なり、すべてが党委員会の集団的指導の下におこなわれ、その過程がすなわち勤労大衆自身の広範な意思と要求を実現する過程であるというところに、テアンの事業体系の本質的特徴がある。テアンの事業体系はそれが広範な人民大衆をして、国家と社会の主人としての責任と役割を果たせるための社会主義国家活動の根本原理を具現していることにより、経済にたいする指導管理体系としてだけでなく、社会主義社会全般を管理運営していく社会管理体系として普遍的意義を有する。

それゆえ、総書記はテアンの事業体系を創始した主席の不滅の功績について、それは、社会主義政権の樹立と生産手段に対する社会主義的所有関係の確立に劣らぬ、社会改造分野での大革命だと言えると熱く述べたのである。

３．民族の慈父

1）民族再生の恩人

朝鮮民族は民族の始祖である檀君によって聖なる民族史を始めて以来、高い尊厳と強大さ、5 千年の悠久な歴史と燦然たる文化を誇ってきた英知に富む民族であった。

その朝鮮民族が民族の正しい指導者にめぐり会えなかったため、事大主義と屈従によって衰え、20 世紀の初期にはとうとう亡国の悲運にとざされ、植民地奴隷としての痛ましい受難を強いられるようになった。

金日成主席が誕生することにより、こうした朝鮮民族に再生の曙光が差し、5 千年の民族史の新たな転機が開かれた。

金正日総書記は次のように述べている。

「金日成同志こそは朝鮮民族を再生させた恩人であり、朝鮮人民にもっとも貴い社会的・政治的生命を与え、もっとも幸せで誇り高い生をもたらしてくれた慈父です」

今日、朝鮮人民が自らを栄えある金日成民族であると堂々と語るのは、主席の誕生から始まった朝鮮民族の歴史が偉大でかつ聖なるものだからである。

主席は奪われた祖国を取り戻し、不滅のチュチェ思想で自主の魂を吹き込み、不敗の党と無敵の強兵、人民の幸福が開花するすぐれた社会主義制度を民族の億年の財宝としてもたらした。

立派で剛直な愛国的な家門、革命的な家門で誕生した主席は、早くから祖国と民族の運命を一身に体現しながら、偉大な愛国者、革命家として成長した不世出の偉人であった。

主席が幼年の時代から耳慣れにした言葉は愛国であり、人生の目標として学んだのもほかならぬ国と民族のためのことであった。主席は幼年の時代から童心世界に浸るよりは日本帝国主義者の凶悪さと受難にあえぐ民族の鬱憤と悲しみを自分の痛みとして体験しながら愛国の信念を固めた。

1918 年 6 月、6 歳の主席は、母とともに朝鮮国民会の事件で平壌監獄に

逮捕された父の面会に行った時、多くの銃口と高い塀、鉄条網で張り巡らされた監獄と日本の軍警によって父の体にできた傷を見ながら、悪魔のような日本帝国主義にたいして義憤をおさえ切れなかった。

７歳の年である 1919 年には 3.1 人民蜂起に参加し、国と人民を殺戮する恐ろしい暴圧の銃剣の前でも屈しない朝鮮民族の不屈の気概を切に感じながら、祖国と民族のために一身をささげて戦おうとする悲壮な決心をもった。

父母に従って中崗と中国東北地方に行く時も、亡国の民の鬱憤とともに日本帝国主義者がのさばる世にたいする軽蔑を禁じえなかった。

主席は幼年の時代から朝鮮の亡国の歴史について父母から聞きながら、国を取り戻す闘争に一生をささげる覚悟と決意をもって、13 歳の若年にして朝鮮が独立しなければ再び帰ってはくるまいと固く決心して、革命の道に身を投じた不世出の愛国者であった。

主席は祖国と民族の運命を救おうという使命感を深く自覚したため、20星霜という抗日の血戦の万里をいささかも動揺することなく、歩むことができたのである。

主席は早くから誰も比肩できない崇高な偉人的風格を備えていたことによって、もはや 10 代の時に、全朝鮮民族の念願と期待が込められた「太陽」の聖なる尊名で呼ばわれた、民族の傑出した指導者であった。

一民族が自分の生んだ傑出した偉人に与える呼び名には実に多くの意味が込められる。しかし、世界の偉人史のどのページにも、一民族が自分の指導者に、指導者として従い始めた初期から聖なる「太陽」の尊名で呼びながら限りなく敬慕し高く戴いた例はなかった。

その尊名には、祖国と民族の運命を救い、自らを導いてくれることを願う朝鮮人民、朝鮮民族の一致した念願が込められていた。それとともに非凡な英知と指導力を身につけた民族の指導者を太陽のように慕う朝鮮人民の限りない敬慕と信頼の情が熱く込められていた。

革命活動の道を踏み出した時、青年指導者である主席に革命家と独立運

動家、人民は朝鮮の前途を照らす星になってくれることを念願して「ハンビョル」「一星」という雅号をつけ、再び太陽になぞらえた名である「日成」という尊名を冠した。

革命詩人金赫は朝鮮民族が崇敬する偉人を称揚した歌「朝鮮の星」をつくって普及した。この歌は中国の満州はもとより、国内と海を渡って日本にも波及した。この事実は当時、主席を民族の指導者として高く戴こうとする朝鮮人民の心がどんなに熱烈であり、主席の偉人のような人格がどんなに万人の心を激動させたかを優に察することができる。

主席を朝鮮の太陽として仰ぎながら叫ぶ朝鮮民族の歓呼と激情は、1930年代と1940年代を経て抗日武装闘争の全過程に高く響き渡った。

抗日の日々、朝鮮人民は主席の伝説のような偉人像を「白頭山の精気を一身に担った同胞の救い主」「百姓に万福をもたらす天が下した聖人」として称揚し、さまざまな伝説を多く創造し、人民歌謡「白頭山の将軍星」などの歌までつくって歌った。それればかりでなく、抗日遊撃隊員と朝鮮人民は「金日成大将は万民の太陽である」「万民の太陽、光復の領袖金日成大将万歳　祖国解放万歳」「子々孫々奉じ従おう希世の英雄金日成大将」など、多くの革命的スローガンを国内はもとより、中国東北地方各地の千古の密林の樹木と樹林地帯に刻み込んで、主席を仰ぎ慕う全朝鮮同胞の胸に大きな民族的誇りと希望を与えた。

主席は最悪の条件で強大で暴虐な帝国主義侵略者と立ち向かって15星霜の血のにじむ武装闘争をくり広げて30代に民族再生の歴史的偉業を成し遂げた民族の英雄の中の英雄であった。

主席は朝鮮革命の並外れた特殊性と歴史の教訓から出発して路線と方針、闘争方略にいたるまで民族解放闘争で提起されるすべての問題を徹底して独自に思考し確定した。

民族解放のスローガンを高く掲げた主席は、いかなる勢力の圧力と専横の中でもその実現をめざして戦う朝鮮の革命家の神聖な権利をしっかり固守することにより、朝鮮人民の抗日武装闘争を名実ともに民族の解放を目標

とする民族的偉業として固く発展させた。

1932 年 4 月 25 日、朝鮮民族の最初の革命的武装力である反日人民遊撃隊を創建した主席は、国家的後方や正規軍の支援もないもっとも厳しい条件で、暴悪で強大な日本帝国主義と真っ向から立ち向かって血のにじむ遊撃闘争をくり広げた。

武装闘争の基本形式を示した主席は、遊撃隊員の高い思想精神力と巧みな遊撃戦術を勝利のための威力ある宝剣として堅持し、敵らに甚大な政治的・軍事的打撃を与え、祖国解放の勝利をもたらした。

主席は民族の自主権はもっぱらその民族自身の主体的な努力と不屈の闘争によってのみ保全し獲得することができるという確固たる立場と観点をもっていた。

主席は歴史上初めて、軍民一致の貴い気風を創造し、抗日遊撃隊が国家的後方やいかなる他国の支援のない中でも敵との戦いで常に勝利するようにした。

「魚が水を離れては生きていけないように、遊撃隊は人民を離れては生きていけない」、これは主席が示した抗日遊撃隊の生存方式であり、活動原則であった。

主席は朝鮮人民の独立闘争が進むべき道はあくまでも自力更生の道であると確認し、遊撃闘争で提起されるすべての問題を自力で解決するよう導いた。

遊撃隊員たちは自力更生の旗を高く掲げて密林の中の兵器廠で各種の武器を自力で修理して研ぎ、延吉爆弾や木製の砲なども製作した。その日々に、やすりでミシンの針をつくって 600 着の軍服をつくりあげた不屈の闘争についての逸話も生まれた。

主席は抗日革命闘争を開始しながら、全民族の大団結を独立闘争の大前提としておし立て、全朝鮮人民を聖なる祖国解放の旗の下に結束した。

主席は民族解放運動の具体的現実にもとづき、朝鮮人の力で日本帝国主義を打ち破り、国を解放するには、日本帝国主義に反対するすべての力量、

つまり労働者、農民、青年学生はもとより、宗教家、良心的な民族資本家にいたるまで､反日思想をもったすべての愛国力量を反日の旗の下に固く結束すべきであると示した。

主席は独創的な反日民族統一戦線路線にもとづき、国と民族を愛するすべての愛国力量を一つに結束できる統一戦線組織体である祖国光復会を1936 年 5 月に創立した。

全人民を一つに結束させた主席は、全国に全民抗争の炎を燃え上がらせ、民族自力で祖国解放の民族史的偉業を成し遂げた。

1945 年 8 月 9 日、主席は祖国解放のための最後の攻撃命令を下達した。

朝鮮人民革命軍の総攻撃に合流してすでに国内に組織されていた人民武装隊と武装蜂起組織､広範な人民は全国各地で日本帝国主義侵略軍と憲兵、警察機関を襲撃、掃討しながら敵の背後を攪乱する闘争を果敢にくり広げ、進撃してくる人民革命軍部隊を大いに支援した。

日本帝国主義は最後の攻撃が開始されて一週間もならない 1945 年 8 月 15 日に無条件降伏を宣言せざるを得なかった。

1945 年 10 月 14 日､平壌牡丹峰公設運動場では祖国と民族の独立を成し遂げた民族の英雄金日成主席の祖国の凱旋を歓迎する市民大会がおこなわれた。

その日、三千里の山河を震撼させたその熱狂的な歓呼は、聖なる民族解放偉業を輝かしい勝利へと導き､息が絶えつつあった国と民族の運命を救い出した絶世の愛国者、解放の恩人にたいする全人民的感謝の爆発であった。

２）民族の尊厳と栄誉を轟かせた民族的英雄

民族自主で建国聖業を実現

金日成主席は解放された朝鮮人民にチュチェの建国の大綱を示して、国と民族が進むべき道を明示し、自主的発展の大道を開いた。

帝国主義の植民地支配から解放されて再生した民族にあって、進むべき前途を正しく知らなければ、たとえ民族的独立は遂げたとしても、自己発展の道で紆余曲折を免れず、再び列強のなぶりものになりかねない。

主席は 1945 年 8 月 20 日、軍政事幹部らの会議でおこなった歴史的演説で、自主的な独立国家を建設するのは朝鮮民族が新しい祖国を建設する上で捉えていくべき唯一の建国路線であることについて明確に示した。

金日成主席は次のように述べている。

「祖国解放の歴史的大業がなし遂げられたいま、われわれには新しい闘争課題が提起されています。われわれは勝利の成果にもとづいて朝鮮革命をひきつづき前進させ、朝鮮人民自身の手で豊かで強力な自主独立国家を建設しなければなりません」

朝鮮人民自身の手で豊かで強力な自主独立国家を建設しなければならないという主席の建国思想には、祖国解放の歴史的大業を朝鮮人民の手でなし遂げたように、新しい祖国の建設も他人の手を借りてではなく自分の手で、朝鮮の実情に即して他国の方式ではなく自分の方式でおこなうべきだという、徹底した自主的立場が反映されていた。

主席は新しい祖国建設路線を実現するための戦略的課題として建党、建国、建軍の 3 大課題を提示し、これを解放された祖国において朝鮮革命を急速に発展させるために遅滞なく貫徹すべき、緊急かつ重大な革命任務として提起した。

主席は自主的な新しい祖国建設路線の成果的実現のために、国を愛するすべての愛国力量を固く団結させ、その団結した力で建国事業におけるすべての問題を解決することをその基本方途として提示した。

1991 年 8 月のある日、主席は、われわれは解放後、新しい社会を建設するたたかいにおいても、民族の大団結をなしとげることに主力を注いだ、わたしは祖国の解放をなしとげた後に人民におこなった演説で、国と民族を愛し、民主を愛する全人民が一つにかたく団結して、力のある人は力で、知識のある人は知識で、金のある人は金で、建国事業に積極的に貢献するよう呼

びかけた、われわれは各階層の人民の団結した力に依拠して、民主的な新しい祖国の建設と社会主義建設を力強くおし進めた、と感慨深く回顧した。

主席は民族自主的な新しい祖国建設路線にもとづいて解放された祖国で遅滞なく建党、建国、建軍の3大課題を立派に実現することにいって、朝鮮人民の真の民族的自主権をもたらした。

主席は解放された朝鮮に醸し出された情勢と革命の発展が、朝鮮革命を勝利へと導く党の創立を切実に求め、広範な人民大衆を結束させ、彼らを組織動員して新しい祖国を成功裏に建設できる基本的保証も統一的な党の創立にあると見なした。

こういうことから主席は党創立の理論の提示からそれを実現するための闘争の全過程で、党をある特定の階級だけではなく、全朝鮮人民の要求と利益を代弁する政治的嚮導者として建設する原則を確固と堅持し貫いた。

主席が独創的に示した党創立の原則は、自主性の原則であり、その方式は党創立の組織的・思想的基礎を強固にし、広範な大衆の中で党の基礎組織を先に建設したことに基づき、それを拡大強化する方法で党を創立することである。

すべての準備にもとづいて主席は1945年10月5日、党創立のための予備会議を経て、10月10日、平壌で歴史的な党創立大会を開き、党中央指導機関としての北朝鮮共産党中央組織委員会を結成した。それでチュチェ思想を指導思想とし、朝鮮人民の自主的利益を代表するチュチェ型の革命的党が誕生するようになり、「トゥ・ドゥ」の結成から始まった党創立の歴史的偉業が立派に実現されるようになった。

1949年、朝鮮革命の要求と人民の志向によって、北と南に存在していた労働党が合党して、全朝鮮民族の利益を代表する革命的党、朝鮮労働党として強化発展された。

主席は党のマークに労働者と農民、インテリを象徴するハンマーと鎌、筆を明記させて、勤労人民の大衆的党としての朝鮮労働党の性格を明確にした。

主席は解放された祖国に民族自主的な政権を樹立することにより、朝鮮民族をして自主権を自分の手に掌握した自主民族として世界の政治舞台に堂々と立たせた。

解放直後、主権の問題をめぐる国内外の情勢は非常に複雑で鋭かった。

主席はそれぞれの主義主張が乱舞し、先鋭化する南朝鮮の情勢と複雑な国際情勢の中でも、遅滞なく北半部に人民の政権を樹立すべきであるという革命的方針を示し、人民の総意によって自分の手で地方主権機関を設けるように積極的な措置を講じた。

北朝鮮のすべての地域で人民委員会が組織されて自己の活動を始めたことにもとづいて、1946 年 2 月には北朝鮮臨時人民委員会が樹立した。

主席の賢明な指導の下に樹立した北朝鮮臨時人民委員会は労働者階級が指導する労農同盟にもとづき、各階層の広範な人民大衆の統一戦線に依拠した新しい型の民主主義的な政権であった。

主席が導く民族自主の人民主権の下で反帝反封建民主主義革命の課題が成功裏に遂行されるにつれ、北朝鮮臨時人民委員会は北朝鮮人民委員会に強化発展した。

主席は外部勢力の植民地奴隷化策動によって南朝鮮が再び外部勢力の植民地になりさがっている状況下で、全朝鮮人民の利益を代弁する統一的な中央政府を一日も早く樹立すべき切迫性を深く洞察し、憲法と国旗、国章を制定するようにして、共和国創建の準備活動を成功裏におこなうようにした。

これにもとづいて 1948 年 8 月、北南の総選挙を実施するようにした。それにもとづいて 1948 年 9 月 9 日、金日成主席を国家元首、内閣首相とする朝鮮民主主義人民共和国の政府が組織された。

朝鮮民主主義人民共和国の創建は、全朝鮮人民の総意によって樹立した唯一の合法的国家の誕生であり、共和国は全朝鮮人民の自主権の実際の代表者、徹底した擁護者であった。

主席は革命の銃剣を強化することにより、自主権を掌握した、国の堂々たる主人としての朝鮮人民の地位をさらに確固と保障した。

主席は平壌学院を創設し、水上保安隊の組織に継いで、陸海空軍の母体部隊と各技術兵種部隊を組織しうる土台を築き、自体の兵器工業を創設した上で 1948 年 2 月、朝鮮人民軍を創建した。

主席が正規的革命武力を創建し、人民主権の確固たる武力的保証をもたらすことにより、朝鮮人民はかつて、銃がなくて亡国の悲運にとざされ、血の涙を流していた歴史の教訓を繰り返さず、強力な革命軍隊によってその自主的発展をめざす道へと確固と入るようになった。

数千年の民族史で初めて民主の新しい国を樹立した主席は、民主改革を通じて朝鮮を人民が社会生活のすべての分野で実際の主人となって、自分の手で幸福を創造していく人民の国につくり変えた。

主席は農民の長い間の念願である土地改革から民主改革の烽火を掲げ、重要産業の国有化を実施するようにし、労働法令と男女平等権法令を発布させ、もっとも人民的で民主主義的な教育と文化、司法検察制度を樹立した。

国と民族を復興させて人民により裕福な生活をさせるための主席の大志と崇高な愛に感動された朝鮮人民は、建国思想総動員運動の炎の下で愛国米献納運動、愛国的増産競争運動、労働英雄運動など、多様な建国運動と生産突撃運動をくり広げながら、国の民族経済を発展させ、民族繁栄の土台を築くための闘争を力強く展開した。

解放された朝鮮の勤労する人民大衆が国の実際の主人となって社会生活のすべての分野を自分の意思と要求に即して改造変革していく東方最初の民主の国であった。

自主民族の魂と気風の確立

主席は朝鮮人民にいかなる物質的財宝に比べられないほど高貴な民族自主の偉大な精神を植えつけ、朝鮮式に生きていく闘争気風を確立した民族の慈父である。

主席は国の解放をなし遂げた初期から朝鮮人民に自己の運命の主人と

なって朝鮮の未来を朝鮮民族の力で開拓しなければならないという透徹した民族自主の精神を植えつけるために大きな心血を注いできた。

主席は祖国の凱旋演説で、解放された朝鮮の主人はほかならぬ朝鮮人民である、かつて日本帝国主義の植民地支配下で抑圧され蔑まれてきた労働者、農民をはじめとした勤労大衆が新しい朝鮮の真の主人とならなければならず、彼らによって国のすべての問題が解決されるべきであるとし、すべての人たちが朝鮮の真の主人であるという自覚をもって、新しい朝鮮の建設に一致して奮い立つことを熱烈に呼びかけた。

解放後、新しい朝鮮が進むべき前途を明示する主席の建国思想と路線が発表された瞬間から全朝鮮人民を大きく激動させ、新しい朝鮮建設へと力強く奮い起こす戦闘的旗印となったのも、それにいかなる外部勢力の干渉も許すことなく、民族の運命開拓で提起されるすべての問題を徹底して朝鮮人民自身の力で解決すべきであるという、民族自主の精神が確実に具現されていたからである。

主席は解放後、祖国のどこを訪ねても、工場と農村、鉱山と漁村など、祖国のすべてが労働者、農民をはじめとした朝鮮の勤労大衆のものであり、文化人は新しい朝鮮の文化部門の主人、青少年たちは未来の朝鮮の主人公であると熱烈に主張している。

主席は朝鮮人民に主人としての自覚を深く植えつけるとともに、長い間、朝鮮人民の精神領域に残っていた思想的汚物を完全に一掃することにより、全国に民族自主精神を徹底的に確立するようにした。

民族の尊厳にたいする意識を蝕むもっとも害毒的な思想傾向は、民族主体意識を麻痺させる事大主義とそれから生まれる民族虚無主義である。

主席が朝鮮人民に徹底した民族自主精神を植えつける上で強力な思想的・精神的武器としたのはチュチェ思想であった。

チュチェ思想はすべての民族が自己の運命の主人となるためには、民族自主精神をもって、自民族の力に依拠して民族の運命を開拓しなければならないという真理を示している。

主席はいつも、経済、国防建設の問題や文化建設問題、対外活動問題について助言をおこなう時にも、人民にチュチェ思想の要求通り、自己の信念をもってすべての問題を朝鮮の現実に合わせておこなうよう強調している。

徹底した自主の革命思想、チュチェ思想でしっかりと武装させるための主席の絶え間ない指導によって、朝鮮人民は事大主義と教条主義をはじめ、あらゆる古い思想の影響から脱して、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を開拓する力も自分自身にあるという強い自主の信念と意志、自主精神をもつようになった。

解放後、困難で複雑な状況下で巨大な社会的変革が成功裏に完遂された秘訣も、どの国でも見出せないチョンリマ運動のような全人民的大衆運動の炎が激しく燃え上がって、他人が一歩を歩くとき、十歩、百歩走って短い歴史的期間にチュチェの社会主義強国が建設することができた秘訣も、主席が朝鮮人民に民族自主精神を植えつけたである。

主席は闘争の実践を通じて民族自主的に、朝鮮式に生きることが朝鮮民族の固有の気質、気風になるように指導した。

主席がおし立てる自己の方式、朝鮮式の闘争気風には、民族の運命は徹底的に自民族の力で自国の実情に即して開拓しなければならないという民族重視の哲学、愛国愛族の哲学が込められている。

主席が主張した自己の闘争方式、朝鮮式は決して時代の趨勢を無視した主観ではなく、自主を志向する人民大衆の志向と要求、民族の自主的利益の具現である。

それぞれの国には民族固有の特性があり、人民大衆の志向と要求、生活感情と風習も異なっているため、すべての国、すべての民族に同様に当てはまる唯一の処方箋などあり得ない。

主席は朝鮮人民をして、世界にいかなる風が吹き、情勢がどう変わろうとも、革命と建設でチュチェ思想の旗印、朝鮮式を最後まで固守し貫徹していくように指導した。

この世に万能の処方箋があるとすれば、それは自主的な思想精神とそれ

によって高く発揮される自己の力だけである。

振り返れば、他人が船に乗って世界を一周し、機械で産業を発展させ、繁栄を遂げている時まで冠をかぶり、ロバに乗って回ったあまりにも貧しく立ち遅れた朝鮮民族であった。その朝鮮民族が、他人が数百年のもの間、収めた繁栄を半世紀余りの歴史的期間になし遂げ、今日は世界の強大国とも堂々と肩を並べ、民族の尊厳を高く轟かせている根本的な秘訣は、まさに主席が徹底した民族自主の精神力を与え、実践闘争の中で自力更生の闘争気風が朝鮮人民の固有の闘争気風、気質になるよう、導いたからである。

実に、革命と建設の全過程で朝鮮式、自己の方式という威力ある闘争方式で朝鮮人民を武装させ、朝鮮式に歴史の数多の試練を切り抜け、民族繁栄の大道を開いた主席の功績は、朝鮮民族の歴史で他人の方式を終わらせ、チュチェ式を徹底的に確立した貴い業績となる。

民族尊厳の偉大な守護

金日成主席は民族の尊厳と自主権を生命とし、朝鮮民族を害したり、国の自主権を侵したりする支配主義者、帝国主義者を一度も許したことがなく、朝鮮民族を蔑視し愚弄しようとするいかなる支配と干渉行為にたいしても妥協しなかった。

日本帝国主義の植民地支配から脱して民族の尊厳と自主権を取り戻した朝鮮人民は帝国主義連合勢力との 3 年間の厳しい解放戦争を行わなければならなかった。

当時、朝鮮戦争時、特派記者として活動したことのあるロシアのある人士は、独ソ戦争が大軍と大軍の間の戦争、連合国と同盟国間の戦争であったならば、朝鮮戦争は「世界制覇」を夢見る大軍と創建されて間もない軍隊との戦争、連合国勢力と建設されて間もない一カ国との普通の常識を外れた対決であったと書いている。

剛毅な自尊心と必勝の信念と意志を身につけた主席は、祖国解放戦争の

全期間、常に愛国聖戦の陣頭に立って、人民軍将兵と人民を民族の自主権と尊厳を守り通すための闘争へと一貫して指導した。

主席は敵機の爆撃で橋が断ち切られた時には、近所の鉄橋をも渡ってたたかう人民軍兵士と人民を新たな偉勲へと鼓舞し、最前線にまで出て作戦を指揮した。

その日々、敵が「不退の線」だと豪語していた錦江界線での強行渡河が成功裏におこなわれ、大田包囲作戦が勝利のうちに結束し、洛東江渡河が断行されて一か月余りの間に敵を大邱、釜山の狭い地域に追い込み、南朝鮮全地域の 90%以上を解放する奇跡が創造された。また 1211 高地が英雄の高地として名高くなり、祖国の寸土が命をもって守られた。

主席は愛族、愛民、愛国の信念で祖国解放戦争の勝利をもたらした。

前線に不利な状況が生じて戦略的な一時後退が始まった時、一部の卑怯者は鴨緑江を渡ろうと主張した。

しかし主席は祖国の地に埋もれることがあっても、再び鴨緑江を渡ることができず、千万ベン死すともこの地で侵略者と戦って必ず勝利すべきだという、民族守護者としての信念と意志、自尊心を挫かなかった。

祖国解放戦争の勝利は主席のその不屈の愛国的信念、ゆるぎない鋼鉄の意志に励まされた朝鮮の人民軍将兵と人民が剛毅な精神力と政治的・思想的優勢により帝国主義連合勢力を打ち破って収めた輝かしい勝利であった。

主席は祖国と民族の運命を決する苛烈な戦火の日々、勝利する明日を見通して戦後の復興建設の青写真を示し、その準備を早めるようにした。

そして前線で戦っていた大学生を校庭に再び呼ぶ命令を下し、技術人材を前線から召還して外国留学に送るようにし、科学者大会を召集し、国家科学院を創設するようにした。

これはひたすら祖国と人民にたいする熱い愛と勝利にたいする信念と楽観を持した民族の慈父である主席の偉大な世界でのみ考えられる伝説であった。そしてこれは戦う朝鮮の人民軍将兵と人民に大きな励ましとなり、民族の尊厳、この上ない誇りとなった。

主席は戦争の全行程でチュチェ式の卓越した戦略と戦法を創造し、巧みに適用することにより、帝国主義連合勢力の軍事的・技術的優勢を戦略的・戦術的優勢で完全に粉砕し、敵にせん滅的打撃を与えた卓越した総帥であった。

当時、敵が朝鮮戦争で適用したすべての戦略と作戦、戦術は西欧の世界では数多くの侵略戦争を通じて「名声」をとどろかせた数十名の「策略家」と悪名高い好戦「将軍」らが集まって作り、検討したものであった。

しかし、主席は確固たる主体的立場に立ってチュチェ式の独創的な戦略と戦術でそれらのすべてをことごとく撃破した。

卓越した軍事の英才である主席は戦争の全過程で、常に急変する軍事政治情勢とその発展推移、敵味方の間の力量関係と敵の行動性格、敵の弱点と前線の実態を具体的に把握した上で、戦争の戦略的段階を科学的に設定し、各段階で遂行すべき課題とその実現のための正しい闘争方針、戦闘で適用すべき独創的な戦法を明哲に示し、前線で決定的意義を有する作戦と戦闘を直接組織指揮した。

主席は朝鮮の人民軍将兵と人民にたいする熱い愛情でもって祖国解放戦争の歴史的勝利をもたらした。

昔から愛を百病の薬、天をも得る鍵、死にも勝つ第一の武器であるといった。

どの戦争史にもない火線休養所を開設し運営するようにした話、敵に包囲された兵士たちを救うために全前線に渡る緊急対策を講じた話、3 歳の子供を救うために完全武装した隊員を敵区に派遣する非常措置を講じた話などは、主席の崇高な愛兵、愛民の精神世界を示している。

この愛の伝説はそのまま戦争の勝利のための奇跡をもたらした。

思想と精神力において比べられず、戦略戦術と道徳的側面でも比肩でない朝鮮の人民軍将兵と人民の威力の前で敵は恐怖におののいた。

祖国解放戦争を通じて主席は現代のもっともすぐれた名将、百戦百勝の鋼鉄の総帥としての名声を全世界に誇示し、民族の運命に責任をもって導く

民族の慈父としての偉人像をさらに明白に示した。

主席は戦後の数十年間、朝鮮で新しい戦争を挑発しようとする敵の絶え間ない侵略策動を断固粉砕し、自主民族の尊厳をしっかり守って輝かせた。

朝鮮人民は戦争を望まないが、絶対に戦争を恐れず、決して平和を哀願しない、他民族の尊厳と自尊心を傷つけず、朝鮮民族の尊厳と自尊心が侵害され、蹂躙される時には勇敢に奮い立って、朝鮮人の気概を示すというのが、ほかならぬ主席が朝鮮人民に植え付けた民族的自尊心であり、革命的戦争観点であった。

武装情報収集艦プエブロ号事件に次いで再び侵入した大型スパイ機EC121を一発目に撃墜させ、無数の非武装地帯での敵の武装挑発を制圧、粉砕しただけでなく、朝鮮民主主義人民共和国を的にしてくり広げたチーム・スピリット合同軍事演習をそのつど水泡に帰させたのは、主席が徹底した民族的自尊心と主体的な戦争観点で人民軍将兵と人民をしっかり武装させ、反帝対決戦に力強く奮い起こした結果である。

民族の尊厳と自主権の代表者であり守護者である主席を戴いたため、朝鮮は強固な自主の強国として全世界にその威容を誇示することができた。

人民に民族第一の誇りと自負を抱かせ

今日、朝鮮人民、朝鮮民族がもっている誇りと自負は、ほかならぬ偉大な領袖を戴き、偉大な党の指導の下に無敵の軍事力をもったチュチェの祖国で革命をおこなう民族的誇りと自負であり、美しくて住みよい国で暮らす民族的誇りと自負であり、悠久な歴史と文化をもった民族的誇りと自負である。

主席が朝鮮人民に植え付けた民族的誇りと自負でもっとも貴重なのは、朝鮮人、朝鮮民族として生まれた誇りと自負である。

朝鮮人民革命軍の政治幹部及び政治教員の前でおこなった演説で、朝鮮民族は5000年の悠久な歴史をもつ単一民族であり、昔から侵略者と歴代の反動的な支配者に抵抗して頑強にたたかってきた勇敢で覇気のある民族で

あり、人類の科学と文化の発展に大きく寄与した才知にたけた民族である、祖国と人民を誰よりも熱烈に愛する朝鮮の革命家は、朝鮮人民としての民族的自尊心と誇りをさらに深く心に刻み込まなければならない、と教えた。

各階層の人民に朝鮮人として生まれた誇りと自負をもたせようとする主席の心血と労苦は、解放された祖国の地に響き渡った「愛国歌」にも、戦火の日々、平壌市教育幹部養成所の教員、学生たちにおこなった意義深い談話にも込められている。

主席が植えつけた朝鮮民族としての誇りと自負は、朝鮮民族の英知と勇敢さ、文明度と直結する健気な思想感情であり、祖国の山河の美しさと貴重さとも結びついた特異な愛の感情である。

主席は朝鮮人になった誇りと自負を特別に深く抱いていたため、常に誰に会おうと朝鮮人であることを忘れないように強調していた。

主席は民族の悠久な歴史を全世界に輝かせ、民族の文化遺産を継承発展させることにより、朝鮮民族の誇りと自負をより高くとどろかせた不世出の愛国者である。

主席は 5000 余年の朝鮮民族史を主体的見地で正しく定立するよう導いた。

当時まで朝鮮民族が悠久な歴史をもっているとはいうものの、実際に朝鮮民族の発生、発展の行跡が鮮明に定立されておらず、空白に残っている部門が少なくなかった。

主席は解放後、遅滞なく朝鮮民族の歴史にたいする全面的な研究をおこなうよう措置を講じ、みずからこの事業に責任をもってエネルギッシュに指導した。その過程で朝鮮民族の歴史は科学性と歴史主義的原則で再評価され、正しく解明されるようになり、朝鮮民族は悠久な民族史をもつ世界でもっとも文化的かつ尊厳高い民族であることがはっきりと実証されるようになった。

主席は朝鮮民族の始原に関する問題に科学的解明を与えることにより、朝鮮民族が暮らすこの地が人類の発祥地の一つであることが明らかになっ

た。

1950 年代まで朝鮮の歴史学会の一部の人たちは人類発生の初期と呼ばれる旧石器時代の遺跡が発掘されなかったことを根拠に、朝鮮には旧石器時代が存在しなかったし、隣国で旧石器時代を経た人たちが新石器時代にこの地に移住してきて暮らしたと見ていた。

主席は、旧石器時代の遺跡が発掘されなかったからといって、朝鮮に旧石器時代が存在しなかったとは言えないとし、研究を深めて発掘をより積極的におこなうための措置も講じた。

こうして朝鮮が人類発祥地の一つ、朝鮮人の発祥地であり、人類文化の発祥地であることを実証する貴重な考古学的な資料が多く発掘されるようになった。

主席は朝鮮人の起源問題についても科学的に研究、分析するよう導いた。

主席の助言と細心な指導の下に、歴史学者らは朝鮮人にたいする人類学的表徴と文化的特性にたいする研究を深化させて、朝鮮人は名実ともに本土起源の単一の民族であり、朝鮮民族は旧石器時代から新石器時代、青銅器時代に至る原始社会のすべての発展段階を経ながら、独特な生活様式と文化を創造してきた、すぐれた民族であることが解明された。

主席は日本帝国主義の民族抹殺策動と歴代の反動的で大国主義的な史家によって、甚だしく歪曲されていた朝鮮民族の始祖である壇君を探し出し、伝説として伝えられてきた 5000 年の民族史を科学的に解明した。

主席は歴史学者も思い至らなかった問題を優れた英知と深奥で豊富な知識、科学的な洞察力で具体的に解明しながら、以前に研究された資料であっても、壇君を考証する上では些細なことも疎かにしてはならないと助言し、調査発掘隊も処々に派遣して発掘調査を積極的に進めるようにした。

こうして、多くの歴史書籍の記録と壇君神話を通じて得た結論と考古学的発掘によって古朝鮮の始祖王の生存時代が解明され、壇君が平壌一帯で生まれて国を建てたということが定説だという証拠をもつようになり、1993年、壇君陵にたいする発掘がおこなわれて彼が実在した人物であると科学的

に解明されるようになった。

主席は東方の強大国であった高句麗の建国年代を科学的に解明し、高麗の太祖である王建についても主体的立場で再評価するよう指導した。

主席は歴史を研究する上で、徹底して主体的立場にたち、自分の信念をもって、かつて歪曲されていたすべての歴史的事実や事件にたいして正しく考察し評価するよう指導した。

こうしてかつて定説となっていた安岳 3 号古墳の壁画の主人公の問題、壇君陵紀跡碑周辺の石獅子の問題など、多くの歴史問題が朝鮮民族の利益と民族的特性に即して解明されるようになった。

主席は歴史発展の各段階、各分野にたいする該博な知識と非凡な洞察力を備えたことによって、歴史学者と世人の驚嘆を得ていた。

主席は朝鮮人民の悠久な民族文化遺産が朝鮮民族史、人類の文化史に貴重な財宝として輝かしい光を放つようにした。

主席は民族文化遺産を抜きにしてその民族の歴史と未来についても論ずることができないという見解と観点をもって、朝鮮人民がなし遂げた民族文化遺産を民族の大事な財宝として守り輝かせるために誰よりも労苦をつくした。

主席は崇高な愛国の一念から民族文化遺産を主体的に継承し発展させるべきだという独創的な思想を示し、その実現のための活動を直接指導して朝鮮で民族文化遺産保存の新しい起源を開いた。

主席は、朝鮮人民の愛国偉業、社会主義偉業を指導する全期間、祖先たちが創造した民族文化には民族固有の言語と風習、生活感情、人民のすぐれた才能が反映されており、こうした民族文化遺産は民族文化の発展において貴い財宝になるという確固たる見解と立場を堅持してきた。

主席は解放後、遅滞なく民族文化遺産を保存管理する活動を司る国家機構を設け、歴史遺跡と遺物を発掘して保存し、平壌市をはじめ、各道都に歴史博物館を建設し、全国の歴史遺物を収集して国宝として登録し、歴史遺跡と遺物があるところには他の建設をしないようにし、各地の寺もそのまま保

存するようにした。

文化のすべての分野にわたって朝鮮人民が収めた民族のすぐれた遺産をすべて探し出し､それを新たな現実に合わせて継承し発展させた主席の細心な指導によって、国立芸術団体が組織され、国立音楽学校が創立し、国立曲芸団と建築家同盟が組織されて､民族のすぐれた文化芸術と建築術を正しく継承し発展させるための活動が力強くくり広げられるようになった。

民族の貴重な文化遺産を探し出して守り抜いた主席の熱い愛国心は、厳しい祖国解放戦争の日々、人民の生命と財産を保護し、民族の貴重な文化遺跡をいささかの損傷もなしにそのまま保存するため､ソウル解放のための総攻撃を明け方になった後に開始するようにした事実と､流失し焼却されるところだった貴重な文化遺産である朝鮮封建王朝の実録を救うための対策を講じ､最高司令部に保管するようにした伝説のような話を通してもよく分かる。

主席は戦後、国の状況が困難な中でも破壊された歴史遺跡を原状通り復元するようにし、多くの古典文学作品と医学書籍を収集、整理、翻訳するようにし、朝鮮の始祖王の陵墓を立派に改修するようにした。

このように主席は生の最後の時期まで、民族の歴史と文化をより燦然として輝かせるためにすべてを尽くした民族の慈父であった。

3）民族の繁栄をはかる社会主義を建設した指導者

社会主義を民族の自主偉業に転換

金日成主席は朝鮮で社会主義革命が完遂されつつあった1958年6月11日、最高人民会議第2期第3回会議で、第1回5ヵ年計画に関する法令を採択し､社会主義の建設が民族の将来の繁栄をめざす闘争になると明白に宣言した。

早くから革命の道に身を投じ、「トゥ・ドゥ」の旗の下に、朝鮮革命の

開始を宣言した主席は祖国の解放をなし遂げた後、民族の自主性、人民大衆の自主性が完全に実現された社会主義、共産主義を建設することを革命の目標とおしたてた。

主席が抗日の血戦万里の道をかき分ける時から建設しようと構想した社会は愛国、愛族、愛民の理念から出発して各階層の人民大衆の要求と利益を全面的に具現し、全同胞の民族的利益と繁栄の実現に真に寄与する人民大衆中心の社会主義社会であった。

主席は歴史上初めて、革命と建設の主人は人民大衆であるという原理にもとづいて、社会の発展と革命運動の合法則性を新たに解明することにより、社会主義理論を新たな科学的土台の上に引き上げた。

主席はチュチェの原理を具現して社会主義、共産主義建設の理論を全面的に示し、全一的に体系化した。

主席が示した社会主義、共産主義建設の理論には社会主義、共産主義社会の様相と共産主義建設の戦略的目標、社会主義への過渡期と社会主義の完全な勝利及び共産主義の高い段階への移行を内容とする社会主義、共産主義建設の合法則的道程、共産主義建設の綱領としての全社会のチュチェ思想化の方針、人民大衆の自主的要求と利益を擁護して確実に具現し、主体性と民族性を固守すべきであるという社会主義建設の根本原則、人民政権を強化し、思想、技術、文化の3大革命を遂行すべきであるという社会主義、共産主義建設の総路線、社会主義の政治方式に関する理論などがある。

主席が示したチュチェの社会主義理論は、あくまで自国の実情と自民族の要求と志向を重視する立場から出発して展開され体系化された理論である。

1983年6月のある日、主席は朝鮮を訪問しているペルー・アメリカ革命人民同盟代表団を接見したとき、チュチェ思想がマルクス主義を機械的に模倣したのではなく、今日の現実に合わせて創造的に発展させた思想だと理解しているとの彼らの言葉を肯定した。

主席はマルクスの著作には、個々の国での革命の遂行方途までは具体的

に記述されていない、個々の国の共産主義者は、自分の頭を働かして自国人民の利益と自国の実情に合った革命の遂行方途を見いださなければならないとし、革命の遂行において固定不変の公式といったものはありえない、われわれは長期にわたる革命闘争の革命闘争の過程で、こうした結論を得るようになった、と意味深く述べた。

主席は朝鮮革命を指導する全過程で、特に朝鮮で社会主義制度が樹立した後、社会主義の建設で提起されるすべての理論的・実践的問題を既成の理論や公式にこだわることなく、朝鮮革命の要求と社会発展の合法則性に即して独創的に解決した。

去る世紀の末、世界の社会主義運動の内部で起こった悲劇的な事態とは対照的に生成発展していく朝鮮式社会主義の真骨頂を通じて、社会主義の標柱を掲げてはいてもすべての民族構成員の自主的志向と要求を無視し疎かにするならば、全民族的偉業としての社会主義をスムーズに前進させていくことができないということが実践によってはっきり証明された。

かつて、社会主義運動ではその階級的原則を守り、階級的団結をなし遂げる問題が主に強調され、民族をどれ程度重視するかという問題は、自己の個人的所信を表明する程度に論じられてきた。

早くから共産主義者になるためには真の民族主義者になるべきだとしながら国と民族のために一生をささげるという覚悟をもって革命の道に身を投じた主席は、歴史上初めて民族主義について正しい解明を与え、国と民族の運命を開拓する革命闘争で共産主義と民族主義、共産主義者と民族主義者の関係を立派に解決した。

主席が一生、強調している言葉がある。

革命は民族のためにおこなう！

まさにこれに、すべてを民族重視の角度で考察する主席の特異な革命観点がある。すべての革命闘争はただ民族のために必要であり、また価値をもつというのが主席の熱い民族愛にもとづく革命にたいする観点の中核である。

主席は民族の利益の上のいかなる階級や党派の利益などあり得ず、民族に背を向けたいかなる英雄も決して真の英雄と言えない、民族のためならいかなる深淵や障壁も乗り越えるべきだ、という不変の観点をもって、民族と革命の相互関係の問題を解決した。

民族重視の社会主義社会建設の独創的な道を開拓し導いた主席の卓越した指導と熱い愛情は、全朝鮮人民の利益を真に実現してくれる愛国、愛族、愛民の新しい社会を建設し、社会主義と民族の運命を一つに結び付けた根源であった。

主体性とともに民族性を固守し発展させて民族的特色が生かされた社会主義を建設しなければならないということ、まさにこれが、主席の主張する社会主義建設の重要な一方略であった。

社会主義建設で主体性を生命としてきた主席の指導によって、朝鮮の具体的現実と人民の民族的感情と情緒に即して政治生活と経済生活が保障され、朝鮮民族の特色を生かして朝鮮式社会主義を建設することができた。

すでに抗日武装闘争期に祖国光復会 10 大綱領を示しながら社会生活のすべての分野で帝国主義的、封建的文化と思想、生活因習を徹底して一掃し、真の民族文化を建設し、人民的な教育制度を樹立する問題を綱領に明記した主席は、社会主義的民族文化を建設するうえで民族的形式に社会主義的内容を正しく結合することを鉄則としてきた。

主席は教育、文学芸術、生活様式など、すべての文化分野で民族性を重んじ、それを現代的美感と人民の要求に即して発展させることこそは、民族性の真の継承発展になると見なした。

主席は言語分野に大きな関心を払って民族性を生かすようにした。

主席は解放後、新しい祖国建設の壮大な設計図を示しながら朝鮮語の民族的特性を大いに生かし、純潔性を固守するために、すぐれた平壌の言葉を基準にして朝鮮語を発展させるべきという方針を示し、朝鮮語と文字が外来語と漢語が入り混じった混合語、混合文字にならないよう格別な感心を払い、指導した。

主席は民族のスポーツの発展にも関心を払い、民族正統の高麗医学を大いに奨励し発展させ、文学芸術分野で民族性をユニークに生かしていくように指導した。

主席は衣・食・住の生活分野でも民族的特色を大いに生かすように指導した。

1958 年 8 月 23 日、玉流館を建設するようにして、敷地を定めてくれた主席は 1960 年 8 月 13 日に民族的情趣にあふれる朝鮮式建築物にその名も「玉流館」とつけてくださった。その後も数十余回に渡って玉流館を現地指導し、直接冷麺の味見もしながら人民にたいするサービスにおける問題にいたるまで具体的な助言をおこない、解決した。

今日、玉流館では平壌の誇りであり、民族の誇りである平壌冷麺、肉を盛りつけたチェンバン麺、チェンバン麺をはじめ、牛のバラ汁、平壌魚粥、緑豆チジムなど、各種の民族料理をつくって朝鮮人民と外国人に立派にサービスしている。

2000 年、平壌を訪問した金大中とその一行が玉流館で平壌冷麺をごちそうになったという事実が報道されると、南朝鮮の人たちの間では平壌冷麺が大人気料理になったという。

主席は早くも戦争の最中である 1953 年 4 月 5 日、第 55 回軍事委員会で平壌市復興建設の基本方向を示しながら、平壌市を復興する上で歴史的に形成された都市の基本軸を保存し、普通門、大同門のような伝統的な朝鮮式建物と新たな近代的な建物をよく配合することについて強調した。

主席の構想により、平壌市には戦後から今日にいたる間に平壌大劇場と人民文化宮殿をはじめ、文化芸術、サービス基地と主要建築物が朝鮮式に立派に建ちあがった。

主席は美しくてすぐれた民俗を重んじ、より開花させるために朝鮮民族の魂が反映された生活文化を大いに生かすよう、誰よりも心血を注いだ。

今日、朝鮮式社会主義が愛国に理念と情を置いたすべての朝鮮人の真の祖国となり、世界の多くの国と民族の驚嘆の対象となっているのは、社会に

民族の魂が激しく脈打ち､民族的なすべてのものが重視されてより開花しているからである。

民族の理想が開花する真の社会建設

金日成主席は次のように述べている。

「われわれの社会は、人民の政治的権利が法的に、社会的にりっぱに保障され、人間の尊厳を侵害、蹂躙するいかなる社会悪もない、政治的にもっとも安定した社会です」

長期にわたる人類歴史は人間が真に人間らしい生を享受しうる社会の建設を志向して探求してきた歴史的過程であったといえる｡その歴史の流れの中で東洋と西洋の多くの人が理想社会、理想国家を夢見てきた。

朝鮮民族だけでなく､東洋と西洋のそれぞれの民族が描いてみた理想社会の形態において共通的なものは､人間尊重の社会､人間による人間の搾取と圧迫がなく、真の自由が保障される平等な社会にたいする渇望であった。

その念願を込めて、社会主義ソ連が理想社会建設の最初の帆を上げた。しかし、現代修正主義の策動によって20世紀の最後の年代にソビエト社会主義が崩壊すると人々は絶望感に陥った。

すると、人類のその理想は果たして夢であったのか、

この世紀的質問に答えたのが､ほかならぬ主席が樹立し指導してきた朝鮮式社会主義の現実であった。

世人が目にした朝鮮式社会主義は主席が真の人間尊重の思想、人民大衆中心のチュチェ思想にもとづいて建設し､チュチェ思想の要求を一貫して具現してきたことによる賜物であった。

主席は世界でもっとも貴い存在は人間､人民大衆であることを歴史上はじめて解明し、それを自分の持論に具現した人民の卓越した領袖であった。

主席にとって人民はすなわち天であり､「神様」であった。

主席の「以民為天」の思想と持論が社会主義建設の実践に全面的に具現

された結果、やがて歴史に類を見ない理想的な人間尊重、人民尊重の社会が建設されるようになった。

主席は人間、人民大衆の人格と価値を最上に高めることを制度的に法化するようにした。

今日、朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法は、自主的人間の権利と義務、公民の権利と義務をもっとも神聖に、もっとも立派に規制している自主的人間尊重の大法典である。これには政治生活、経済生活、文化生活など、すべての分野で社会主義的公民が享受できる権利がもっとも平等に、もっとも理想的に規制されている。

主席はすべての政策と路線、社会的施策を徹頭徹尾、社会の構成員の利益と意思を反映して作成、公布し、人民自身の手で徹底して施行していくようにする原則を一貫して堅持するようにした。

人民大衆中心の社会主義という幸せの拠り所で世々年々福楽を享受している朝鮮人民の生活を通じて、民族の念願を花と咲かせ、社会主義楽園を建設した主席の偉人像は、より輝いている。

ひたすら、人民のためを思う主席にとって祝日の日、休息の日が別にあったのではなく、なお１年中のただ１日である誕生日さえ祝うことを許さなかった。主席が燃えるような精力で一生を変わりなく人民行きの列車に乗って走ってくることができた思想的・精神的要因は、ほかならぬ人民にたいする熱烈な愛と幸福の楽園で生きようとする民族の念願を必ず実現しようという重い責任感を持したことにあった。

去る革命運動史には、偉人たちが自分自身の目的を立てて遠路を歩んだ逸話もあるが、主席のようにひたすら人民を訪ねて、一生休まずに数千数万里の道を歩み続けた例はなかった。

主席が人民のためにささげた不眠不休の昼と夜、思索と心血はそのまま朝鮮人民の幸福となり、喜びとなった。

主席は人民的な社会主義的施策で人民により多くの福が行き渡るよう気を使った。

主席が樹立した社会主義制度下で朝鮮人民は衣・食・住の心配ばかりでなく、治療を受ける心配、学ぶ心配も知らない幸福な人民として生を享受するようになった。その幸福な生活の中で1960年代から「われら幸せ歌う」という歌がこの地に響き渡っている。

実に、朝鮮人民にとって主席が樹立した社会主義制度、母のような温かい愛情で手取り足取り見守り導く社会主義祖国は幸福の楽土、永遠な生の拠り所である。

朝鮮人民はこの世のどの人民も享受できない福の中の福を享受しながらその万福を生んだ福を「領袖にめぐまれた福」だと称え、それは朝鮮人民にだけめぐられた福であると誇り高く自負する。ゆえに、朝鮮人民は日に日に深まる主席の限りない愛と恩情に燃えるような愛国で報いるために、自分らの持ち場と職場で奇跡と革新を起こしてきた。

主席は人民のこういう姿を見ながら、われわれは実に人民に恵まれた福を享受していると熱く述べている。

人民は領袖に恵まれた福を歌い、領袖は人民に恵まれた福をもって生まれたと自負する、福があふれる社会、福が福を生む社会がほかならぬ朝鮮の社会主義である。

子孫万代の繁栄を裏付ける

朝鮮式社会主義があれほど威力あり、生命力のある社会として万人の賛嘆を受けているのは、自分の領袖、自分の指導者の周りに一つに結束した一心団結の社会であることと重要に関連している。

主席が建設した社会主義の本質的特徴と不敗性は全人民が一心団結した社会だというところにある。

一心団結は朝鮮の社会主義の存在と発展の生命線であり、その不敗性の源泉である。

歳月の激しい雨風にもめげず毅然と立っているたくましい樹木を見る

時、地中に深く張ったその根を思うのと同様に、人々は朝鮮の社会主義を不敗のとりでに作り上げた力の源泉をほかならぬ一心団結で探している。

今日、一心団結という言葉が朝鮮の真の姿、本質的特徴を表現する単語として世人に知られているが、それは決して平坦な過程の中で自ずと容易になされたものではない。

朝鮮革命の開拓期に新しい世代の青年共産主義者によって築かれた一心団結の伝統を、抗日の革命隊伍にりっぱに具現し、祖国解放の歴史的偉業をなし遂げた主席は、祖国を解放した後には党の組織的・思想的団結を実現したことに基づいてそれを全社会の統一団結として強化発展させた。

主席は解放された祖国の地に第一歩を踏み込みながら、人民に民主主義の旗の下に結束して新しい朝鮮を建設しようと熱烈にアピールした。労働者、農民、インテリ、企業家、宗教家など、それぞれの階級と階層の人民に会っても民主主義の旗の下に一つに団結することについて熱く述べた。

主席は全社会の統一団結を社会のすべての構成員の血縁的絆にもとづくもっとも強固な一心団結に絶えず強化発展させてきた偉人であった。

血縁的絆にもとづく強固な一心団結、全社会が一つの仲むつまじい大家庭をなし、領袖と人民が一丸となって渾然一体をなした社会が、ほかならぬ主席が打ち立てた朝鮮の社会主義である。

朝鮮の社会が今日のように血縁的な絆の中、一つの中むつまじい大家庭、渾然一体をなすことができたのは、主席の人民にたいする燃えるような愛と信頼、熱い同志的愛と信義に根源がある。

主席にとって一人の同志は何物にも代えがたい貴重な存在であった。それで抗日の日から、資本家は金儲けが格別の楽しみだというが、わたしにとっては同志を集めることがまたとない楽しみであり、喜びであったと述べている。

主席は領袖と人民の関係は指導をして、指導を受ける関係である前に、革命の道で生死をともにする革命の戦友であり、一家族であるという崇高な人間関係に関する思想を打ち出し、人民のためにありとあらゆる愛と恩情を

たゆみなく施した偉人であった。

偉大な領袖、偉大な党の周りに一つの思想と意志、情で結束した朝鮮人民の高尚な精神世界は「一人はみんなのために、みんなは一人のために！」という集団主義的スローガンの下でより崇高に発揮されている。

実に、領袖を中心にして全人民が鉄桶のごとく結束して全社会が渾然一体をなしているまさにここに、一心団結の社会としての朝鮮の社会主義の永遠な生命力があり、世界でもっともすぐれた社会を建設してくれた主席の不滅の偉人像がある。

主席は国と民族の興亡盛衰の法則から軍事力の強化を国事の中の第一国事としておし立て、早くから軍事力の強化に総力をあげた。

自衛の原則を堅持し、軍事力の強化をもっとも重視した主席の不滅の指導業績があって、朝鮮は世界的な軍事強国に、今日、強国建設の確固たる軍事的担保をもった生命力のある不敗の社会主義に発展した。

主席はもっとも生命力があり、強固な自立的民族経済を建設して富強繁栄の確固たる土台を築いた。

朝鮮で戦後の困難な中でも重工業の優先的発展と軽工業と農業の同時的発展を内容とする経済建設路線が社会主義経済建設の基本路線と選ばれるようになったのは、自立の原則にもとづいて国の経済的土台を築くべきであるという主席の戦略的構想にもとづいたからである。

自立的民族経済の強固な土台があったからこそ、朝鮮は世界の社会主義が崩壊し、帝国主義者の制裁と圧力が度合いを強めており、世界経済の波動が絶え間なく及んでいる中でも、ゆるぎなく社会主義建設を力強く推進させてくることができた。

４）祖国統一の救い星

祖国統一の偉大な経綸

祖国統一は金日成主席が早くから解放された祖国に帰ってきた初期から胸に秘めた意志であり、信念であった。

亡国の悲しみを胸に、「鴨緑江の歌」を歌いながら朝鮮独立の誓いを立てた時、主席が描いた祖国は一つの朝鮮であり、分裂した二つの朝鮮ではない。主席が白頭密営の灯火を手にして照らしてみた朝鮮の地図も白頭山から漢拏山に至る三千里朝鮮であって、決して二分された朝鮮ではなかった。

解放直後、民族分裂の悲運にとざされた当時、すでに民族の分裂を防げず、祖国統一を成し遂げられないと、次代まで大きな不幸と苦痛をなめるようになるだろうとし、統一の道を模索してきた主席は1960年代に入ってからはわれわれがもっと年をとる前に祖国を統一しなければならない、祖国統一の任務を絶対に次代に譲り渡してはならない、と切に述べ、統一偉業の実現のためにあらゆる精魂を傾けた。

祖国統一にたいする主席の念願と意志は、主席の一生を貫いた人生観であり、体質化された信念と意志であった。

金日成主席は次のように述べている。

「祖国の統一は朝鮮人民にとって一刻の猶予もならない民族至上の課題であります。われわれは一日も早く祖国統一の偉業をなしとげて全民族の一致した切なる願いをかなえ、統一した祖国を次代に譲り渡さなければなりません」

主席は数十年を一日のように国の統一の偉業を実現するためにあらゆる労苦と心血を注いだ。

われわれの世代に祖国を統一しなければならない、統一した祖国を次代に譲り渡さなければならない、これは主席が祖国統一にたいする透徹した使命感から高くかかげて信念のスローガンであり、統一の旗印であった。

人民に祖国統一を贈り物として譲り渡そうとする大きな願いを常

に胸に秘めていた主席であったので、第 2 回汎民族大会が準備されていた 1991 年 8 月 1 日にも祖国平和統一委員会の責任幹部、祖国統一汎民族連合北側本部のメンバーとの談話で、わたしは国が分断された以後の半世紀間、一日として朝鮮民族の不幸と災難について忘れたことがなく、わが祖国の統一について考えなかった日がない、祖国統一の課題を次代に譲り渡さなければならない、われわれは必ず、われわれの世代に祖国を統一しなければならない、と述べた。

主席は祖国統一の問題を外部勢力によって人為的に分断された民族の血脈を再びつないで、一つの民族として不信と対立をなくし、民族の和合をはかる問題として規定した。

主席は祖国統一の問題の本質を闡明したことにもとづき、祖国統一の問題はその性格において朝鮮民族内部の問題、朝鮮人民の内政問題であり、朝鮮民族の主体的力量によって実現すべき全民族的偉業であることを明哲に示した。

主席は祖国統一の問題にたいする科学的な評価にもとづき、祖国統一は朝鮮民族にとってもっとも死活的であり、一刻の猶予もならない民族至上の課題として提起されるという歴史の結論を下した。

1996 年 11 月、総書記は歴史的な板門店視察の道で、主席が打ち出した祖国統一の 3 大原則、高麗民主連邦共和国創立方案、全民族大団結 10 大綱領は、祖国統一の 3 本の柱、3 大憲章であるといえると熱く述べた。

主席は崇高な祖国愛、民族愛にもとづいて自主、平和統一、民族大団結の祖国統一の 3 大原則を示すことにより、祖国統一の礎石を磐石のごとく打ち固めた。

祖国統一を外部勢力に依存し、外部勢力の干渉を受けることなく、自主的に実現しなければならないという自主の原則は、統一問題解決の根本的立場であると同時に起点であり、祖国統一を武力行使に依拠することなく平和的な方法で実現すべきであるという平和統一の原則は、朝鮮半島の分裂が抱えている戦争の危険性とこれを取り除くべき民族的、時代的要求に即して提

起される切迫で重大な統一問題解決の重要な方途である。そして思想と理念、制度の差を超越して民族的大団結をはからなければならないという民族大団結の原則は、祖国統一という志向と目標の下に、全民族を一つに結束させる行動の指針であり、祖国を自主的に、平和的に統一するための基本的保障である。

自主、平和統一、民族大団結の祖国統一 3 大原則を示したのは主席が祖国統一の運動史に積み上げた不朽の功績であり、朝鮮民族に残したもっとも貴重な統一遺産である。

主席は祖国統一 3 大原則にもとづいて公明正大な民族共通の統一方案である高麗民主連邦共和国創立方案と民族統一戦線の綱領である全民族大団結 10 大綱領を示すことにより、祖国統一の実現の現実的な道程と方途を明示した。

主席が示した高麗民主連邦共和国創立方案は、北と南のすべての階級と階層、党派がともに受け入れられるもっとも合理的で公明正大な統一国家建設の方途を示している統一大綱である。

新たな統一方案には北と南が互いに相手方の思想と制度をそのまま認め、容認する基礎の上で双方が同等に参加する民族統一政府を樹立し、その下で北と南が同等の権限と義務をもってそれぞれの地域自治体を実施している高麗民主連邦共和国を創立して祖国を統一することが見込まれている。

連邦国家の国号も朝鮮に存在した初の統一国家である「高麗」の名をつけたものであり、民主主義を志向する北と南の共通の政治理念とともに双方がともに受け入れられる連邦であるという国家結合方式と共和国であるという国家政治体制を反映している。

全民族大団結 10 大綱領は、自主的で平和的かつ、中立的な汎民族統一国家としての連邦国家の創立を総体的目標として提起し、民族愛と民族自主精神を団結の理念的基礎、共存、共栄、共利をはかり、祖国統一偉業にすべてを服従させることを団結の基本原則として規定している。

全民族大団結 10 大綱領は、自主性を生命とする民族の本性と祖国統一

の本質、数十年間の分裂によって産生した政治的、社会的問題から提起される本質的で現実的な要求を全面的に反映している独創的な民族統一戦線の綱領、政治連合の綱領である。全民族大団結 10 大綱領は、透徹した自主的、愛国愛族の立場と全同胞の念願を包括的に反映したことにより、国と民族を愛し、統一を願う人であるなら、誰もが受け入れられるもっとも合理的で現実的な民族団結と民族繁栄の大綱領、大憲章である。

自主、平和統一、民族大団結の祖国統一 3 大原則、高麗民主連邦共和国創立方案、祖国統一のための全民族大団結 10 大綱領は、民族自主精神と祖国愛、民族愛を抜きにしては全く考えることも、規定することもできない統一の里程標である。

今日、北と南、海外の全同胞は、歳月の流れにつれて祖国統一 3 大憲章がもつ大きな民族史的意味をさらに切に認識しており、この不滅の統一大綱、3 大憲章が指し示す道に沿って祖国統一のための全民族的運動に力強く奮い立っている。

半世紀以上の長きにわたる主席の祖国統一の闘争史は、主席が一つの朝鮮路線、統一路線を一貫して堅持し、祖国統一の機関車をひっきりなしに、かつ力強く走らせてきた闘争の歴史であった。

主席は解放後、国が分裂した当初から全民族の統一熱望を反映した自主的な統一路線を一貫して堅持し、敵の分裂主義路線に主動的に対処することにより、敵の反統一策動をことごとく粉砕した。

主席は苛烈な戦火の日々に、賢明な指導によって戦争の勝利のために南朝鮮人民を解放し、共和国の旗の下に祖国統一偉業を実現するように全民族を覚醒させ、奮起させる一方、祖国統一に有利な国際的環境を作り出し、祖国統一を促進させていくようにした。

主席は戦後、反統一勢力の悪辣な策動によって、民族的対立が日に日に激化される中で、民族の運命にたいする崇高な責任感を抱き、一つの朝鮮路線、統一路線にもとづいて現下の情勢の要求に合うさまざまな合理的な統一方案を相次いで示した。

共和国の正当で合理的な統一政策は、南朝鮮人民の統一愛国闘争を力強く鼓舞し、世界の平和愛好人民に朝鮮の統一問題にたいする正しい理解と認識を与え、朝鮮問題の平和的調停のための国際会議で世論を広く呼び起こした。

主席の指導によって 1971 年 9 月 20 日から 1972 年 8 月 11 日の間に 25 回に渡る双方的赤十字団体の予備会談と 13 回の双方実務者会談がおこなわれる中、赤十字会談とは別途に 1972 年 5 月の初旬には最初の北南高位級政治会談が平壌でおこなわれた。この歴史的な北南高位級政治会談により、その後、主席の統一理念がそのまま反映された歴史的な 7.4 南北共同声明が採択される祖国統一史に永遠に記される大きな政治的出来事が起きるようになった。

7.4 南北共同声明の発表は、主席が示した自主的平和統一方針の輝かしい勝利であり、特に北南協商方針がもたらした立派な結実であった。北南高位級政治会談と共同声明の発表は、統一運動を、北南対話を通じて新たな高さで指導する上で画期的な転換の契機を開いた。

1991 年 12 月、歴史的な「南北間の和解と不可侵および協力、交流に関する合意書」と「朝鮮半島の非核化に関する共同宣言」の採択は、全的に主席の卓越した対話協商思想と崇高な包容力がもたらした歴史的勝利であった。

このように主席は一つの朝鮮路線、統一路線にもとづいて主動的で積極的な統一提案を引き続き提起し、祖国統一偉業を力強く指導してきた民族の慈父、統一の救い星である。

統一のためにささげた偉大な一生

金日成主席にとって民族大団結はすなわち祖国統一であった。民族の団結を遂げていく過程はすなわち国と民族の統一と繁栄を遂げていく過程であるというのは主席の持論であった。

主席は思想と理念、政見と信教の違い、財産の有無と社会的地位に関わ

りなく、すべての階級、階層が民族共同の要求と利益を第一位とし、一つに結束するという独創的で幅広い民族大団結思想を打ち出し、それを実現するために大きな心血と労苦を注いだ。

主席は国が分裂した初期、すでに国と民族を愛する北と南の愛国的民主勢力を一つの統一戦線体に結束することを決心し、そのために1949年6月、全朝鮮的な統一戦線組織である祖国統一民主主義戦線を結成した。

祖国統一民主主義戦線は北と南の 70 余の愛国的政党、社会団体が網羅した全民族的愛国勢力の総集結体として、北と南のある地域に限定された統一戦線体ではなく、南北の全地域を包括する全民族的愛国勢力の統一戦線体であった。

主席は民族大団結のための統一戦線を形成することを確固たる意志とし、それを実現するための活動にすべての精魂を傾けた。

主席の主動的な発起とエネルギッシュな指導によって 1948 年 4 月、平壌で分裂史上、初の歴史的な会合であり、民族会議である南北朝鮮の政党、社会団体代表者連席会議がおこなわれた。

5 月 2 日、主席は大同江のスク島で南北連席会議に参加した南北政党、社会団体の代表とともに協議会を開き、5.10 単独選挙を阻止し、統一的民主主義政府樹立のための当面の闘争対策を討論した。

スク島協議会は全朝鮮的な統一的中央政府としての朝鮮民主主義人民共和国を創建することについて合意を見た事実上の全朝鮮政治協商会議となった。

主席は終始一貫、北と南、海外のすべての人士と同胞が一堂に会して統一対話を交わしてこそ、民族大団結を成功裏に遂げることができるという立場から、北と南の間の接触と協商のための前途に横たわった難関を主動的に打開し、その実現のための闘争をより積極的に指導した。

北と南の間の接触と往来を実現するためのこうした闘争過程に 1970 年代に赤十字会談を始めとした各レベルの接触と協商がおこなわれ、北と南の間に最初の高位級会談がおこなわれ、1980 年代に新しくて合理的な連邦制

方式で統一をなし遂げるための各階層の民族構成員の幅広い接触と往来、対話の実現のための闘争がより積極化された。

南北間に各レベルでおこなわれた接触と往来、対話と協商は全朝鮮人民の意思と念願を民族大団結と統一の実現へと力強く志向させた。

主席は世界の各地域で暮らす海外同胞に祖国訪問のより広い道を開き、共和国北半部の同胞と接触できる機会をもたらし、海外同胞を暖かく迎えて彼らが北と海外の連帯を実現する上で先駆者的役割を果たすように暖かく指導した。

その過程にオーストリアのウィーンで 1981 年 11 月 3 日から 6 日まで祖国統一のための北と海外同胞のキリスト信者間の会合がおこなわれ、続いて 1982 年 12 月、フィンランドのヘルシンキと 1984 年 12 月、オーストリアのウィーンで第 2 回、第 3 回対話がおこなわれた。特に、第 3 回対話では北と海外同胞陣容間の連合のための非常設協議体として、祖国統一のための民族連合が結成される大きな成果が収められた。

こうした肯定的変化を深く洞察した主席は遅滞なく北と南、海外を包括する汎民族的な大会を召集するように積極的な措置を講じた。

それで 1990 年 8 月 15 日、とうとう祖国解放 45 周年、民族分裂 45 周年になる同日、反統一勢力の悪辣な妨害策動によって汎民族代表がたとえ、一所に集められなくなった状況下でも板門店とソウルでは同じ時刻に同じ案件をもって同一した日程にしたがって断ち切られた民族の血脈をつなぐための歴史的な会合である祖国の平和と統一のための汎民族大会が全同胞の大きな関心の中で大盛況裏に開催された。

1990 年 11 月、とうとう民族大団結の旗の下に北と南、海外の統一愛国勢力が民族の前に誓った通り、常設的な全民族統一戦線体である祖国統一汎民族連合（汎民連）が結成されたし、続けて 1992 年 8 月 15 日、祖国統一汎民族青年学生連合（汎青学連）が結成され、汎民連と汎青学連の傘下組織が北と南、そして海外の各地域に組織されるようになった。

北、南、海外の全同胞の熱い統一熱望の中で祖国統一のための民族大団

結の闘争はおしとどめることのできない歴史の流れとなった。

主席は統一偉業を実現する上で提起される要求と国際政治の実態を深く洞察した上で、朝鮮人民の祖国統一偉業にたいする支持者、同調者の隊伍を増やし、国連などの国際舞台で内外分裂主義者の「二つの朝鮮」陰謀を阻止、破綻させることにより、祖国統一に有利な局面を開くためにエネルギッシュに活動した。

主席の主動的な措置と賢明な指導によって 1973 年 9 月から開幕された国連総会第 28 回会議の第 1 委員会では共和国代表団の積極的な活動と多くの国の代表の力強い支持声援にもとづいて、7.4 南北共同声明の原則にしたがって、朝鮮の自主的平和統一を促進させるという希望を表しつつ、米日反動の「二つの朝鮮」国連同時加入案を一蹴し、国連南朝鮮統一部復興委員団を即時解体することを決定し、これは国連総会で表決なしに満場一致で採択された。

そして 1975 年、国連総会第 30 回会議では敵対勢力の悪辣な妨害策動にもかかわらず、朝鮮問題解決に関する共和国政府の立場を反映した 43 カ国の共同決議案が第 1 委員会と総会で圧倒的多数の賛成票で可決された。

この共同決議案の基本内容は、「国連軍司令部」を解体し、国連の旗の下に南朝鮮にあるすべての外国軍隊を撤去させるのが必要であると認めるということ、これと関連して朝鮮軍事停戦協定を平和協定に変えることを停戦協定の実際の当事者に呼びかけるということ、朝鮮の北と南が南北共同声明の原則を遵守し、相手方に反対する武力行使をしないことを保障する実際的措置を講じることにより、朝鮮で軍事的対峙状態を解消し、強固な平和を維持し、国の自主的平和統一を促進させていくことを要望するということなどであった。

1980 年代末―1990 年代に入り、帝国主義者は各国における社会主義の崩壊と変質を自分らに有利に悪用して国連で「投票機械」を動かして、朝鮮の永久分裂のための「二つの朝鮮」陰謀を必ず実現させようと公然と策動していた。

主席はこうした状況下で国連に共和国が先に加入するようにする重大な決断を下した。

主席のこの措置には国連に南朝鮮が単独で入って朝鮮問題を「解決」されて民族の永久分裂を固着させようとする敵らの狡猾な企図を阻止し破綻させ、変遷した状況に即して祖国統一の闘争で引き続き主動を堅持し、分裂主義者に打撃を与えるための深い意図が込められていた。

主席は解放後から生涯の全期間、130 余カ国の 7 万余名の外国人士と活動した。その中には社会主義諸国、非同盟国家ばかりでなく、資本主義諸国、さらには敵対国であるアメリカと日本の人士もいた。

主席は彼らに朝鮮統一問題の本質と朝鮮人民の祖国統一闘争の正当性と生命力、統一祖国の展望について分かりやすく教えた。

主席の積極的な対外活動によって 1970 年の 1 年だけでも第 3 回非同盟諸国サミットなど、各国際会議と国際機構で朝鮮の平和的統一を支持する 200 余件の各種の連帯性措置が講じられた。こうした大勢の潮流の中で各国、各地域で朝鮮人民の祖国統一を支持する署名運動、連帯性集会などが広範にくり広げられた。

朝鮮の自主的平和統一のための国際連絡委員会の呼びかけによって、1979 年 4 月から 12 月までの間におこなわれた朝鮮人民の祖国統一偉業を支持する国際的署名運動に世界 128 カ国と 31 の国際機構と地域機構で 10 億 8000 万名以上が参加したという事実は、朝鮮の統一にどんなに有利な国際的環境がもたらされたかをよく示している。

主席は祖国統一に有利な国際的環境をもたらすために民族分裂の基本的張本人であるアメリカ当局との協商闘争を主動的にくり広げることにより、朝鮮問題解決のための画期的局面を開いた。

主席の積極的な朝米協商方案によって共和国とアメリカ間の会談は 1993 年に幕開けとなり、1994 年 10 月には歴史的な朝米基本合意文が発表される歴史的出来事がもたらされた。

総書記にアメリカ大統領が直接「朝鮮民主主義人民共和国最高指導者」

という尊名まで丁寧につけて保証書簡を取り付けて朝米間の基本合意文が取り交わされたという消息で世界は沸き立った。

主席は不滅のチュチェ思想と崇高な民族愛から出発して海外同胞運動の発展の独創的な道を開拓してきた。

主席は自主的立場で海外同胞の問題は徹底して民族問題の一環であり、海外同胞運動はたとえ他国でおこなわれるが、どこまでも自己の祖国と自民族、自国革命に奉仕すべきであるということ、こういうことから海外同胞運動は同胞たちの民主主義的民族権利を擁護し、祖国の富強繁栄と統一偉業に貢献するものとならなければならないということを示した。

たとえ異国の地に住んではいても、朝鮮人の血筋を引いた海外同胞はどこまでも朝鮮民族であり、したがって民族構成員としての権利を行使し、義務を果たさなければならないというのが海外同胞の問題を見る主席の立場であった。

海外同胞運動を指導するに当たって、主席が大きな力を入れたのは、朝鮮人が住んでいる世界各地に海外同胞組織を結成するようにし、同胞たちを祖国統一隊伍に一つに固く結束することであった。

主席の賢明な指導によって 1955 年 5 月 25 日、朝鮮民主主義人民共和国の権威ある海外公民団体である在日本朝鮮人総連合会「総聯」が結成され、結成大会では「祖国の平和的統一独立と民主主義的権利のために」という組織活動方針が採択された。

総聯結成を起点にして、在日朝鮮人運動ははじめてチュチェ思想を指導理念とする民族的愛国運動として確固と転換され、主体的な海外同胞運動の資源が開かれるようになった。

主席は総聯をモデルに海外同胞組織を建設するための海外同胞運動の闘争を指導した。

アメリカとヨーロッパ地域、独立国家協同体地域、中国に住む朝鮮の海外同胞は、主体的海外同胞組織の典型である総聯をモデルにして、既存の自己の散発的な組織を再整備し、自主、民主、統一のための進歩的団体を新設

し、それを汎同胞的な組織として拡大、発展させた。

この過程に1970年代—1980年代にアメリカ、ヨーロッパ、日本などで祖国統一と関連して促進委員会、研究会、国民戦線、国民会議、民主主義を守る会、自主統一推進会、祖国統一促進会、協会などの名称で自主、民主、統一のための進歩的団体が結成された。

資本主義世界に社会主義の砦である朝鮮民主主義人民共和国の堂々たる海外公民の同胞組織が結成されて祖国と運命をともにしながら統一愛国闘争を力強くくり広げるようになった歴史的現実は、主席の主体的な海外同胞運動の思想の輝かしい勝利を示す驚異的な画幅であった。

主席は海外同胞組織の活動で同胞たちが自分の主義主張を祖国の統一繁栄であるという民族的大義に服従させて、みんなが固く団結しなければならないことを一貫して強調した。

主席のエネルギッシュな労苦があって、世界各地には共和国の威力ある海外同胞組織が雨後の竹の子のように生まれ、その周りに広範な同胞大衆が結束し、主席の祖国統一構想を実現していく道で、自分の役割を責任をもって遂行していけるようになった。

主席は暖かい配慮によって7000万の同胞を懐に抱き、統一の道に導いた偉大な慈父であった。

ひたすら、民族重視、民族統一であるという民族的大義を前にし、愛国を志向する人であるなら彼がだれであれ、暖かく抱き、生を輝かせた主席の幅広い愛と信頼は、この世の誰も考えられない幅と深さ、熱い熱度をもっていた。

主席の懐は聖なる統一実現の道に一身をささげた人であるほど、より熱い信頼を与え、彼らに民族構成員としてのもっとも高貴な生、永生する生を与えた熱い愛の懐であった。

今日、平壌市郊外にある新美里愛国烈士陵には祖国統一のために一身をささげて戦った多くの統一愛国烈士たちが安置されている。彼らはみんな主席が知り、高くおし立てた愛国者であった。

遠く離れた子供を思って眠れないのが父母の気持ちであるというが、主席は実の親の気持ちにも比べられない限りなく暖かい愛によって、海外に離れ離れになった同胞をみんな懐に抱いて統一愛国の道に立たせ、貴い生を与えようと誰よりも心を砕いた。

それゆえ、主席は解放後から海外同胞の問題に深い関心を払い、彼らを祖国に連れてくるための措置も講じ、祖国を恋しがる彼らがいつでも祖国を訪問できるように必要なすべての条件を保障した。

主席の父なる愛の中で 1959 年 12 月から世界が「資本主義から社会主義への民族大移動」であると激賞した在日同胞の帰国の航路が開かれ、多くの在日朝鮮の同胞たちが祖国の懐、主席の懐に抱かれるようになった。

主席は海外に派遣される代表団と幹部らばかりでなく、海外同胞組織の幹部らと海外同胞たちにも、祖国に来たがる同胞を祖国はいつも歓迎することをみんなに伝えるようにし、その過程を通じて彼らが祖国をよりよく知るべきである、と常に強調した。

主席の暖かい愛と信頼の中で多くの人士らが統一愛国の道で生を輝かせるようになった。

偉大な生をささげて開いた統一の明るい展望

金日成主席の一生があれほど偉大なものとなれたのは、それが全民族の運命に責任をもち、民族のための不眠不休の一生であり、生の最後の瞬間までも祖国の統一と民族の明るい未来のためにささげた大いなる一生であったからである。

1990 年代は主席が 80 の高齢を前後した時期であった。しかし、主席はその年齢にもかつてよりもっと頑強に、より精力的に祖国統一のための道に身命を賭して事にあたった。

主席はこの時期、祖国統一の決定的突破口を開く上で自分が旗手になるべきであり、さらには分裂の深淵がより深まっている現状況下で、その画期

的局面は自分が開くべきであると深く考えていた。

事実、この時期、全民族的な統一対話を実現し、祖国統一汎民族連合のような汎民族統一戦線を結成するようにし、北南対話を成功させて北南の合意書と非核化共同宣言を採択させ、祖国統一のための全民族大団結 10 大綱領を発表して、全民族を大統一戦線に結束させ、朝米協商の妥結と北南最高位級会談の道を開拓し、南朝鮮の各階層の統一使節を接見し、彼らを統一の道に導いたのは、主席のような民族の偉大な慈父、不世出の愛国偉人ならではの思いも寄らない巨大な民族史的問題であった。

主席は朝米協商を実現し、南朝鮮の当局者と直接統一対話をおこなうことが 1990 年代を祖国統一の年代にならせる画期的突破口であると結論した。

主席の広い度量と卓越した政治知略によって、とうとう 1992 年 4 月、アメリカのビリー･グラハム牧師が朝鮮との友好を望んでいるというクリントン大統領の口頭メッセージをもって朝鮮を訪問し、その結果、以前には閉ざされていた朝米協商の扉が動き始めた。

主席は 1994 年 4 月 16 日、アメリカの「ワシントン・タイムズ」記者団の質問に答えながら、アメリカにわれわれは平和をこのうえなく大切にし、戦争を望まないが、誰であれ、われわれの自主権を侵害し、武力をもってわが国を征服しようとするなら、われわれも自衛権を行使し、武力で対応せざるを得ないということ、わが共和国政府と人民は自主権を生命とみなしており、いかなる侵害からも祖国の自由と独立を守る確固たる決意と準備ができている、と厳かに警告した。

このようになってアメリカの政府は再び協商の道に出たし、1994 年 6 月には元アメリカ大統領であったジミ･カーターがクリントン大統領の特使の資格でソウルと板門店を経て平壌を訪問するようになった。

限りなく広い度量と包容力を備えた主席はカーターを暖かく迎え入れ、彼との談話で朝米間の対決問題を解決するための合理的な方案を示した。

カーターは主席が示した協商方案に全的な支持を表しつつ、朝米間の凍結した氷を壊す先駆者になることを誓った。

それ以後、アメリカが朝米会談に再び応じることにより、朝鮮とアメリカとの関係改善の突破口が開かれるようになった。

このように、朝米関係改善の突破口を開いた主席は、朝米会談とともに北南協商の前線も展開し、円熟した政治実力とすぐれた指導手腕で祖国統一の新たな決定的局面をもたらすための不眠不休の労苦をささげた。

主席は北と南間の対話の門が開かれていた初期から、最高位級会談に大きな意義を付与し、それを成功させるために労苦を惜しみなくささげた。南朝鮮にいわゆる「文民政権」が樹立した後も、主席のこの立場には変わりがなかった。

主席はカーターに、国の統一のためであれば、自分は誰とでも会う用意があるとし、北南間の最高位級会談をする以上、互いに統一方案をもって対座すべきであり、南朝鮮当局者は自分の統一方案を示さなければならないことを明らかにした。

北南間の最高位級会談は会談のための会談ではなく、統一のための会談、民族分裂の悲運を転換させる会談とならなければならないし、したがって最高位級会談は自己の明白な統一方案をもって祖国統一の大原則を合意してしかるべきだというのが、主席が会談と関連して堅持した根本的立場であった。

主席は広い度量によってかつて、極端な右翼民族主義者、反共的であった人物に会って民族のための道に指導した経験からも、もし南朝鮮当局者がいくら民族に背を向けていたとしても、朝鮮民族のいささかの魂があるならば、民族統一にたいする提議に背くことはできないだろうと確信した。

このようになって朝鮮民族の悲劇的な分裂歴史に年輪が 49 回も刻まれていた 1994 年 7 月、平壌では主席の発起と絶え間ない労苦によって、分裂史上はじめて、北南間の最高位級会談が予見されるようになった。これは全民族に祖国の平和的統一にたいする大きな希望と期待を与える消息であった。

この消息が公布されると、北と南、海外の全同胞は、北南間の最高位級

会談の開催を熱烈に歓迎しながら、この画期的な会合の道を開いた主席に限りない感謝と最大の敬意を表した。

祖国統一の日は目前に迫っていた。それゆえに、南朝鮮の著名な人士である文益煥牧師も、統一は未来型ではなく、現在型であり完了型であると嘆声を上げげたのである。

主席は瞬時も休息することも、仕事の手を休めることもできなかった。祖国統一のために一日を 10 日、1 時間を 10 時間のように働くべきであるというのは、主席が直接立てた活動日課、生活日課であった。自分がもっと奮闘すればそれだけ統一の大門は 1 時間でももっと早く開けることができると主席は思っていた。

主席の生の最後の時期の統一指導とともに永遠に忘れられない胸の熱い話がある。

1994 年 7 月 7 日、ちょうど前日に経済部門の幹部協議会を指導し、夜更かしして分厚い統一書類を見ていた主席は同日の朝、総書記が日課として定めた朝の散策まで忘れて思索を重ねた。

幹部らが執務室に入ってから深い思索から覚めた主席は、壁に掛けられた時計を見て、金正日総書記が組んだ日課なので必ず守るべきであるが、今日は祖国統一と関連した書類を早く完成して金正日総書記と討論しなければならない、だから今日だけは散策時間を守れないだろう、と話した。その書類は民族分裂の悲劇を終わらせ、祖国統一の新たな局面を開くようになる北南間の最高位級会談と関連した歴史的な書類であった。

主席は全同胞の悲願である祖国統一の画期的局面を開くようになる北南間の最高位級会談について深く考えながら歴史的な書類を完成していった。

主席は遠からず到来する祖国統一の日を思い描き、全同胞の一致した統一意志を込めて闊達な筆致で「金日成　1994. 7.7.」であると記入して歴史的書類を終結した。

実際、当時主席は心臓病と目の手術によって安定治療をしなければなら

なかった。しかし、主席は統一のためにこのように自分をつくしたのであった。

その 1994 年 7 月 8 日の早暁 2 時、民族の慈父である金日成主席が思いがけなく、祖国統一の書類を傍に置いたまま、偉大な心臓の鼓動を止めた。

主席の逝去は 5000 年の民族最大の痛恨事であり、同胞の統一運動史にいまだかつてない、いかなるものをもってしても決して補償できない最大の喪失であった。

あれほど願っていた祖国統一のために一生をろうそくのように燃やした朝鮮民族の慈父である主席は、統一した祖国を見ずに余りに哀惜にも逝去した。

祖国解放 50 周年を前にして板門店の統一閣の前には祖国統一のために心を砕き、偉大な心臓の最後の鼓動までささげた主席の歴史の最後の親筆を形象した祖国統一親筆碑が不滅の記念碑として丁重に建立された。

1996 年 11 月 24 日、朝鮮人民軍板門店代表部を現地指導した総書記は主席の親筆碑の前で激情にかられて長い間立っていた。

総書記は激情を抑えながら熱く述べた。

碑に刻まれた主席の親筆はわずか九つの文字しかならないが、ここに込められた意味は数千数万字の碑文にも代えられない巨大で偉大なものがある…

主席の親筆には主席の剛毅な統一意志と信念が含蓄されており、祖国統一にたいする主席の心血と労苦が凝結されている。それは自分が朝鮮人民に与えられるもっとも大きな贈り物は祖国統一であるとし、統一のために一生をささげた主席の大きな労苦と限りない献身にたいする貴い証票であり、その親筆を刻んだ親筆碑は、祖国統一の道に一生をささげた主席の業績を後世に末永く伝える歴史の功績碑である。

民族の慈父である主席が偉大な革命生涯の最後の瞬間までささげて祖国統一の歴史的偉業の遂行に積み上げた革命業績は、民族分裂の悲劇史を終わらせ、必ず国の統一をなし遂げるための全民族的闘争で永遠不滅の礎石と

なる。

4．不世出の総帥

1）チュチェの軍事思想の創始者

独創的に創始したチュチェの軍事思想

金日成主席のチュチェの軍事思想は、新たな歴史的時代である自主時代に朝鮮革命の実践の中で創始された全く新しい軍事思想である。

金正日総書記は次のように述べている。

「金日成同志は、わが革命武力の創建者であり、帝国主義強敵との二度の革命戦争を輝かしい勝利に導いた百戦百勝の鋼鉄の総帥であり、主体的な軍事思想と戦略戦術、戦法を創造した軍事の英才です」

主席は軍建設と軍事活動の実践的要求から出発して思想理論活動をくり広げ、自主時代が提起する理論的・実践的問題に解答を与える過程を通じて、チュチェの軍事思想を創始し、発展豊富化してきた。

主席は 10 代後半の時期から、数十星霜の困難な革命闘争の過程に現代戦争史の奇跡として呼ばれる大きな軍事的勝利を収め、その豊富な実践的経験にもとづいて科学的かつ革命的なチュチェの軍事思想と理論を創始し、深化発展させた。

主席の天才的な軍事思想理論家としての名声は、20 世紀の 30 年代から世界に広く知られており、百戦百勝の鋼鉄の総帥としてのその絶対的権威は世人ばかりでない敵対勢力も公式に認めた。

1990 年代の中葉、アメリカの軍部、国務省、政界、学界はある契機の会合で、主席を「現代政治史の出色の偉人」「特出した軍事大家」として評した。

主席は帝国主義強敵と立ち向かって革命戦争をくり広げながらも帝国主義者とはいかなる場合にも絶対に妥協してはならないし、ひたすら軍事的力で対抗しなければならないということを鉄の真理として銘記し、チュチェの軍事思想にそのまま反映した。

主席は、非凡な英知で銃剣をもって襲いかかる敵とは銃剣でもって立ち向かわなければならないという、革命の真理を再度確証し、抗日武装闘争路線を示し、銃剣で強大な日本帝国主義を打ち破り、祖国解放の歴史的偉業をなし遂げた。

主席が解放直後、あれほど困難で複雑な情勢の中で国の防衛力を強化する上で第一義的な力を入れたのも、経済建設と国防建設を並進させるという革命的方針を示し、強力な自衛的国防力を打ち固め、革命の貴い遺産として譲り渡したのも帝国主義強敵とは必ず力によって立ち向かわなければならないし、銃剣のみが帝国主義の侵略と挑戦を粉砕し、国と民族の尊厳と自主権を固守することができるという真理を確信したからである。

主席が武装した全人民の団結した力によって侵略者を打ち破らなければならないという、深奥な真理を解明したのも帝国主義強敵との対決戦であった。

主席は抗、日大戦を宣布しながら遊撃戦は本質において人民戦争という独創的な軍事思想を打ち出し、それを抗日武装闘争の全行程に立派に具現した。

主席は、戦後の厳しい情勢の中でも人民軍を強化する活動とともに全人民を国防の主人としておし立て、彼らの高い自発性にもとづいて全民武装化、全国要塞化を徹底して実現する活動に大きな力を入れ、敵の侵略と挑戦から国の自主権と社会主義の獲得物を誇らしく守り抜いた。

帝国主義侵略軍隊の数的、技術的優性を革命軍隊の政治的、思想的に、戦略的、戦術的な優性によって打ち破らなければならないという深奥な真理も、主席が帝国主義強敵とくり広げる革命戦争の実践の中で求め、定立したことである。

主席は、朝鮮人民革命軍の精神力と戦略戦術の優越性にもとづいて、日本帝国主義侵略軍との戦いで常に主導権を掌握し、敵の大規模な「討伐」攻勢を断固粉砕した。

革命軍隊の精神力と戦略戦術を勝利の重要な要因としておし立てた主席は、祖国解放戦争期にも奇妙な戦略戦術と戦法を巧みに活用するとともに人民軍軍人の間で政治活動、対人活動を決定的に強化するようにした。

主席は帝国主義強敵との革命戦争時のみならず、社会主義祖国守護のための帝国主義との軍事的対決を勝利へと導きながらチュチェの軍事思想を絶えず発展豊富化した。

主席は帝国主義との対決の中で、帝国主義の軍事的侵略脅威が続いている条件で、いつでも戦争に対処できる準備を着実におこない、敵の些細な侵略戦争挑発策動にもせん滅的な打撃を加えるという革命的な思想もチュチェの軍事思想と理論の重要な内容の一つとして定立した。

主席は高句麗が 1000 年のもの間、東方で強大国として名を馳せた要因は、まさに軍事を重視する尚武の気風を確立したことにあると教え、軍事を重視し、全人民が軍事を習うことについて機会があるたびに強調した。

主席が示した戦争に対処する準備を着実におこなうという軍事思想を指針にしたがゆえに、朝鮮の人民軍将兵と人民は政治的・思想的準備に第一義的な力を入れながら、全民武装化と全国要塞化を実現し、戦時生産と輸送準備を十分に整えたし、常に緊張し動員された態勢を堅持することにより、いかなる侵略者もあえて手出しができないようにした。

主席は主体的な観点と立場で世界の戦争史を新たに分析、総括し、それにもとづいて独創的なチュチェの軍事思想を創始した英才である。

これまでの戦争史を通じて出た軍事思想理論を見ると、それは例外なく武器を基本にして展開された軍事思想理論であった。

かつて、絶対多数の軍事思想家や軍司令官は、武装力の構成と戦争で重要な役割を果たす人間と武器の中で武装装備を絶対化する「武器万能論」「武器中心論」に執着されていた。

主席は、すべての従来の軍事思想理論の制約性を科学的に解明した上で、歴史上はじめて戦争をはじめとした、すべての軍事問題を人間、軍人大衆を基本にして見る独創的なチュチェの軍事思想を打ち出した。

主席はこれとともに自主的立場と創造的方法論にもとづいて従来の軍事理論を新たに分析総括し、それにもとづいてチュチェの軍事学説を創始した。

主席はいかなる軍事思想的・理論的問題を考察しながら教条主義を断固排撃し、常に自主的に、独創的に思索し探求する軍事思想理論家の鑑であった。

主席が打ち出した植民地民族解放闘争における遊撃戦に関する思想理論だけを見てもこれには自主的立場と創造的立場を徹底して具現していく主席の並外れた思索と探求の世界がそのまま込められている。

去る世紀の前半期だけでも人々は遊撃戦を正規戦の補助的な闘争形態にのみ見てきた。

しかし、主席は植民地諸国における武装闘争の基本形式の問題について思索と探求を重ねながら既存の慣例にこだわりなく、正規戦ではなく、遊撃戦を植民地民族解放闘争の基本形式として規定した。

主席が正規武力建設と関連して打ち出した現代的な軍種、兵種建設に関する理論は、チュチェの軍事思想で重要な地位を占める。ここにも人民軍の武装装備を朝鮮の地形条件と軍人の体質と機能的な特性に即して朝鮮式に発展させるという主席の主体的な観点と創造的な思索が歴々と込められている。

主席は各国における戦争経験を研究・分析しながら革命軍隊に党組織を結成し、その役割を高める問題がもつ意義を示した。

主席は軍事と政治を完全無欠に結びつけ、軍事行政活動にたいする党の政治的指導が確固と保障されるように革命的軍指揮体系を確立する道を示すことにより、朝鮮人民軍をどの国の軍隊ももてなかった強力な党組織、政治組織をもった政治的軍隊として強化発展させた。

主席は朝鮮と世界各国における戦争経験と教訓を総括し、それにもとづいてチュチェの戦争理論も新たに集大成した。

抗日遊撃隊は歴史に類を見ないもっとも厳しくて困難な条件で政治的・思想的、戦略的・戦術的優勢によって数的、技術的に優勢な100万の日本帝国主義の関東軍と対抗して戦い、祖国の解放をなし遂げた。

主席は、こうした経験と教訓から戦争勝利の決定的要因の一つが政治的・思想的、戦略的・戦術的優勢をいかに保障するかにかかっていることを示し、それを戦争勝利の恒久的要因の一つとして明白に定立した。

主席は狡猾で貪欲的な帝国主義者の侵略戦争を通じてその本質と手法を究明し、チュチェの戦争論をさらに豊富にした。

主席はかつて、朝鮮とその周辺で展開されたさまざまな戦争と事件を分析した上で、小さくて弱い国には手当たり次第に襲い掛かり、大国にはおずおずと探りを入れてから襲い掛かるのが資本主義、帝国主義侵略者の本性であり、常套的な侵略手法であるということ、したがって帝国主義者の策動に常に警戒心を高め、戦争に主動的に対処し、侵略者と断固闘わなければならないと示した。

主席は主体的軍事戦法もさらに発展豊富化した。

人類の戦争史はすなわち軍事戦法の発展歴史である。人間の創造的知恵の産物である軍事戦法は主に戦争を通じて発展し、作戦と戦闘の勝敗も主に戦法の科学性と巧みさの如何によって左右されてきた。

主席はチュチェ40（1951）年1月のある日、人民軍の指揮メンバーに、もちろんわれわれは他国の経験に学ばなければならないが、それをそのまま適用するのではなく、わが国の具体的実情に即して適用することについて比喩的に説明した。

主席は食事の時、ある国の人たちはフォークとナイフでたべ、またある国の人たちは長い箸で食べる、われわれはご飯を食べ、汁を啜るのでナイフやフォークで食べると、口を傷つき易く、食べにくい、だからわれわれは匙と箸で食べるのが一番いいと述べながら、戦争をやるのも同じである、だか

ら戦闘も必ずわれわれの方式でおこなわなければならない、と強調した。

主席はその後、朝鮮の実情に即した積極的な陣地防御戦を展開するという新たな軍事的・戦略的方針を示し、全軍的に「私の高地」運動を力強く展開するようにした。

このように、主席が打ち出した軍建設と軍事活動に関する独創的なすべての思想と理論は、世界各国における戦争経験と教訓を全面的に分析、総括し、それにもとづいて独創的に示されたことにより、自主時代の最高峰の軍事思想として輝いている。

現代の軍事問題にたいする完璧な解答

金日成主席は主体的な軍事原理と原則、軍事理論、主体的戦法に構成されたチュチェの軍事思想を打ち出すことにより、時代が提起するすべての軍事的、理論的、実践的問題に完璧な解答を与えた。

主席が示したチュチェの軍事思想の出発的原理は一言で言って、軍建設と軍事活動で人間、軍人大衆が基本であるということである。言い換えれば、軍建設と軍事活動の主人は人間、軍人大衆であり、軍事問題の解決において決定的役割を果たすのも人間、軍人大衆であるということである。

チュチェの軍事思想の原理から武装力のもっとも重要な要素も人間、軍人大衆であるという新たな見解と観点が確立するようになった。

主席は武器やいかなる物質的・技術的手段よりも人間、人民大衆の尽きない力を先に見通して日本帝国主義との戦いを開始し、日本の強大な軍事力を打ち破り、祖国解放の歴史的偉業をなし遂げた。その時、朝鮮人民革命軍は日本帝国主義の軍事力に比べられなかったが、国を独立するという固い信念をもって一人のように立ち上がった 2 千万民衆の力によって日本帝国主義との抗日戦争で勝利を収め、祖国を解放することができた。

主席が解放後、新しい祖国建設でなすべきことは多かったが、平壌学院から先に建て、革命武力の中核を育成したことも、そして人民軍で思想、技

術、文化の3大革命を力強くくり広げるという方針を示しながら、思想革命の遂行に中心を置いたのも、武装力の建設において人間、軍人大衆を基本として見なす新たな見解と観点から出発したことであった。

主席が1960年代に示した人民軍を「一当百」の戦闘隊伍として育成するという思想もやはり人間、軍人大衆を武装力のもっとも基本的な要素と見なす見解と観点にもとづいていた。

主席が示したチュチェの軍事思想の原則は、人間の本性を科学的に反映した自衛の原則である。

国防における自衛の原則に関する思想は、いかなる古典や軍事大国と自称する国でも打ち出せなかった新たな国防力建設の原則である。

主席は、自分を擁護し防衛しようとする人間の自主的本性を哲学的に解明し、それから出発して自衛の原則に関する軍事思想を打ち出すことにより、科学的で革命的な国防建設の指導的指針をもたらした。

自主独立国家となるためには、思想における主体、政治における自主、経済における自立の原則を堅持するだけでなく、自衛の原則に立って自体で自分を守り抜ける強力な国防力をもたなければならない。

主席は、国防における自衛が自力更生の革命的原則に基づいて自力で国防を建設していく軍事思想であることを示した。

国と民族の自主権を擁護し防衛するための国防建設は決して、他人に依存する性格のことではない。もちろん、外部から効果的な援助を受けることもできる。しかし、外部からの援助がいくら大きく重要であるとしても、各国の主体的な力に代わることができない。中立国家の場合にも自力、自衛的国防力があってこそ、国の自主権を守ることができることを過去の実例がよく示している。

一般的に軍事思想の原理と原則が人々に軍事問題にたいする見解と観点、立場と態度を明示するならば、軍事理論はそれにもとづいて武力建設と戦争遂行、用兵術の活用など、軍建設と軍事活動と関連した路線と戦略戦術的問題を示す。

主席は戦争に関する従来のすべての理論を分析、総括し、主体的観点と立場で現代の戦争の実際的本質と根源、性格、その主な勢力について全面的に解明を与えた。

主席は、戦争は本質においていかなる階級や国家が特別な暴力手段によって実行する政策の延長であるといい、その性格を判別する基準について、戦争には正義の戦争と不正義の戦争、先進階級の戦争と反動階級の戦争、階級的、民族的抑圧から解放をもたらすための戦争と、この抑圧を強化するための戦争がある、と示した。

主席は、侵略と略奪は帝国主義の本性であり、侵略戦争はその本性から生じる帝国主義の生存方式であることを示した。

帝国主義の戦争商人も認めているように、帝国主義は戦争の恒常的な根源であり、帝国主義は戦争を離れて一時も生きられない。帝国主義はその本性において侵略的で、独占資本が国内で膨張すれば、海外侵略の道に進むのは動かしがたい法則である。

主席は人民大衆の自主性を実現するための革命戦争の本質と特性、根源についても新たに示した。

革命戦争は本質において、勤労人民大衆の自主性を実現するための組織的な武装闘争である。革命戦争の特性は、それがもっとも困難で熾烈な全人民的戦争であるところにある。革命戦争の根源は他国と他民族の自主性を蹂躙し、他人を支配しようとする帝国主義者と搾取階級の反動的な思想と政策にあり、その直接の要因は人民大衆の高い自主意識と政治的準備にある。

主席は戦争勝利の要因についても示した。

従来の理論では戦争勝利の要因を、恒久的要因と一時的要因に区分し、後方の強固さのような恒久的要因を決定的要因と見なした。

しかし、国家的後方をもてなかった植民地条件で朝鮮人民がくり広げた抗日革命戦争をはじめとした世界各国における革命戦争の実践は決して、戦争勝利の要因が後方の強固さのような恒久的要因によるだけではないことを示している。

主席はチュチェ思想の原理から、現代の革命戦争は主体的な要因によってのみ決定的に勝利することができるという真理を新たに示した。

主席はチュチェ思想の要求に即して、物質的・経済的要因にかたよる戦争理論とは裏腹に人間、人民大衆の自主的要求と利益から戦争に反対する新たな観点と立場を示した。

主席が示した革命的な戦争観点は、戦争を恐れず、敵とは必ず一度は戦わなければならず、革命戦争、正義の戦争を積極的に支持すべきであるという観点である。

この観点には、人民大衆が帝国主義者の侵略戦争には革命戦争で立ち向かうべきであり、敵を徹底的に撃滅、掃討し、自己の自主性を実現すべきであるという徹底した反帝・自主的立場、階級的立場が具現されている。

主席は人間の役割を基本にした軍事理論を示しながら、主体的立場で強力な自衛的国防力を建設するという理論を示した軍事理論家である。

他のすべての活動と同様に、各国と各民族の国防力の建設で何よりも重要なのは、国防建設にたいする立場と態度を正しくもつことである。

国防力は、あくまでも自力で建設すべきであって、他人が建設した国防力の命脈は

人の手に握られるようになり、そうした国防力は自国と自国人民の真の自衛力となれない。

主席は1945年8月20日に発表した古典的著作「解放された祖国での党、国家および武力建設について」を始めとした多くの著作の中で、自力で現代的な正規武力を建設するという問題と先行した革命段階でもたらされた自己の武力建設の中核と伝統にもとづいて、自らの革命武装力を建設するという思想を示した。

主席は、人民大衆の力が大きくて限りないということを誰よりも深く体得していたがゆえに、自衛的武装力を建設する大きな活動も朝鮮人民の力に依拠しておこない、実践闘争の中で自らの力で自衛力を建設する理論の正当性と生命力を示した。

それがいかにぬきんでた先見の明であり、子孫万代のための正当な選択であり、重大な決断であったかは、祖国解放戦争時はもとより、戦後から今日にいたる朝鮮革命の全歴史が明白に実証してくれた。

主席の革命武力建設理論で特徴的なのは、一言で言って、思想を基本に捉えて党と領袖に忠実な革命武力を建設するという理論である。

朝鮮の革命武力がひたすら朝鮮労働党に忠実で、党の指導の下に革命の一途を前進し、党が獲得した革命の結実を守り、党中央委員会を先頭に立って決死擁護する名実ともに党の革命武装力とならなければならないというのは主席の意思であり、鉄の意志であり、一貫した革命武力建設原則である。

主席は軍建設の運命も思想から求め、武装力の威力の源泉も軍人たちの思想から求めた。思想を基本に捉えていくのは、主席の軍事理論で初めて示され立派に具現されてきた軍建設の原則である。

主席が創始したチュチェの軍指揮理論の特徴は、党と領袖の唯一的指導の実現を根本内容とする軍指揮理論であり、政治活動、対人活動を基本にする軍指揮理論、将兵が一つとなって部隊の指揮管理で提起されるすべての問題を解決していく軍指揮理論であるところにある。

主席は、革命軍隊にたいする指揮、軍指揮の問題を革命的領袖観の原理にもとづいて歴史上初めて考察し、徹頭徹尾、革命武力にたいする指導の唯一性を確固と保障できるように軍指揮原則と軍指揮体系、軍指揮方法に関する理論的問題を完全無欠に解決した。主席は、人民軍にたいする党と領袖の唯一的指導は軍隊内に党と領袖の命令指示を無条件にあくまで貫徹する革命的気風と活動体系を確立する時にのみ保障されることができると明らかにした。

主席は、政治活動を優先させることを部隊指揮管理における最初の工程として、基本として、そして一つの鉄則として規定した。主席は部隊の指揮管理で軍事・政治幹部が政治活動、対人活動にたいする正しい見解と観点をもって説伏と教育の方法で軍人大衆の革命的熱意と創造的積極性を高く発揮させ、政治活動を大衆自身の活動に転換させて一人が十人、十人が百人、

百人が千人を教育し、導いていくことについて示した。

一般的に軍隊は上官と部下に区別されており、軍事指揮、軍事的指導を実現する上で上官と部下間の関係を上下関係、服従関係に見た。

中国の歴史で軍事家として知られていた孫武が呉国の女官たちに軍事訓練を与えたが、命令に不服して動かないと、指揮官に任命された二人の女官を首切りして一瞬にして女官たちを規律正しい「兵士」につくったという話がある。

主席は、革命軍隊の中で部隊指揮管理が命令と服従の関係だけでなく、革命的同志愛にもとづく将兵一致、軍・政配合によって実現されるという独創的なチュチェの軍指揮理論を示した。

主席は 1963 年 2 月の初旬、ある人民軍部隊を訪れた機会に、革命軍隊では将校や戦士も革命のために生死苦楽をともにする同志である、目上の人は下の人を愛して援助し、下の人は目上の人を尊敬し擁護しながら上下の固い団結を保障すべきであると述べた。

部隊の指揮管理で軍・政配合を正しくおこなうというチュチェの軍指揮理論は、主席が歴史上初めて示した独創的な理論である。主席は軍・政配合が人民軍にたいする党と領袖の唯一的指導を確固と保障し、全軍を党の周りにしっかり結束し、党の軍事路線と方針を貫徹する上でもつ意義と重要性を深く洞察し、軍・政配合を実現する上で偏向が現れないように深い関心を払った。

主席はいかなる侵略軍隊も打ち破ることのできるチュチェの軍事戦法を創造した。

主席が創造した主体的戦法には、その組織執行方式によって正規戦法と遊撃戦法があるかとすれば、その目的と規模、持続時間にしたがって戦略的または作戦、戦術的意義をもつ戦法があり、目的と環境、様相にしたがって攻撃戦法と防御戦法を始めとした戦法があるかとすれば、力量と機材の動員程度にともなう戦法があり、地形と昼夜条件にともなう山岳戦法と夜間戦法があるなど、実に多種多様な戦法がある。

主体的戦法がかつてはいうまでもなく、今日の他のすべての軍事戦法と区別される本質的特徴は、チュチェ思想から出発して人間の役割を基本にして創造されたし、現代革命戦争の実践的要求を正しく反映している独創的であり、完成された戦法であるところにある。

主席は数十星霜、朝鮮革命武力を指導して帝国主義者との対決戦をくり広げる日々、革命軍隊の本質的優越性、革命軍隊の高い精神力にもとづいて百戦百勝の主体的戦法を創造し、全一的に体系化した。

主席は抗日武装闘争期、誘引伏兵戦法と夜間襲撃戦、一行千里の戦術など、多様な遊撃戦法と戦術を創造した。主席は祖国解放戦争の時期にも飛行機狩り組運動をはじめとした独創的な戦法を多く創造した。

このように、主席は科学的で革命的な主体的戦法を創造して、人類の軍事戦法の発展に不滅の業績を積み上げた天才的な軍事戦略家であり、百戦百勝の総帥であった。

2）銃剣でチュチェ革命を開拓した不世出の英雄

金正日総書記は次のように述べている。

「じつに、金日成同志は卓越した思想・理論と正しい指導によって現代史を輝かした偉大な哲学家、偉大な政治家、偉大な軍事戦略家、偉大な指導芸術家でした」

革命軍隊が民族の独立意志と信念の最高代表者であり、民族解放戦線の主力軍であり、革命の組織者、統率者であるということ、これが抗日武装闘争の時期、主席が新しく考察した革命軍隊の地位と役割であった。

主席はこういう観点と立場で革命武力建設の先行であるという歴史的課題を朝鮮革命の前に提起した。

正義の銃剣を強化し、その銃声を高く響き渡らせるとき、民族の愛国心と魂も高まるという真理は、主席が革命軍隊を創建した数日後、現実の中で証明された。

主席が朝鮮人民革命軍を統率し、普天堡へと進撃したという消息が伝わると、世界が騒ぎ、全民族が興奮した。

主席は革命武力建設先行の新たな道を示した上で、チュチェ式に革命武力を創建し、革命指導を始めた。

元来、国権がなく、国家的後方も、正規軍の支援もなしに、植民地国で自体の革命軍隊を創建するということは容易なことではない。それも他国の領土で革命軍隊を創建せざるを得なかった朝鮮革命家がもっていた苦衷はなおさら大きかった。

主席は抗日革命の初期に革命軍隊を創建しながら、その必須的要素である人間と武器の問題を自らの実情に即してチュチェ式に解決した。

主席は創建される遊撃隊の中核を革命的実践の中で育てる一方、各革命組織を通じても育成した。遊撃隊の創建が迫った時期には短期講習（短期訓練）を組織して核心を集中的に育て、彼らに軍事訓練を与える場合にも自己の実情に即して戦いに実際に必要なことを教えるようにした。

主席は父の遺産である 2 挺の拳銃を元手にして敵の武器を奪って武装するための闘争の先頭に立ったが、遊撃隊のグループと赤衛隊で編成された襲撃組を引率し、安図県にある悪質地主の防衛団を不意打ちにして 10 余挺の武器と多くの銃弾を鹵獲した。

武装を獲得するための闘争がどんなに困難であったかについて主席は回顧録に、もし、武器獲得闘争で朝鮮人民が発揮した無比の犠牲精神と大胆さ、臨機応変の機知、すぐれた創意についてのエピソードを収集して、文学作品を書き上げるなら、おそらくそれは荘厳な一つの叙事詩となるであろう、と書いている。

主席は敵の武器を奪うと同時に、自力更生の革命精神を高く発揮して自力で武器をつくるための闘争もくり広げるようにした。主席の指導の下に、自力更生の革命精神を発揮して延吉爆弾を開発した和竜県の鷹岩窟兵器廠は後日、朝鮮人民革命軍の頼もしい兵器製造所、修理所となって抗日大戦に大きく寄与した。

1932 年 4 月 25 日、主席は安図の樹林の中で反日人民遊撃隊の創建式をおこない、朝鮮人民の革命的武装力の創建を全世界に宣布した。

反日人民遊撃隊が創建された時から軍隊を先に創建し、それに依拠して朝鮮革命全体を指導していく主席の革命指導の新しい歴史が始まるようになった。

主席は抗日革命の全過程に朝鮮人民革命軍を強力な政治的軍隊に育成することに大きな心血を注ぎ、人民革命軍が革命の中枢的中核力量、政治的導き手としての使命を立派に遂行するようにした。

主席はいつか、自分の一生の貴重な体験と朝鮮革命実践にもとづいた軍隊生活過程は一つの総合大学の課程であるといえる、と意義深く述べたことがある。

朝鮮人民革命軍の遊撃闘争が革命軍の隊員を思想意志的に鍛える上でどんなに大きな意義をもったかは、1938 年の末から翌年の春まで革命軍が断行した苦難の行軍の過程を一つ見ても十分に理解することができる。

主席は回顧録の中で、苦難の行軍の内容を一言で要約すれば、厳酷な自然とのたたかい、ひどい食糧難と疲労とのたたかい、恐ろしい病魔とのたたかい、奸悪な敵とのたたかいが一つにからみあったものであった、これにいま一つの深刻なたたかいがともなった。それは苦難にうちかつための自分自身とのたたかいであった。初歩的には生き残るためのたたかい、ひいては敵にうちかつためのたたかいが、この苦難の行軍の基本内容であった、と書いている。

いかなる逆境にあっても、信念を捨てずに自分の指導者の周りに一つの思想意志に、道徳的信義の上でさらに結束して敵を打ち破った革命家の典型を創造したこと、これがまさに苦難の行軍が収めた重要な成果であり、抗日革命が収めたもっとも大きな業績の中の一つである。

抗日の日々、主席の肉親的愛と慈愛深い配慮の下で、朝鮮人民革命軍の将兵の間でどんなに立派な革命の核心、政治活動家が多く排出されたかということは、彼らによって全国の人民が覚醒されて全民抗戦に一人のように奮

い立つようになった歴史的事実と解放後､彼らの核心的役割によって新しい祖国建設の困難かつ､骨の折れるすべての歴史的課題が立派に実現された現実が明白に実証してくれた。

主席が生前に常に回顧しているように、金策同志をはじめとした抗日革命闘士はかつて、いかなる正規教育を受けたことはないが、一様に党建設と国家建設、軍隊建設で提起される問題はいうまでもなく、いかなる経済課題を与えても巧みに遂行するそうそうたる政治活動家、実践家であった。

主席が朝鮮人民革命軍党委員会による党的指導であるという新たな革命指導方式を創造することにより､朝鮮革命家は党創建の偉業が完遂されない朝鮮の条件でも朝鮮革命の政治的参謀部をもつようになり､失敗と紆余曲折で満ちた過去と決別し､勝利と栄光に輝く真の革命の道を歩むことができた。特に､抗日革命隊伍全般にたいする党的指導を実現できる正しい方法論が講じられ、一つの指導中心、主席を中心にした革命隊伍の統一団結の新時代を迎えることができた。

朝鮮人民革命軍は、朝鮮革命の唯一の指導思想であるチュチェ思想を指導的指針とする革命軍隊であり､その実現を目指して身命を賭してたたかう革命的武装力であった。朝鮮人民革命軍の隊員は、人民の中に入ってチュチェ思想とその具現である主体的な革命路線と方針を広く解説、宣伝した。それだけでなく、人民革命軍で発行する「鐘の音」と「鉄血」「3・1月刊」のような出版報道物は革命軍の思想と路線、方針を人民に広く知らせた。それで朝鮮人民革命軍と反日革命大衆は一つの思想的絆を結ぶようになり､軍隊と人民の思想の一致という、大きな民族史的画幅が開かれた。

主席が銃剣をもって日本帝国主義を打ち破り、国の解放をなし遂げて新しい祖国建設の広い道を開いたのは､抗日革命を通じて収めたもっとも大きな業績となる。

主席は抗日革命の日々、朝鮮人民革命軍を主導的力量にして党建設準備活動を積極的に推進することにより、解放後、建党偉業を完遂できる強力な土台を築いた。

党創建のための朝鮮革命家の政治的参謀部は朝鮮人民革命軍党委員会であった。朝鮮人民革命軍党委員会には、朝鮮革命の唯一の指導中心である主席がおられ、ここで抗日革命の戦略と戦術、党建設の路線と方針が採択された。

革命偉業に限りなく忠実であり、いかなる分派主義にも染まらない純潔な党の核心が多く育って、党創建の柱となり、先鋒闘士、旗手となり、党の隊伍が一つの指導中心にもとづいて思想的、意志的に、組織的に固く結束され、基層党組織から地域的党指導機関、朝鮮人民革命軍党委員会に至るまで、整然とした党組織指導体系が確立されたのは、抗日武装闘争の時期、党創立の準備活動で収められた大きな成果であった。

主席は、反日人民遊撃隊に依拠して豆満江沿岸の広い地域で日本帝国主義の植民地統治体系を一掃し、解放地区形態の遊撃区域を創設し、続いて極左的なソビエト路線の否定的影響を一掃し、人民大衆の絶対的な支持と参加の下に人民革命政府を樹立した。

人民革命政府は農民に土地を無償で分与し、遊撃区内の全域で８時間労働制を実施した。人民革命政府は遊撃区の各集落に児童団学校を立てて無料教育を実施し、梨樹溝と十里坪に設置した遊撃区病院ですべての住民に無料治療が受けられるようにした。人民革命政府は、封建的および帝国主義的抑圧の中であらゆる蔑みと蔑視を受けている女性たちに男性と同等の権利を保障することを自己の神聖な義務とした。人民革命政府から分与された土地に杭を打ちこみ、鉦を打ち鳴らし踊りに興ずる農民の姿や無料教育、無料治療制、そして男女平等の実現によって広がった人民の自由で幸福な現実は、朝鮮の共産主義者によって間島という不毛の地に創出された世紀のパノラマであり、別天地であった。

反日人民遊撃隊に依拠して人民的で革命的な新しい型の政権を建設した主席の不滅の業績と経験は解放後、新しい祖国建設の強固な土台、元手となった。

主席は、朝鮮人民革命軍を第１戦に立たせて革命的で人民的な文化を創

造する原則と方式にしたがって、朝鮮人民革命軍で革命的で人民的な文芸作品を多く創作、公演するようにした。

主席は、常に生活文化を革命家の思想問題、革命軍隊の戦闘力と直結させ、朝鮮人民革命軍で革命的で戦闘的な生活文化を創造することに当然の関心を払うようにした。

主席の細心な関心の中で朝鮮人民革命軍の隊員は困難な条件でも兵室はもとより、相手をきりりとさせるように衛生文化施設を整備し、生活も文化情操的に豊かにした。その真骨頂は白頭山麓に位置している青峰宿営地に行って見ればすぐ理解できる。

今日、踏査をする人たちが青峰宿営地に入りながら受ける強い衝動は、あれほど困難な抗日戦の日々、一夜を宿営した場所であったが、遜色なしにきちんと整備した几帳面な腕前である。兵舎と焚き火の址、小さい泉までも整然としてつくって利用した朝鮮人民革命軍の文化的な生活ぶりを見ては、感嘆を禁じえないでいる。

朝鮮人民革命軍の隊員はいかなる困難な環境の中でも常に秩序が確立し、活気にあふれ、戦闘で常に勇猛をふるうことができた。抗日連軍の指揮官の一人であった楊靖宇が常に朝鮮人民革命軍の節度ある生気はつらつとした文化的な生活ぶりを見ては、いつもうらやましがったのは決して偶然なものではなかった。

主席の賢明な指導の下に、抗日革命の主人公たちは、抗日の日々に収めた革命的文化創造の経験にもとづいて、解放後、建国思想総動員運動と文盲退治運動を力強くくり広げて、植民地的であり、封建的なあらゆる古い思想文化を覆し、革命的で人民的な文化の新しい花園を立派につくることに率先垂範した。

3）革命戦争史の奇跡を創造した天下の名将

去る 20 世紀の初期に朝鮮人民に対抗した侵略者は、戦争と略奪に血眼に

なって狂奔した帝国主義強敵であった。

しかし、鋼鉄の総帥である主席はいかなる侵略者にも断固立ち向かい、絶対に容赦や慈悲を知らなかった。

主席の前では当代の強敵であると豪語していた帝国主義も軍事的敗北を認め、膝を屈した。主席は唯一に一世代に強大な両帝国主義侵略軍隊を打ち破り、現代戦争史の奇跡を創造した軍事の巨匠であった。

主席は遊撃戦でも名将であり、現代の正規戦でも名将であり、祖国守護戦でも名将であった。帝国主義侵略の頭目も頭を下げて心から褒め称える非凡な軍事戦略家、鋼鉄の総帥がほかならぬ主席であった。

朝鮮で 1930 年代に遊撃戦をくり広げる前までも遊撃戦を植民地民族解放戦争の基本形式に定式化した理論もなかったし、そうした遊撃闘争で名を馳せた軍事家や英雄もなかった。

主席は、抗日革命戦争の各戦略的段階に提起される闘争課題と敵の行動性格にしたがって、さまざまな形態の遊撃作戦を独創的に創造し、立派に具現した。

金正日総書記は次のように述べている。

「抗日革命戦争と祖国解放戦争、戦後の復興建設をはじめ、朝鮮革命の前途には幾多の厳しい試練が立ちはだかっていましたが、金日成同志は、天が崩れ落ちてもはいでる隙間はある、という鉄の意志をもって難関に立ち向かい、非凡な指導力を発揮して革命と建設を限りない高揚へと導きました」

主席は抗日武装闘争の初期に遊撃区防御作戦を創造して具現したが、それは当時までの遊撃戦の歴史になかった独創的な作戦芸術であった。

抗日武装闘争の初期、日本帝国主義は豆満江沿岸の遊撃区を「東洋平和のガン」であるとし、どうしてでもそれを掃滅しようと血眼になって狂奔した。醸し出された軍事情勢は遊撃区を敵の「討伐」から固く守ることを要求した。

主席は 1934 年 3 月から 1935 年 3 月までの間に敵の「囲攻作戦」を破綻

させるための遊撃区防衛作戦を組織し指揮した。

この時期、主席は朝鮮人民革命軍部隊とともに反日自衛隊、そして遊撃区人民が遊撃区一帯における積極的な防御行動をくり広げるとともに敵の軍事的拠点にたいする背後打撃を加えるようにし、第 1 次北満州遠征を組織指導した。それで日本帝国主義の「囲攻作戦」は最終的に破綻し、朝鮮人民革命軍をはじめとした革命力量を保存育成し、武装闘争を拡大発展させるための抗日武装闘争の初の段階の戦略的課題が成果的に遂行されるようになった。

主席は 1936 年 2 月、歴史的な南湖頭会議で朝鮮人民革命軍部隊が大規模的で機動的な遊撃活動を組織展開する新たな作戦芸術を示した。

主席はこの時期、白頭山地区への進出作戦と白頭山西南部一帯における遊撃作戦、2 回に渡る国内進攻作戦、敵の背後攪乱作戦、そして苦難の行軍、大部隊旋回作戦など、多くの遊撃作戦を成功裏に組織指導した。その中で代表的な大部隊機動作戦は普天堡戦闘を中心にした国内進攻作戦であった。

鉄壁であると豪語していた敵の国境警備陣をすばやく突破し、朝鮮人民革命軍の主力部隊が国内に進出して日本侵略者の軍事要衝地を不意に打撃したのは、瞬く間に朝鮮国内と日本の統治層の内部はもとより、全世界を揺るがした。

主席は 1940 年 8 月、敦化県小哈爾巴嶺でおこなわれた朝鮮人民革命軍の軍政幹部会議で新たな戦略的段階を規定しながら、朝鮮人民革命軍の力量を保存し蓄積するという戦略的課題とそれを実現するための小部隊作戦方針を示した。

主席は政治幹部と軍事幹部、古参の隊員と新入隊員を適切に配合する原則にもとづいて小部隊は 10 余名から数十名、グループは数名程度に編成し、該当の任務と活動区域を示し、武装も軽快にするようにした。小部隊、グループにたいする統一的な指揮体系と連絡体系が確立し、小部隊、グループ内に党細胞と党分組が組織された。

主席の作戦的・戦術的方針にしたがって、朝鮮人民革命軍部隊は小部隊

戦を基本にしながら、場合によってはいくつかの小部隊が連合して大きな戦闘もくり広げるなど、千変万化の遊撃戦術で敵に大きな打撃を与えた。満州中と朝鮮の北部国境地帯は小部隊、グループの活動で沸き立った。

主席が小部隊作戦を猛烈にくり広げるようにしたのは、朝鮮人民革命軍を不断の「消耗戦」によって掃滅しようとした敵の企図を破綻させ、革命軍の力量を保存、蓄積しながら祖国解放の大事変を迎える活動を着実に準備する上で実に大きな意義をもった。

主席が抗日武装闘争を立派に飾り付けながら示した独創的な作戦芸術は、祖国解放作戦、全国解放のための最後の攻撃作戦である。

いままで各国で展開された遊撃戦争を見ると、全国を解放する最後の血戦を行なわずに停戦協定を通じて植民地主義者から独立を認められる方法で国の解放を達成することが一般的であった。

主席はこれとは異なり、日本帝国主義が明白に敗北を目前にひかえてもすぐ降伏しようとせず、「本土決戦」まで準備する条件で侵略者を軍事的に容赦なく徹底的に撃滅掃討する作戦的方案を示した。これは日本帝国主義との最後の決戦段階で朝鮮人民革命軍の積極的な総攻撃作戦に全民抗争を配合して日本帝国主義侵略者を撃滅し、祖国を解放する独創的な作戦方式として、国の全地域を短期間に解放する軍事的奇跡を創造するようにした軍事的・芸術的要因であった。

このように、主席は独創的な遊撃作戦芸術を創造し、輝かしく具現して植民地民族解放戦争の手本を創造する不滅の業績を積み上げた非凡な遊撃戦略家であった。

1970 年代、ある日本人は自分が直接見て聞いた歴史的事実を叙述した「神出鬼没の抗日遊撃隊」という書籍を公開して抗日の伝説的英雄である主席の不滅の業績と主席が創造した遊撃戦術の偉大さを高く称揚した。

主席は主体的な革命武力によってのみ強盗日本帝国主義を打ち破り、国を独立させることができるという自主的立場から自体の独自的な革命武力を建設し、それに依拠して抗日武装闘争を勝利へと組織指導した。

自己の運命を開拓していこうとする人民が頼りとするものは、ひたすら自分自身の力だけである。自分を信じ、自主的に自己の運命を開拓していく人民は、いくら厳しい苦難と試練を経るとしても、勝利と栄光の高峰をきわめることができるということ、しかし他人の言葉に耳を傾け、他人の力に頼る人民は一時的には平安であるかも知れないが、結局戦争で敗北と奴隷の運命を免れないということ、これは 20 世紀の総括でもある。

主席はコミンテルンやソ連のような外部の支援よりも朝鮮人民自体の力をより重んじた。そして人民大衆の積極的な参加の下に、主体的な革命武力を創建し、それにもとづいて抗日武装闘争を組織展開する自主的立場を一貫して堅持した。主席はコミンテルンや他国の革命家と手をとってともに戦う場合にも、常に朝鮮革命を思考と実践の中心に据え、すべてを自主的立場に対し、自体の常備的な革命武力、朝鮮人民革命軍に依拠して、抗日武装闘争を勝利へと導いた。

主席は自体の革命武力に依拠して武装闘争を展開する全行程で常に独自性を堅持した。

主席は 1930 年代の前半期には抗日武装闘争を急速に拡大させるための切実な要求から敵の植民地統治があまり及んでいない中国の東北地方、豆満江沿岸の天険の要塞に解放地区形態の遊撃区と半遊撃区を建設することに力を集中した。主席の指導の下に 1932 年 5 月の末、安図県小沙河の遊撃区域が創設されるようになり、これを契機に遊撃区創設活動は早いテンポで進捗した。

主席は 1930 年代の後半期には白頭山密営を中心に国内深く秘密根拠地を創設して、武装闘争の火の手を全国的版図へ激しく燃え上がらせる確固たる保証をもたらした。

白頭山一帯は、軍事地形学的見地から見る時、一人が守る関門を千人が開けられない天然要塞であるといえる。遊撃戦を拡大する上で白頭山よりもっと打ってつけの基地はなかった。

朝鮮民族の感情が引かれる白頭山地区に朝鮮革命を指導していける戦略

的地帯を確保すれば、民族のすべての力量を反日抗戦の聖戦へと力強く奮起させることができ、全民抗争の勝利をさらに確固と成し遂げることができた。

世界の戦争史には中国の井崗山や延安根拠地、キューバのマエストラ山の遊撃根拠地など、革命戦争の拠点になった根拠地が少なからず記録されているが、白頭山根拠地のように隠蔽された密営と革命組織に結ばれた秘密根拠地形態の根拠地は見出せない。

主席は日本帝国主義との抗日大戦を宣布しながら日本帝国主義との対決は、全朝鮮人民との銃の対決となることを明白に宣言し、全民抗争の旗印を高く掲げた。

日本帝国主義は 1933 年の冬、遊撃区を掃討するための大規模な冬季「討伐」攻勢を開始した。

力量上や軍事装備の上でもあまりにも甚だしい困難な戦いであったが、早くから人民の力に依拠すれば、いかなる敵も恐れるものがないということを鉄の真理として肝に銘じた主席は、遅滞なく遊撃隊と全民を遊撃区の防衛戦へと力強く奮い起こした。

遊撃隊と人民は主席の指揮下に一丸となって、遊撃区の防衛戦に一致して奮い立った。遊撃隊と人民は互いに励ましながら戦い、陣地に石塚を積み、「討伐隊」が接近すると石を転がして大量に殺傷した。遊撃隊が敵をうちのめすたびに遊撃区の人民と児童団員は太鼓と鉦をたたき、ラッパを吹きながら気勢をあげ、高地に銃弾が切れると爆弾を運搬し、銃が壊れると、その都度修理して武器を保障した。銃を撃ってみた経験のある老人は遊撃隊と半軍事組織のメンバーと共に直接戦闘に参加した。敵の大兵力の連続的な攻撃の中でも遊撃区の寸土は血をもって死守され、難攻不落の要塞として毅然とそびえ立っていた。

主席は 1945 年 8 月 9 日、朝鮮人民革命軍部隊に日本帝国主義を撃滅し、祖国を解放するための最後の攻撃作戦を開始する命令を下達した。

主席は朝鮮人民革命軍の最後の攻撃作戦に応え、すでに国内に派遣されて活動していた朝鮮人民革命軍小部隊、グループと政治工作員が人民武装隊

と武装蜂起組織、広範な人民を全民抗争へと組織動員するように命令した。朝鮮人民革命軍の小部隊、グループと政治工作員の指導の下に、人民武装隊は全国各地で日本帝国主義侵略軍と憲兵、警察機関を襲撃、掃討しながら敵の後方を攪乱する闘争を果敢にくり広げ、進撃する人民革命軍部隊を積極的に支援した。

主席の指導の下に、朝鮮人民革命軍と朝鮮人民は日本帝国主義の植民地統治機構を最終的に覆し、祖国解放の歴史的偉業をなし遂げた。

世界には外来侵略者を追い出すために遊撃戦をおこなった国も多く、正規武力による現代戦をおこなった国も少なくない。しかし、朝鮮のように至極困難な条件の中で自力によって武力抗争を展開したケースはほとんどない。

主席はチュチェ思想の旗印の下に自力で主体的な革命武力を創建し、朝鮮人民革命軍の武装闘争と全民抗争によって強盗日本帝国主義との最後の決戦で勝利を収め、国を解放した。これは世界が公認する歴史的事実である。

4）強力な自衛的国防力を建設した偉人

必勝不敗の革命武力の建設

金正日総書記は次のように述べている。

「金日成同志は主体的な軍建設思想を示し、それをりっぱに実現して、人民軍を党の偉業、社会主義偉業を守る必勝不敗の革命的武装隊伍に発展させた、われわれの革命的武力の創建者であり、百戦百勝の鋼鉄の総帥です」

主席は人民軍が一つの思想と一つの中心をもって革命的信義と信念、革命的同志愛にもとづいて統一団結した軍隊、いかなる風波と試練のなかでも党の偉業、社会主義偉業に忠実な革命軍隊に発展されるようあらゆる心血を注いだ。

1973 年 10 月、朝鮮人民軍中隊長、中隊政治指導員大会が開かれた時であった。

大会を指導していた主席は人民軍の思想的団結と関連して、人間にはさまざまな血液型がある、人間に輸血するときには A 型の血液をもった患者には A 型の血液を輸血するのであって、B 型の血液を輸血すると、体から熱が出て死なれる、これと同様に、チュチェの血統をもったわれわれの党内にはチュチェ型の血液のみ溢れるべきであって、事大主義型の血液や修正主義型の血液が入ってはならない、人民軍軍人はわが党の革命思想、チュチェ思想でしっかり武装し、全軍がチュチェ思想にもとづいた統一団結をなし遂げるべきである、と述べた。

革命軍隊の統一団結は本質において、一つの思想にもとづいた統一団結であり、領袖の革命思想にもとづいた団結だけがもっとも強固で生命力のある統一団結となれるという深奥な真理が込められた教示であった。

主席は、革命的同志愛と信義で結束した軍隊のみが試練と難関に満ちた革命の道を最後まで歩むことができ、敵と戦って百戦百勝することができるという真理を信条とし、チュチェの軍建設史のページを兵士たちへの愛の逸話で記した。

主席は、1951 年の秋のある日、真夜中に前線にある軍団長を電話で呼び、もう天気がかなり寒いようだが、戦士たちに熱いご飯と汁を食べさせ、豆のもやしも食べさせるべきであると指示して愛情のこもった措置も講じ、人類の戦争史にその名もなかった火線休養所も設けるようにした。

指揮官や戦士を問わず、みんな戦いだけを考えていた時、主席が前線の兵士たちのために施した同志的愛と恩情は、そのまま人民軍の将兵に力と勇気になり、最高司令官と人民軍を一つにつなげる血脈となった。

主席はチュチェ革命偉業の継承で新たな転換期がもたらされていた 1970 年代の中葉、全軍をチュチェ思想化するという建軍綱領を示した。

全軍チュチェ思想化を軍建設の総体的課題として示した主席は、「全軍をチュチェ思想化しよう！」というスローガンを高くかかげ、人民軍を政治思

想的に、軍事技術的にいっそう強化する活動を力強くくり広げるという課題と方途を全面的に示した。

主席が示した全軍チュチェ思想化の建軍綱領は、半世紀前にチュチェ思想の旗の下、白頭の密林で開拓されたチュチェの建軍偉業を最終的に完成するための戦略的目標とその実現方途を科学的に示した、新しく独創的な革命武力の建設綱領であった。

全軍のチュチェ思想化を立派に実現するための主席の指導は、人民軍内のチュチェ思想で一貫した政治思想教育活動を決定的に強化して、すべての軍人をチュチェ型の革命家に育成する活動から始まった。

主席は 1977 年 11 月、朝鮮人民軍第 7 回扇動員大会でおこなった演説をはじめ多くの機会を通じて、人民軍でチュチェ思想の原理教育と党にたいする忠実性教育、社会主義愛国主義教育、革命伝統教育と階級教育など、チュチェ思想教育にもとづいて政治活動をさらに強化することについて教え、1973 年 10 月、朝鮮人民軍中隊長、中隊政治指導員大会と 1991 年 12 月、朝鮮人民軍中隊政治指導員大会など、各契機に人民軍の基本戦闘単位である中隊を党の唯一思想で一色化した集団につくる事により、全軍チュチェ思想化を促すことについて強調した。

全軍を朝鮮労働党の革命思想、チュチェ思想で一色化するための闘争を力強く行うように指導した主席の指導において特に重要な地位を占めるのは、すべての軍事事業と軍事活動にチュチェ思想を具現することを鉄則とするようにしたことである。

かつて、ワルシャワ条約の参加国であった東欧の社会主義諸国は、国の防衛でソ連に依拠していたので、自国にソ連の軍事基地を設け、武装装備もソ連のもので配備した。これらの国々では軍建設と軍事活動がソ連の指揮棒にしたがっておこなわれていた。結果、軍事分野で非思想化が実施されると、それがそのまま模倣され、しまいには大国の軍隊が社会主義の銃剣を手放すや、相次いで革命の銃を下ろし、党と社会主義も台無しにしてしまった。

主席は支配主義と結合した現代修正主義、現代社会民主主義の思想潮流が

氾濫する複雑な中でも、すべての人民軍将兵が他国のものに頼ろうとせず、すべての軍事事業と軍事活動を徹頭徹尾自己の方式で、主体的立場でおこなうようにした。主席は歴史的教訓に照らして人民軍の中に党組織と政治機関の活動体系と政治思想教育活動の基本方向と内容、方法も自己の方式でおこなうようにし、部隊の組織編成と指揮管理、戦闘訓練も自己の方式でおこなうようにした。

主席はいかなる強敵も一気に打ちのめすことのできる無敵の軍事力をもった不敗の革命武力を建設した鋼鉄の総帥であった。

久しい前から全軍幹部化、全軍現代化の方針を人民軍強化の指導的指針におし立てた主席は全民武装化、全国要塞化とともにそれを朝鮮労働党の 4 大軍事路線として定立し、徹底的に貫徹して、人民軍を幹部化され現代化された「一当百」の革命武力に発展させた。

主席は 1953 年 7 月 27 日、朝鮮人民軍最高司令官命令第 470 号「祖国解放戦争の偉大な勝利を祝賀する」の中で、人民軍の戦闘動員準備をしっかり整える一方、人民軍強化のキーポイントを全軍幹部化と全軍現代化に置き、力強くおし進めた。

人民軍を「一当百」の革命武力に発展させる上で全軍幹部化を戦略的方針におし立てた主席は、全軍幹部化の先行を軍人にたいする政治思想教育に求め、それを決定的に強化するようにした。

主席は 1963 年 10 月、金日成軍事大学（当時）の第 7 期卒業式と 1964 年 4 月、軍事部門責任幹部らとおこなった談話などの機会に、軍人を政治的・思想的にしっかり武装させることを、人民軍を革命軍隊に強化する上で提起される第一義的な課題として示し、軍人たちにたいする政治思想教育で提起される諸問題について具体的に教え、1966 年 10 月、不朽の古典的著作「現情勢とわが党の任務」でも人民軍の政治的・思想的優越性について示しながら、軍人たちを党と革命に限りなく忠実な革命戦士に育成することについて重ねて強調した。

主席は全軍を幹部化していく過程がそのまま人民軍を「一当百」に準備さ

せていく過程になるようにし、これらのすべてが戦闘訓練の中で実現するように指導した。

1963 年 2 月のある日、主席は最前線の兵士たちを視察して、人民軍で掲げるべきスローガンは「一当百」である、戦闘訓練を正しくおこなうのが軍人たちを「一当百」に準備させ、人民軍を強化するための重要な方途となることについて教えた。

主席は人民軍の幹部化と現代化を実現するために、従来の 4 大綱領をさらに深化発展させ、独創的な 5 大訓練方針を示した。

主席が 1975 年 2 月、党中央委員会第 5 期第 10 回総会で示した、人民軍軍人が不屈の革命精神、巧みな戦術、剛毅な体力、百発百中の射撃術をもち、人民軍の中に厳格な軍事規律を確立することを規制した 5 大訓練方針は、人民軍の訓練目標と基本内容を示した指針であった。この 5 大訓練方針は現代戦の要求と軍人たちの戦闘能力を高める各要因を全面的に具現している科学的で革命的な訓練方針であった。

主席は全軍幹部化とともに全軍現代化を「一当百」の革命武力建設の根本問題の一つとして見なし、この活動に拍車を掛けて建軍史に永遠に輝く業績をなし遂げた。

現代戦の要求に即して革命軍隊を現代的兵器と戦闘技術機材で武装させることが全軍現代化である。

主席は 1961 年 12 月の朝鮮労働党人民軍委員会第 2 期第 2 回総会の拡大会議とその後の各機会に、人民軍の現代化はあくまでも去る祖国解放戦争の経験と教訓、わが国の軍事行動地帯の特性、主体的戦法、国の経済発展水準に即して行わなければならないと教えた。それによって曲射火力の比重を高め、武器と技術装備をより軽量化し、現代的武器、常用武器を強化し、国防工業の発展に伴って次第に威力ある現代的装備をつくりだし、すべての武装装備を機械化、オートメ化する方向に発展させるという原則が提示された。

主席は人民軍の武装装備の現代化を実現する上で現代的軍事科学技術を発展させることを先決条件と見なし、これに大きな力を入れるようにした。

各軍種、兵種の武装装備がより現代化されることにより、強力な軍事力を誇り、いかなる強敵が襲い掛かっても一撃の下に掃滅できる「一当百」の強兵に強化発展した朝鮮人民軍の面貌は、現実を通じて証明された。

今日、朝鮮人民軍は強い精神力とともに武装装備の面でも戦術武器だけでなく、戦略武器までも保有している最強の武装力となっている。

主席は人民軍を自発的な軍事規律をそなえた鋼鉄の精鋭隊伍として強化発展させた。

主席は 1953 年 10 月に朝鮮人民軍第 831 軍部隊の軍人の前で「部隊の戦闘力を強化するための課題」について演説しながら、われわれは抗日武装闘争当時から革命軍隊の規律は自発的なものでなければならないこと、抗日遊撃隊の輝かしい革命伝統を継承した人民軍の規律は当然自発的なものであるべきだ、ということを強調した。

主席は革命軍隊の規律を自発的な軍規と見る観点と立場から、常に政治活動方法、解説と説伏の方法によって軍人大衆の自発性を積極的に奮い起こして、人民軍の中に鋼鉄のような軍事規律を確立するようにした。

朝鮮人民軍の名称には「人民」という呼び名が厳かに付けられている。

朝鮮人民軍、この名称には人民の中から生まれた軍隊、人民の息子、娘として構成された軍隊、人民の利益のために戦う軍隊、軍民一致を実現していく軍隊、一言でいって、徹底した人民的性格を帯びている軍隊の特徴と面貌が集約されている。

主席は人民軍を人民の自由と幸福のために戦う真の人民の革命武力として建設することを不敗の革命強軍建設の重要な目標の一つとしておし立て、立派に実現した。

革命軍隊が人民を離れては戦いで勝つことも、存在することもできないというのが主席の持論であった。

主席はチュチェ思想の旗の下、朝鮮の革命武力をその誕生の初期から人民の息子、娘で組織され、人民の自由と幸福、利益のためにたたかう真の人民の革命的武装力として建設した。

1932年4月25日に創建された反日人民遊撃隊は、人民を革命の主人としておし立てるチュチェ思想の原理をそのまま具現して、人民の中で生まれ、人民のためにたたかう真の人民の軍隊であった。

主席は解放後、朝鮮人民軍を創建する時にも抗日の伝統を立派に継承して朝鮮の革命武力が反動を除いたすべての階級階層を網羅した、それこそ全人民の息子や娘で構成された人民の軍隊として組織するようにした。

主席は朝鮮の革命武力が人民の武装力としての高尚な風貌を備えるように指導した。

主席は1947年1月15日、保安幹部訓練所第2所将校会議でおこなった演説で、みなさんは人民の軍隊なのだから、人民には限りなく忠実で、敵とは獅子のように勇敢にたたかわなければならない、すべての軍人が実際の行動をもってわれわれの軍隊が真の人民の軍隊であることを示し、人民が人民軍を肉親のように愛し援護するようにしなければならない、と教えた。

主席は愛民性を革命軍隊の建設と活動の鉄則とし、一貫して堅持するように賢明に指導した。それで人民軍は軍民一致の美風を高く発揮していく革命的武装力に強化発展するようになった。

主席は将兵一致を保障することを人民の革命的武装力としての人民軍の重要な風貌と見なし、その実現に大きな関心を払って、すべての将兵が一つの思想と熱い同志的愛にもとづいた一致団結をなし遂げるようにした。

主席は指揮官、政治活動家に会うたびに、抗日武装闘争の時期に常に隊員の中に入って生活しながら隊員とともに歩哨を立った経験も聞かせながら指揮官、政治活動家が中隊に降りていって戦士の生活をして見てこそ、戦士たちの生活上の問題を適時に解決することができ、戦士たちには指揮官も特殊な人ではなく、平凡な労働者、農民の息子と娘であることをはっきり認識させることができると教えた。

主席の深い関心の中に人民軍ですべての将兵が一つの思想と熱い同志的愛によって一致団結をなし遂げたのは、人民軍の面貌を新たな境地でさらに完成させた輝かしい成果となった。

全国を難攻不落の要塞に

今日、世界には朝鮮のように正規武力の強化とともに全人民的、全国家的防衛体系を確立した実例は少ない。

現在、朝鮮の全人民的、全国家的防衛体系に世界が驚嘆しているのは偶然ではない。

世人が国家防衛体系樹立の手本として激賞する全人民的、全国家的防衛体系を立派に確立した方は偉大な主席である。

全民を武装させる問題は久しい前から試みられてきた。古代にギリシアのスパルタで奴隷を除き、当時の住民の多数を占めていた市民階級の男子たちに実施した「皆兵制」は、住民武装の初期形態であったと見ることができる。

今日、一定の年齢にある男性と女性の兵器着用の義務を規定し、正規的な常備軍を置かず、有事の際に全民武装化の方法によって国家防衛体系の確立問題を解決しようとする国々もある。

そのように見ると、朝鮮でのように正規的革命武力とともに全国的範囲で全一的に組織化された民間軍事組織と軍事訓練体系によるすぐれた全人民的防衛体系を確立し、いつでも侵略者とたたかえる万端の戦闘動員態勢をととのえている国はない。

主席が 1962 年 12 月、党中央委員会第 4 期第 5 回総会で示した「片手には銃を、片手には鎌とハンマーを！」という戦闘的スローガンは、朝鮮における全民武装化を明白に象徴している。

主席は全民武装化を実現する上で合理的な民間武力形態を誰もが自分の持ち場で働きながら、いつでも敵とたたかえるように準備した非常備的武装隊伍に規定し、1959 年 1 月 14 日、全国的範囲で全一的体系をもつ労農赤衛隊（今日の労農赤衛軍）を創建した。

労農赤衛隊は国の主人となった社会主義的勤労者たちの自発的な民間軍

事組織として武装で党と領袖を擁護防衛し、敵の侵害から革命の獲得物を固守する非常備的な党の革命的武装力である。労農赤衛隊の基本使命は、社会主義建設を立派に進めながら一朝有事の際には正規武力である人民軍と協同し、自立的に敵の侵攻から社会主義祖国の後方を頼もしく守るところにある。

主席は労農赤衛隊を政治的・思想的に、軍事技術的に強化発展させることに大きな力を入れ、民間武力としての戦闘力を全面的に強化するようにした。

主席は、1962 年 12 月、党中央軍事委員会拡大会議で、労農赤衛隊の幹部隊伍を立派に整え、武器の保管管理と掌握統制活動を強化し、すべての幹部と党員を軍事訓練に欠かさず参加させることについて教え、1964 年 1 月には各道、市、郡の労農赤衛隊の指導幹部の連席会議で労農赤衛隊を強化するための新たな革命的な措置を講じた。

1973 年 12 月のある日にも主席は、酷寒にもかかわらず、戦闘訓練に参加した載寧、青丹、新院郡内の労農赤衛隊員を接見し、彼らの動員準備状態と訓練状況を具体的に調べ、いかなる敵も撃滅できるように準備した彼らを激励した。

主席は 1970 年 9 月 12 日、青少年学生たちの自発的な武装組織である赤の青年近衛隊も組織し、それを強力な民間武力として強化発展させるようにした。

赤の青年近衛隊は党と領袖を武力で擁護防衛し、社会主義の獲得物を敵の侵害から守ることを自己の使命としている朝鮮労働党の指導を受ける学生青年たちの自発的な軍事組織として、学習を本務とし、祖国防衛の任務も遂行する革命的民間武力である。赤の青年近衛隊は侵略者が戦争を挑発する場合に、労農赤衛軍とともに後方を鉄壁のように守る上で重要な役割を果たすようになる。

主席は、民間武装力であると同時に正規武力の後続力量である赤の青年近衛隊を強力な武装力に発展させるために赤の青年近衛隊の軍事訓練、野営

訓練を強化するようにし、訓練の内容と形式、方法にいたるまで細心に感心し、指導した。

主席のエネルギッシュな指導と暖かい配慮の中で赤の青年近衛隊が労農赤衛軍とともに政治的･軍事的に準備した頼もしい党の革命的武装力として育つようになったのは、朝鮮の革命武力の誇りとなる。

これまで人類の戦争史は難攻不落の要塞とはあり得ないし、日増しに発展する威力ある攻撃手段の前ではいかなる要塞も崩壊することを示した。

主席は要塞化にたいする既存の見解と経験に終止符を打ち、敵のいかなる打撃にも微動だにせず、自己の陣地を最後まで守り、必要な場合、それに依拠して主動的な攻撃行動をくり広げることのできる鉄壁の要塞を全国に打ち立てる軍事要塞の建設の新たな道を開いた。

主席が全国要塞化の実現の原則として打ち出したのは、敵のいかなる火力打撃にも耐えることができるように全国の前後方を難攻不落の要塞、金城鉄壁につくることである。

祖国のどこにも一人の敵も入る場所がないようにするというのは、主席が示した全国要塞化の重要な要求である。

ある一つの地域や地点だけではなく、前線と海岸はいうまでもなく、国のいたるところにもれなく各種の強固な防御施設をつくって、ハリネズミのような防備策を講じれば、それがすなわち全国を要塞化したものとなる。

主席は 1963 年 7 月と 1964 年 1 月におこなった教示をはじめ、各機会に陣地を固め、対空地下構造物を大々的に建設することについて教えた。

独創的な全国の要塞化方針を示した主席は、敵を該当の境界線で完全に撃滅掃討できるように防御工事を質的におこなうことに深い関心を払った。

主席が傾注した献身の労苦があって、千里の防衛戦のすべての哨所、全国の軍事陣地と防御築造物が整備されるようになった。

全国が要塞化され、それが全民武装化と有機的に結び付けられた事実は、まだどの国にもその例がなかった。すべてのところが要塞化された朝鮮の現実は世人の驚嘆を呼び起こしている。

ある国の高位軍事代表団のメンバーは、朝鮮を訪問して「これまで多くの国々を見回ったが、この国のように全民が武装され、全国が要塞化されている国ははじめて見る。朝鮮は間違いなく軍事大国である」といった。

威力ある国防工業の建設

建党、建国とともに建軍を新しい祖国建設の3大課題の一つとして打ち出した主席は祖国に凱旋した初期に成すべきことが多かったが、国防工業の創設に第一の関心を払い、その歴史の初めての道を先頭に立って切り抜けた。

1945年10月2日、主席は解放前、日本帝国主義が砲弾加工と兵器修理をしていた平壌兵器製造所があった場所を訪れた。解放された当時には訪ねるべき工場や新設すべき工場が多かったが、自体の兵器工業、国防工業の建設のためにここから先に訪ねたのであった。

朝鮮の軍需工業建設の新しい歴史は解放直後、主席が大きな足跡を記した意義深いこの平川への道から始まった。

同日、酷く破壊された兵器製造所を見て回った主席は、この工場の破壊ぶりを見ただけでも、日本帝国主義侵略者がいかにあくどいものであったかがよく分かるとし、幹部らにわれわれはこれから、すべてのものが破壊された廃墟の上に民主主義の新しい朝鮮を建設しなければならない、われわれが富強な自主独立国家を建設するためには、党も創立し、人民政権も樹立し、国と民族を防衛する強力な正規武力も建設しなければならない、と述べた。

長きにわたる抗日革命闘争の日々、直接育てた抗日革命闘士たちを兵器工業部門に派遣した主席は1946年12月、砲兵技術訓練所を設置し、兵器工業部門の技術幹部を体系的に養成するようにした。そして、かつて兵器部門で働いた労働者、技術者を全国各地で探し出して工場に送るようにした。

解放後のある日、兵器技術者を呼んだ主席は今、正規武力を建設するための準備活動として、平壌学院と中央保安幹部学校を建てて幹部も養成しており、部隊も組織しているが、われわれは自分の軍隊を武装させる上で必要

な武器をどんことがあっても自体で生産し保障しなければならないと力強く述べた。

主席の高志を体し、兵器工場の労働者階級と技術者たちは兵器工業の歴史がなく、技術が足りない朝鮮では機関短銃をつくれないとし、他国で資材と部品を輸入するための輸入申請書まで持ち歩いていた事大主義者と技術神秘主義者の策動を断固粉砕し、抗日遊撃隊員が発揮した自力更生、刻苦奮闘の革命精神を発揮して最初の機関短銃の試作品をつくりだした。

1948 年 12 月 12 日、朝鮮の兵器工業の初の製品である機関短銃にたいする試射をおこなった主席は、3 発の銃弾が 10 点円の中に命中された的を見て、われわれの労働者階級が最初につくった機関短銃が非常に素晴らしい、命中率も高く集中性も良いと満足を表した。その日に主席が大きく響かせた銃声は、朝鮮で主体的な兵器工業の創設を告げるこだまであり、銃剣を重視する朝鮮人民のたくましい気概を世界に知らせる雷となった。

朝鮮の兵器工業の歴史を振り返る人たちは当時、主席が残した一枚の写真を通じて特別な感懐を感じるようになる。

主席は兵器工場の労働者階級が 1949 年 10 月に自分に送った数挺の機関短銃を受けてたいそう満足し、その機関短銃を金策、崔庸健、姜健、金一など、抗日革命闘士たちに授与し、彼らとともに意義深い記念写真を撮り、主体的兵器工業の歴史を世界に知らせたのであった。

1949 年 10 月の初のある日、ある幹部を呼んだ主席は、11 月に中国の首都北京で世界職業同盟大会が開かれるようになるが、ここに毛沢東主席も参加するだろうとし、わが国の職業同盟代表団が中国共産党中央委員会の主席に自分の名義の機関短銃 2 挺を贈ればいいと述べた。

それで 11 月の初旬、中国でおこなわれた世界職業同盟大会に参加した朝鮮代表団は、主席が送る機関短銃 2 挺を中国の指導幹部に丁重に伝達した。

主席が送った機関短銃を前にした毛沢東をはじめとした中国の指導幹部は驚嘆を禁じえなかった。

中国に比べて人口も、領土も余りにも取るに足りないし、銃が弱くて日

本帝国主義の完全な植民地として 40 余年間も踏みにじられていた朝鮮でまだ自分たちがつくれなかった自動兵器を他国の援助を受けることなく、自分の手でつくり出したのであった。

彼らは主席の指導がこうした結実を生んだことを深く感じ、朝鮮の労働者階級が兵器工業部門で収めた驚異的な成果を心から喜んだ。彼らは中国革命が試練を経ているもっとも厳しい時期に、朝鮮人民が自分たちを血でもって、物心両面で大いに援助するようにした金日成主席が、今回は機関短銃まで送りながら新たな力と勇気を与えたと激情を禁じえなかった。

主席が 1992 年 6 月、ある機会にわが国の軍需工業が歩んできた歴史を感慨深く追憶しながら、機関短銃は祖国解放戦争の時期に大きな役割を果たした、機関短銃がなかったならば、戦争は不可能なことであったと述べたことがある。

朝鮮の労働者階級がつくった機関短銃は祖国解放戦争で大きな功を奏した。

主席は解放後、空手で銃をつくった朝鮮の労働者階級の愛国熱意と気迫をさらに発揮させて、戦火の炎の中では君子里（クンジャリ）に兵器工場を設けて、さまざまな武器と弾薬を生産させた。

1952 年 3 月の初旬、君子里（クンジャリ）兵器工場にたいする主席の現地指導は、朝鮮の兵器工業の発展の新しい里程標をもたらした歴史的な一歩となった。

この日、主席はわが国で兵器工業を拡大、発展させるのは現時、醸し出された軍事・政治情勢と関連して非常に切実な問題として提起されているとし、地球上に帝国主義が残存している限り、兵器工場の建設を絶対に疎かにすることができないと強調した。そして今後の工場の発展方向と新たな兵器工場建設の方途を示し、工場の建設を早めるための具体的な措置を講じた。

兵器工場の労働者階級にたいする主席の現地指導と鼓舞は彼らを限りなく励ました。敵機の猛烈な空爆の中でも国の兵器生産基地が拡大強化され、新たな部門別兵器工場が建設されるにつれて、各種の砲弾と手榴弾、地雷と通信機材など、さまざまな武器と戦闘技術機材の生産が急激に増大されるよ

うになった。

解放後、ゼロの状態で自力によって兵器工業を創設して将来、国防工業の土台を築いた主席の賢明な指導こそは、軍事強国の万代の礎石を築いた根本要因であった。

世人は 1990 年代の朝鮮人民が民族の慈父を失い、歴史に類を見ない苦難の行軍、強行軍をせざるを得なかった時、それを克服した秘訣が何かについて好奇心をもっていた。

その時、敵対勢力の執拗な反社会主義、反共和国孤立圧殺と数年間続く自然災害がもたらした困難かつ苦難にみちた歴史の渦の中でも朝鮮は微動だにせず、社会主義の本来の姿を固守しながら逆境から順境へと、経済的圧迫状態から強国建設の道を開いていく劇的な転換をもたらした。

朝鮮労働党と朝鮮人民が、誰もが容易に達成できない奇跡を創造することができたのは、朝鮮人民と人民軍将兵の強い精神力とともに国防工業本位の強力な自立的な経済土台、自己式の特殊な経済構造があったからだということを歴史の逆風が一回吹きまくった後になってこそ、世人は知ることができた。これについては世界の世論も特別に強調した。

主席は民族国防工業を自立的に、現代的に発展させることを国と民族の生死存亡にかかわる重大な問題として提起した。

よその家の金塊より自らの家の金塊のほうがまさるという諺がある。この諺を確証しているように 1962 年に起こったキューバのカリブ海の危機は、大国に祖国防衛の運命を託しては失敗をまぬがれないことを再度教えた。

経済建設と国防建設の並進、これこそは主席が長い間、模索しながら探した社会主義建設と守護のための大綱であった。

経済建設と国防建設をともに堅持し、並進させていくことは、前例のない膨大な事業であり、領土や人口の数でも余り大きくない朝鮮の場合にはさらに困難な事業であったが、主席は自国と民族はあくまでも自力で守らなければならないという、不変の信念と意志、無比の胆力をもち、ためらいなく並進路線貫徹の道を選んだ。

経済と国防を並進させるという路線は、それだけでも既成の経験と前例を超越することであった。世人の驚嘆はこの戦略的路線が実現された現実を見る過程にさらに大きくなった。朝鮮は 1960 年代にとっくに政治において自主的で、経済において自立的な社会主義国としてのみならず、軍事的面でも自衛的な強国としてそびえ立った。

世界の帝国主義連合勢力とも単独で堂々と立ち向かえる自衛の強力な国防力をもった軍事強国を建設したのは、不世出の偉人、不世出の総帥である主席のみがなし遂げられる業績の中の業績である。

5. 人類解放の救い星

1）人類解放の前途を示した世紀の偉人

世界に光り輝くチュチェの光

金日成主席は時代と歴史、人民の大河の中でチュチェの貴い真理を発見し、それを起点にするチュチェの思想、理論、方法を全面的に深化発展させて、世界の進歩的人士と数億万の人民に自由と解放のもっとも貴い思想的・精神的武器を与えた世紀の偉人であった。

主席が創始し、深化発展させた不滅のチュチェ思想が人類の自由と解放のための闘争の前途を指し示す光、闘争の旗印となったのは、その絶対的な普遍的真理性にある。

自由と解放のために奮い立った進歩的人類は、普遍的真理性をもつ思想を時代の偉大な革命的旗印として公認し受け入れる。

1977 年 9 月 14 日から 17 日まで平壌で開かれたチュチェ思想に関する国際セミナーで日本のある人士は 100 余年前、50 余年前をマルクス・レーニン主義の時代であるといったならば、現代は金日成主義の時代であるとい

えるとし、すでにマルクスやレーニンは生存期間に制限された範囲で役割を果たし、マルクス主義やレーニン主義はそれを創始したマルクスやレーニンが逝去した後に世界的な基本思潮として波及された。しかし、金日成主義はその創始者である金日成主席が精力的に活動している現代にすでに世界的な基本思潮となり、世界人民の心を捉えていると激賞した。

彼が激賞したように、チュチェ思想はある一時代、ある一国や一民族の運命のみと結びついておらず、朝鮮人民だけでなく、世界の進歩的人類の解放闘争の前途を明示している。

金日成主席は次のように述べている。

「わが党のチュチェ思想は、世界の主人として生きようとする人民大衆の志向と要求を全面的に具現した自主思想であり、人類の完全な解放と世界の発展のためのもっとも強力な武器を与える科学的な革命思想であります」

不滅のチュチェ思想は、自主を根本的中核にして展開され、自主で一貫された徹底した自主の思想である。

主席は、革命の道を踏み出した当初から自主が帝国主義者をはじめとしたすべての圧制者、搾取者に踏みにじられていた朝鮮人民と全世界の被抑圧勤労大衆の共通の要求であり、根本的志向であることを科学的に洞察した。

主席は、血を流しながらも絶叫する朝鮮人民の独立万歳の叫びとモンゴル革命に歩調を合わせて中国、インドなど、アジア諸国で激浪のごとき沸き立つ革命の強い潮流に接しながら、自由と解放のかん声を叫ぶ被抑圧勤労大衆の共通の根本的志向と要求がまさに自主であることを確信するようになった。主席は何ものにも拘束されず、自己の運命の主人として生き発展していこうとする人間のこうした性質を自主性として規定した。

今まで人類思想史には多くの思想家、哲学家によって数多の思想と理論が提起されたが、人間の自主的本性、自主的に生きようとする人民大衆の志向と要求を正しく具現した自主の思想はチュチェ思想だけである。

チュチェ思想は、その哲学的原理と社会歴史原理はいうまでもなく、人

生観的原理と内容がすべて自主で一貫されている。自主を人間の生命、人民大衆の根本生命としておし立て、自主を実現する上で運命開拓の旗印がほかならぬチュチェ思想である。

いつか、チュチェ思想に魅了された外国のある人士は、金日成主席はチュチェ思想というテコで地球を、宇宙をもち上げげたと確信に満ちて話した。

不滅のチュチェ思想は、人類の解放偉業遂行の理論的・実践的問題に完璧な解答を与える百科全書的な思想である。

主席は、抑圧され蔑まれてきた人民大衆の自主的志向と要求を反映して不滅のチュチェ思想を創始し、それを各段階の革命闘争と政治、経済、軍事、文化のすべての分野に具現していく実践闘争の中で絶えず深化発展させた。

主席は終始一貫、チュチェ思想を唯一の武器とし、朝鮮革命の初期から二度にわたる革命戦争と二段階の社会革命、社会主義建設のための朝鮮労働党と人民の闘争を賢明に指導して人類解放偉業の輝かしい手本を創造した。

主席がチュチェの原理と原則を具現して示し貫徹してきた反帝反封建民主主義革命理論と新しい社会建設理論、社会主義革命と社会主義建設理論はすべてが自由と解放を志向するすべての国と民族が見習うべき闘争の教科書である。

主席が絶えず深化発展させたチュチェ思想には、人類の解放のために世界人民が共同で遂行すべき闘争戦略も科学的に示されている。

主席は人類解放闘争の戦略的目標とその達成のための闘争戦略を明示し、世界の社会主義運動と非同盟運動を全面的に強化し、世界の平和と安全を守り、自主的な新しい世界を建設する上で提起されるすべての理論的、実践的問題も正しく明示した。

今日、世界の進歩的人士と革命的人民が主席の創始し深化発展させた不滅のチュチェ思想の真理性と革命性、普遍性に魅了されて絶えず信奉し、見習うことは自主時代のおしとどめることのできない潮流となっている。

チュチェ思想の研究者は世界の5大陸のどこにもあり、それぞれの名称のチュチェ思想研究組織を設け、不滅のチュチェ思想を普及する活動を力強

く展開している。1969 年 4 月 15 日、マリで初めてチュチェ思想研究組織が結成されてからわずか 20 余年間に世界の 100 余カ国にチュチェ思想研究組織が結成され、チュチェ思想研究普及活動が力強くおこなわれ、研究者の隊列も多く増えた。

1978 年 4 月 9 日には、チュチェ思想研究普及活動を国際的規模でさらに拡大発展させるという現代の志向を反映して、チュチェ思想国際研究所が創立し、それを前後にして地域的なチュチェ思想研究所が各地域で結成されてチュチェ思想普及活動がさらに活発におこなわれている。

これとともに地域及び国際チュチェ思想研究セミナーが大規模で盛大におこなわれており、世界各国で多くの全国セミナー、連合セミナー、グループセミナー、各種集会がおこなわれている。

彼らはチュチェ思想研究とともに世界的範囲における普及活動も力強くおこなっている。金日成主席と金正日総書記、金正恩委員長の不朽の古典的著作を 60 余の民族語で翻訳、出版して普及しており、「チュチェ思想研究」「金日成主義研究」「チュチェの時代」をはじめ、各種の雑誌とニュースレターを世界 130 余の国々に配布している。

これらのすべての事実は、主席が創始し深化発展させたチュチェ思想こそは、自主時代の人類解放闘争の道をもっとも正しく示す思想的旗印であることを力強く確証している。

チュチェ思想の創始が宣言され、全世界に波及していた 20 世紀に次いで 21 世紀に入ってもわずか数年間に多くのチュチェ思想研究組織が新しく結成された。

世紀を次いで人類の前途を指し示すチュチェ思想が永遠な人類解放の旗印であることがさらに明らかになっている。

自主時代における人類解放闘争の最終目標

主席は現代にたいする正しい評価を下した上で、人類の自由と解放のための闘争の最終目標を示すことにより、人類解放闘争を新たな境地で目的指向性を持ってくり広げることのできる確固たる保証をもたらした。

現代に入って時代の評価問題は、人類の生存と人類社会の運命にかかわる重大な課題として提起されていた。

新時代に入りながら自主性のために世界各所で起こった社会主義諸国の人民の革命闘争とともに植民地諸国の人民の民族解放闘争、新しく独立した国々の新しい社会建設のための闘争は帝国主義、植民地主義者を不安と恐怖におののかせた。

帝国主義者と植民地主義者は、危機に処した自分らの運命を救うために社会主義諸国と自主的な独立国家に反対する露骨な侵略行為を働き、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の民族解放運動を野蛮に弾圧し、世界のいたるところで平和と安全を悪辣に攪乱した。そして他国と他民族の「独立」と「自由」を認めるふりをしながらも、反動化された軍部上層及び種族上層部の代表のような右翼階層を買収して、これらの国々にたいする新植民地従属化政策を実施した。

これによって新しく独立した少なからぬ国々が帝国主義者の侵略策動と狡猾な従属化策動に巻き込まれて右往左往しているかとすれば、期待をもって依存しようとしており、一部の社会主義諸国までも帝国主義者に恐れをなし、幻想をもつ傾向が現れている。

ここに現代修正主義者によって現代にたいするあらゆる誤った反動的見解が流布されていて、少なからぬ国々で新しい社会建設の進路を見出せず、右往左往していた。

こうした現実は、自主性を志向する社会主義諸国と新しく独立した国の革命家たちと人民をして今日の時代にたいする正しい認識をもち、いつにもまして反帝反米立場を堅持し、すでに獲得した民族的独立を強化し、国の繁

栄をなし遂げるための闘争を力強くくり広げることを切に要求していた。

主席は自主時代の人民大衆の解放闘争の切迫した要求を科学的に洞察した上で、現代を過去の時代と区別して自主性の時代として新たに定式化した。

現代が自主性の時代であるという主席の定式化には、今日の時代が抑圧され蔑まれていた人民大衆が自己の運命の主人として登場して、自己の運命を自主的に、創造的に開拓していく歴史の新しい時代であるという意味が込められている。

現代にたいする主席のこうした評価は、かつて生産道具の発展水準や社会経済制度の類型、社会発展で果たす特異な分野の役割と意義によって区分した見解と区別されるもっとも通俗的で独創的な科学的評価である。

現代にたいするもっとも正しくて独創的な評価を下した主席は帝国主義、支配主義に反対し、自主性を志向する国の国家元首と進歩的人士、人民に現代の本質と推移を正しく知らせて彼らが自主性を目指す闘争の道に確信をもって進むよう大きな心血を注いだ。

主席は世界の進歩的人民が時代の推移と全般的潮流を知ってこそ、それに合わせて自国と自民族の解放闘争を目指す正しい道を求めることができ、人類解放闘争の偉業の共同戦線で歩調をともにしていけると見なし、接見する外国の友人と人民に現代の本質と推移について分かりやすく通俗的に説明し、彼らを覚醒させた。

他人に拘束されて生きるのではなく、自主的に生きようとする世界人民の志向と要求を反映して現代を自主時代に定式化し、自主時代の推移を正しく目覚めさせる主席の教示は、現代にたいするいかなる見解や規定とも対比できない通俗性と科学性によって、日増しに大きな感化力を表し、世界の数億万人民の共感を呼び起こした。

主席は、現代の本質にたいする科学的解明にもとづいて人類の自由と解放のための闘争の最終目標を明示することにより、人類の解放闘争を現代の潮流と一致させて力強く展開していける確固たる展望を開いた。

自由と解放の旗印は、人類が久しい前から掲げた闘争のスローガンであった。

しかし、どこまでどのように闘争すれば真の自由と解放をなし遂げることができるのかについては主張も異なり、見解もそれぞれであった。

すぐれた英知と非凡な洞察力をもって20世紀の時代的潮流の自主的本性を最初に見抜いた主席は、人民大衆の本性的志向と要求の実現の見地から人類解放偉業遂行の最終目標を新たに示した。

主席が新たに解明した人類解放偉業遂行の最終目標は、人民大衆の自主性を完全に実現することである。

これには、自由と解放のための進歩的人類のすべての闘争が徹底して自主性を実現することに服従しなければならないし、自主性を完全に実現する時まで解放闘争を絶えず展開しなければならないという貴重な思想が込められている。

主席は自主性を完全に実現する上で提起される重要な戦略的課題についても明白に示した。

主席は朝鮮革命をおこなった当初から終始一貫、帝国主義が人民大衆の自主性を抑圧する民族的従属と階級的支配の根源であり、植民地国の人民にたいする民族的従属と支配は帝国主義の本性であり、生存方式であると見なした。

主席は、まさに帝国主義の反動性にたいする科学的眼識をもっていたので、帝国主義を完全に一掃することこそ、人民大衆の自主性を実現していく根本条件をもたらすための闘争となり、人類解放闘争の最終目標を実現するために第一義的に解決すべき課題となると確言したのであった。

主席は世界的範囲における社会主義の全面的な勝利を人民大衆の自主性を完全に実現するための重要な課題として提起した。

主席はクウェート「アル・カバス」新聞社総局長が提起した質問にたいする回答をはじめ、各教示と談話、演説で人民大衆があらゆるものの主人となり、すべてが人民大衆のために奉仕する社会主義社会は人民大衆の自主的

で創造的な生活と永遠な未来を保障するすぐれた社会であることについて具体的に述べた。

主席が人類解放闘争の最終目標を新たに解明することにより、人類の解放偉業は全世界的範囲で帝国主義、植民地主義を完全に一掃し、すべての国とすべての民族が民族的あるいは階級的な従属から脱して、社会主義を完成する歴史的な闘争道程を経て完遂されるというのが新たに解明された。

ラテンアメリカのある政治家は、金日成主席は不滅のチュチェ思想を創始し、人類の自主偉業の道を明示した偉大な思想理論家であるとし、自主への道、まさにこれが現世紀の基本潮流であり、新世紀の人類の進路であると激賞した。

主席は人類解放を目指す闘争の発展とその勝利の合法則性についても科学的に示した。

主席は、人類の解放闘争の発展とその勝利は各国で革命が成功裏に遂行される過程を通じて、そして各国の革命が互いに支持し補充する過程を通じてなされることを新たに闡明した。

主席が新たに示したこの理論には、人類解放を目指す闘争の発展とその勝利が世界的範囲で同時になされるものではなく、個別的な民族国家で革命が勝利する過程を経てなされることと、各国における革命の勝利は該当の国の革命の主体の決定的役割によってもたらされるという真理が込められている。

主席が人類解放を目指す闘争の発展とその勝利の合法則性にたいする理論を新たに科学的に示すことにより、自主性を志向する世界のすべての国と民族、被抑圧人民が自由と解放のための闘争をもっとも正しい戦略戦術にもとづいて展開できる威力ある武器がもたらされるようになり、人類の自由と解放のための闘争史に存在してきた偏狭な民族利己主義と民族排外主義に決定的打撃を加え、世界の進歩的人民が確固不動の主体的立場と国際主義的立場にしっかり立って人類の解放偉業を力強く推進できるようになった。

現時、人類共同の闘争課題

金日成主席は、自主化された新しい世界を建設することを現時、世界人民が共同で堅持していくべき課題として示した。

主席は誕生 80 周年に際して共和国政府が催した宴会でおこなった演説で、帝国主義者と反動派の主観的意思に反して、自由で平和な新世界の建設が可能な社会的・歴史的条件がいっそう整えられ、自主性を目指す世界人民の闘争で新たな転換が起こっている時代的環境を科学的に分析しながら、今日、世界の進歩的人民の前に提起される共同の課題は、自主化された新しい世界を建設することであると明示した。

主席が示した自主化された世界を建設するという共同の闘争戦略は、自主性を目指す世界人民の闘争がいまだかつてなかった大きな幅と深さをもって前進していく、自主時代の推移全般にたいする科学的な分析にもとづいたものであった。

日増しに世界のより多くの国々が自主の道に進んでおり、自主性を志向する激しい潮流が帝国主義、植民地主義の支配と干渉の逆流を押しのけながら世界のすべての大陸を席巻していた。社会主義力量が日に日に強化される一方、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの植民地諸国で民族解放闘争の炎が激しく燃え始め、1950 年代の中葉から 1980 年代の末まで 100 余の諸国が民族的独立を成し遂げ、新しい社会建設の道に入った。

主席はちょうどこうした時代の要求にたいする科学的な分析にもとづいて、自主化された世界を建設することを現時代の世界人民が遂行すべき共同の闘争課題として示したのであった。

主席が示した自主化された世界を建設するという共同闘争戦略は、現時、帝国主義者をはじめとしたすべての反動勢力によって醸し出されていた複雑で緊張した国際情勢にたいする正確な分析にもとづいたものであった。

主席は全世界の自主化を目指す闘争が本質においてどのような闘争であるかについても解明した。

主席が新たに解明した自主化された世界を建設するための闘争は、本質において帝国主義、植民地主義をはじめとしたあらゆる支配主義を完全に一掃し、すべての国と民族の自主権が完全に実現される世界を建設するための闘争である。

自主化された世界を建設するための闘争は帝国主義、植民地主義を最終的に一掃するための闘争である。

主席は 1982 年 10 月 26 日、朝鮮を訪問しているパキスタン大統領を随行した記者たちが提起した質問に答えながら、今日国際情勢は極めて複雑で緊迫している、国際緊張状態を緩和し、世界の平和を守るためには、全世界の自主化を実現しなければならない、そのためには世界のすべての国、すべての民族が外部勢力のあらゆる支配と従属から脱し、民族的独立を達成しなければならないと教えた。

すべての国、すべての民族が外部勢力のあらゆる支配と従属から脱して民族的独立をなし遂げ、自主性を確固と堅持していく時、全世界の自主化が実現されるであろうし、そうなる時、帝国主義者が孤立されて役に立たず、世界の平和が保障されるだろうという科学的判断にもとづいた意義深い助言であった。

自主化された世界を建設するための闘争は、あらゆる支配主義を完全に一掃するための闘争であると同時に、国と民族の自主権が完全に実現される民主化された国際社会を建設するための闘争である。

もちろん、世界には大きな国もあり、小さな国もあり、発展した国もあり、発展途上の国もある。しかし、すべての国は平等で自主的である。それゆえ、国の大きさや発展程度にはかかわらず、すべての国の間には支配と従属の関係ではなく、平等かつ公正の国際関係が成されるべきである。

主席は 1991 年 6 月 1 日、日本共同通信社社長が提起した質問に回答を与えながら、自主性は社会的人間の生命であり、国家と民族の生命である、対内的には人民大衆が国家と社会の主人としての地位を占め、主人としての役割を果たすようにすることにあり、対外的には国と民族の自主権を確固と

保障し、自主、平和、親善の理念にもとづいて世界各国との友好・協力関係を発展させるべきである、と述べた。

主席はすべての国と民族が自主性を確固と堅持し、対外関係でも自主権を堂々として行使していくことを自主化された世界を建設するための重要な原則的方途として提示した。

主席は国と民族が対内的にすべての路線と政策を自国の実情に即して独自に策定し、自力で貫徹するだけでなく、対外的にも完全な自主権を行使しなければならないことについて具体的に示した。

主席によって自主化された世界を建設するという戦略が示されることにより、進歩的人類は支配と従属の古い世界を爆破し、自主と繁栄の明るい新世界に向かって力強く闘争していける必勝不敗の戦闘的旗印がもたらされるようになった。

今日も世界の進歩的人士と数億万の人民は、自主化された世界を建設する戦略を「全世界の人民が恒久的に堅持していくべき闘争綱領」「世界の人民を自主偉業の勝利へと力強く奮い起こす偉大な鼓舞的旗印」であるとし、それに全的な支持と共感を表しており、全世界の自主化に関する戦略を示した主席に限りない感謝と称揚の挨拶を送っている。

進歩的人民に自覚させた団結の戦闘的旗印

主席は、人類解放偉業の最終的勝利を収める上で反帝自主勢力の強化がもつ重要性を誰よりも深く感じ、自主性を擁護する世界の人民の団結を強化することを現代、自主時代の人類解放闘争の戦略的スローガンとして示した。

主席は最高人民会議第９期第１回会議でおこなった演説で、自主化された世界を建設するための闘争は世界人民の共同の偉業であり、この闘争で主体は自主性を擁護する世界の人民であるので、世界人民間の親善と団結を強化してこそ、帝国主義者の妨害策動を粉砕し、自主化された新しい世界を成果的に建設することができ、各国の自主的発展も保障することができると強

調した。続けて主席は、自主性を擁護する世界の進歩的人民が帝国主義者の分裂離間策動に団結の戦略で立ち向かわなければならないとし、自主性を擁護する世界の人民の団結を人類解放偉業の実現の戦略的スローガンとして示した。

主席が新たに示した自主性を擁護する世界の人民の団結を強化するという戦略的スローガンは、自主化された世界建設の主体がほかならぬ自主性を擁護する世界の人民であるという確固たる見解にもとづいている科学的なスローガンである。

主席が新たに示した「自主性を擁護する世界の人民は団結しよう!」というスローガンは、人類の解放闘争が新たな幅と様相を呈してくり広げられている自主時代の要求をもっとも正しく反映して、自主化された世界を成功裏に建設する威力ある旗印である。

主席は全世界的範囲で労働者階級だけではなく、各階層の人たちが人間の自主性、国と民族の自主性を擁護する闘争に広範に奮い立っており、単に抑圧と搾取から脱するだけでなく、新しい社会を打ち立て、社会主義を建設するための広範な闘争へと自主性を目指す闘争が絶えず拡大されている時代の要求を正しく具現して「自主性を擁護する世界の人民は団結しよう!」という新たな戦略的スローガンを示した。

主席が新たに示した「自主性を擁護する世界の人民は団結しよう!」という革命的スローガンは、国際革命勢力を全面的に強化する闘争の武器である。

自主的な世界はそれを志向する世界人民の国際革命勢力によって建設され完成される。国際革命勢力は自主化された新しい世界建設の主人であり、直接の担当者であり、推進力である。それだけに自主化された世界の建設を目指す闘争勢力を強化することはその勝敗を左右する要の問題となる。

主席は自主化された世界を建設する国際革命勢力を強化するためのキーポイントをまさに団結で探した。団結のみが各国での革命勢力を一つに結束させるだけでなく、自主性を志向する全世界の人民を一つに結束させるこ

とができると見なしたのであった。

主席が自主化された世界を建設するための闘争勢力を準備し強化するために打ち出した団結はすなわち、この闘争の主力である社会主義勢力の団結であり、非同盟諸国をはじめとしたすべての発展途上諸国の団結であり、社会主義勢力と発展途上諸国の団結である。自主化された世界建設を志向するすべての勢力、すべての国が一つに固く団結する時、国際革命勢力は全面的に強化され、世界の自主化偉業がさらに力強く前進完成されるというのは、主席が構想し新しく打ち出した団結の戦略である。

自主性を団結の旗印としておし立て、自主性の原則に徹底してもとづいてこそ、政見と信教、制度と民族を異にする広範な自主勢力を団結させることができ、自主化された世界建設の強力な勢力を整えることができる。自主性にもとづいた団結は強固であり、それは全世界の自主化を実現するための闘争で不敗の力の源泉、勝利の決定的要因となる。

主席が新たに示した「自主性を擁護する世界の人民は団結しよう！」という闘争スローガンは、誰にも受け入れる普遍性と真理性によって、世界の数億万人民を一つの絆で結びつける強力な武器となっており、世界の反帝自主勢力の団結と威力を全面的に強化し、自主化された世界を建設するための進歩的人民の闘争を絶えず激励している。

日本のある社会活動家は自分の著書で、偉大な金日成主席がわれわれの時代、自主性の時代が切実に要求していた世界革命の戦略的スローガンを示したのは、実に現代の偉大な歴史的出来事である、このスローガンこそは、世界の革命的人民が人類解放の偉業を完遂するまでの全歴史的期間にわたって掲げるべき世界革命の戦略的スローガンである…世界の革命的人民は金日成主席が打ち出した戦略的スローガンを限りない感激と歓呼の中で心から受け入れたということは団結のスローガン、闘争の戦略に接した進歩的人類の一致した気持ちを代弁したものであるといえる。

今日、世界の多くの進歩的人士と数億万の人民は、自主性のための闘争の道に一つの絆として結び付ける強力な武器をもたらして団結の新しい歴

史を開いた主席を「反帝自主勢力の団結のために一生をささげた偉大な指導者」として限りない尊敬と賛辞を惜しまなかった。

２） 人類解放闘争を自主の道に引導した政治元老

民族解放運動の新たな高揚期を切り開き

20 世紀の初旬に入りながら政治的独立の道を開拓することは、朝鮮をはじめとした世界の多くの植民地および半植民地諸国で一刻の猶予もゆるされない運命的な課題として提起されていた。

しかし、当時、民族解放運動を標榜した多くの人たちが植民地民族問題解決の正しい指針をもって戦えなかったことにより、世界の多くの国と民族の民族的独立をなし遂げるための闘争は失敗と紆余曲折を経ていた。

エンゲルスはヨーロッパ住民が移住した植民地については独立を予見したが、土着住民が住む植民地は宗主国の労働者階級が革命で勝利した後、その管理の下にあり、一定の時間が経過した後に独立できると予言した。レーニンはすべての民族は平等かつ自主的で国家的分立の自由と政治的自決権をもつべきだと提起したが、植民地諸国が従属国から分立して民族国家となるための闘争は宗主国の労働者階級の革命闘争にかかっているといった。

しかし、時代は前進し、革命も発展した。かつて、抑圧され蔑まれていた植民地および半植民地で広範な人民大衆が歴史と自己の運命の主人として登場して自主的に、創造的に自己の運命を開拓していく新たな時代に入った。

時代と革命の要求を敏感にとらえ、従来の理論の制限性を科学的に洞察した上で、民族自体の力で国の独立と民族の自主権を実現していく前人未到の道を歴史上初めて開拓した方は偉大な主席であった。

主席は抗日革命戦争の全期間、常に自主的立場にしっかり立って、すべての革命路線と方針を示し、自体の革命力量に依拠して民族解放のための闘

争を力強くくり広げたので朝鮮民族はとうとう、数十余年間も続いた日本帝国主義の植民地統治を終わらせ、祖国解放の歴史的偉業を成就することができた。

世界の多くの植民地および半植民地諸国の独立運動者と人民は、東方の朝鮮で燃え上がった解放闘争の激しい炎を目撃し、それを独立と自由のための闘争の手本にした。

1968 年 1 月、キューバの首都ハバナでは 70 余カ国から来た進歩的文化人たちの参加の下に世界文化大会が開かれた。

大会では自力で民族解放革命の勝利を収める新時代を開拓し、とうとう帝国主義植民地体系に最初の突破口を開いた主席を敬慕して「金日成主席の直接的な指導の下に組織展開された朝鮮人民の抗日武装闘争」であるという書類を採択した。書類では主席が組織指導した朝鮮における抗日武装闘争の経験が現時、植民地民族解放闘争の普遍的経験であり、理論であることを確証した。この書類は自主の旗の下に民族自体の力で国の独立と民族の解放をなし遂げた主席の卓越した功績にたいする世人の一致した公認と称揚の表しであった。

自力独立の偉大な手本を創造した主席は朝鮮を訪ねてくる独立運動指導者たちと抗争闘士、そして反帝民族解放闘争を大いに支持声援している国家元首と進歩的人士らに自力で政治的独立をなし遂げた貴い経験と勝利の秘訣を教え、大きな信念と勇気を与えた。

ゆえに、主席がなし遂げた抗日武装闘争の経験を見習うために朝鮮に多くの政治活動家と抗争闘士が訪ねてきた。

その中には国の自由と民主主義のために力強く戦っているドミニカ人民運動代表団もあった。彼らは 1967 年 5 月、自主的な独立思想の第一の体現者であり、輝かしい実践家である主席を接見し、すでに収めた成果を強化しながら国の発展を成し遂げるための助言を受けるために朝鮮に来たのであった。

主席は彼らに自分は革命の道を踏み出した当初からわが国の革命を自

主的に遂行し、この過程に事大主義、教条主義とあらゆる日和見主義に反対し、自国の革命路線を自分お頭で思考して立て、提起されるすべての問題を自力で解決してこそ、革命と建設で成果を収めることができるということを確信したと述べた。

自国と自民族の運命を開拓するための革命を誰が代わってやることもできず、ひたすら自分自身が主人となって自力で遂行しなければならないということは、主席が深刻な体験の中で体得した真理であった。主席が彼らにおこなったこの教示には、国の独立は誰がプレゼントしないし、どこから物乞いし、自ずと実現されないという深奥な意味が込められている。

アジア、アフリカ、ラテンアメリカの多くの国の革命家と被抑圧人民は主席が開拓した植民地民族解放闘争の新たな道に沿って民族解放闘争により力強く奮い立った。

ジンバブエの抗争闘士が朝鮮の抗日遊撃隊員は正規軍の支援もなく、国家的後方もなく、人民の支持以外には誰の援助も受けられない困難な条件で草の根を噛みながら満州広野の吹雪の中で 15 年間も爪先まで武装した日本帝国主義と戦って勝利した、ところが、吹雪はなく、1 年中暑くて行く先々にバナナをはじめ、さまざまな果物と食べるものが多いわがアフリカでどうして戦えないのか、われわれも立ち上がって帝国主義に反対して戦うべきであり、また戦えば、勝利できるというのは、主席が崇高な手本を創造し、貴重な経験で指導した植民地民族解放闘争が新たな高揚期に確固と入り、自力独立のための闘争がおしとどめることのできない潮流となったことにたいする明白な実証であった。

早くから革命の道を踏み出した当初から植民地民族解放闘争の歴史的教訓と革命闘争の根本道理を深く洞察した主席は、踏みにじられた同胞を救い、国と民族の自主権を取り戻す道はただ銃で革命をおこなう道だけであるという動かしがたい真理を体得した。ゆえに、主席は反帝武装闘争を民族の自主権を取り戻すための第一の革命路線として打ち出した。

組織的で積極的な武装闘争によって民族的自主権の確立の手本を示し、

植民地および半植民地諸国の人民が銃剣に依拠する民族解放闘争の新たな突破口を開いたまさにここに、主席が組織指導した抗日革命戦争勝利の世界史的意義がある。

新しい社会の建設闘争に画期的局面をもたらし

帝国主義植民地支配からの解放は、自主性を目指す人民大衆の解放闘争でもっとも大きな歴史的転換となる。しかし、それによって人類が世紀を次いで願ってきた自由と解放の歴史的課題がすべて遂行されるのではない。

主席が新しい社会を建設するための他国と他民族の闘争を指導する上で第一義的な力を入れた問題は、彼らが政治的自主性を徹底して実現させることであった。

金日成主席は次のように述べている。

「政治的自主性は、自主独立国家の第一の表徴であります。いかなる民族であっても、政治的自決の権利をまともに行使してこそ、国の完全な独立を保障することができます」

主席が朝鮮を訪問したジンバブエ国会代表団との談話で述べているように、政治的自主性のない国は、たとえ大統領がおり、国会があるとしても真の独立国家とはいえず、そういう国は再び外国に従属されるものである。政治的見解ももてず、他人の言葉を唯唯諾諾と従う執権者はいくら絶対的な権限をもっているとしても、傀儡に過ぎず、自国、自国人民の利益のために奉仕しない国会は実際において他人の拍子に踊るクラブに過ぎない。

それで主席は、国と民族の政治的自主性を保障することを終始一貫、自主独立国家の第一の表徴、第一の生命としておし立てたことであった。

アメリカのある女流記者は、解放を迎えた朝鮮を訪ねた。早くからアメリカを離れて長い間、海外で生活しながら文筆活動によって帝国主義とファシズムに反対し、平和と民主主義のための世界人民の闘争を支持してきた進歩的な記者である彼女が朝鮮に来たのは 1947 年 8 月であった。

彼女は主席の賢明な指導の下に解放後、全国が新しい社会建設で沸き立っていた朝鮮の各地を参観した。

現実を目撃すればするほど、そして時間が流れれば流れるほど、驚きと感嘆を禁じえなかった彼女は、元山で行われた記者会見で自分が朝鮮に来て感じた感想を率直に打ち明けた。彼女は自分が北朝鮮に来て何よりも驚いたのを、政権を運営し、経済を建設し、人民生活を営むこれらのすべての活動を主席の自主的な政治を高く奉じ、朝鮮の人たちが責任をもって自力で解決していくことであるとし、現地を参観する過程に受けた大きな感動についても具体的に話した。

この記者会見にたいする消息は新聞、通信、放送を通じて内外に広く報道された。

朝鮮にたいする参観を終えた彼女は、自分が帰ると正義の筆を掲げた記者として、自主の旗の下に前進する北朝鮮の現実を紹介する記事を自国と他国の新聞に掲載し、書籍もぜひ書くと本音を言った。

翌年の 1948 年の初旬にヨーロッパのある出版物には彼女が帰国しながら書いた朝鮮訪問印象記が掲載された。朝鮮の現実をありのまま紹介した印象記であった。彼女の訪問印象記には、朝鮮に滞在する日々に行く先々で自主的な人民の政権の下に自主政治が実施されて、自主的な新しい社会を打ち立てる朝鮮の荘厳な現実にたいする強烈な印象が少しも飾り気もなく叙述されていた。彼女の印象記は主席が解放後、実施した自主政治が真の新しい社会建設の道に進もうとする世人に政治的自主性の実現の実践的模範になったという歴史的事実にたいする是認でもある。

資本主義国を代表するアメリカのある記者が、新しい社会建設を早める朝鮮に直接来て見て書いた記事は、発表されるや否や各国の通信と新聞、放送を通じて広く報道された。それは、解放された朝鮮、新しい社会建設で沸き立つ朝鮮に世界人民の耳目が集中されるようになった重要な契機となった。

これを契機に世界の多くの進歩的人士と人民は長い間、日本帝国主義の

植民地となっていた朝鮮が民族的独立後、どのように変わったかについてより良く知るようになり、自主的な政権の下で新しい民主朝鮮建設の輝かしい成果を収めている朝鮮人民を熱烈に祝賀した。

主席は1991年4月、国際議会同盟第85回総会の開幕会議でおこなった歴史的な演説「自由、平和の新しい世界のために」でも公正な新国際秩序を樹立する活動を人類が志向する新しい世界を建設するための重要な要求として提起し、その実現の原則的方途について全面的に示した。

主席は演説で、政治、経済、文化のすべての分野で不平等な旧国際秩序をうちこわし、公正な新国際秩序を確立しなければならない、世界には大国と小国はあっても、地位の高い国と低い国はありえず、発達した民族と未発達の民族はあっても、支配する民族と支配される民族の区別はあってはならない、すべての国と民族は国際社会の同等の構成員として、自主的で平等な権利をもっている、国際関係ではいかなる特権や専横も許容してはならず、相互尊重と内政不干渉、平等と互恵の原則にもとづいて諸国間の友好と協力を積極的に発展させなければならない、と指摘した。

主席の演説が発表されるとすぐ世界は、それを「新しい国際秩序の内容を全面的に示した百科全書的な演説」「公正の国際秩序確立の輝かしい旗印」であると称揚し、人類の解放偉業に大きく貢献している主席にたいする限りない敬慕と感謝の情を禁じ得なかった。

それゆえ、朝鮮を訪ねて自主の深遠な真理を体得し、自主の偉大な武器で新しい社会建設を力強くおし進めるという固い決意をもって帰国する外国の多くの友人と人民は、主席が示した自主の道に進む時、必ず勝利と繁栄のみをなし遂げることができるという信念と意志で胸を燃やし、「金日成主席は自主性の象徴、自主性の守護者」であると、異口同音にいった。

主席は新しい社会建設に入った国々が自力で自立的民族経済を建設していく巨大な創造の歴史を初めて開拓し実践してきた偉大な先駆者であった。

1983年10月、主席は、ある国の政治活動家を接見した時、朝鮮の自立

的民族経済建設経験を分かりやすく聞かせ、経済的自立へと導いた。

主席は戦後、わが国の都市と農村はアメリカ帝国主義によって廃墟となり、われわれに残ったものは何もなかった、当時、われわれには一枚のれんが、１ｇのセメント、一片の鉄材もなかったし、それに戦争の時期に多くの青壮年がアメリカ帝国主義者と戦うために人民軍に出ていたので、労力も非常に足りなかったとし、当時の困難な国の状況を具体的に述べた。

そしてわれわれは戦後、国の状況が非常に困難であったが、領土があり、人民があり、人民政権があり、人民を指導する党がある以上、国のすべてのものがいくら酷く破壊されたとしても、再び新しい生活を創造できるという確固たる信念をもって、戦後の復興建設のための闘争に全人民を奮い立たせたと話した。

主席は自立的民族経済建設路線を打ち出し、あくまで貫徹したことと、他国の援助よりも自力を信じて自分の手で復興建設をおこなったことについて教えた。

他国の援助によってではなく、自力で国の経済を建設した生々しくて意味ある主席のこの助言は彼の心の琴線にふれた。

新たに独立した国、発展途上諸国の人民を経済的自立の道に導きながら主席がもっとも重視した問題は、これらの国々間の協力と交流を拡大し発展させることであった。

主席は 1974 年 9 月 19 日、ダオメー政府機関紙「ダオ・エクスプレス」社長との談話で、発展途上諸国の協力を実現することがなぜ必要であり、実際的可能性がどこにあるのかについて具体的に教えた。

主席は、発展途上諸国は帝国主義が「援助」の美名の下に、経済的な侵略を断行できないようにするためにも、また、すでに獲得した民族的独立を強固にし、国の繁栄をなし遂げるためにも必ず経済、技術面での協力と団結をなし遂げなければならないと述べた。主席は、続けて発展途上諸国は協力を強化することができるすぐれた経験や技術ももっている、現在、発展途上諸国には 100 余の国があるが、これらの国がすぐれた経験と技術を一つずつ

出し合っても、100余りのりっぱな経験と技術を得ることができる、発展途上諸国はこれだけを交換しても、大きな問題を解決することができる、と教えた。

主席の教示は各国の自然富源と技術的潜在力を具体的に分析したことにもとづいた、実に賢明な助言であった。

人民が主人となった新しい社会、新しい生活創造で自衛的国防力の建設が占める位置と重要性を誰よりも明るく見抜いた主席は、自衛的国防力建設の輝かしい模範を創造し、新しい社会建設に奮い立った発展途上諸国人民を導いた。

主席は1971年9月、コロンビア国会代表団が訪朝した時にも、自衛的な国防力建設の重要性について、わが国の実例を上げながら具体的に述べた。

主席は1962年に起こったカリブ海危機は、われわれに国の自主権を守るためには自立的民族経済を建設するだけでなく、自衛的国防力をさらに強化しなければならないという深刻な教訓を与えた、それでわが党は経済建設と国防建設を並進させるという路線を打ち出し、それを実現するために闘争している、と述べた。

主席は1980年4月、ザンビア大統領と1981年9月、イラン国会代表団との談話でも、わが国が困難な条件でも自立的民族経済を建設し、国防における自衛を実現したので政治的自主性と民族的独立を固守しているとし、民族的独立を強化する上で人民大衆を固く団結させることも重要であるが、自衛的国防力を建設するのが非常に重要であると懇ろに述べた。

主席が新しい社会を建設している国々に自衛的国防力を建設することがもつ重要性について実例を挙げながら具体的におこなった助言は、朝鮮ですべてのものが不足し困難な時にすべてを克服しながら自衛的国防力を建設したことがどんなに正当であったかについての確信として一貫されており、それで自衛的国防力建設の道に導く貴重な経験となるのであった。

社会主義運動を自主の軌道に乗せ

主席にとって社会主義はすなわち自主であった。自主性を志向する人民大衆の選択はすなわち社会主義であり、自主によって建設しなければならないのがまさに人民が主人となった社会主義であるということは、主席の心中に常に刻まれている政治的信条であった。

主席は 1973 年 8 月 25 日、日本の大阪府知事一行を接見した時にも自主的に、独自的に社会主義を建設してきた朝鮮の経験について分かりやすく教えた。

主席は知事一行に、朝鮮ではどのようになって新しくて独創的な路線を打ち出し、自力で社会主義を早く建設することができたのかという彼の質問に具体的な回答を与えた。

主席は新しくて独創的な路線を打ち出し、社会主義を建設したのは、他国の実情とわが国の実情が異なるからだ、ヨーロッパの社会主義諸国の場合を見ると、それらの国々はかつて正常な資本主義の発展段階を経た条件で社会主義革命を遂行した、しかし、わが国は正常な資本主義の発展段階を経なかった、それでわが国では解放直後、社会主義革命ではなく、反帝反封建民主主義革命を遂行した、と述べた。そして 1955 年 4 月のテーゼで、社会主義革命を本格的に早めるという方針を打ち出した時にも、ヨーロッパの一部の国の人たちは工業の土台がない条件でどのように協同化を実現することができるかといってわれわれをあざ笑ったが、協同化が農民たちの生活上の要求として提起されており、それを遂行できる主体的力量が準備されている条件で、他国の人々があざ笑っても構わず、協同化を力強くおし進めたし、他のすべての活動はいうまでもなく、インテリの問題をはじめとした民族幹部養成問題に至るまで、すべてをわが国の実情に即して自主的に解決した、と述べた。

主席は彼に、各国の革命の主人はその国の人民自身であるので、すべての路線と政策を自国の実情に即して独自的に打ち立てて自分のやるべきこ

とは自力でやらなければならない、もちろん、他国の経験を受け入れる場合にも、自国に必要であり、自己の実情に合致すれば受け入れ、そうでなければ受け入れてはならないと述べた。そしてわが国が革命と建設で自主的な原則を確固と堅持してきたので、アメリカ帝国主義によって分裂され、大国の間に挟まれており、周辺の情勢が複雑であっても少しも微動だにせず、自己の主張をあくまで固守することにより、社会主義建設で大きな成果を収めていることについて具体的に説明した。

自主の信念が脈打つ主席の教示は、早くから自主で革命の錨を上げ、ひたすら自主で国と民族の独立と新しい社会建設、社会主義偉業を勝利へと指導してきた主席から聞くことのできる貴重な教示であった。

20 世紀が終わっていた 1990 年代に入りながら、人類の解放偉業は大きな難関に直面するようになった。ソ連をはじめとした東欧諸国で社会主義が崩壊する悲劇的な事態が起こったのである。

世界の社会主義運動で醸し出された悲劇的な事態によって、社会主義偉業、人類の解放偉業に及ぼす結果を全面的に分析、洞察した主席は、社会主義偉業と人類の運命にたいする責任感を強く自覚し、挫折した社会主義運動を再建し、より力強く前進させるために心血を注ぎ、労苦を尽くした。

主席は、社会主義勝利の必然性にたいする科学的な解明を与え、自由と解放を渇望する世界の進歩的人類に大きな希望と信念を与えただけでなく、社会主義再建の画期的契機をもたらすために心血を注いだ。

主席の誕生 80 周年を迎え、世界の各大陸、各地域で多くの外国の友人と人士は主席がおられる平壌に集まった。主席にたいする限りない敬慕の念と祝賀の挨拶を送りたい切なる願いを抱いた進歩的人類のおしとどめることのできない流れであった。それは複雑多端な厳しい時期に自分の運命、人類の運命を託する人類解放の救い星である主席に馳せる世人の心情であった。

主席は世界の多くの共産党、労働党および進歩的な政党代表団が訪朝する際に、社会主義を志向する人民と革命的党が掲げるべき共同の行動綱領を

打ち出すことを決心し、幹部らに社会主義を擁護し前進させるための共同の闘争綱領を採択し発表する上で提起される貴重な助言をおこなった。

それだけでなく、主席は外国の代表団と人士、友人を対面し、社会主義を再建するための闘争で提起される課題と方途にたいする自分の見解と立場を提起した。そして変化する情勢と環境に即して、正しい共同戦略を立てるために緊密に協力するという問題をはじめ、国際問題にたいする多くの意見も交換した。

主席のこの貴重な教示に接した多くの国の共産党、労働党と進歩的な政党の代表は、社会主義建設で朝鮮労働党と朝鮮人民が収めた成果を目撃し、社会主義を擁護し前進させる決意を表明しながら、それに関した共同宣言を採択するという朝鮮労働党の発起を積極的に支持し、双務的あるいは多務的会談を保障し、社会主義偉業を擁護固守し、社会主義運動を新たに再建するための方途を十分に討議した。

それで 1992 年 4 月 20 日、平壌では世界 70 の党の 48 名の党首をはじめとした代表が署名した歴史的な平壌宣言「社会主義偉業を擁護し前進させよう」が採択、発表されるようになった。

世界の革命的党と進歩的人民は、平壌宣言を「社会主義再建運動と国際共産主義運動の再生を告げる偉大な共産党宣言」「社会主義再建の戦闘的旗印」「社会主義を守ろうとする固い意志を闡明した書類」「帝国主義者の反社会主義策動に対処する強力な武器」であると高く評価しながら積極的に支持した。

平壌宣言が採択された同年である 1992 年末、すでに世界の 80 余の政党が宣言に署名し、2003 年 6 月までその数は 260 余個に増えた。これは、世界の数億万の人民大衆が平壌宣言を社会主義再建運動の指針として受け入れているという明白な表しであった。

今日、進歩的人類は自主性の旗の下に、社会主義制度を強化発展させるために戦う朝鮮労働党と朝鮮人民の闘争に全的な連帯を送っており、平壌宣言の旗の下に社会主義再建運動を力強くくり広げている。

平壌宣言の発表以来、アイルランド共産党、ベルギー労働党、スウェーデン・マルクス・レーニン主義共産党（革命家）、バングラデシュ労働党、ネパール共産党（統一中央）、民主コンゴ労働党をはじめ、各政党では平壌宣言にもとづいて党の綱領と党規約、党内の基本書類全般を新たに作成し、政治決議を採択し、平壌宣言を党大会の公式書類として添付するなど、社会主義のための闘争の憲章として打ち出した。

平壌宣言の精神にしたがって、世界の各地で革命的党が再建され、社会主義再生のための闘争も広範に広げられた。宣言の発表以後、わずか 1、2 年の間に社会主義が挫折した東欧のほとんどの国で共産党、労働党が再建されて活動を開始し、ロシア連邦共産党、ベラルーシ共産主義者党、ウクライナ共産党（マルクス主義者）、ルーマニア新社会党、ポーランド共産主義者同盟「プロレタリアート」をはじめ、新しい出発を宣布した党は、自国で社会主義体制の崩壊の原因を深刻に分析し、その教訓に基づいて社会主義の再生を基本任務としておし立て、それを実現するために積極的に闘争した。各国の共産党、労働党と進歩的政党も平壌宣言にもとづいて社会主義を志向する国内のすべての左翼力量との団結をなし遂げ、連帯を強化するための闘争を力強くくり広げた。

現実は、社会主義偉業の勝利のために一生の労苦を惜しみなく尽くした主席の崇高な意図が日増しに全世界の進歩的人類の一致した信念として、より確固と転換されており、主席が示した平壌宣言の旗の下に全世界が社会主義へと進むことはおしとどめることのできない時代的趨勢となっていることを如実に示している。

非同盟運動を反帝・自主の道へと導き

新たな発展段階に入った 20 世紀の人類解放闘争は、その年代記に非同盟運動の誕生という今一つの感動的な出来事を刻み込んだ。

1961 年 9 月、旧ユーゴスラビアの首都ベオグラードで開かれた第 1 回非同盟諸国首脳会議を契機にして、非同盟運動が第一歩を踏み出したのである。長い間、歴史の外に押しやられていた発展途上諸国が一つの組織化された政治的力量で国際社会に登場したことは、人民大衆の自由と解放のための闘争で起こった重要な出来事であった。

新しく独立した国々をはじめ、広範な力量を網羅する非同盟運動の誕生は、圧制者、略奪者を戦慄させる数億万の進歩的人類の組織的団結の一大誇示となった。

主席は、非同盟運動の初期から、それを反帝自主的な性格をもった世界の進歩的人民の革命的な運動として方向を転換させることに大きな心血を注いだ。

非同盟運動の初期から、それを反帝自主的運動として転換させることに深い関心を払った主席は、反帝自主の炎が激しく燃え上がる時代の要求に即して、この運動を反帝自主の旗をより高く掲げていく革命的で進歩的な運動として発展させることに大きな力を入れた。

主席は 1974 年 5 月、朝鮮が非同盟運動に正式に加入するという立場を明らかに闡明し、それを実現するための具体的な対策まで講じた。

それで朝鮮は 1975 年 8 月、ペルーの首都リマで開かれた非同盟諸国外務相会議で満場一致で非同盟運動の公式加盟国となった。朝鮮の非同盟運動の加入は、非同盟運動の制約性を克服し、自主時代の威力ある反帝革命力量としての役割を果たす上で大きな意義をもった。

主席は、革命発展の各時期に非同盟運動を強化発展させる上で提起される貴重な指針をもたらすことに格別の関心を払った。

主席は 1975 年 12 月 16 日、歴史的論説「非同盟運動は現代の強大な反

帝革命勢力である」を発表した。

主席は、著作で反帝・自主の崇高な理念を具現している非同盟運動は帝国主義、植民地主義の侵略と略奪に反対する威力ある運動であり、非同盟諸国は帝国主義反動勢力と対峙している強力な勢力であると定式化し、非同盟諸国が帝国主義、植民地主義に反対する闘争をさらに強化する上で提起される原則的問題について示した。

主席は帝国主義者がかつて非同盟諸国、発展途上諸国を過酷に抑圧し搾取しただけでなく、これらの国々が民族的独立をなし遂げた後にも侵略と干渉を続けており、新植民地主義の方法で略奪し搾取しようと悪辣に策動している事実を暴露し、非同盟諸国が帝国主義に反対する闘争を抜きにしては民族的独立を固守することも、繁栄する新しい社会を建設することもできないことを明白に論証した。

主席は、続けて非同盟運動の崇高な理念と目的を実現するためには、非同盟諸国が自主性を堅持し、これらの国々との団結と協力を強化発展させることが重要であると指摘し、それを実現するための闘争方向と方途を全面的に示した。

主席が発表した歴史的著作は、非同盟運動の本質と性格を全世界に明示し、この運動を徹頭徹尾反帝自主的な運動として強化発展させる上で貴重な指針となった。

主席は非同盟諸国が自己の理念に即して国際舞台で反帝自主の原則を確固と固守していくようにエネルギッシュに指導した。

この会議に先立って主席は 1976 年 5 月、ユーゴスラビア・タンユグ通信社の対外編集主筆を接見した席で、第 5 回非同盟諸国首脳者会議の方向と関連した諸問題について述べながら、今回の会議では発展途上諸国を侵略し略奪しようとする帝国主義者の策動を粉砕し、自由と解放、民族的独立を強化するための人民の闘争をより効果的に支援するという問題を基本にして討議すべきであるという朝鮮労働党と共和国政府の立場を明確に示した。

主席は 1990 年代に入って冷戦が終息し、非同盟運動が新たな挑戦に直

面した時にも、厳しい国際情勢に対処し、この運動の発展方向と関連した原則的諸問題を明示した。

主席は 1992 年 1 月、インドネシア「メディア・インドネシア」新聞社責任主筆の質問にたいする回答で、厳しい国際情勢に対処して非同盟運動の発展方向と関連した原則的諸問題を明確に示した。

主席は著作で、自由で平和な新しい世界を建設しようとする世界各国人民の志向には変わりがなく、自主、平和を志向するのは逆もどりさせることのできない歴史の基本的潮流であると述べた。続けて主席は、自主性を生命とする非同盟運動は、その根本理念と原則を変わることなく固守しなければならない、この運動が変化する情勢に効果的に対処するためには、活動方法をたえず改善しなければならないが、その根本理念と原則から脱してはならないとし、非同盟運動を強化発展させる上で提起される諸問題について全面的に示した。

主席が示した非同盟運動を強化発展させる上で提起される問題は、非同盟運動の統一団結を実現し、帝国主義、支配主義、植民地主義、人種主義に反対して共同の戦略で国連をはじめ、国際舞台で歩調を合わせることであり、非同盟諸国が政治、経済、文化のすべての分野にわたって互いに緊密に協力することである。

主席が新たに示した非同盟運動に関する思想と理論は、この運動がその根本理念と原則、政治的性格を変わることなく固守する上で綱領的な指針となった。

非同盟運動には、すでに久しい前から 100 余の加盟国がおり、世界の多くの政治指導者と著名な人士がこの運動に関与している。しかし、非同盟運動を終始一貫反帝自主の崇高な道一筋に変わることなく指導した方は、ただ主席だけであった。

非同盟運動の発起者の一人である旧ユーゴスラビア大統領であったチトーは、すでに 1977 年 8 月、訪朝した時、主席にこれからは非同盟運動を尊敬する金日成主席が指導しなければならないと、丁重に申し上げたこと

がある。

インドネシアのバリでは2011年5月25日から27日まで、非同盟運動創立50周年に際して、非同盟諸国外務相会議がおこなわれた。会議では、加盟国が団結して国際問題の解決の主導的力量としての役割を強める問題と発展途上諸国の利益を守り、強化する上で集団的行動を強化するという問題などを討議し、創立50周年に際し、バリ記念宣言と最終書類が採択された。宣言には、この運動が今後より平和で安全かつ、多極的な世界を建設し、加盟国にたいするいかなる一方主義的行為も断固粉砕するための原則と方途が示されている。

この宣言は、非同盟運動の卓越した指導者であった主席が一生の労苦を尽くして導いた非同盟運動の反帝自主的理念がそのまま生きているということに対する力強い示威であった。

3） 世界の平和と安全の偉大な守護者

金日成主席は、平和で安定した世界で生きようとする進歩的人類の平和擁護偉業を力強く導いてきた世界の平和と安全の第一の守護者であった。

スイス・チュチェ思想研究グループが主席の誕生100周年慶祝チュチェ思想世界大会の召集決定を支持し、不滅のチュチェ思想によって抑圧の古い世界が崩壊し、自由で平和な新しい世界が創造される自主の時代、チュチェの時代が到来したという声明を発表したのは、世界の強固な平和と安全を守るために積み上げた主席の世紀的業績に対する限りない称揚であった。

反帝・平和勢力の団結は、平和と安全をなし遂げ、守り抜くための切実な要求として提起された。

主席は、世界の反帝・平和愛好勢力の団結のために、人類解放偉業の旗手である社会主義諸国の統一と団結を実現するために最も大きな労苦と心血を注いだ。

金日成主席は次のように述べている。

「真の社会主義諸国の人民と第 3 世界諸国の人民、世界のすべての平和愛好人民がかたく団結して反帝闘争を力強くくりひろげるならば、帝国主義者の新たな戦争挑発策動を成功裏に粉砕し、世界の平和と安全を守ることができます」

社会主義諸国の団結問題がもつ重大な意義を誰よりも深く洞察した主席は、この問題を党と国家の一貫した対外政策的問題として提起し、その実現のためにエネルギッシュに活動した。

主席が構想し、それを実現するために努力した社会主義勢力の団結は、単なる経済的・技術的進歩や文化交流のためのものではなかった。それは徹頭徹尾、反帝・自主のための団結、世界の平和と安全を守り、人類の自主的発展と繁栄の実際的な担保をもたらすためのものであった。

主席は独立をなし遂げ、新しい社会建設の道に入った国々を各個分散させるための帝国主義者と反動派の分裂、離間、争奪策動が日増しに悪辣になっている条件で、新しく独立した国々の広範な統一戦線を実現することは、より切実な問題として見なした。

主席が朝鮮民主主義人民共和国創建 30 周年を記念する中央慶祝報告大会でおこなった報告で、新しく独立した国々が支配主義者の分裂、離間、争奪策動に団結の戦略で立ち向かわなければならないと力強く宣言したのは、まさにこうした実態にたいする科学的判断にもとづいたものである。

20 世紀の中葉に入って、国際舞台では世界の平和と安全を破壊する新たな様相の炎が燃え上がった。独立をなし遂げた国々間に紛争と衝突、戦争が頻繁に起こったのである。戦えば戦うほど、貧困になり、貧困になればなるほど、もっと戦う新しく独立した国々の実態は、国際社会の大きな憂慮を醸し出し、世界の平和と安全を破壊する主な要因の一つとなっていた。

ユーゴスラビア新聞「オスロボジェーニェ」責任主筆が主席にこれに関連した質問をしたことがあった。現世界は、一部の地域において、はては武力衝突によってのみ「解決」されている数多くの未解決問題を前代から引き継がされたが、主席はこのような紛争問題の除去または平和的解決のため、

なにをなすべきであるとお考えなのか、という質問であった。

彼の質問に主席は、こんにち国際舞台で生じている新興諸国間の紛争問題は、植民地主義制度の産物であると強調しながら、帝国主義者によってさまざまな紛争が頻発しており、はなはだしくは武力衝突や紛争にまで拡大していると明白に答えた。

主席は植民地主義者、帝国主義者の悪辣な植民地支配策動によって引き起こされているこうした紛争と衝突は、反帝・自主をめざす共同闘争を展開するのに支障を受け、人民は災難に見舞われていると述べた。

主席は、発展途上諸国間の意見相違や紛争の問題がいくら深刻なものであっても、武力行使の方法ではなく、反帝・平和を共同の理念として第一とし、相互の理解と団結の原則で平和的に解決しなければならないと常に述べていた。

主席は 1974 年 9 月、アルゼンチン記者代表団が訪朝した時にも、彼らに発展途上諸国間に団結と協力をいつにもまして強化するという貴重な助言をおこなった。

主席は彼らに第 3 世界は、歴史の舞台に新たに登場した現代の強大な反帝革命勢力であるとし、強力な反帝革命勢力として歴史舞台に登場したこれらの国々の戦闘的団結と協力を強化することは、現時、極めて重要な意義をもつと強調した。

主席は、帝国主義者はあたかも自己の援助なしには第 3 世界が生きてゆけないかのように宣伝しているが、実際にはその逆である、帝国主義者は第 3 世界の資源に頼らずには生きてゆけない立場におかれていると明哲に指摘した。そして第 3 世界の人民がかたく団結し、帝国主義者に圧力を加えるならば、かれらを身動きできないようにすることができるし、堂々たる主人としての役割を果たすことができると、信念に満ちて述べた。

主席は 1970 年代の初頭、アラブ諸国が石油輸出禁止措置をとり、西側諸国を深刻な経済危機に追い込んだ事実、当時開かれた原料および開発問題にかんする国連特別総会は、これまで第 3 世界人民の利益を犠牲にしてきた

原料および開発にかんする国際秩序を、第3世界人民の利益にかなうように改めるたたかいで大きな成果を収めた事実、そしてベネズエラで開かれた第3回国連海洋法会議で、第3世界諸国が200カイリ領海権のためのたたかいで同一歩調をとり、帝国主義者の野望に大きな打撃を与えた事実など、実例を挙げて教えながら、これはすべて第3世界人民がかたく団結してたたかった結果であると述べた。

こうした事実は新たに独立した国々が互いに団結してたたかうならば、いかなる強大国の圧力も粉砕することができることを明示するものであった。

主席は非同盟諸国の統一団結を強化するためにも大きな力を入れて反帝・平和のための強力な力量をもたらした。

主席は1979年7月、朝鮮労働党中央委員会政治委員会、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会連合会議を招集し、第6回非同盟諸国首脳者会議で解決すべき根本問題にたいする綱領的教示を与えた。

主席はこの教示で、非同盟諸国は自主性を堅持し、統一団結を強化することにすべてを服従させ、すべての軍事同盟の解体、非核地帯、平和地帯の創設問題を提起し、その実現のためにたたかい、古い国際経済秩序を打ち壊し、新しくて公正な国際経済秩序を打ち立てるべきであると闡明した。

主席は1983年3月、インドの首都ニューデリーで開かれた第7回非同盟諸国首脳者会議、1986年9月、ジンバブエの首都ハラレで開かれた第8回非同盟諸国首脳者会議をはじめとした各会議も、非同盟諸国の統一と団結を実現するための重要な契機にならせるためにエネルギッシュに活動した。

主席は各国の平和愛好勢力が独自の政治勢力として固く団結するだけでなく、世界の平和と安全を守るための闘争で、反帝・平和の共通した理念の下に一つに結束してたたかうように指導した。

世界の平和と安全は、決してある政治的勢力の独自の活動と努力で解決される問題ではない。全世界で平和と安全の確固たる担保をつくり、世界のすべての大陸を平和の大陸につくるためには、地球上のすべての進歩的政治

勢力、政治的勢力がともに奮い立って反帝、反戦、平和守護の旗を高く掲げていかなければならない。

主席は社会主義諸国と新しく独立した国々、非同盟諸国が互いに自己の理念と原則に即して団結を実現するだけでなく、これらの勢力が反帝・平和守護の同じ塹壕に立った戦友、兄弟として対し、互いに固く団結するということについて常に強調し、その実現のために努力したのであった。

主席はすべての社会主義諸国間の団結に第一の力を入れながら、新しく独立した国々と非同盟諸国との団結を強化することを朝鮮労働党と共和国政府の重要な対外政策として打ち出し、一生涯、その実現のために最大限の精力を傾けながら、世界のすべての反帝・平和擁護勢力を反帝親善、平和守護の旗の下に固く団結させることのできる確固たる土台を築いた。

こうした成果は、世界の強固な平和と安全のためにすべてをささげた主席の不眠不休の思索と精力的な対外活動の輝かしい結実であった。

4）真の国際主義者の偉大な亀鑑

正義の闘争にたいする原則的な支持声援

革命をおこなう人々が互いに私心のない支持と声援を送ることは崇高な国際主義的義務、当然の階級的信義となる。正義と進歩のための闘争で互いに積極的に支持声援せず、自分の利益をはかることは、間違いのない民族利己主義であり、国際主義と階級的信義にたいする背信行為である。正義を貴びたたかうだけでなく、正義のための世界人民の闘争を大いに支持声援してくれるところに真の革命家、偉人の真価がある。

金日成主席は次のように述べている。

「わが党と共和国政府は、今年も反帝・自主の旗を高くかかげ、社会主義諸国の人民、非同盟諸国の人民をはじめ世界の進歩的人民との友好・協力関係を発展させ、民族の独立と新社会の建設をめざす諸

国人民の闘争を断固支持声援するとともに、世界の平和と安全を守るため積極的に努力するでしょう」

反帝・自主、平和と進歩をめざす諸国人民の闘争を積極的に支持声援しなければならないというのは、主席が生涯の全期間に確固と堅持してきた一貫した姿勢と立場であった。

国と民族の自主的尊厳と権利を守ってたたかう世界人民の正義の闘争に送った主席の支持声援は、いかなる環境と条件にも関わらず、もっとも革命的で積極的な支持声援であった。

キューバ革命は主席が限りなく崇高な国際主義的信義をもって断固支持声援してくれた正義の闘争の一つであった。

アメリカ帝国主義によって醸し出されたカリブ海危機はキューバ人民にたいする主席の支持声援がどんなに堅実なものであったかを示した歴史的な契機であった。

当時、アメリカ大統領であったケネディは国家安全保障会議を開き、キューバにたいする侵略を謀議し、続いてキューバにたいする全面的「武力封鎖」を宣布した。

情勢は、社会主義諸国をはじめ進歩的な国々が血をもって獲得した革命の獲得物を守ろうと単独にアメリカ帝国主義との決死戦に立ち上がったキューバを大いに支持声援することを切に要求した。しかし、アメリカ帝国主義の威嚇と恐喝に恐れをなして誰も一肌脱いでキューバを支持声援する勇断を下ろしていなかった。さらには昨日まで兄弟だの、同志だのといっていた国の人たちも、いつそうであったかのように身を入れない状況であった。

さらに、この厳しい時期にアメリカ帝国主義の威嚇と恐喝に恐れをなした旧ソ連のフルシチョフはアメリカの要求通りにキューバに配備しているミサイルと飛行機を急遽撤収させ、アメリカ帝国主義がミサイル撤収結果の確認を求めると、世界の面前で自国でもないキューバの領土、領海、領空からの監視を「許容」する卑屈な醜態まで演じた。

「社会主義の砦」だと自称していた国がこのように「大国」の体面も、

階級的原則と信義も捨てて卑屈に出ると、アメリカはより意気軒昂として狂奔した。

ちょうどこの時期、キューバ革命を守り、キューバ人民の反米闘争を積極的に支持声援することを神聖な国際主義的義務とし、アメリカ帝国主義の侵略から社会主義の獲得物を守るためのキューバ人民の英雄的な闘争に強力な支持と連帯を一番先に送った方は偉大な主席であった。

主席の革命的措置によって発表された朝鮮民主主義人民共和国政府声明は「キューバ革命とキューバ人民に反対してアメリカ帝国主義者が長い間、働いた侵略的策動はもっとも露骨的で破廉恥な段階に入っており、世界の平和は厳しい脅威に直面した。」と指摘し、キューバ人民にたいする全面的な武力封鎖措置を宣布したアメリカ帝国主義の侵略行為は「公海上における野蛮な海賊行為であり、世界戦争を直接挑発しようとする犯罪行為であり、全世界の平和愛好人民にたいする横暴な挑戦行為」であると、厳しく糾弾した。

朝鮮民主主義人民共和国政府声明が発表されるにつれてアメリカに反対して立ち上がったキューバ人民の闘争を支持声援する平壌市大衆集会をはじめ各階層の大衆の集会が全国的な範囲で広くくり広げられた。

主席はアメリカ帝国主義の傲慢無礼な策動によって、カリブ海危機が絶頂に達したときにも、アメリカ帝国主義のキューバにたいする侵略策動に対処して、キューバ人民と同じ塹壕でともにたたかうという決断力を持つ措置を講じることにより、キューバ人民に力と勇気を与えた。

主席が朝鮮大使館の職員と留学生、そして家族までも銃を手にし、決死戦に参加してキューバ人民と生死をともにすることにたいする電報指示を送ったことを通告されたキューバ人民は感動して「もっとも困難なとき、生死運命をともにしようとする国は朝鮮しかない」と激情を吐露した。

国と民族の自主的尊厳と権利を守ってたたかう世界人民の正義の闘争に送った主席の支持声援は、堅実で絶対的であるだけでなく、いささかの私心や対価も知らないもっとも真実かつ熱い同志的支持声援であった。

一般的に国籍を異にするそれぞれの国と民族間の関係では、どの国や民

族も理解より打算を、信頼より対価を、真心より偽りを、支援を与えることより援助を受けることをより重視し優先させるものである。

しかし、主席の限りなく崇高な国際主義的信義の世界は、いかなる小さな打算や対価も知らない熱い同志的信義にもとづいたもっとも真実かつ清潔なものであった。

たたかうベトナム人民に送った主席の変わらぬ支持声援は、進歩的人民の正義の偉業にたいする主席の国際主義的信義がどんなに高潔かつ、熱くて真実なものであるかをよく示す。

トンキン湾事件が起こると主席は即時に共和国政府声明を発表するようにした。

1964 年 8 月に発表された朝鮮民主主義人民共和国政府声明は、アメリカ帝国主義者が東南アジアで戦争を拡大するために久しい前から悪巧みをし、実践へと移していることを具体的に指摘し、これはベトナム人民の自主権を蹂躙する厳しい挑発行為であり、全社会主義陣営と世界の平和愛好人民にたいする重大な挑戦行為であり、東南アジアと世界の平和を破壊する危険な火遊びであると烙印した。そして共和国政府はアメリカ帝国主義者の侵略行為を糾弾し、すでに発表されたベトナム政府声明を全幅に支持するとし、朝鮮人民はアメリカ帝国主義の侵略に反対し、民族的独立を守り、国の平和的統一を実現するために英雄的にたたかっている兄弟的ベトナム人民に熱烈な支持と戦闘的連帯を表すると指摘した。

共和国政府声明を発表してアメリカ帝国主義の強盗的な挑発行為を暴露糾弾するようにした主席は、たたかうベトナム人民にたいする国際的支持声援を強化する対外活動をより力強くくり広げた。

主席は 1964 年 11 月、党および政府代表団を引率し、きびしい政治・軍事情勢の中にあるベトナムを訪問した。

たたかうベトナムを訪れた主席は、国家主席ホーチミンと会談をおこないながら、たたかうベトナム人民を大きく励まし、彼らが要求する問題を全部解決した。

当時をいえば、トンキン湾事件以後、ベトナムの全地域で戦争が起こっていた時期であった。戦争の危険をかえりみず、戦争の最中の国まで訪れてたたかう彼らを鼓舞し支持する主席の高潔な風格は、実に熱い同志的信義にもとづいた最も真実な国際主義精神の発現であった。

主席はその後、バンドン会議 10 周年記念行事に参加するためにインドネシアを訪問したときにも、そこに来たベトナムの指導幹部を数回に渡って接見し、国際的範囲で彼らを支持し声援するための対策的問題を討論し、全力を尽くして援助するという、朝鮮労働党と共和国の立場を重ねて表明した。

主席は、ベトナムでのアメリカ帝国主義の「階段式戦争拡大」策動が新たなきびしい段階に入っていた時にも、ベトナム人民の英雄的反米救国闘争をより積極的に支持声援した。

主席の正義の闘争にたいする原則的な支持声援の配慮は、反帝闘争の道でたたかったカンボジア、ラオス、アルジェリア、アンゴラ、ジンバブエ、ナミビア、モザンビーク、ニカラグアをはじめとしたアジア、アフリカ、ラテンアメリカなど、世界のどこにも及んでいる。

主席が与える支持と声援は、常に万人の心の琴線にふれ、どこでも偉大な勝利をもたらす強力な推進力となったが、主席は一度もそれを別に思わなかった。

1977 年 7 月 16 日、朝鮮を訪問しているパレスチナ民族解放運動代表団が主席の接見を受ける光栄に浴した。

彼らは中東をはじめ、全世界の正義の闘争に惜しみない支持声援を送っている主席に進歩的人類の心を込めて謹んで感謝の挨拶を送った。

すると、主席はわれわれが準戦時状態のようなきびしい情勢の中にいながらも、他国人民の闘争を支持声援してくれるのは誰の賛辞を受けるためではなく、反帝反米の共同闘争で担った国際主義的義務を果たすためであると述べた。そして自分がたたかう国の人民の闘争に深い関心をもって心から支持声援を送っているのは当然、やるべきことをやるのであると述べた。

主席はまさにこういう国際主義者であった。もっとも堅実で高潔であり、変

わらぬ支持声援によって正義の偉業のための進歩的人類の旗印になり、解放の聖戦に大きな鼓舞的力を与えてもそれを当然、やるべきことと見なす主席は、正義の闘争の第一の擁護者、最高鼓舞者であり、国際主義的信義と同志的友愛心を最も崇高な境地で体現した真の国際主義者である。

戦う革命戦線にたいする積極的な軍事的支援

戦う革命戦線を血でもって援助した主席の国際主義的支援は、自由と解放のために他国と他民族がくり広げる正義の聖戦に直接銃をもって参加し、彼らと同じ塹壕に立って生死をともにした最も積極的で熱烈な支援であった。

主席は一度も正義のために戦うべき対象が強敵であるか、否か、戦勝の可能性があるか、否かという問題を考慮してみたことがなかった。主席が他国と他民族がくり広げる戦いに参戦することを決心したことにはただ一つの条件のみがあった。まさに、それは自主性を志向する国、自由と解放のために奮い立った人民の正義の戦争であるならば、地球上のどこでいつ、誰がやる戦争であれ、同じ塹壕で生死をともにしなければならないというのが、主席が一生堅持した一貫した原則であった。

主席は抗日革命の全期間、中国人民との反帝共同戦線で彼らと肩を並べて彼らの革命闘争を積極的に援助し、「ソ連を武力で擁護しよう!」というスローガンを打ち出し、社会主義ソ連を武力でしっかり擁護した。

主席は革命の道を踏み出した当初から、この共同の戦線で中国の戦う兄弟と反日統一戦線を形成し、共同闘争をくり広げながら中国革命を誠心誠意援助した。

2 回の北満州遠征は、中国人抗日武装部隊を誠心誠意に支援しようとする主席の崇高な国際主義的信義心から出発しておこなわれたことである。

主席は、2 回にわたって直接北満州遠征隊を率いてきびしい老爺嶺を乗り越えながら砲煙弾雨の中で朝中革命家の間の戦闘的友誼をさらに厚くし

た。

中国の諺に人と親しくなるためには彼の心を見ろ、という言葉がある。

中国革命家と人民は、抗日革命戦争が起こっていたその日々に、すでに主席の崇高な国際的信義で一貫された同志的友誼と国際的信義心を熱く体験している。

第1次北満州遠征時、主席は周保中をはじめ、北満州の中国革命家たちに会って抗日闘争を発展させるための方途について明示しただけでなく、熱い同志的信義から中国人武装部隊の戦闘力を強化するために遠征隊の半分以上の隊員を彼らに配属させた。特に彼らとの共同作戦によって1934年11月、寧安県南湖頭付近の鏡泊湖戦闘をはじめとしたさまざまな戦闘をくり広げ、この過程に彼らに遊撃戦法と大衆政治活動方法なども教えた。

主席は、1935年6月から翌年の2月までの間におこなわれた第2次北満州遠征期間にも寧安県山東屯戦闘、鏡泊湖戦闘など、多くの軍事作戦を勝利へと組織指導して朝中両国の革命家が指導する武装部隊間の戦闘的団結と連帯をさらに強化した。

冒険的な「熱河遠征」によって、東北革命が大きな難局に直面し、特に抗日連軍1軍が全滅の危機に処した時である1938年10月におこなわれた臨江県外岔溝での包囲脱出戦闘は、主席の崇高な国際主義的信義をそのまま見せることであった。

主席の賢明な指導の下に朝中人民の反日連合戦線が立派に実現し、連合作戦が各所で力強くくり広げられるようになり、日本帝国主義侵略者は行く先々で撃滅され、朝中人民の戦闘的友誼と国際主義的連帯は一層強化された。

主席は、抗日武装闘争の時期に勝利した社会主義ソ連を武力で擁護する輝かしい国際主義的模範を創造し、日本帝国主義の対ソ侵略計画を破綻させることにも大きく寄与した。

主席は、日本帝国主義が膨大な武力をソ満国境一帯に集中配置し、ソ連にたいする武装挑発を絶えずおこなっていることと関連して1932年の秋から1933年の秋まで琿春と東寧県城をはじめとした敵の軍事的要衝地にたい

する襲撃戦闘と 1934 年の春から 1935 年の末にいたる間、列車にたいする待ち伏せ襲撃戦闘などを相次いで手配し、日本帝国主義のソ満国境侵攻策動に大きな打撃を与えた。

事実上、主席がおこなったソ満国境一帯における戦闘は、作戦上では朝鮮革命に大きな利益になるのではなかった。それは全的にソ連を武力で援助するために主席が意図的に、主動的に組織した戦闘であった。

主席は反ソ侵攻の機会のみをうかがっていた日本帝国主義が 1938 年 7 月下旬、ソ連の沿海州の南端にある朝、ソ、満州の国境の三角地帯である張鼓峰付近にたいする武力侵攻を挑発した時にも強力な敵の背後打撃によって敵の作戦的企図を撃破、粉砕した。

主席は日本帝国主義が 1939 年 5 月、モンゴルのカルキンゴルで再びソ連にたいする武装挑発事件を起こした時、これは決して偶発的な国境衝突事件ではないことを見抜いた。

主席は、この事件は日本帝国主義が長い間、準備してきた大々的な対ソ侵攻作戦の一環であり、その序幕であることを一瞬にして見破った。主席は遅滞なく敵の背後攪乱作戦として、日本帝国主義の対ソ侵攻作戦を破綻させるための賢明な措置を講じた。

主席の命令を受けた朝鮮人民革命軍部隊は、日本帝国主義のカルキンゴル地域への兵力移動と軍需物資の輸送を破綻させるために、敵の軍事補給路である「境羅線」（長春と羅津間）と「ハルビンと敦化間」一帯で戦闘活動を積極化した。特に、朝鮮人民革命軍部隊は 1939 年 8 月下旬、安図県大沙河、大醤缸戦闘と 9 月の下旬の腰岔戦闘、富爾河襲撃戦闘、百草溝襲撃戦闘など、さまざまな戦闘をくり広げて日本帝国主義侵略軍の大部隊を掃滅し、多くの戦闘技術機材を鹵獲した。これらの戦闘で敵の銃眼を体で塞いで部隊の突撃路を開いた金振と自分の青春も生命も惜しみなくささげた許成淑など、多くの国際主義的戦士が輩出された。

ソ連人民が困難であったその時期、主席が発揮した真の国際主義的模範は、ソ連党と国家指導者を大きく感動させた。

主席が 1949 年、政府代表団を引率してソ連を公式親善訪問した時、スターリンは主席のために盛大な宴会を催し、信頼と親善の情が溢れる祝杯の辞で、20 星霜にわたる長い間、日本帝国主義に反対する戦いで旗手としての役割を遂行した抗日遊撃隊を組織指導した金日成主席は、東方で帝国主義の侵略からソ連を血でもって擁護してくれた真のプロレタリア国際主義者であると高く評価した。

スターリンの真心のこもった祝杯の辞は、血をもって真の国際主義の模範を示した主席にたいする熱烈な尊敬の念と称揚の表しであった。

1945 年 8 月、日本帝国主義の敗亡とともに中国でも抗日戦争が終わるようになった。人々は新しい生活にたいする歓喜にあふれていたが、中国人民の喜びは長続きしなかった。蒋介石一味によって内戦に巻き込まれるようになったのである。

事実、解放後、朝鮮の状況は非常に困難であった。朝鮮人民の前には日本帝国主義がすべてを破壊して逃げ出したので、廃墟の上に新しい朝鮮を建設すべき膨大な課題が提起されていた。こうした状況で、朝鮮が他国の革命を援助するというのは、想像を絶することであった。

しかし、中国人民の革命闘争を私心なく援助することを崇高な国際主義的信義、革命を先に遂行した国として当然履行すべき義務と見なした主席は、すべてのものが不足し、困難な中でも危機に処した中国人民の革命闘争を血でもって援助した。

主席は中国東北地方に多くの政治軍事幹部と部隊を派遣して東北地方を政治、経済、軍事的にしっかり築くようにした。

主席はそれだけでなく、東北解放作戦と関連した戦略戦術的方案も示した。

東北革命の運命を心配していた主席は、中国革命家の要請を喜んで受け入れ、1945 年 11 月末、鴨録江をわたって丹東にいった。

丹東に到着した主席は、軍区司令部の作戦協議会で各指揮メンバーの報告を受けながら、敵軍の配置状況と起動状態などを具体的に調べ、現下の一

時的難局を打開するための戦略戦術的対策を講じた。

主席は同日、軍区司令部の指揮メンバーに当面して敵との無謀な正面衝突を避けて都市を明け渡し、敵の力量を最大限に分散、弱化させ、その代わりに農村に根拠地を強固に設けるべきであるとし、軍隊と人民の間で政治活動を活発にくり広げて、彼らが勝利の信念をもって階級的敵に反対して断固戦い、白頭山を中心にしてつくられた解放地区を固守しながら大部隊起動戦と遊撃戦を広く展開して、絶え間ない消耗戦で敵の力量を最大限に弱化させるべきであるという、具体的な作戦戦術的方案を示した。

歴史には多くの戦争が記録されているが、その中には他国の革命を支援した話も少なくない。しかし、このように一国の領袖が他国の戦場にまで出て夜通し具体的な作戦的方向を明示し、勝利の信念を与えた事実は、どこにもない。これは、ひとえに崇高な国際主義的信義をもった主席だけが踏み切ることのできる国際主義的壮挙であった。

主席の意図を正確に把握し、東北解放作戦に参加した約 25 万名の朝鮮人部隊の戦闘員は、東北民主連軍の主力として、蒋介石一味と自己犠牲的に戦った。特に、長春、吉林、沙坪、金珠, 瀋陽解放戦闘で朝鮮人部隊の戦闘員は自分の貴い青春を惜しみなくささげて戦うことにより、中国東北地方を解放する上で決定的転換の契機をもたらした。

朝鮮人部隊の戦闘員たちは主席の意を体し、中国人民の第 3 次国内革命戦争の全期間、東北の牡丹江と延辺地方から万里の長城を越え、長江を渡河して海南島にいたる数万里の道程で国際主義戦士としての栄えある使命と任務を果たし、中国革命の勝利に大きく寄与した。

ゆえに、中国の周恩来総理は早くから中国人民の抗日戦争期間と数回にわたる国内革命戦争の間に朝鮮人民のすぐれた息子と娘は、自分の命を惜しみなく中国人民を支援したと熱く述べた。

実に、中国革命を援助することを自分の崇高な国際主義的信義、義務として見なし、中国人民が波乱に富んだ曲折を経ている時期に、すべてのものが不足し困難な中でも彼らを私心なく血をもって援助した主席の不滅の業

績は、今日も中国人民の革命闘争史とともに永遠に輝いている。

真の国際主義的信義をもった主席は、アラブ人民の正義の闘争も血をもって援助した。

主席は戦うアラブ人民と同じ塹壕に立っていた。戦うアラブ人民に与えた主席の積極的な軍事的支援は、世界の進歩的人民をアラブ人民にたいする国際主義的支援へと奮起する鼓舞的旗印となり、アラブ人民にとって反米、反イスラエル戦争で以前になかった成果を収めるようにした大きな力であった。

1973 年 10 月 6 日に起こった第 4 次中東戦争時、主席は一番先に朝鮮民主主義人民共和国政府および外務省声明を発表させ、エジプトとシリアの要請にしたがって飛行隊を送る画期的な措置を講じた。これは反帝・自主をめざす血戦に出たアラブ人民の正義の偉業にたいする主席の堅実で揺るぎない反帝的立場の明白な表しであった。

主席の戦闘命令を受けてエジプトとシリアに派遣された勇敢な朝鮮のパイロットは、最初の戦闘で敵の最新型飛行機を一撃の下に撃墜し、各戦闘で高い戦闘的・道徳的品性を発揮して敵を戦慄させ、英雄的朝鮮人民軍の気概を余すことなく示した。

当時、イスラエル侵略者はアラブ諸国のパイロットを取るに足りないもののように思いながら、空中で傲慢に振舞った。しかし、アラブの空に朝鮮戦争とベトナム戦争を通じて世界にその威力が広く知られた朝鮮のパイロットが現れると、形勢は完全に変わった。米国製の最新式飛行機をもったイスラエルのパイロットは、技術的に立ち遅れた飛行機をもってでも自分たちを抜き差しならぬ窮地に追い込んだ朝鮮のパイロットを見るだけでも戦慄した。

主席の崇高な国際主義的信義と誠心誠意の支援があって、3 回にわたる戦争で毎回敗北していたエジプトとシリアは、第 4 次中東戦争でイスラエル膨張主義者を打ち破って土地を取り戻した。これはアラブ世界で起こった大きな歴史的出来事であった。

帝国主義者の植民地的統治を終わらせ、民族的独立をなし遂げるために戦っている国の人民であるなら、いつどこで戦っても主席の私心のない援助を受けた。モザンビーク、ジンバブエ、アンゴラ、ナミビア、南アフリカなど、民族解放と人種主義に反対してたたかうアフリカ諸国人民をはじめ、地球上の各所で自由と解放のために戦う人民の闘争戦線に主席の国際主義的信義によってもたらされた大量の兵器と弾薬、軍服、医薬品など、軍事的援助が限りなく送られた。

世界にはたたかう国にさまざまな援助をした政治家や革命家、軍事家がたまにいた。しかし、主席のように自分の心血を惜しみなく注いで援助した真の国際主義的信義の体現者はいまだかつてなかった。

進歩と繁栄のための闘争に寄せた私心のない支援

主席が新しい社会建設の道に入った国々を進歩と繁栄の道に指導する上で第一義的な関心を払ったのは、すでに獲得した革命の獲得物を頼もしく守っていける自衛的国防力を建設するように援助することであった。

主席にとって新しく独立した国々の国防力の建設は決して他人事ではなかった。それはかつて、朝鮮のように植民地の境遇から解放をなし遂げた国々の再生と繁栄に関する問題であるだけでなく、全世界的範囲における人類の解放偉業、自主偉業の最終的勝利のための正義の革命偉業であった。

こういう姿勢と立場を確固と堅持した方なので、主席は国防力建設問題で苦労している国と民族の気持ちを誰よりもよく察し、それをすなわち自分の苦衷として受け入れた。どうしてでも彼らを助けて自衛の国防力を建設し、人類解放の歴史的偉業に奮い立たせようとする主席の崇高な国際主義的信義によって、独立の旗がなびく世界のいたるところに暖かい軍事的支援が行き届き、それに支えられてとうとう多くの国々が自衛的な国防力を建設するようになった。

その国々の中には、イギリス帝国主義者との 15 年間の困難な武装闘争

の末に国の独立をなし遂げ、1980 年 4 月、共和国創建を宣布したジンバブエもあった。

主席は、ジンバブエ政権の強固さを保障できる軍事力を保有させるために可能な限り援助し、一つを援助しても常にその国の人民の立場に立って万事を図って誠心誠意援助した。

主席の私心のない崇高な国際主義的支援があって、ジンバブエ人民は自体の軍事的力を養って新しい社会建設を妨害し、破壊転覆陰謀を企てていた帝国主義者と国内反動派の策動を粉砕し、革命の獲得物を守護しただけでなく、「ジンバブエ式社会主義建設」のスローガンの下に、新しい社会建設を力強くおし進めることができた。

新社会建設の道に入った国々の苦衷を実際の体験を通じて誰よりも深く察した主席は、彼らが自立的民族経済と発展した民族文化を建設する上で提起される切実な問題をいささかの私心もなく物心両面から援助した。

主席は常に幹部らに何かを少し援助するからといって、偉そうな顔をしてはならない、一番間抜けなことは援助をしながら「私が援助する」と偉そうな顔をすることである、こういうことをわれわれが一番間抜けなことだと考えているが、なぜ他人にそんなに振舞うか、傲慢に振舞わず、謙遜な態度をとるべきであり、何かを少し支持し支援することについて、少しも威張ってはならないと教えた。

衣食に事欠いても革命をする人同士で互いに国籍をつきとめず、食べろ、使えという時がもっと良いというのが、ほかならぬ主席の国際主義的信義の世界である。こういう方なので主席は 1967 年 6 月 15 日、龍城機械工場（当時）党委員会拡大会議を指導しながら、社会主義国の労働者階級が 1 日に 1 時間ずつでも増産して搾取され抑圧される人民と分裂した国々を軍事的に、経済的に積極的に援助しなければならないと呼びかけ、龍城の労働者階級がこの闘争の先頭に立つことを頼んだのであった。

主席が新しい社会建設の道に入った新しく独立した国々に送った支援と援助は、私心のない崇高な国際主義的信義にもとづいたものであったので、

発展途上諸国の国家元首と人民は常に主席にたいする熱烈な尊敬と敬慕の感情を禁じえなかった。

事実、朝鮮の経済的潜在力や人的および物的資源に比べるとき、他国と他民族に与えた国際主義的援助は力にあまる膨大なものであった。しかし、主席はそれを常に当然なこと、ぜひやるべきこととして見なしたので、一度も顔に出さず、幹部らと人民もそのように教育したのであった。

新しい社会建設の道に入った国々における経済的・技術的支援とそれが早い時日内に実質的に効力を表すようにするために尽くした主席の労苦と心血を話すには限がない。

常に、国際主義的支援の崇高な模範を示している主席の暖かい配慮に支えられて朝鮮は、1984 年 1 月に、22 カ国に 30 余の工場を建設し、20 余カ国に灌漑建設を援助し、50 余の発展途上諸国に 5000 余名の技術者、専門家を派遣して新しい社会建設を各分野で援助した。

このように、絶え間なく続く新しい社会建設の道に入った国々にたいする支援は、自立的民族経済と民族文化を建設するために戦う人民に新たな希望を与えた。新しい社会を建設する上で提起されるすべてのものを些細な私心もなく物心両面から援助して、彼らを世紀的後進性と貧窮から救い出した主席にたいする尊敬と感謝の声は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカなど、世界各地で響き渡った。

2008 年 1 月、パキスタン・朝鮮親善協会が全世界の朝鮮人民との親善および連帯団体に送るアピールが全世界に広がった。

金日成主席の誕生 100 周年に際して、準備委員会を結成し、セミナー、座談会、展示会、図書出版など、多様な活動で 2012 年の太陽節を意義深く慶祝しようというアピールであった。

2010 年 10 月には国際準備委員会も結成された。

2011 年 4 月 13 日、意義深い太陽節に際して平壌では、主席の誕生 100 周年慶祝国際準備委員会の責任幹部協議会が開かれた。国際準備委員会の共同委員長と書記が参加した会議では 2012 年太陽節を意義深く慶祝するための国別、地域

別の国際準備委員会の組織と活動状況が通報され、2012 年を金日成主席の尊名とともに歴史に末永く刻される年として輝かせる上で提起される諸問題にたいする意見が交換され、責任幹部協議会の決定書が採択された。

主席にたいする限りない感謝と旧懐が合わせ、世界的範囲で一つの大河をなしているこうした現実は、主席が進歩的人類の心の中に残した余韻がどんなに大きくて深いものであるかを再度示唆する。

６．永遠な領袖

1）チュチェ偉業の代をしっかり受け継がせ

金日成主席は、歴史上初めて革命偉業継承の問題を革命の将来運命と関連した重大な原則的問題として提起し、早くからその実現に大きな力を入れ、朝鮮人民に子々孫々領袖の福に恵まれるようにした不世出の偉人である。

革命偉業継承の問題を輝かしく解決した主席の業績の中でもっとも大きな業績は、自分のすべての心血を注ぎ、労苦を尽くして朝鮮革命の代を固く継承する今一人の傑出した偉人を育てたことである。

朝鮮革命が祖国解放という民族史的大事変を目前にしていた時期に、総書記の誕生を迎えた主席は父の意を体し、息子を祖国と民族の立派な息子として育てることを自分の絶対の使命と責任として肝に銘じた。

朝鮮人民は、万景台の革命家門で総書記が誕生した歴史のその日から総書記を金隊長の後を継ぐ白頭光明星として高く仰ぎ称揚した。

「白頭山に金日成隊長の継承人誕生」「千万年末永く輝け、朝鮮の白頭泰星」、このスローガンには民族の太陽金日成将軍の代をまっすぐに継承する道こそは、朝鮮の運命であり、未来であるという、朝鮮人民の絶対的な確信と金正日総書記がその歴史的偉業を必ず実現させることを願う朝鮮人民の切なる期待と願いがそのまま込められている。

チュチェ偉業の将来運命をかけて総書記を立派に育てようとする主席

の大きな労苦は、総書記のすぐれた生まれつきの資質と能力を誰よりも先に発見し、それを遺憾なく発揮させるための努力から始まった。

主席が幼年時代の総書記から最初に感じたのは、普通の子供とは並外れた探究心と記憶力、度胸と人情味など、すぐれた才能と人格であった。鶏が水を飲むとき、必ず口ばしを上げる現象や、花の色の中に黒い色がない理由を必ず解明した事実、一つに一つを合わせればより大きな一つになる場合もあるという、意味深長な道理を悟った事実、友だちを巧みに率いる隊長の気質と幼年時代から他国の将官の前も躊躇せず遮る度胸、一個の果物も友だちとともに分けて食べる純潔な人情味…

主席は、すでに総書記の行動の潜在力を見抜いていた。それは、独自的で創造的な思考力、けりをつける忍耐力と意志、否認できない牽引力、正義の芯、高潔な人間性であった。それは、頭脳活動から気質とひととなりにいたるまで、完全無欠の結合によって調和をなした一つの天才としての人間像であった。

主席は総書記が身につけている生まれつきの資質と能力が、祖国と民族の息子としての立派な人格として完成されるように最大の心血を注いだ。

主席が総書記の成長で格別の関心を払ったのは、総書記をチュチェ思想の完璧な体現者、擁護者として準備させたことである。

主席は、総書記をしてエネルギッシュな学習と探求、実践を通じて、党の思想と政策を完全に把握するようにし、その本質と正当性を深く解説した。

主席の深い関心と配慮の中に総書記は、早くから中学時代からチュチェ思想とその具現である党の路線と政策を熟知しており、この過程に主席のチュチェ思想が最も独創的で偉大な指導思想であるという確信をもった。

総書記は、大学時代に主席の革命思想の独創性とその不敗の生命力を研究論証することに多くの時間を費やし、論文的な意義をもつ文献を数百件も発表した。

総書記が成長する当時、朝鮮革命では主体確立の問題が国と民族の運命、革命の運命を左右する死活の問題として提起された。事大主義と教条主義、支配

主義に反対する厳しい闘争で自主的支柱を打ち立てる問題が国と人民の運命のためにどんなに重要なものであるかを切に感じていた主席は、総書記が革命と建設のすべての問題を考察する上で確実に独自の眼識をもつように指導した。

その日々に、総書記は100余年の労働者階級の革命思想史で公理のように認められてきたマルクス・レーニン主義の時代的および理論的制約性を明哲に解明した。それだけでなく、政治経済学と歴史学、法学、文学など、社会科学のすべての分野で学界を驚嘆させる独創的な発見と貴重な助言をおこなって、社会科学全般をその基礎から新たに解明し、教育の前途を主体的に開拓した。総書記が数百年余りの「定説」として公認されてきた歴史問題である「新羅精通説」を再評価し、朝鮮の中世歴史を東方の強大国である高句麗を中心にして正した一つの事実だけでも、この時期、総書記の独自の思考力と実践力の境地をよく示唆する。

いつか総書記は、自分は3歳の時から軍人であり、自分の兵士生活は白頭山で始まったことにほかならない、生まれて初めてかけた布団は母の軍服であり、最初に手にしたのも母の拳銃であった、と感慨深く回顧した。

総書記の最初の学校は、強大な帝国主義を打ち破る戦場であった。まさに、ここで銃剣にたいする総書記の強い信頼と愛が根を下ろし、パルチザンの息子としての突撃的な性格が形成され、職業的な軍人としての気質が体質として全身に位置づけられるようになった。幼年時代から服の中では軍服を好み、遊びの中でも軍事ごっこを好み、本の中でも英雄伝を愛読していた総書記の非凡な風格はこのように形成されたものである。

主席が総書記にチュチェ偉業のバトンとして譲り渡したのは銃剣であり、人生の柱として植えつけたのも軍人の魂であった。

早くから祖国解放戦争時に最高司令部の作戦台のそばで総書記の軍事的英知と知略をそなえさせた、その関心と努力で主席は、1960 年代に入っては総書記の革命行路に偉大な先軍指導の足跡を深く印し、軍現地指導の道で卓越した軍事的知略と軍指揮術を体得するように深い関心を払った。

総書記の革命指導史に先軍革命指導の開始として記録された 1960 年 8

月、朝鮮人民軍近衛ソウル柳京守第105戦車師団にたいする現地指導も、ほかならぬ主席が総書記とともに歩んだ軍現地指導の道であった。

主席が総書記とともに全国の多くの人民軍部隊へと絶えず続けた軍現地指導の日々は、単に総書記に軍事的知略と用兵術を体得させた過程ではなく、名実ともに、チュチェの軍事家としての完璧な品格をそなえるようにした歴史的な日々であった。

こうした日々の中で総書記は、20代に将軍の英知と気概をもって生まれたもう一人の白頭山青年将軍として高く名を馳せた。抗日闘士たちと人民軍の指揮官は、1960年代の末から総書記を「最高司令官」であると高く戴いた。

主席は、総書記を人民の偉大な精神力と限りない創造的力を知り、人民と喜怒哀楽をともにし、人民のためにすべてをささげる人民の息子として育てることに最大の心血を注ぎ、労苦を尽くした。

主席は、幼い総書記の心の中に人民は最大の正義であり、力であり、万事解決の根本であることを信念として植えつけるためにすべてをささげた。

主席のこの崇高な努力は、総書記が早くから人民を知り、人民にたいする熱烈な愛と信頼を肝に銘じるようにし、その偉大な人民と生死をともにする真の人民の指導者として成長できるようにした貴い滋養分となった。

主席は一生涯、絶え間ない現地指導の道を歩んだ。この時に主席は総書記とともに同行した。ここには、総書記をして国の具体的現実をより幅広く体験し、その過程に革命と建設にたいする指導方法と指導芸術を体得させようとする主席の深い意図が込められている。

主席が現実の中で総書記をチュチェ偉業の継承者として育てた過程は、具体的な活動方法を一つ一つ体得することから始めて、現実で提起される諸問題について自体で判断し、結論するようにし、多様な主題の幅広い談話を通じて政治的見識と実践能力の培養にいたるまで、政治家としての成長全過程を包括した。

1964年6月19日、総書記は主席の委任によって党中央委員会で活動を

始めた。

主席は総書記が党活動全般を掌握し、党の戦闘力と指導力から絶えず強化するようにしながら、次第に人民軍をはじめ、全般的な分野にたいする指導を実現するようにした。

早くから総書記が党中央委員会で活動しながら革命と建設全般にたいする指導を実現するようにした主席の出色の先見の明と決断は、総書記を第一歩から主席の革命偉業と切り離すことのできないチュチェ偉業の指導者、主席の魂と人格と指導風貌をそのまま継承したもう一人の卓越した指導者として準備させた決定的要因であった。

ゆえに、30 余年の歳月が流れた遠い後日、総書記は党中央委員会で活動を始めた時を幹部らの前で感慨深く回顧しながら、わたしがその時、民青（民主青年）に行ったならば党中央委員会での 30 年の党活動歴史をもてなかっただろう、主席は思慮深い意図をもってわたしを育てた、と熱く述べた。

主席が総書記を熱烈な革命家、国と民族の息子として立派に育ててきた日々は、朝鮮人民が総書記の偉人像に魅了されて総書記を心から高く奉じてきた意義深い日々であった。

総書記は、大学の時代から公認された指導者として青年学生と教職員から絶対的に信頼されていた。

総書記は、革命と建設全般を指導し始めてからは「親愛なる指導者」としてすべての幹部と人民の限りない尊敬と燃えるような敬慕を受けていた。

1970 年代の初旬からは次第にその尊称が党と国家の公式書類に記されるようになった。

文学芸術部門と社会安全部門をはじめ、総書記の指導を受ける各部門の幹部と人民は、総書記の指摘が数回もあったにもかかわらず、事務室と機関に総書記の肖像画を丁重に掲げ、1971 年 2 月 16 日には総書記にたいする忠誠の頌歌をつくって歌った。

もちろん、この歌詞をつくって歌う当時は、総書記に大きな心配をかけたし、総書記の厳しい指示によって出版物や放送に公開されなかったが、そ

れは朝鮮人民の間で急激に普及された。真っ暗な夜空に昇った明星を仰いで全国の人民が心から「朝鮮の星」の歌詞をつくって歌った歴史のその日の感動的な再現であった。

当時、すべての党員と人民は総書記をチュチェ偉業の唯一の継承者として公認し、「嚮導の星」に高く仰ぎ慕った。

全国の党組織と政権機関、行政経済機関、勤労者団体、人民軍と社会安全機関，科学、教育、文化、出版報道機関、工場、企業所、協同農場では、党中央委員会に総書記を主席の後継者として高く戴くという請願書と手紙を送ってきた。

朝鮮労働党と朝鮮人民の歴史的意志は、すでに誰も、何をもってしてもおしとどめることのできない絶対的なものとして固まった。

1974 年 2 月、歴史的な朝鮮労働党中央委員会第 5 期第 8 回総会では、総書記を党中央委員会政治委員会委員に朝鮮労働党の首脳部に戴く組織問題を討議し、総書記をチュチェ革命偉業の後継者として高く戴いた。

金正日総書記は次のように述べている。

「金日成同志のもっとも輝かしい先見の明は、早くから革命偉業継承の歴史的必然性を洞察し、そのための準備を着実に行い、革命偉業を確固として継承、達成していく組織的・思想的基礎と指導体系を強固に打ち立てるようにしたことです。これは、金日成同志が朝鮮人民のために積み上げたもっとも貴い功績です」

主席が総書記を祖国と民族の立派な息子として育て、全党と全人民軍将兵と人民の熱烈な敬慕と絶対的な支持と賛同の下にチュチェ偉業の唯一の継承者としておし立てたのは、党と革命、祖国と人民の運命開拓でもっとも重大かつ、根本的な問題を解決した歴史的出来事であり、チュチェ革命偉業の永遠な継承と勝利を約束する一大慶事であった。

主席は、総書記の唯一的指導を実現するための組織的・思想的基礎と指導体系を樹立する活動をもっとも着実におこなうようにした。

1982 年 6 月 12 日、三池淵で開かれた党中央軍事委員会の会議で、主席は人

民軍の前に提起されるもっとも重要な課題を提示しながら、金正日総書記が人民軍を党的だけではなく、軍事的にも指導するように述べた。そして総書記の活動を軍事的に補佐できる新たな機構を設けるようにした。

歴史的な三池淵会議がもつ重大な意義は、総書記に朝鮮人民軍最高司令官の職務を公式には授与しなかったが、事実上、総書記が最高司令官のような地位で活動するようになったことを内外に宣言したことにある。

主席は 1991 年 12 月 24 日、朝鮮労働党中央委員会第 6 期第 9 回総会を招集した。歴史的な総会では、総書記を朝鮮人民軍最高司令官に高く推戴する重大な措置が講じられた。

総書記が朝鮮人民軍最高司令官の重任を担った同日は、抗日の女性英雄金正淑女史の誕生 74 周年になる意義深い日でもあった。

1993 年 4 月 9 日、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第 9 期第 5 回会議は、主席の崇高な意志とすべての人民軍将兵と人民の一致した意思と念願を反映して、朝鮮人民軍最高司令官である金正日総書記を朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長に高く戴いた。

主席は、チュチェ革命偉業にたいする指導の継承問題をもっとも高い水準で完全に実現していた生涯の最後の時期には、全党員と人民が総書記に忠実であり、総書記の唯一的指導を生命線として奉じるように実践的模範を示し、党と人民に貴重な頼みの教示をおこなった。

主席が 1992 年 2 月 16 日、金正日総書記の誕生日に際して直接つくった親筆頌詩は総書記の偉大さにたいする完璧な称揚である。

白頭山頂に　正日峰そそり立ち
小白水の碧き流れ　よどみなし
光明星誕生し　いつしか五十年
文武忠孝兼備せるを　こぞって称えけり
万民称賛の心　ひとしくして
歓呼の声　天地をゆるがす

主席は、生前に 2 月 16 日を民族最大の慶賀すべき祝日として制定するとい

う、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会の政令も直接批准した。総書記を朝鮮人民軍の最高司令官として高く戴いた後、初めて閲兵式がおこなわれる時には閲兵行事が最上の水準でおこなわれるように指導し、答礼の発言も総書記にさせた主席の思慮深い意志を人々は知らないでいた。

主席は、貴い生涯の最後の瞬間まで幹部らと人民をして総書記にたいする忠誠の真心をもって、総書記の指導を忠実に奉じていくように精力的に活動した。

主席は、このように革命の生死存亡と民族の将来を決定する革命偉業の継承問題を自分の代に完全無欠に解決した。

主席の不滅の業績があって、朝鮮民族の尊厳と栄誉を全世界にとどろかせる総書記の時代が始まるようになり、総書記の指導の中で朝鮮革命の永遠な勝利と繁栄を保障する継承の歴史が変わることなく流れるようになった。

2） 永遠に流れる太陽の歴史

1994 年 7 月 8 日、主席の心臓は鼓動を止めた。

人類を抱き、時代と革命を抱いて太陽のように燃え上がっていた主席の逝去は、朝鮮人民と世界の進歩的人類に空の太陽が消えたような大きな衝撃を与えた。20 世紀のたそがれ時を揺るがした青天の霹靂のような悲報は、平凡な人々が卓越した偉人も生の終点があるという人類史の法則を再度確証するかのようであった。

しかし、主席の逝去は、時代と歴史の前に主席が一生涯になし遂げた業績に匹敵する今一つの大きなページを切り開いた。それは人類歴史上初めとなる人間の現実的な永生であった。

主席は朝鮮人民の心の中に生き続ける永遠な人民の慈父である。

主席の逝去直後、朝鮮のある文筆家は、太陽が完全に消えたかのように真っ暗な空から雨が降ってくる、この世の果てしなく遠いところで宇宙の心魂が泣いている、地上で一時にあがった人民の哭声に空が応えたのである、

涙にまじえた天地...

人民が泣く時には世界でもっとも大きな悲しみが迫ったことを信じるべきだ、という文を残した。

数千万の老若男女が一時にあげた切々たる大きな号泣、これは主席の逝去が全世界に与えた巨大な最初の衝撃であった。

主席は朝鮮人民と永遠に離れられない人民の領袖である。

主席が朝鮮革命の道を踏み出した20世紀の初頭、すでに同胞は朝鮮の再生と栄光のために朝鮮の空に昇った朝鮮の太陽を見た。ゆえに熱血の新しい世代、青年共産主義者らは主席に太陽の尊名を冠した。もっとも偉大であり、もっとも永遠なものの象徴である太陽としてのみ主席を呼べると確信したためである。

歴史が流れ、歳月が変わっても主席の象徴は変わることなく太陽であった。朝鮮人民と進歩的人類は、主席を「チュチェの太陽」「民族の太陽」であると感服して呼び、「人民の太陽」「人類の太陽」であると、もっとも美しい歌詞、もっとも厳かで格調高い詩で称賛した。

すべての民族の歴史の中にはその民族がおし立てる指導者がいる。

しかし、どの歴史にも幼年の時代から民族の星、革命の太陽として呼ばれて称揚された偉大な指導者、偉大な領袖はいなかった。

朝鮮人民は10代の主席に不滅の頌歌「朝鮮の星」を創作してさし上げた。人民がさし上げる頌歌も主席の幼年の時代につくられたものであった。

かつて、労働者階級の領袖が受けた領袖頌歌は、彼らの執権後に受けたことであった。

朝鮮民族の運命を一身に担い、革命の道を踏み出した時から主席は革命を導き、人民を見守る朝鮮の星であり、朝鮮の太陽であった。

主席は、空の太陽のように朝鮮人民にできる限りのことをすべて与えた人民の太陽であった。

主席は、人類思想史の最高峰をなす自分の思想もチュチェ、人民大衆の名をつけて朝鮮人民に贈った。人民大衆の永遠な義務と権利を位置づけるチ

ュチェ思想は、歴史の主人である人民の思想であり、その人民の幸福と栄光のための闘争の旗印であった。

朝鮮人民は、主席のチュチェ思想を通じて圧制者に奪われた自己の尊厳と地位、限りない創造の能力と人類歴史を導くべき責任を取り戻した。チュチェ思想の理念と意志に支えられて歴史の舞台に登場した朝鮮人民は、自分のための唯一の思想、唯一の保護者がほかならぬチュチェ思想であることを知るようになった。

朝鮮人民は主席の尽きない指導力によって、奴隷の境遇から英雄的人民の栄えある地位に上がった歴史の幸運児であった。

主席の卓越した能力は 80 余星霜、主席の全生涯の中で限りなく発揮された。主席は他人が機関車に乗って 20 世紀に入るとき、牛車を引きながら 40 余年の亡国史の第一歩を踏み出したその世紀に朝鮮人民を人類歴史の中心に、陣頭に立たせた。大国の間に挟まれて身動きが取れない朝鮮民族を立ち上がらせ、チョンリマの勢いで天地開闢の歴史を開いた主席は、朝鮮人民にとって、その運命を永遠に見守り、万福をもたらす偉大な創造の巨匠であった。

朝鮮人民は、主席の偉大な愛に支えられて一つの大家庭の中で幸福のみを享受してきた一家族であった。

主席は、抑圧され搾取されてきた人民を懐に抱いて不幸な子供を育てる母のようにあらゆる苦労を尽くし、ひたすら人民のために生きた人民の慈父であった。

マルクスは多くの人に幸福をもたらした人が一番幸福な人であるとし、もし人間が自分自身だけのために仕事をするならば、著名な学者、偉大な賢者、立派な詩人とはなれるかも知れないが、決して真に完成した人間とはなれないといった。マルクスのこの見解に照らして見ても、主席は実にこの世のもっとも多くの人、まだ誰も人民大衆に与えなかった大きな幸福、永遠な幸福を与えたこの世の唯一の聖人であった。

去る 20 世紀は主席を人民の領袖、人民の慈父として奉じ、主席と人民を

一つの運命に結びつけた。

主席の偉人的な能力によって受難の歴史を終わらせた朝鮮人民は、主席の指導を抜きにしては歴史の嵐を切り抜けることができないことを知っていた。

主席の暖かい愛を熱に、光にして無敵の英雄として成長した朝鮮人民は、その栄えある愛を失えば、自分たちが陽光の外に移植された巨木のように悲惨に枯れてしまうことを知っていた。

朝鮮人民は、自分の歴史的地位をこの世の頂点に引き上げるために、一生を奉げた主席が自分たちの生の中から離れると自らの生のすべてがないことを知っていた。

朝鮮人民は、主席が生き続けるときにのみ、自分たちの歴史的地位と自分たちが享受する栄光と幸福が永遠に保存されることを痛感している。

民心は天心であり、民心の流れは歴史そのものであるといった。

主席との永訣の日に朝鮮人民は、主席の姿を太陽像であると高く呼んだ。そのように、主席は輝かしい太陽の姿で人民の心の中に永遠におられる。

人民の念願と意志によって歴史は昨日も、今日も変わらない主席の歴史として永遠に流れている。

主席は貴い一生を奉げて時代と人類のために収めた不滅の業績によって生き続ける。

主席の逝去にたいする世界の反響には、主席の逝去によって地球が軽くなったという意味深い言葉もある。

主席にたいする世界の評価は、全地球的な重さを表した時代と人類の評価である。それは、思想はもとより、指導業績と風貌、すべての面において人類歴史の発展に大きな業績をなし遂げ、偉人史の手本を創造した主席にたいする時代と人類のもっとも公正な評価である。

2001 年 9 月、朝鮮を訪問した江沢民中華人民共和国主席は、チュチェの最高聖地錦繍山記念宮殿を訪問し、主席に崇高な敬意を表し、訪問録に、功績は卓越であり、偉業は永遠であろうという文を残した。

彼が残したこの文は、時代と人類のために大きな業績を積み上げた主席の歴史は、世紀に次いで永遠に続くという、人類の確信をそのまま反映している。

去る20世紀の中葉から世界の政治舞台では、革命をおこなうためには必ず金日成主席の接見を受けなければならないという格言が公理のように認められてきた。

かつて、多くの人は自分たちの幸福の道を啓示するという聖者とその聖地を訪ねることを幸運として見なした。マルクス主義が出た後、全世界の労働者階級はマルクスが生存していたドイツをマルクスの祖国として呼び、レーニン主義が勝利したソビエトロシアを世界革命の本拠として呼んできた。

チュチェ思想が創始された朝鮮は、世界と人類の明るい未来を永遠に示す灯台、革命の聖地となり、チュチェ思想の創始者である主席の接見を受けることを世界の革命家と進歩的政治家、人類の最大の願いとなった。

偉大な思想を与えることは世界を与えることであるという言葉がある。

ある歴史家は20世紀を総括しながら、ギリシア神話のプロメテウスが人間に火を与えて文明世界の扉を開けてくれたように、金日成主席はチュチェ思想を創始して人類に主人となった世界、理想郷の建設の鍵を与えたと高く称揚した。

人間の絶対不変の本性である自主性を発見し、それを中核にしてチュチェの思想、理論、方法を全一的に体系化したチュチェ思想は、事実上、誰の意志による思想であるというよりも、時代と人類、歴史そのものの意志であり、それに込められた真理の力によって自ずと永遠な生命力をもつ不滅の思想である。不滅のチュチェ思想を創始した主席は時代と人類とともに生き続ける。

今日も、主席の音声はチュチェ思想を通じて地球上のすべての国と民族、人民大衆のために絶えず響き渡っている。この声が勤労人民大衆に自主的な新しい生活と平等な新しい世界を建設する意志を励まないところは事実上、地球上のどこにもない。

主席は、20 世紀の人民大衆の運命開拓で焦眉の問題として提起されていた民族解放革命と階級解放革命、社会主義建設を目指す闘争など、各段階の革命を唯一無二に当代に勝利へと指導して人類偉業の大宝庫を豊富にした指導の巨匠であった。

主席の革命指導史には、民族的独立と自主権を守護する二回の革命戦争もあり、廃墟の中で国を打ち立てる 2 回の復興建設もあり、反帝反封建民主主義革命と社会主義革命を包括する二段階の社会革命もあり、社会主義制度の樹立後、継続革命の旗を高く掲げてチュチェの社会主義を建設するための闘争実践もあり、人々を完成された社会的人間につくるための人間解放の偉業を実現するための闘争もある。政治家として当代に一つの問題だけ解決しても大変なことだと認められる大きな偉業、それも人類史が解決を望むすべての焦眉の問題を自分の政治生涯でもっとも立派に解決したのは、実に万人の驚嘆を呼び起こす驚異的な事実であった。

20 世紀の世界政治の中心に立っていた主席の革命業績と闘争経験の偉大さは、決してその包括範囲の膨大さや実際的な結果にのみあるのではない。

主席の革命業績と闘争経験はその一つ一つがもっとも科学的なチュチェの世界観にもとづいているだけでなく、それがもっとも典型的な革命闘争の実践でその正当性と生命力がことごとく検証されたことにより、いつどの国の革命と建設でも普遍的な意義をもつ不滅の業績であることにより大きな世界史的意義がある。

主席が創造した業績と経験は、それ自体が進歩的人類の生と闘争の真の教科書となっている。

キューバ革命の指導者フィデル・カストロは、主席を接見して 4 時間余りにわたって革命と建設に関する助言を受けてから、これはすなわち革命の教科書であると称揚し、主席に回顧録を必ず書かせてほしいと、真心を込めて切に申し上げた。

ソ連のスターリン大元帥から中国の毛沢東主席、周恩来総理をはじめ、ベトナムのホーチミン主席、インドネシアのスカルノ大統領、カンボジアの

ノロドム・シハヌーク大王、チリ大統領サルバドル・アジェンデなど、去る世紀のすべての名人政治家たちは一致して主席を世界的な政治元老として高く奉じ、主席に世界革命の運命を託した。

人類が生むことのできるすべての偉人的能力が主席に集中された。

主席がおられたので 20 世紀があるといえた。

ひとえに、主席の思想と業績の重さでのみ人類の重さ、地球の重さを測ることができるというのが去る世紀が残した歴史的総括である。

主席の不滅の思想と業績を原動力にして流れる時代と歴史の流れは永遠である。

人民のために、時代と人類のために自分の限りない能力を遺憾なく発揮した主席の永生は必然的なものであった。しかし主席が人類の歴史の中に開いた道、人類が必ず進むべき、その必然の道も卓越した後継者が創造する継承の歴史がなければ絶対に実現され得ない。

総書記は主、席を生前の姿で高く戴き、主席の思想と業績、主席の貴い遺訓を貫徹するための力強い闘争によってこの地に領袖永生の輝かしい歴史を開いた。

「偉大な領袖金日成同志は永遠にわれわれとともにおられる」

「偉大な領袖金日成同志の革命思想でいっそうしっかり武装しよう!」

総書記が血の涙が流れていた痛恨事の日々に示したこのスローガンには、主席を社会主義朝鮮の永遠な始祖、朝鮮民族が永遠に高く戴くべきチュチェの太陽として奉じようとする総書記の鉄の意志と燃えるような忠誠心が熱く込められている。

総書記の燃えるような忠誠によって建設された錦繍山記念宮殿は、主席が生前の姿でおられる永遠な太陽の家であり、チュチェの最高聖地である。

主席を生前の姿で安置するための総書記の指導で特記すべきことは、主席の尊名を共和国の永遠な主席として法文化することにより、主席を永生する社会主義朝鮮の始祖として高く戴いたことであった。

総書記は 1997 年 7 月、主席の革命生涯と不滅の業績を末永く輝かせるた

めにチュチェ年号と太陽節を制定、公布するようにした。

主席の銅像と太陽像、現地教示版、党創立記念塔のような記念碑が新たに建立し、名勝地の自然岩に領袖永生のスローガンと太陽称揚の文字が刻まれ、領袖永生歌謡と領袖永生の文学作品が多く創作、普及され、主席の革命活動と不滅の業績を収録した記録映画が編集、上映された。

総書記は主席の生前の意志と意図を100%継承し、100%完遂することを主席の永生の総体的目標として打ち出し、不屈の意志と労苦を尽くして実現した。

金正恩委員長を戴いて領袖永生の歴史は続いている。

今日、世界は領袖の永生であるという一つの新たな時代、主席の永生の歴史をはっきり見ている。

主席は、人民大衆から絶対的に支持され信頼された人民の慈父として、時代と革命の重荷を一身に担った世界的な政治元老として、不世出の偉人を後継者としておし立てた領袖として生き続ける偉人である。

金日成主席は朝鮮人民と人類、限りなく繁栄する社会主義朝鮮と永遠なチュチェ時代とともに永久に不滅するであろう。